

カノジョ探しの異世界 行

もっち～！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

同じ高校でクラスメイトの研、静、萌が異世界に召喚されてしまう。そこは、聖女を召喚する国であった為、男である研は、王子により遠くの地へ強制転移させられた。

色々な出会いをしていく研は、萌達のいる国を目指して、迷走していく。

先ず出会ったのが、国外追放処分された乙女ゲーの悪役令嬢キャラ、カタリナ・クラエスに転生してしまった少女。二人で逃避行の旅をしながら、静、萌を探す研。

次に出会ったのが、王子に婚約破棄されて自領で領主代行を始めた乙女ゲーの悪役令嬢キャラ、アイリス・ラーナ・アルメリアに転生してしまった少女。カタリナ、アイリスという二大悪役公爵令嬢という共通点もあり、アイリスの家でバイトをしながら、ア

ルメリア公爵邸を拠点にして、静、萌を探す研。

クロスオーバーしている作品は以下の通りです

- ・乙女ゲームの破滅フラグしかない悪役令嬢に転生してしまった…
- ・公爵令嬢の嗜み

・異世界でスローライフを（願望）

・本好きの下剋上

・私、能力は平均値でって言ったよね！

・聖者無双 ～サラリーマン、異世界で生き残るために歩む道～

・悲劇の元凶となる最強外道ラスボス女王は民の為に尽くします。？ラスボスチートと女王の権威で救える人は救いたい？

・この度、公爵家の令嬢の婚約者となりました。しかし、噂では性格が悪く、十歳も年上です。

・悪役令嬢後宮物語

・悪役令嬢の取り巻きやめようと思います

・異世界のんびり農家

・フェアリーテイル・クロニクル ～空気読まない異世界ライフ～

・陰の実力者になりたくて！【web版】

・ループ7回目の悪役令嬢は、元敵国で自由気ままな花嫁生活を満喫する

・転生したら悪役令嬢だったので引きニートになります

・魔導具師ダリヤはうつむかない

・ずたぼろ令嬢は姉の元婚約者に溺愛される

・無自覚聖女は今日も無意識に力を垂れ流す〜今代の聖女は姉ではなく、妹の私だったみたいですよ〜

・遅し令嬢はへこたれない〜腹違いの妹に婚約者と聖女の座を奪われた私は、騎士団でメイドとして働いています〜【WEB版】

・くまクマ熊ベアー

・リアデイルの大地にて

・魔王様、リトライ！

・デスマーチからはじまる異世界狂想曲

・アラフォー賢者の異世界生活日記

目次

主な登場人物	1
1章 カノジョ探しの異世界行	
ここはどこ？ Part 1	16
ここはどこ？ Part 2	22
そこはどこだ？	27
いつの間にソレがそれに？	34
運命的な出会い Part 1	40
運命的な出会い Part 2	46
人材スカウト Part 1	52
人材スカウト Part 2	58
人材スカウト Part 3	65
人材スカウト Part 4	70
奇病の少女 Part 1	76
エリクサーもどき	83
奇病の少女 Part 2	91
初めてのダンジョン攻略	98
公爵夫人VSケン 商談編	105
ラスボス達の集い	111
背伸び王女と鬼畜な錬金術師	118
みくつけた！	123
再会	129
2章 帰還方法探しの異世界行	
掛け違えたボタン	134
新規事業 Part 1	139

新規事業	Part 2	144
再開発		149
波乱の幕開け		155
建国記念パーティー		160
隼人来る		168
鑑定		173
大惨事		181
結婚式		189
糸口		195
訳あり物件		201
激突		206
交渉事		214
SS：野暮用		220

3章 問題解決の為の異世界行		
指名依頼		224
再開発計画		231
蹂躪		236
戦後補償		243
理不尽な追放		249
死の森		254
指名依頼		260
逃げ場なし		267
スパイダーシルク		275
拷問？いえ、治療です		283
それでいいののか、聖女よ		289
リーシエの憂鬱		296

一触即発	303
カルチャーショック	310
婚約破棄は突然に	316
スカウト	323
服飾職人をスカウト	328
珍客到来	335
次期教皇候補から逃げる為の人材	340
教皇の掌上	345
王家の瞳問題終結	351
アインズヘイルの問題	358
神殿とオークション	364
王家の証	371

王家の証 Part 2	377
魔導コンロ	382
提訴	388
商売繁盛	394
アマツクニの商人	400
4章 再召喚からの異世界行	
幕間 一時帰国	405
再び集結	410
絶望的な場所の天国	417
イレギュラーイベント	423
物体X	429
指名手配されました	435
V S 教皇サイド	441

人間を墮落させる魔導具	449
聖者というバケモノ	456
世界樹の下に	463
日本壊滅	469
SS：日本消失	475
暗躍する者	479
再会は突然に	487
溶け込む異物	494
宝の山	498
VSプライド妹	504
5章 富国強兵作りの異世界行	
トキオ共和国建国	509
クマさん現る	515

クマさん、異世界で呼び出される	520
銀環の魔女を探せ	525
魔女の遺産	529
思い込み王女の粘着	535
聖者、家を買う	539
身食い患者再び	545
魔女の子供達	550
聖者、孤児院を助ける	556
聖者、王都へ行く	560
聖者達、スタンピートに遭遇する	568
出産経験者は貴重である	573

	悪意は灰に	—	578
	嵐の前の静けさ	—	582
	6章 魔王迎撃の為の異世界行		
	魔王召喚	—	587
	魔王はどっちだ？	—	592
	ロリテイマーと聖女	—	597
	魔王とバトルジャンキー	—	602
	魔王2号降臨	—	607
	召喚魔王達が同僚だった件	—	612
	殲滅の廃ゲーマー、異世界に立つ		
618	聖者と殲滅者はボーナスステージへ		
623	巫女誘拐事件	—	672
	7章 平和が一番な異世界行		
	商会、領主との取引を始める	—	666
	聖女、痴態を晒す	—	662
	聖女VS聖者	—	658
	聖女とは？	—	653
	有益な番犬のコカトリス	—	648
	642 後輩氏は知らない間にアラフォーに		
	エレローラVS日本の食卓	—	637
	る	—	633
	殲滅者、知らないうちに駐在大使にな		
	日本語は古代語？	—	628

面会すら命がけ

—————

678

無知は罪なのか？

—————

684

自転車で文明開化するだろうか？

690

言葉の行き違い

—————

695

とある商人の愚行

—————

699

愚行の末

—————

704

開発ブーム

—————

708

猿の惑星の始まりか？

—————

713

主な登場人物

牧之原研／ケン

オリ主。器用貧乏系で、来る者拒まず去る者追わずの男子高校生。

スキル：剣術、回復術、治療術、浄化術、錬成術↓錬金術、修復術、魔法（無、時、聖、闇）、強奪、隷属術、念動力、祝福、龍殺し、封印無効、結界無効、状態異常無効、畏怖、招魂

冒険者ギルドランクS、錬金術ギルドランクSS、商業ギルドランクA

フレンド登録（5人まで）

隼人、レインリヒ、ターニャ

称号：転生者を狩る者、聖治神の祝福、聖龍の加護、龍殺し、封印を解き放つ者、怒りを覚える者、闇を制する者、次期フリージア王国王配、神々へ辿り着こうとする者、始祖魔王を葬り去った者、身食い治療者

鬼龍院静／シズカ

オリキヤラ。スタイル抜群で文武両道系の才女。召喚後、第一王子に連れて行かれた。

若草萌／モエ

オリキヤラ。大柄であるが手先の器用な研究者タイプ

【聖女の魔力は万能です】

小鳥遊聖／セイ

萌達の後、スランタニア王国に召喚された元OL。

ドミニク・ゴルツ

スランタニア王国の宰相。

ユーリ・ドレヴェス

スランタニア王国の宮廷魔道師団師団長。

ヨハン・ヴァルデック

スランタニア王国薬用植物研究所の所長。ケンの怒りに触れ、死亡。

アルベルト・ホーク

スランタニア王国第三騎士団団長。氷の魔力の遣い手。

エリザベス・アシュレイ

異世界に来てからのセイの数少ない友人。

〔乙女ゲームの破滅フラグしかない悪役令嬢に転生してしまった…〕

カタリナ・クラエス

ソルシエ王国クラエス公爵家の令嬢。第三王子の婚約者。乙女ゲー内では悪役令嬢に転生した元JK。人タラシ、土ボコというスキル持ち

ジオルド・ステイアート

ソルシエ王国第三王子でカタリナの婚約者。独占欲が強く、女性に対してもヤキモチを焼く。カタリナ曰く『腹黒ドS王子』。苦手なものは無いとされるが、蛇が苦手らしい。

アラン・ステイアート

ソルシエ王国第四王子で、メアリの婚約者。しかし、彼もメアリもカタリナ一択で愛しているバカツプルである。俺様系であるが、芸術的なセンスがある。

キース・クラエス

カタリナの義理の弟であるが、カタリナを一人の女性として大切にしている超シスコ

ン。

メアリ・ハント

ソルシエ王国ハント侯爵家の令嬢。第四王子の婚約者。緑の手という植物育成能力を持つらしい。

ニコル・アスカルト

ソルシエ王国アスカルト伯爵家の次期当主。老若男女問わず魅了する能力があるらしい。

ソファイア・アスカルト

ニコルの妹。本とカタリナのこと大好き

マリア・キャンベル

平民であるが光の魔力を持つ。お菓子作りが得意である。

アン・シエリー

クラエス公爵家のカタリナ専属メイド。子供のころ、火事で腕に大やけどを負った。

【公爵令嬢の嗜み】

アイリス・ラーナ・アルメリア

タスメリア国のアルメリア公爵家の令嬢。第二王子の婚約者であるが婚約は破棄さ

れる方向である。乙女ゲー内では悪役令嬢

ターニャ

アイリスの側仕え兼護衛兼諜報員の女性。

メルリス・レゼ・アルメリア

アイリスの母親。現アルメリア公爵夫人。王都の社交界で辣腕を振るい、一方では剣の腕がバケモノ級らしい。

ルイ・ド・アルメリア

アイリスの父で、タスマリア国の宰相。

ガゼル・ダズ・アンダーソン

アイリスの母方の祖父で、タスマリア国の將軍。30年前の戦役にて国の英雄に。

デイン

アイリスの政務の手助けをするバイトである商人の息子。

アイリーヤ・フォン・タスマリア

タスマリア王国の王太后。息子である王よりも権限を持ち、アイリスの母メルリスと仲が良く、アイリスと孫である王子との結婚を望んでいる。

アルフレッド・D・タスマリア

タスマリア王国の第一王子。王位継承権第一位。

【異世界でスローライフを（願望）】

早川隼人

女神による異世界転生をしたSランクの冒険者

ミイ

猫人族の獣戦士で、隼人パーティーのメンバー。

レインリヒ

アインズヘイルの錬金術ギルドのギルドマスター。

アイナ

人族と炎人族のハーフで冒険者ランクA。『赤い戦線』のリーダー。

ソルテ

微乳な狼人族の冒険者ランクA。『赤い戦線』のメンバー。

ヤーシス

奴隷商館の店主。

ウエンディ・ティアクラウン

種族は不明（原作では水の大精霊）、爆乳持ちの訳あり特殊奴隷。家名持ちなので貴族

か王族なのだろうか？

シロ

猫人族の奴隷。護衛が出来るらしいネコ耳少女

オリゴール

ハーフリングのボク娘で、商業都市アインズヘイルの領主様

ミゼラ

闇オークションで買ったハーフェルフの少女

【本好きの下剋上】

本須麗乃／マイン

身食いという膨大な魔力に飲み込まれる奇病にかかる転生者である少女。成長障害か、見た目は実年齢より2〜3歳幼く見える。

トウーリ

マインの姉。針子見習い

エーファ

マインとトウーリの母親。染物職人

ギユンター

マインとトゥーリの父親。エーレンフェストの兵士で、エーレンフェストの街の門番。

【私、能力は平均値でって言ったよね！】

栗原海里／マイル／アデル・フォン・アスカム

総ての生物の平均的ステータスを持つ、スーパーチーターな転生少女。創造主の僕達を侍らせている。

【聖者無双】

ルミナリア・アークス・フランシスク

聖シユルール協和国伯爵家の次女で、戦乙女聖騎士隊隊長。

【悲劇の元凶となる最強外道ラスボス女王は民の為に尽くします。？ラスボスチートと女王の権威で救える人は救いたい？】

プライド・ロイヤル・アイビー

フリージア王国の第一王女で、後に極悪非道で最強外道なラスボスと言われるようになる予定らしいが、転生者だったため、ケンに回収された。

ティアラ・ロイヤル・アイビー
プライドの妹で、第二王女。シスコン。

【この度、公爵家の令嬢の婚約者となりました。しかし、噂では性格が悪く、十歳も年上です。】

オリヴィエ・アルウエイ

ウエザード王国アルウエイ公爵家の令嬢。27歳独身…

ホルスト・W・フェアリーガー

ウエザード王国の国王

ヴェロニカ・W・フェアリーガー

ウエザード王国第一王女。オリヴィエの幼なじみで28歳独身…

【悪役令嬢後宮物語】

ディアナ・クレスター

エルグランド王国クレスター伯爵家長女。別名『氷炎の薔薇姫』。

リタ

クレスター家の侍女。ディアナとは幼なじみ

【悪役令嬢の取り巻きやめようと思います】

コゼット・エーデルワイス

栗色の髪にサファイヤブルーの瞳の超重量系アルトリア王国エーデルワイス伯爵家の令嬢。

レオンハルト・アルトリア

アルトリア王国王太子。輝く銀髪にエメラルドグリーンの瞳の天使のような美少年で、正義感が強いが詰めが甘い。

エドワード・エーデルワイス伯爵

金髪碧眼の美男で、妻と娘のコゼットを溺愛しているらしい。

【異世界のんびり農家】

ザブトン

イリーガルデーモンスパイダーのメス。死の森の主で、スパイダーシルクを生産してくれている。

【フェアリーテイル・クロニカル】

エアリス

ファアーレーンの第五王女。

ドーガ卿

エアリスの従者

エレーナ

ファアーレーンの第二王女。

レイオット

ファアーレーンの王太子

マーク

ファアーレーンの王子。

【陰の実力者になりたくて！【web版】】

アルファ

金髪に青い瞳のエルフの少女

ベータ

銀髪に青い瞳のエルフの少女

クレア・カゲノ

ミドガル王国カゲノー男爵家令嬢。

ガンマ

藍色の髪に深い青い瞳のエルフの女性。ミツゴシ商会の会長。

デルタ

獣人の少女。単純な戦闘力ならアルファと互角だが、知能の差でいつもボコられる。

イプシロン

透き通った湖のような髪と瞳のエルフの少女。いろいろあつて魔力操作が得意。緻密と呼ばれる。有名なピアニスト兼作曲家として活躍中。

ニュー

ダークブラウンの髪と瞳をした元貴族の少女。化粧が得意で特殊メイク担当。

ラムダ

褐色のダークエルフで新人の教育担当。

【ループ7回目の悪役令嬢は、元敵国で自由気ままな花嫁生活を満喫する】

リーシエ・イルムガルド・ヴェルツナー

王太子から婚約破棄を言い渡される運命のループを生き延びて、現在7周目のループを経験中のヴェルツナー公爵家の令嬢。

【転生したら悪役令嬢だったので引きニートになります】

アルベルティーナ・フォン・サンデイス（旧姓ラティツチエ）

サンデイス王国の王位継承権1位の王女で、元ラティツチエ公爵家の令嬢。

キシユタリア・フォン・ラティツチエ

アルベルティーナの義弟

ラティーヌ・フォン・ラティツチエ

アルベルティーナの義母

ジュリアス・フォン・フォルトウナ

アルベルティーナの従僕。

アンナ・ホワイト

アルベルティーナの侍女

レイヴン

アルベルティーナの影

ミカエリス・フォン・ドミトリアス

アルベルティーナの幼なじみ

ジブリール・フォン・ドミトリアス

ミカエリスの妹

ガンダルフ・フォン・フォルトウナ

アルベルティーナの母方の祖父。強引にアルベルティーナを王家に引き渡した人物。

【魔導具師ダリヤはうつむかない】

ダリヤ・ロセツティ

悪役令嬢では無いのに、結婚式の前日に婚約破棄イベントを迎えた魔導具師で、今は亡き男爵の令嬢。過労死した記憶を持つ元日本人の転生者。

イルマ・ヌヴォラーリ

ダリヤの友人で幼なじみの美容師。

マルチエラ・ヌヴォラーリ

イルマの夫で運送ギルドの運送人。

【ずたぼろ令嬢は姉の元婚約者に溺愛される】

アナスタジア・シヤデラン

男爵家の令嬢で、結婚相手の元へ向かう途中、事故で行方不明に。

マリー・シヤデラン

アナスタジアの妹。

キュロス・グラナド

アナスタジアの元婚約者で、マリーの婚約者。

【無自覚聖女は今日も無意識に力を垂れ流す。今代の聖女は姉ではなく、妹の私だったみたいですよ】

カロリーナ・サンチェス

セレスティア王国サンチェス公爵家次女。見た目も中身も只の凡人であるが…

【逞し令嬢はへこたれない】

セイディ・オフラハティ

リア王国の子爵令嬢。聖女であるが、婚約破棄イベントを経て、神殿を追放され、子爵家から縁を切られた。

1章 カノジヨ探しの異世界行

ここはどこ？ Part 1

目の前で元カノと現カノが揉めている。俺の所有権を巡って：

「私は身体は興味無いの！彼の知識を借りるだけよ！」

「彼はあなたの猫型ロボットじゃ無いのよ！」

話して楽しい元カノ、鬼龍院静。一緒にいると安らぐ現カノ、若草萌。さて、どうするか…そんな事を悩んでいると、いきなり光のボールに包まれていく。足下をふと見ると、魔方陣らしき物が浮かんでいた。これは、異世界召喚ってヤツか？光に飲み込まれていくと、意識が遠くなっていった。

——若草萌——

あの女と揉めていたら、光に飲み込まれ、知らない場所にいた。あの女は王子らしき者に連れ出され、彼は兵士達に連れて行かれた。そして私は、残った者達に客間らしき場所に連れて行かれた。

「ここはどこですか？彼はどこですか？」

彼の行方を知りたい私は、目の前にいる者に訊いてみた。

「ここはスランタニア王国。君達は聖女召喚の儀により、この世界に召喚されたんだ。そして彼は男で聖女では無いのが確定で、王子により国外追放処分された」

処分？なんで？男と言うだけで…待て待て、異世界召喚？それって、誘拐じゃないか??

「彼に会いたい。どこにいるんですか？それに召喚つて、誘拐でしょ？ねえ、私達を元の世界に帰して!!」

「聖女候補である君達は、王国で保護する。君達のいた世界には帰れない。仮に聖女で無くても、責任を以て保護は続ける」

誘拐するのに保護？ここは傲慢な世界なのか？

「しばらくは、王宮で暮らし、この世界になれてくれ」

そんなことを言われても…

——ドミニク・ゴルツ——

数百年ぶりの聖女召喚の儀は成功した。しかも三名も召喚できた。だが、第一王子が召喚された聖女候補の一人を気に入り、勝手に連れて行ってしまった。その上、彼女のボーイフレンドらしき男は邪魔だからと、国内から追放してしまったのだ。国王に判断

を仰ぐこと無く独断でだ。

そして今、目の前には残ったもう一人の聖女候補がいる。彼に会いたい、帰りたいと、興奮状態であったのでは、魔法で眠ってもらった。

「どうするんだ?」

今回の儀式の発案者である宮廷魔道師団の師団長、ユーリ・ドレヴェスに訊いた。

「どうもこうも…まさか三名も召喚出来るとは。想定外だったのは、王子の行動かな。お気に入り連れ出し、彼女達の連れを処分とは…」

状況判断が速く、即断出来るのは良いが、向かう方向がお粗末である。国家事業である為、まずは国王に判断を仰ぐの筋である。

「彼を城に戻せないか?」

罪悪感がある。彼女の指摘した通り、召喚された彼らからすると、誘拐とか拉致とかと同じ行為である。

「無理…強制転移用魔方陣での国外追放だよ。どこに飛ばされたのかも不明だし、戻る手立ても不明なんだから」

その昔、手に負えない魔物を遠くの地へと投げ捨てたとされる魔方陣。王子からの命令でそれを使ったらしい。

「王子の命令だからね、逆らえなかった」

ユーリが難しい顔をしていた。彼を探し出すのは、ユーリでも無理なんだろう。

「問題は残った彼女達が聖女かどうかだ。もし彼が聖者だったら、王子はどう責任とるのかな？」

そうか、その可能性もあるな。聖なる力を持つ者を呼ぶ召喚術だからな。

——ケン——

別室に案内されたと思つたら、森の中に転移させられていた。ここはどこだよ。そもそも、あそこの国名を知らないし。国内転移なら良いのだが。

まずは現状を確認する。道具と言えるのは、彼女から貰ったゾーリングン製の万能ナイフ。どれも切れ味は抜群である。入れ物はバックパック。多用途であるが、割と大容量である。中にはサバイバル用途のusb出力のソーラー充電器、バッテリー、懐中電灯、スマホなどなど：有ると便利なグッズ類である。後は、愛用の風邪薬、胃薬、絆創膏、軟膏：

所謂、彼女と一緒に泊まりセットと言うか：

森の中を闇雲に歩いていると、剣戟の音が聞こえてきた。音のする方へ向かうと、馬車が剣を持った一匹？一頭？のゴブリンに襲われていた。剣で身を守っていた御者がゴブリンに屠られた瞬間、俺はゾーリングン製の千枚通しをゴブリンの首筋に深々と刺

していた。その場で息絶えるゴ布林。

馬車の中を覗くと、結構有名な人が…あれ?ここってゲームの世界なのか?ラノベで
ありがちの…

「お前、『FORTUNE・LOVER』のカタリナ・クラエスカ?」

「あなたは誰?転生者?」

驚いたような顔の囚人服らしき服装の女性。

「いや、異世界召喚されたんだけど、ここはどこ?」

「ゲームと同じでソルシエ王国よ」



御者の服を剥ぎ取り、カタリナに着せた。彼女は囚人服を着ていたので、主人公が
ハッピーエンドを迎えたカタリナなのだろう。

「あのね…別にハッピーエンドじゃないからね」

バッドエンドだと、王子に殺されるはずだが…

「嵌められたのよ。破壊から逃れる為、フラグをへし折ったんだけど…」

あのゲームの主人公であるマリア・キャンベルとも仲が良いそうだ。あくまでカタリ
ナの主観であるので、話半分かな。

「ねえ、手を貸して…」

その言葉…何かに巻き込まれそうだ。でも…旅は道連れ世は情けとも言うし。

「いいけど…」

「この国から脱出しようと思うの」

嵌めた相手を潰すんじゃないかと、これ幸いと逃げるらしい。流石は破滅フラグしかない悪役である。

「なあ、この国って、異世界召喚ってある？」

「無いと思うけど…私以外の転生者にも転移者にも会ったこと無いもの」

無いのかあ。

カタリナの現況を訊くとゲームと違い、悪役令嬢ではなかったらしい。驚くことに、逃亡後の生活を考え手に職をと、農業女子をしていたそうだ。中々の努力家のようにだ。

ハハはどハハ? Part 2

—モエ—

【聖女召喚の儀】とは、スランタニア王国に古の時代より伝わる儀式だそうだ。遙か昔に、瘴気に包まれた王国に魔物達が蔓延った時、どこからか聖女が降臨して、瘴気を晴らして魔物を退けたそうだ。

どこからか降臨では無く、違う世界から拉致してきたのだろう。そう、私達のように…

「どうしたの?」

目の前にセイさんという女性がいる。私達二人に聖女らしさが無いってことで、懲りずに召喚して拉致されてきた女性である。現在、私達は薬用植物研究所にいる。王宮にいても暇なので…

「この国、おかしいでしょ? 聖女候補を召喚って、これって、拉致ですよ、ら、ちー!」
「そうよねえ。でも帰る方法はないと言うし…」

セイさんはOLだったそうだ。それもデスマーチな職場の…そのせいか、ノンビリとしたこの生活が気に入ったみたいだ。

「彼のことも心配だよね」

そう、彼…研のことが心配である。器用貧乏系なので、サバイバル生活でもなんとかなるだろうけど、他の女と生活をしていないかが心配である。漸く、あの女から奪ったのに…なんでこんなことに。

——ケン——

カタリナと一夜を過ごした。中々のスタイルの上、甘い歌声も良かった。

「私の身体を味わったんだから、約束は守ってね」

「ああ、この先、ずっと傍にいるよ」

萌とお泊まりのはずが、アクシデントに巻き込まれ、溜まっていた俺はカタリナの添い寝で、狼になった。いやカタリナが女豹になったと言うか…

「これから、どうする?」

「まずは地図が欲しいかな」

「地図は高いわよ」

旅行をするのは高位貴族だけらしく、国内地図もあまり無いらしい。あつても高額だと言う。

「だけど、闇雲に船は出せない。せめて陸地の方角は知りたいなあ」

ってことで、カタリナの記憶頼りで、近くの街へと向かった。目指すは冒険者ギルドである。まず冒険者になって、お金と信用を得ようと思うのだ。冒険者ギルドの信用を得られれば、地図を見る機会もあるだろうと。

しかし、着いたの違う街だった。やたらに大きな街である。ここはどこだ？

「ごつめえくん」

カタリナが謝っている。まあ、冒険者ギルドがあれば、どこでも良いんだよ。って、ここはどこ？

「もしかして、『FORTUNE・LOVER』のカタリナ・クラエス、さん？」

おおお、カタリナは転生者を釣る撒き餌か何かなのか？乙女ゲーを知っている人が釣れた。話し掛けてきた女性を見た俺は、彼女を二度見してしまった。

「そっちは、『君は僕のプリンセス』のアイリス・ラーナ・アルメリアか！」

まさかの乙女ゲー二大悪役令嬢の揃い踏みである。カタリナもそうだけど、アイリスもゲーム内で見えるよりも、表情が柔らかい。きつと破滅フラグを回避して、悪役令嬢にならずに生きてきたのか？

「そうなるよ、お二人とも転生者？」

アイリスに訊かれた。

「いや、俺は召喚されたんだ。ここはどこ？」

「ここはタスマメリア国のアルメリア公爵領の領都よ」

「あれ？」

カタリナの脳内地図は当てにはならないようだ。目的とは別の国にいるんだけど……アイリスと話した結果、しばらくアイリスの館、アルメリア公爵邸でご厄介になることにした。アイリスは領主代行の仕事をしているそうなので、俺達も手伝うというかバイトとして衣食住付きで雇ってもらった。カタリナも公爵令嬢であるので、貴族としての手紙の代筆を、俺は経理、計算系を担当した。

「そうか。破滅フラグを避けまくっても、湧いてくるのね」

三人でのお茶会での折、アイリスにカタリナが逃避行の経緯を話した。

「で、冒険者ギルドって、どこ？」

俺の目的を話した。

「この国には冒険者ギルドは無いの」

国のシステム的に無いらしい。そう言えば、カタリナのいた国にも無かったなあ。乙女ゲーの世界には無いのかな？

「地図は用意出来るけど、ここに居て欲しい。日本の話を一杯したいの」

「じゃ、カタリナはここにいろ。俺だけで、どうにかする」

公爵家の令嬢のカタリナには、長旅は向かないだろう。

「ちゃんと帰って来てくれる?」

ゲーム内では見る事が無いカタリナの上目遣い気味の甘えた表情。

「勿論だよ。取り敢えず、ここでバイトをしながら、アイリスの側近達に剣を鍛えて貰って、冒険者ギルドに登録しに行くよ」

◇

半年ほど、アイリスの館で過ごし、稼いだお金と、剣と地図を貰い、冒険者ギルド探しの旅に出る準備が整ってきた。経理系は、俺とアイリスで複式簿記を推奨に、お金の流れが追いやすくなった。

「明日には出るの?」

アイリスに訊かれた。

「地図もあるから、迷わずに行けるはずだよ」

「ねえ、ここにイイ女が二人いるんだから、変なの引つかからないでよね」

とはカタリナ。

「そうだな。カタリナとアイリスに勝てる女はいないだろう。色々な意味でね」

今夜も二人と身体を合わせて、身体も心も夢の世界へ…

そこはどこだ？

——シズカ——

第一王子に連れて行かれた先は、王子専用の後宮、要するに王になった時の為の大奥である。聖女として召喚したんじゃないの？まさか、王子のハーレムメンバーを集める為なのか？

「王位を継いだら、優秀な女性達は、私の側がよく似合うだろ？」

あの…趣味で無いです…話して愉しく無い男性はノーサンキューである。見た目は二の次で、本質が大事なのに…

大奥に来ての初夜…王子と二人きり、彼に習った護身術で王子の意識を刈り取った。

——ケン——

地図の存在は偉大である。迷う事無く冒険者ギルドに辿り着いた。冒険者になると自分のステータスが見られる様になった。ギルドカードという身分証明書に自分のステータスが随時表示出来る。これからは、ギルドで売っているスクロールを買うことでスキルが覚えられるらしい。アイリスの館で鍛えて貰ったおかげで剣術のスキルは既

にあったけども。

予算に合うだけスクロールを買い込む。あると便利な錬成術、覚えてて良かった浄化術、戦闘の必需品の回復術、治癒術、修復術など…

冒険者ランクはFからスタートだそう。魔物に出会ったら、討伐証明部位と魔石を回収すると、ギルドでお金になるそう。で、死体から魔石を取るまでに肉などを切り分けると、食べられるんだとか。間違つて魔石を先に取り除くと、魔物の身体は魔素に分解されると言う。

まあ、Fランクだから、スライムとかゴブリンしか討伐は出来ないけど…

カタリナではないが、手に職をと思い、冒険者ギルドでのバイトも始めた。解体や調理、事務仕事など…ヒーラーが居ない時などは、ヒーラーの代わりを務めたり。

薬草を集めるクエストをして、バイトで回復薬を作ると、二度美味しい。冒険者収入とバイト代が貰えるし。

「お前の作るポーションの効き目が良いらしいぞ」

ギルドマスターに告げられた。手順通りに作っているはずんだけど…

「お前のに当たったヤツはラッキーだな」

ポーションの瓶には誰が作ったのが判る印などは無い。ギルドの売店に俺の作ったのも先輩達の分と並んでいるのだ。



ギルドでの一日：朝起きて身支度をしてから、ギルド内の清掃。浄化術で一撃で終わる楽な作業である。次に厨房に向かい、今日の分の食材のチェックをして、材料の下処理をした後に、朝飯プラスギルド特製？謹製？の青汁をジョッキで飲み、朝飯。様々な薬草、毒草が微妙なバランスで混ざっているそうだ。効能は状態異常の耐性の強化、最大HP及び最大MPの引き上げ、スタミナのアップらしいが、初めて飲んだとき、嘔吐プラス下痢で弱体化しまくっていた。これって新人虐めでは無いのだろうか？

午前中は収集クエストなどを熟し、午後からは事務仕事や解体などの雑用を熟して、夜食を食べて就寝である。

半年勤め上げた頃、無属性魔法を覚えていた。スクロールを買った覚えは無い。もしかして、あの青汁のおかげか？無属性とは火、風、水、土の基本4種、光、闇、聖、魔の特殊4種以外の属性で、時間や空間などに関係する属性である。転移や無限容量のアイテムボックスなどがある、ラノベでよく見かけるアレである。

休日、久しぶりの里帰り、アイリスの館まで転移してみた。

「お帰り…」

カタリナが俺の姿を見かけると、ダッシュしてのタックルをしてきた。

「ただいま。明日には出るけどね」

「おお、ケンの臭い……」

クンクンと俺を嗅ぐカタリナ。コイツ、臭いフェチだっけ？俺、そんなに臭いか？浄化魔法を掛けてみる。

「お帰りなさい」

アイリスは貴族令嬢らしい振る舞いで近寄って来た。目の下に隈……デスマーチな勤務時間か？回復術と治癒術を掛けて上げる。

「えっ……ヒーラーなの？」

急に楽になったのか、驚いているアイリス。

「まだ、修行中だよ。よし、屋敷内のヤツラ全員を癒やしてやろう」

屋敷内だけのはずだったのだが、役場の領官達にも施すことに……当然なのだが、MPの使い過ぎでのマインドロスでダウンだよ。俺はどこぞのチーターのようには無尽蔵にMPを使えないんだぞ……

翌朝、目が醒めると両脇には、産まれたままの姿のアイリスとカタリナが満足そうな表情で添い寝していた。

◇

冒険者ギルドのネットワークで調べたが、俺を召喚した国が見つからない。ギルドマスターによると、冒険者ギルドが無い国の情報は入って来ないらしい。そして、この世

界には冒険者ギルドの無い国が多いらしい。理由は簡単で、国の指示系統に入らない戦力は要らない王国が多いんだとか。クーデター防止らしい。昔、民意の不満を受けて、王国に牙を剥いた冒険者達。その結果、王国は共和国となり…同じ轍は踏みたくない王国が多いのだろう。

後、考えられる理由…この世界では表面上異世界召喚はタブーらしい。なので、行っても国外に情報は漏らさないそうだ。

おい！見つけられないぞ!! 不満爆発同時に、閃きが舞い降りて来た。そうか！冒険者ギルドがなく、聖女がいる国を目指せば良いのかな？つて、どこだ？

「おい、ケン。出張だ。アインズヘイルの錬金術師ギルドに行つてくれ」

ギルドマスターからの出張命令が下された。

「そこは冒険者ギルドは無い？聖女はいる？」

「冒険者ギルドがあるから、出張の指示が出たんだよ」

呆れた声のギルドマスター。その国もハズレだな。

「アインズヘイルの錬金術師ギルドでポーシオンを作つて来い。これ、推薦状だ」

効果の高いポーシオンを作れる者を募集しているそうだ。行つたことの無い場所には転移出来ないし、短距離転移で向かうか。交通費の節約の為に。スクロールを買うには金が必要である。今、狙っているのは鑑定術、検索術である。用途が広い為、価格が

少し高めであるのだ。

◇

翌日、あの青汁と朝飯を食して、出張？ 移転？ 先へと移動を開始した。短距離転移は目で見える範囲に転移が出来る。山が見えれば、山まで一気に。転移先は障害物の無い地面限定である。いきなり岩の上や木の上には転移はしないので安心である。

なのに転移した先は地面では無く、何か柔らかい。あれ？

「短距離転移かな？」

男の声、振り向くと俺と同じくらい男児がいた。騎士か？ 鎧を着込んでいるし。

「そろそろ退いて上げて欲しい」

退く？ 下を見ると、ネコ耳少女が、恥ずかしそうに俯いていた。ああ、ネコ耳少女と同じ座標に転移したようで、押し倒したようだ。

「すまない」

「うっ…」

ネコ耳少女に手を貸し起き上がらせた。これはラッキースケベなのか？

「なあ、アインズヘイルって、こっちでいいのか？」

男子に訊いてみた。

「もしかして、君は転生者なのか？」

「いや、召喚されたんだ。そうだ、冒険者ギルドがなくて、聖女のいる国って知っているか？」

「まさか、あそこの聖女召喚に巻き込まれたのか？」

「かな？」

コイツ、知っているみたいだ。

「で、アインズヘイルには何の用だ？」

男1女4のパーティーぽい。ネコ耳少女以外の者の手が得物に伸びていく。コイツら敵か？短距離強奪を発動して、敵から或る物を奪い取る。短距離強奪は目に入る対象物から、想像した物を奪い取るスキルである。いつか、距離無制限を取得し、どこかにいる静と萌を強奪して、この手で抱き締めようと思っている。

俺が奪った為、敵の女性陣が悲鳴を上げてしやがみ込んだ。男子は仲間視線を向けた隙に、ヤツの背後に短距離転移して、サブミッシェンホールドを極め、動きを封じた。「お前は、敵つてこといいんだな？」

いつの間にソレがそれに？

——ヨハン・ヴァルデック（スランタニア王国薬用植物研究所の所長）——

「セイさんみたいに5割増しにならないです」

「なんでかな？ 同じ召喚聖女候補なのに…」

目の前では、当研究所の研究員となった、聖女召喚の儀で召喚されたモエとセイが同じ作業をしているのだが、何度繰り返してもセイの方が高品質の物を生み出していた。

「身体の中で魔力の流れって意識出来ている？」

「出来てるのかな？ こういうのは彼の方が詳しいんだけど…」

モエの話では、王子が追放した彼は、召喚される以前でもヒーリング能力があったらしい。

「一緒にいると癒やされるといふか、これってマインドヒーリングって言うんですたっけ？」

マインドヒーリング：高位のヒーリングスキルである。普通のヒーラーは精神まで癒やすことは出来ない。それは：彼が男性でありながら聖女、聖者だった可能性が大である。そして、5割増しの能力を持つセイは聖女なんであろう。あの王子のヤツ：なん

てことを…

——ケン——

「そうか、人捜し中なのか」

パーティーリーダーである早川隼人の行動の自由を奪い、隼人のパーティーメンバー達を正座させた後、それぞれから奪った物を返してあげた。

「女性から下着を奪うって反則じゃ無いのかな？」

「俺は騎士でも勇者でも無いから、騎士道は歩いていないぞ」

出来る手は総て使う派である。隼人に敵意が無いようなので、サブミッションホールドを解いてあげ、街へと案内して貰う。

隼人は女神により召喚された、俺達と同じ時代の日本からやってきたそうだ。なのでゲーム名までは覚えていないが、カタリナとアイリスのことは知っていた。

「あのキャラに転生かあ。可哀想だな」

「実際にアイツらは悪役令嬢臭は無いが、悪巧みを考えている暗黒面の顔は、様になつて
いるけどな」

「どつちが本命？」

「俺には選べない。来る者拒まず去る者追わずだな」

「僕もかな…」

と隼人が口にするのと、一人の女性メンバーがギロリと隼人を睨んだ。ツンツン系か？ ツンデレ系か？この世界に来て1年以上、勇者的な働きをし、貴族籍を持っているそう
だ。調べ物に利用出来るかな？

「じゃ、ケンは一緒に召喚されたクラスメイトを探しているの？」

「そういうこと。問題はどこの国かが判らないことだ。国名を知ること無く強制転移させられたからね」

世界地図が真面に無いこの世界で、どこの国に召喚されたのか探すのは至難の業だろう。まあ、俺ってカルマが多そうだし、至難かな…

「人為的に召喚術を使ったんなら、歴史の古い王国だな。新興国にはそんな術は伝承していないから」

なるほど…言われて見れば。現在、隼人の移動手段である馬車で相席している。俺の膝の上にはネコ耳少女のミイが載っていて、俺の手はモフモフを満喫中である。因みに、ミイ以外のメンバーは、俺に近づいてこない。

まあ、俺も興味無いからいいけど。

「で、街には何をしに行くの？」

「冒険者ギルド本部の依頼で、錬金術ギルドで高品位ポーションを作って、冒険者ギルド

に納品して欲しいって。この街の冒険者ギルド支部って、ポーションが不足しているらしいぞ」

「買い占めて要るヤツでもいるのか？」

「ケンのランクは？」

「冒険者ギルドはAだな。将来的には商業ギルドにも入るかもだ」

アイリスの領地にお土産を買い込む場合、商業ギルド員であると優遇されるらしい。と、街に入るのに関所があった。

「一応、ここでも身分を照会するんだよ」

パーティーを代表して隼人がSランクの冒険者ギルド証を出した。

「これは、隼人様、おかえりなさい」

隼人のギルド証には家の紋章らしい物が浮かんでいる。貴族の証かな。

続いて俺もギルド証を出すと、俺のギルド証にもアルメリア公爵家の紋章が浮かんだ。

「お忍びですね。商業都市アインズヘイルによろこそー！」

いつの間に、こんな細工を…ああ、この前、マインドロストした時かな…

◇

隼人に案内され、漸く錬金術ギルドに到着。何故か俺の背中にはミイが貼り付いてい

る。隼人曰く、気に入られたらしい。因みに錬金術ギルドの看板はフラスコと試験管が描かれている。それって、錬金じゃなくて、錬成じゃ無いのか？

錬金とは金属を練り合わせて合金を作るイメージで、錬成は異なる物質を練り合わせるイメージである。実際、錬成では合金は作れず、錬金で作れたのだ。この国では錬成を含めて錬金術なのかな。深く考えることを放棄した俺。

ギルド内は小ぎれいで広々している。冒険者ギルドのような喧噪感はまだ無い。早速、カウンターにいる受付嬢に冒険者ギルド本部からの推薦状を手渡した。

「少々お待ちください。ギルマスを読んで来ます」

受付嬢は奥に引っ込んだ。しばらくすると奥の方から老婆？が出てきた。ここのギルドマスターかな？

「これはこれはヒヨコの貴族様ですか」

「レインリヒさん。お手柔らかにお願いしますよ」

隼人の知り合いのようだ。

「で、お前さんが冒険者ギルド本部が送り込んで来た錬金術師か？」

「まあ、そんな感じですよ」

「まずギルド登録には5000ノールだよ」

おお！両替していないぞ。

「これでお釣りあるかな？」

アイテムボックスから純鉄のインゴットを一本取りだし、カウンターに置いた。

「なに！まさか、混じりつけ無し鉄のインゴットだと……」

錬金術だどつくり出すのは難しいが、強奪スキルを使えば簡単である。混じり物だけを強奪すれば良いからね。

「わかった。これを買って取ってやる。お釣りは後で渡す」

高額で売れたようだ。

「うううう、腕は確かなようだな」

腕？強奪のかな？まだまだだひよっこだと思っけど。

「ケン、やるなあ。あのレインリヒさんを唸らせるとは」

隼人が苦笑していた。

運命的な出会い Part 1

——ジオルド・ステイアート——

「姉さんに会わせてください」

カタリナの義弟のキースが直談判に来た。結婚前の大事な時期故、王宮で軟禁して王女教育をしていたのだが、兄達の側近共がカタリナの『人タラシ』スキルを『魅了』と勘違いし、魅惑の魔女として人知れず国外追放処分してしまったのだ。今更、そんな顛末をクラエス公爵家に言え無い。いや、正直に言えば兄達のせいか。

「実は、兄達がカタリナを恐れて、魔女として国外追放してしまったんだ。今、私の勢力でカタリナを探しているところなんだ」

「おい！軟禁しておいて、それなのか？姉さんを護れきれないなら、婚約者の資格は無いだろ？」

キースの怒りに油を注いってしまったようだ。私の胸ぐらを掴み、迫るキース。

「王位継承争いに、姉さんを巻き込んだのはお前だ！」

私を押し倒して、部屋から出て行くキース。

「王子、連絡が届いています」

搜索に向かった手の者からの連絡が届いた。カタリナを載せたと思われる場所が、森の中で大破して見つかったそうだ。馬車の破片の周りは血の海の痕跡があり、ゴブリンと思われる死骸が多数あったそうだ。

まさか、ゴブリンの集団に襲われて…最悪の結果が脳裏を覆い尽くしていく。兄達の側近は皆殺しだな。

——ケン——

隼人とは再会の約束をして別れ、レインリヒ相手にギルド登録をしている。この老婆、俺の身体にギルドカードを埋め込みやがった。これも錬金術になるのかな？

『ギルドカードオープン』と唱えるとギルドカードが目前に表示された。冒険者ギルドランクA、錬金術ギルドランクCとある。

「純鉄のインゴット化ができるならランクC相当だ」

あれは錬金術では無いんだけど…まあ、いいつか。

「ステイタスがまるで表示出来ないとはなあ…」

通常はHPやMPなどの数値がランク表示されるらしい。

「違う国のギルドカードを併合した弊害かもしれないな」

この世界では国を跨いで活動する冒険者は珍しいらしい。

「冒険者ギルド本部の推薦が、他国の公爵家の者っていうのも珍しいな」

アイリスが所有権を誇示しているらしい。レインリヒ曰く『タスマリア国アルメリア公爵家の者であるから、手出し厳禁』ってことになるらしい。

「ふふふ、浮気はできんぞ」

レインリヒは知らない。俺がアイリスとカタリナの二人に二股状態であること、それとは別に静、萌をさがしていること。知れば、罵られるだろうな。『浮気者めっ！』と：因みに裏技であるが、ギルドカードにはフレンド登録機能があり、遠距離でも連絡ができるらしい。馬車の中で隼人に教わり、既に隼人とはフレンド登録がしてある。で、今レインリヒもフレンド登録をしていたし。遠くにおいても無理難題が飛んで来そうだな。

「鍊金は鍊金室で行うのがルールだ。奥のレンタルスペースを使いな。料金はインゴットの買い取り価格から引いておく」

えっ？ そんなルールがあるのか。薬草を摘んだ先で鍊成していたけど…

「瓶類も有料だからな。で、お前さんが納品するのは中級以上とある。量は作れるだけってあるが、何本作る？」

「100本ならアイテムボックスに作り置きがあるけど…」

アイテムボックスから作り置きのパーションを取り出し、レインリヒの前に置いた。

「…おい…これって、最上級ポーションじゃ無いか…」

老婆の表情が歪んでいく。

「え？まさか…レシピは中級だったはず…はて」

最上級が100本かあ。買い取ってくれるかな？国家予算並になりそうな予感である。

◇

レインリヒに促されて、冒険者ギルドへと向かう。地図を書いてくれたし、迷子にはならないだろう。万が一、迷っても、フレンド機能で解決出来るだろう。

広場の噴水辺りに来ると、無性に良い香りがしてきた。ああ、屋台だな。喰うか。小銭はレインリヒから貰ったので、買い食い出来るはずだ。

『さあさあ寄ってらっしやい寄ってらっしやい。今日は港町メラルドからの新鮮な海魚の塩焼きだよ！ 絶品の一品がなんと700ノールだよ！』

『お客さん見て行つてー！ かの有名なヘレン牧場の牛を焼いた牛串が一本なんと800ノールだ！』

『さあ、お客さん肉や魚もいいもんだが主食がなくちゃいけないね！ フェイルズ平原で取れた小麦を使ったふつかふかの白パンだ！ これが肉にも合うし魚にもあうんだ』

からたまらない！ お一つ1000ノールだが、その分ポリウムも満点だよ！」

屋台のオッサン達の声もスパイスの一部だな。待てよ。白パンが1つ1000ノール？日本円で1000円って感じか？魚の塩焼が700で、牛串が800なのに？パンが高すぎるだろうに。物は試しでその3つを買い、噴水の縁に腰を下ろした。まずは魚の塩焼きを一口……うん、魚を自分で捌いて塩焼きにした方が良いかな。焼き加減の問題か、塩加減の問題だろう。

そして牛串の肉を白パンに挟んで……旨い。これは、お土産に出来るレベルだな。後で、大人買い……って……コチラを見つめる少女がいた。ネコ耳少女である。魚の塩焼きを渡すと、美味しそうに完食し、肉をサンドしたパンをロックオンしている。これもネコ耳少女に渡し、恐る恐るネコ耳少女の耳た頭をモフモフと……猫人族の付き人はアリだと思う。そんな妄想が脳内を駆け巡っていく。

「はあ……探しましたよ。はぐれないでくださいと言ったではないですか。おや？」
ネコ耳少女の連れらしきオッサンがやってきて、彼女に小言を言っている。

「あ……ダメじゃないですか。奴隷に勝手に、ご飯を与えるのはマナー違反ですよ」
「奴隷？」

「ええ、首輪が見えるでしょう？ これは奴隷の印なんです。ご存知ありませんか？」
猫だけに首輪……ファッション出なくて、奴隷の印？

「そうなのか？知らなかった。すまない」

「なるほど……変わった服装を見るにどこぞの貴族様でしょうか？それならばこの奴隷をお買いになられませんか？」

「買いたい」

「即決ですか？お金はありますか？」

「物納で良ければ……」

最上級ポーシヨンなら持っている。確か1本1000万以上で売れるはずだ。中級で1本100万以上上って言っていた気がするし。

「彼女はいくらだ？」

「ここで交渉するには……本当にお買いになるなら、後ほどヤーシス奴隷商館までお越しください」

「わかった」

オッサンとネコ耳少女の不揃いカップルが去って行った。そうだ！冒険者ギルドへ行かないと……

運命的な出会い Part 2

——ドミニク・ゴルツ——

「何だって…」

薬用植物研究所所長のヨハンのもたらした報告は恐れていた事態であった。

「聖女はセイが確定で、追い出した男は聖者の可能性が大だ。モエ、シズカにはセイのよ
うな5割増しの能力は無い。まあ、シズカの場合は、あのクソ王子が後宮に入れて仕
舞ったせいで、実際には実測出来ないがな」

後宮は主以外に男性は入れない場所である。入るには男性性器を取り除くか、使用不
可にしないとイケない。そんな場所に研究の為名目で、我々は入れないのである。

「仮にシズカが聖女であつても後宮からは出せない。その場合、あのクソ王子の子飼
いの聖女になる。あのバカの狙いはこれだろうな」

王子直轄の聖女…最悪な事態である。国家事案なのに、王子にしか利を得られなくな
る。王ですら王子の後宮には口が挟めない。なんで、王子に後宮を持たしたんだ？文官
のアホどもめ！

「で、どうする？」

ヨハンに訊かれた。

「探しようがない。それにもうすぐ一年も経つ。余所の国に根付いていたら、取り返せない。無理矢理奪還すれば、戦争ものだよ」

打つ手が無い。隣国にはいないみたいだし、別の大陸だろうな。我が国には冒険者ギルドが無い。あのネットワークが使えないのが痛い。

「商業ギルドや魔法使いギルドは使えないしなあ」

もし聖者が本物とした場合、商業ギルド、魔法使いギルドも奪還戦に乱入してくると思われる。なんせ聖者は規格外のヒーラーの可能性を秘めているから。さて、どうするか……

——ケン——

ネコ耳少女を買う気満々な俺。アイリスとカタリナはどんな反応をするかな。モエは猫大好きだから問題は無いだろうけど……って、冒険者ギルドに着いた。

ギルド内に踏み入ると、ギラギラした視線が俺に突き刺さる。知らない者に対しての警戒、新人であるなら虐めのタイミングを計っているのだろう。これはどこの冒険者ギルドであることである。

窓口の受付嬢に用件を伝える。

「ギルド本部の依頼でポーシオンを納めに参りました。これは推薦状です」
ポーシオンを目にして目が点になる受付嬢。品質を確認したようだ。

「やあフィリル嬢！ 今日は何かいイクエストがないかな！」

男の声がして、俺の持って来たポーシオンが、俺の頭の上に落とされた。おい！

ガラガラガツシャーンパリーンパリーン。

床にポーシオンの瓶が落下して割れる音が、ギルド内に響いた。中には俺の頭で割れたポーシオンもあり、俺の身体はポーシオン塗れになっていた。こんなクソみたいな新人虐めもあるのかあ。BGMに俺の惨めな姿を笑う声が方々から聞こえている。

「このことは、ギルド本部に報告する。料金は3倍にして請求するからな」

青ざめた表情の受付嬢に告げ、新人虐めの主犯者を見た。

「クスクス……」

「ダメよ、笑っちゃ可哀想よ」

「だってよダーツハツハツハ!!」

あつという間に、ギルド内には連鎖した笑いの大合唱が生まれた。ここにいる全員が共犯つてことでいいなあ？人知れず、ここにいる全員から財布を強奪した。まあ、迷惑

料つてことで貰っておこう。

「ざまあねえな。製菓ギルドのクソツタレが！」

主犯の男が俺に言葉を投げつけてきた。製菓ギルドってなんだ？ギルドカードをオープンして男に見せた。公爵家の家紋をバックに浮かび上がる『冒険者ギルドランクA』の文字…

「え…なんだって…お前…」

顔が引きつる男。

「何をやっている！」

ギルドの入り口の方から女性の声が響いた。このギルドの主様の登場か？真紅の鎧に紅蓮の長髪を揺らし、俺と主犯格の男の間に颯爽と立ち、俺の方へと振り向いた。

「おい…あれって、紅い戦線のアイナだ」

「なんでアイナさんが」

「ソルテさんもいるぞ」

有名人らしい二人の女性。隼人と同じランクSか？

「見ていたぞ。貴様が彼にポジションを頭の上から落としたりしたところからな」

主犯の男を断罪する女、しかし鋭い視線は俺をロックオンしている。炎を象ったような紋章のついた剣が直ぐに抜けるように手を添えている。俺の行動に拠っては、斬り捨

てる気か？

「なあ、威圧を解いてくれないか？」

威圧？俺はそんなことをしていないぞ。お前が剣を抜いた瞬間に、俺は転移をすると共にこの建物を空間ごと遮断するだけだ。

「今回のことは依頼主に全部報告する」

俺はその場から転移した。

◇

「どうした？ずぶ濡れじゃないか？」

錬金術ギルドに転移するとレインリヒに声を掛けられた。

「冒険者ギルドの連中に持っていったポジションを全部、頭の上から落とされたよ。この納品書にサインをくれないか？」

『最上級ポジション100本』と書かれた納品書に、冒険者ギルドの代わりに、レインリヒのサインをもらった。

「じゃ、依頼主のところに報告して、一旦家に帰るよ」

「また、来るだろ？」

「ネコ耳少女を買いたいから、また来るよ」

「はあ？どういう意味だ？」

驚いた顔のレインリヒの前から、俺は転移をした。

人材スカウト Part 1

——アイナ——

一瞬で目の前から消えた男。無属性魔法か？高位の魔法使いの可能性があるなあ。対応した受付嬢に彼のことを訊いた。彼女は涙目であった。そんなに怖い目にあつたとは思わないけど。

「マズいですよ、アイナさん…彼は冒険者ギルド本部から依頼を受けたランクAの冒険者です。バックにどこかの国の公爵家がいるようです」

彼のギルドカードを見せられたらしい。貴族の配下の冒険者かあ。マズいわねえ。その上、冒険者ギルド本部の依頼で動いていたとなると…

「賠償額は、たぶん国家予算並になりそうです」

何？その額は…彼の持ち込んだポーションは最上級ポーションが100本だったと言う。なんで、そんな高品質な物を持ち込んだのよ？

「ギルド本部から指示書に、中級以上でできるだけ高品質な物を、出来るだけ多く納品つて、書かれています」

「これって、製薬ギルドの嫌がらせ？冒険者ギルド内で揉めごとを起こすって…」

「本部に問い合わせてみます」

◇

「マズい……問題の彼は製薬ギルドで無くて、錬金術ギルドだそうだ……」

蒼い顔のギルドマスター。事態は深刻だった。いつもの製薬ギルドの嫌がらせを思ったギルド員が暴走したのだが、彼は製薬ギルドの関係者でなく、冒険者ギルド本部の依頼で、錬金術ギルドから派遣された冒険者だった。

そして、彼の作ったポーシヨンは錬金術ギルドのギルドマスターに品質をチェックされ、冒険者ギルド本部にその金額が請求されたそうだ。最上級ポーシヨン100本分の請求が……その価格は1本最低でも5000万とも1億とも言われている。それが100本である。

「彼の目の前で現物が廃棄されたって、本部のお偉方が激怒している。やらかしたヤツの首だけでは足り無い。全員の首でも足り無い。この街で責任を持って払えと、領主様に請求書を回すって……」

その彼はここからの転移で、錬金術ギルド、冒険者ギルド本部を経由して家に帰ったそうだ。連絡が取れないらしい。ここからの凄く遠くにある国に家があると言う。

「ずぶ濡れ状態で帰宅すると心配されるので、衣服や身体からポーシヨン成分を強奪し、瓶に戻した。あの時、咄嗟に床へぶちまけられそうになった分もこつそり強奪し、瓶に入れてある。なので実質の損害は30本くらいかな。」

家に帰るとカタリナが抱きついて来て、臭いを嗅ぎ始めた。

「なんで今日は葉臭いの？」

臭いが染みついていたのか。浄化、清浄しておこう。自分と家の中を同時にきれいにした。その後、三人でお風呂に入り、白パン、魚の塩焼き、牛串、ネコ耳少女の話をした。

「愛玩目的だと認められないわ」

アイリスはモフモフしたく無いのか？

「確かにモフモフはしたい、肉球プニプニをしたいけど、愛玩目的では、その子が可哀想よ」

と、カタリナ。元悪役令嬢のセリフとは思えない。

「じゃ、主目的が愛玩で無ければ良い？」

「優秀な人材は宝だわ。仕事が出来る子なら、買って来てもいいわよ。但し、予算はケンの個人資産内で、お願いね」

それは、仕事に使えれば、維持費と言う雇用費は出して貰えるのかな？

「そうだ！ケン、スカウトして来て欲しい人材がいるの。お願い出来るかな？」

「って、カタリナ。国外追放刑を食らった悪役令嬢のスカウトした人材って、厄介ごとに思えるんだが。」

「誰を連れてくれば良いんだ？」

「緑の手を持つメリ・ハント、財務業務が出来るニコル・アスカルト様、その妹であるソフィア・アスカルト、光の魔力の使い手でお菓子作りが得意なマリア・キャンベル」「おい！マリア・キャンベルって、『FORTUNE・LOVER』の主人公じゃないのか？」

「そうだね。カタリナ、彼女を虐め倒したんじゃないの？」

「いや、そんなことはしていません。大丈夫です。この蛇を持って行ってください」

手作りの蛇の玩具…

「これを私が作っていたことは、みんな知っていますから。後、みんな宛てのお手紙を書きますから、手間は掛からないと思います」

◇

何日か掛けて、カタリナの指名した4人？いや5人を連れ帰ってきた。マリア・キャンベルの希望で、彼女の母親も一緒に連れてきたのだ。

「マリアはヒールも出来るみたいだから、普段はお母様と一緒にメイド兼厨房スタッフ

で、有事の時はお願いね」

「はい、任せてください。母と共に雇い入れてくださり、ありがとうございます」

アスカルト兄妹は財務部、メアリはカタリナのいる農業技術部に配属された。ちなみにアスカルト妹も転生者であった。アスカルト妹には転生者の自覚が無いが、カタリナ、アイリスには報告済みである。

「人材補強が出来たけど、後少し欲しいかな。ケンの買っている子達も優秀だといいなあ」

つて、アイリスが甘えたように言う。あのネコ耳少女が財務系仕事している姿は見たく無いんだが…

そうだ、資金を作らないと…：最上級ポーションだと買手が付かないので、中級ポーション並に効果というか、ポーション自体を薄めた。出来た中級ポーションは1万本くらいで、前回の依頼の売り上げの回収が進んでいないこともあり、冒険者ギルド本部とレインリヒに買い取って貰った。これでネコ耳資金が出来たかな？

いよいよヤーシス奴隷商館へと向かった。1万本の中級ポーションの売り上げは、この国の通貨に両替え済みである。討伐してきた魔物の部位も売れる物は売ってきた。資金は国家予算並にあるぞ。これで買えないなら、諦めることにするか。

商館に着くと、

「今日はもう終わりだ。また、明日来い」

と、店員に横柄な態度を取られた。店員教育がなっていないな。

「ヤーシスに個人的に会いに来たんだがいるか？居留守なら、商談は無しと伝えてくれ」
「待て……中に入れ。おい猫。ヤーシス様を呼んできな」

あのネコ耳少女に命令する店員。

「猫じゃない。あと私の仕事は主の護衛。呼ぶならお前が呼んでこい」

ネコ耳少女は護衛が出来るのか。愛玩目的で無ければ、問題は無かったよな？

「んだところ！ 奴隷のくせに俺に口答えか！」

ああ、この店員はダメダメだな

「いいよ。とりあえず中に入るから。そしたら誰か来るだろ」

あのネコ耳少女を抱き上げた俺。

「…じゃ、奥の部屋に入って待ってろ」

「奥の部屋？」

「あつちだよ」

ネコ耳少女に道案内を任せた。

人材スカウト Part 2

——アラン・ステイアート——

「おい！お前が何かしたんじゃないのか？」

俺の双子であり兄である第三王子のジオルドに詰め寄った。コイツが花嫁修業の為という口実で、軟禁していたカタリナ。その軟禁していた彼女が警戒厳重は場内から消えてしまったのだ。

「私も彼女の行方を知りたい」

優男顔のジオルドには珍しく、眉間には皺が生じ、難しい顔をしていた。

事態はそれだけでは無かった。俺の婚約者のメアリ、この国の宰相の子供であるアスカルト兄妹、光の魔力持ちであるマリア・キャンベル親子が、次々に行方をくらましていた。この国の将来を担う人材だったのだが……全員行方知れず、生死不明の状況である。

「お前じゃなければ、長兄、次兄達の勢力か？」

俺達は4人兄弟であり、兄弟仲はそれほど悪くは無いのだが、側近達が王位争いを水

面下で行っているらしい。俺とジオルドを王位争いから脱落させる為に、その一端が暴走したのかもしれない。

「分からない」

ジオルドの顔は憔悴しているように見える。現在もカタリナの行方を配下の者に追わせているようだ。

「マリアだけでなく、彼女の母親も消えたことが解せない」

母親は能力持ちでは無かった上、平民である。

「カタリナが生きていて、彼らを迎えに来たという妄想が、一番しつくり来るんだよ」

そうなんだが…

「その場合、なんでニコルなんだ？キースで無くて…」

カタリナが迎えに来たとすると義弟のキースだろう。いや、ニコルは妹のおマケか？

マリアのおマケが母親なら

ば。そうなる、なんでメアリのオマケで俺が迎えられていないんだ？

わからん…

——ケン——

奥の部屋に着くと、ソファに座った俺の膝にネコ耳少女が載り、俺に身体を預けてき

た。モフモフを堪能するかあ。しばらくの間、モフモフ堪能三昧をしていると部屋の奥にある扉からヤーシスが出てきた。

「これはこれは。仲睦まじいようですねお客様。それで夜分にいかがいたしました？」

表情は笑顔であるが目が笑っていないヤーシス。

「資金が出来た。この子と、他に有能な女性がいれば手に入れたい。値段の交渉を始めようぜ」

内心、国家予算並に吹っかけられたらと、ちよつとビクビクしている。俺、商人が本業で無いからな。駆け引きに弱いかも。

「その子は従属奴隷で1000万ノールです」

想定より安い。即金をアイテムボックスから取り出し、ヤーシスの前に置いた。

「迷わずに即金ですか？」

「他に有能な商品は居るのか？」

ヤーシスの問いはスルーをする。コイツのペースに嵌まると危険だからな。それに、この位の価格帯なら、どんと来いだ。

「特殊奴隷なのですが、良いですか？」

ヤーシスは即答してきた。既に俺の行動を予測していたようだ。ええつと…特殊奴隷とは訳ありの身分の者で、奴隷の方に主を選ぶ権利があるんだっけ？

「価格は1億2000万です」

ヤーシスのプライス宣言と共に、奥の扉から出てきた女性。見た目は問題は無い。ただただデカイ。その一言である。この男が有能っていうのな

ら有能なのだろう。まさか栄養が胸だけに行っている訳では無いよな？ ヤーシスの目の前に、アイテムボックスから取り出した1億2000万を置いた。

「後、これはサービスだ」

ついでに、売れ残った最上級ポーシジョンを1本置いた。

「なるほど、あなた様はわかってらっしゃいますね」

先ほどは笑わなかった目も含めて、目の前にいるヤーシスが笑っている。

「奴隷の首輪以外の隷属方法に出来るかな？ 彼女達の仕事場所は奴隷が禁止なんだよ」

アイリスの国は奴隷の売買は禁止である。ただ、抜け道で他国での買い物はオーケーらしい。

「追加料金になりますが、お土産のお返しでサービスします。身体の一部に奴隷紋を刻みます。普段は見えませんが、主に逆らうと光を放って、現れます」

「それで頼む」

俺は彼女達のデルタ地帯に奴隷紋を刻んでもらい、ウエンディ・テイアクラウンという訳ありの特殊奴隷と、シロというネコ耳少女の奴隷を手に入れた。家名持ちの奴隷：

確かに訳ありのようだ。家名からすると、どこかの王族か？

「またのご来店をお待ちしています」

ヤーシスの見送りを受けて、買い上げた二人と共に、家へと転移した。

——ウエンデイ・ティアクラウン——

初めて見たかもしれない。あのヤーシス相手に、無表情で買い物するお客様を。私を
買うに当たり、何の躊躇もせずと言われた金額をヤーシスの前に置いていた。初めて
会ったのに：：ヤーシスの言葉を信じて、私を買い上げたご主人様。ヤーシスの見込んだ
男性である。この方に買われないと、将来が不安になるかもしれない。ご主人様に買わ
れることを了承した。

ご主人様の住んでいる場所は、この国では無いらしい。奴隷制度の無い国？どこだろ
う。この辺りの国では無いのだろうか。旅の間に気に入って貰えるかなつと思ってい
たのだが、ご主人様は無属性魔法の使い手で、一瞬で違う場所に転移していた。

目の前に大きなお屋敷がある。門番に何かを告げると、門が開いた。この規模のお屋
敷だと公爵家だろうか？伯爵家だろうか？

「おかえりなさい」

屋敷の奥から走り寄ってきた女性。ご主人様に抱きつき、臭いを嗅いでいる。特殊性

癖持ちなのだろうか？

「おかえりなさい。彼女達をお買いになられたのですね」

時間差でもう一人女性が現れた。所作は貴族：着ている衣服は二人に大差は無い。姉妹なのかしら？

「ああ。こつちのネコ耳少女は有能な護衛らしい。二人を連れ歩けない場合、彼女を連れ歩こうと思う。どうだろうか？で、こつちの女性はメイド兼アイリス達のサポート要員だ」

サポート要員？まさか、あの二人の影武者？

「そうね。じゃ、ケンの側仕えと護衛にしましょうか。ケンの留守中はメイドと執務の手伝いをしてもらおうかな」

と、後から出てきた女性。彼女がこの館の主なのかしら？

「この家の護衛は？」

「問題は無いはないわ。欲を言えば、女性の護衛は欲しいわね。女性しか入れない場所の護衛としてね」

「後、あなた。夜のお供は必要無いから、部屋を用意しますね」

夜のお供は必要無い？なんで？私はご主人様の奴隷なんですよ。

「旅先ではお願いするかもしれないわ。私達は国外には出られないから」

「そうだね。まあ、その時は頼みます」

国外に出られない？この二人は、国の重鎮なのかしら？

人材スカウト Part 3

——キース・クラエス——

姉さんがお城に行ったまま、帰つて来ない。お父様とお母様がお城に問い合わせをするが、返答はなく、調査中だという。

そうこうしていると、姉さんと親しい者達も行方不明になっていった。メアリ・ハント、マリア・キャンベル、ニコルとソフィアのアスカルト兄妹：

この国で何が起こっているのだろうか？

姉さんの専属メイドであるアンには、彼女の父親であるシエリー男爵が連日、婚約話しを持って来ている。

『もう仕える主はいないのだから、早く嫁に行け！』と…

何故この人は、姉さんがもういないと言い切れるんだ？

——ケン——

アルメリア公爵邸に住むみんなに、ウエンデイとシロを紹介していく。

「で、どちらが奥様ですか?」

カタリナとアイリスについて、ウエンデイに訊かれた。

「結婚はしていないよ。二人共公爵令嬢で、俺は平民だからね。貴族社会のルールで身分差がある結婚は無理でしょう」

どこの国も貴族ルールは同じだという。公爵令嬢の相手は伯爵家以上でないと、問題があるらしい。まして、俺は異世界から召喚された平民だし。でも、身分があれば、静と萌を探し易くなるのだろうか?

「お仕事は?」

「アルメリア公爵領にいる時は、アイリス、カタリナの手伝い。それ以外はギルド本部や支部からの仕事のだな」

「ウエンデイはメイドとか秘書の仕事は出来る?」

「はい、お任せください。側仕えとしてお仕えます」

スケジュール管理をしてみらおうかな。

「基本、アイリスの忙しい時はなるべく領内にいる。アイリスが通常業務の時は国外でギルドの代行仕事を受ける」

「わかりました」

◇

隼人経由で連絡を貰い、シロを伴い、アインズヘイルの錬金術ギルドへと向かった。

「レインリヒ、何か用か？」

「この冒険者ギルドと折り合いが付かなくてな」

まだ揉めていたのかよ…俺の中では既に終わった話である。

「本業の方が忙しいから、今回は長居は出来ないよ」

本業とはアイリスの手伝いである。疲労回復の手助けと言うか…最近では最大MPが上がったのか、マインドロストしにくくはなっているけど。

「揉めている内容は？」

「あのギルドなりにけじめを付けたと言って言うのだよ」

ケジメねえ。イジメみたいなものか？

「だって、物的にも金銭的にも弁償出来ないでしょ？」

冒険者ギルド本部で聞いた話では、どこぞの国の薬用植物研究所であれば、最上級ポーションが作れる薬剤師がいるそうだが、あの本数は無理っぽい。

「人的にどうにかならないかと言うのだよ」

人的かあ…ああ、アイリスが欲しがっていた人材なら…

「成人した女性の護衛を数名欲しいかな。騎士で無くても、腕が確かなら問題は無い」

「その方向で話をしておく」

レインリヒに交渉を任せ、冒険者ギルド本部経由で、アイリスの元に戻った。

翌週、また呼び出され、レインリヒの元へ向かうと、どこかで見た赤毛の女と狼人族の女がいた。

「取り敢えず、彼女達を寄越してきた」

「赤い戦線のアイナだ。こっちはソルテ」

「で？」

「賠償金代わりに私達を奴隷にして使ってくれ」

「俺の住んでいる国は奴隷禁止なんだが……」

「それはギルド本部から聞いたけど……他に賠償方法が思い浮かばないのだ」

ローンで払うって風習が無いのだろうか？ドラゴンを1000匹くらい狩れば返せるのでは？

「私達の身体を自由にしてくれていい。どうだろうか？」

「じゃ見えない奴隷紋で縛るか」

ウエンディとシロに掛かっている奴隷紋を解析した結果、隷属術を使えるようになった。紋を刻むと時に使うインキの成分なども解析して錬成済みであるので、俺の隷属術で、彼女達のデルタ地帯に見えない奴隷紋を付与した。

「終わった。これで、お前達二人も俺の奴隷だ」

「も、って?」

アイナに訊かれた。

「後ろにいるシロも、俺の奴隷だよ」

三人と共にアイリスの元に戻り、アイナとソルテにアイリスとカタリナの護衛を命じた。

人材スカウト Part 4

——セイ——

「最上級ポーションを100本って、セイならどのくらいで作れる？」

所長に訊かれた。

「うくん、5本のうち3本は作れますけど……100本分だと、材料が研究所に無いですよ」

「だよなあ。そうなると製法が違うのか？」

所長の話によると、どこぞの冒険者ギルド支部が、最上級ポーション100本をダメにしたそうで、その損害補償で制作者と揉めているそうだ。

「なんで、大切に扱わないんでしょうね？」

「冒険者って、粗野だろ？扱いが悪かったんだろ？」

扱いが悪いって、最上級ポーションだよ。きつと最上級ポーションを見た事のない者が、低級ポーション並の扱いでもしたのかな。

「問題は100本も作る材料だよ。制作者は国のバックが無いらしいんだよ。どこで

調達したんだろうな」

問題はそこかあ。確かに貴重な材料を使う。個人レベルで100本分も集めるのは不可能に近い。もしかしたら、私達の知らない素材で作ったのかもしれない。

「その制作者に会えませんか？」

研究者魂が少し疼いた。

——ケン——

また、人材スカウトの依頼である。ニコルから両親を、カタリナからは専属メイドをヘッドハンティングしてきて欲しいと言われた。ハンティングって、スカウトで無くて、拉致にならないか？

ニコルの父親は宰相をしているので、アイリスの領地の政務の力になると言う。カタリナの専属メイドは、カタリナにとって大切な者だと言う。マリア達をスカウトする際、アンのことを忘れていたカタリナ。それは、可哀想で無いのか？

まず、ニコルと共に、ニコルの両親を説得しに行く。難航するかと思っていたが、割とあっさり移住してくれることになった。理由はカタリナの件だそうだ。宰相なのにカタリナが城内で軟禁されたことも、カタリナが国外追放の刑を執行されたことも、移送中の事故のことを聞かされてなかったそうさ。

「王族が好き勝手するなら、この国に宰相は必要ない」

と、言い切り、退職願いを出さずに、夜逃げをする方向となった。立派な屋敷と庭園があり勿体無いので、大規模な強制転移術で、アスカルト邸をアルメリア公爵邸の隣に移設することにした。ただ、移設後に更地だと怪しまれるので、無属性のエクスペロージョンで元アスカルト邸跡地に、クレーターを作って証拠隠滅を試みた。

次にアンのハントであるが、既にクラエス公爵邸にはおらず、彼女の実の父親により嫁入りさせられたそうだ。その父親であるシエリー男爵邸に忍び込み、情報を収集すると、とある金持ちの老人に売つたらしい。嫁入りじゃないのか？それって、性奴隷？この国って奴隷禁止じゃないの？売つた先の老人の場所を調べ、シャリー男爵邸から犯罪の証拠書類と金目の物を『強奪』して、住民の魂の浄化を施した後、件の老人の家に向かった。

老人の家にアンはいなかった。既に飽きて奴隷商に売つたそうだ。しかも老人の趣味の部屋には、拷問道具が数々並んでいた。そっち系の好き者でアンの身体は拷問に耐えきれなくなったのだろう。この家からも証拠書類と金目の物を『強奪』して、老人をアイアン・メイデンにぶち込んで、奴隷商を追った。

◇

数日後、ヤーシスに呼び出された。

「ご依頼の品物が見つかりました」

と…

「いくら？」

「1000万で、どうですか？」

ヤーシスの前に2000万を置いた。実のところ、『強奪』した金と金目の物を売ったので、財布はホクホクである。死人に金は必要無いから、俺が有意義に使うことが淨財だと思ふのだ。

「多いですが…」

「今回の迷惑料と今後の期待料だ」

奥に案内されると、惨たらしい姿になり果てた女体がベッドの上に置かれていた。

「もう1000万出す。しばらく、この部屋を借りていいか？」

「ええ、どうぞお使いください」

アンの身体は移動に耐えられないほど痛んでいた。まず、全身に最上級ポーションを振りかけて、薬で治せるだけ治しておく。薬でも治らないレベルは修復術、治癒術、回復術を使い、根気よく根治させていく。

2週間ほどで、見られる姿になってきたので、家に連れ帰った。

「アン…アン、目覚めてよ〜！」

泣き続けるカタリナ。相当嫌な目に遭ったのか、アンの意識は本能的にマインドロストしたままであった。

「マインドヒールはMPが回復したら施す」

「お願い！アンを…アンを助けて…ケン…」

カタリナの悲痛な叫び…

更に3週間くらいかかり、アンは目覚めた。

「お嬢様…」

「アン…」

泣きながら抱きつこうとしたカタリナを、俺は制止した。

「まだ、完全に治っていない。力一杯抱きつくと、折れるぞ」

「えっ？ええええええ！折れちゃ、困るよ」

つて、言われても…俺の能力の限界である。もっと、アレコレ出来るように鍛錬しないとダメだ。

「見た目だけ治っただけだ。まだ骨も内臓も完全には治っていない。俺はヒーラー専門じゃないからな」

マリアのヒール能力も高くは無い。彼女は聖属性では無く、光属性のヒーラーである

から。光属性の場合、光の届く範囲しか基本治せない。体内などはジンワリと染みこむ聖属性で無いと効果が低いのだった。

「今後のことを考えると、専門職のヒーラーをスカウトしないとダメだな」
貴重なヒーラー能力者って、スカウト出来るのかな？

奇病の少女 Part 1

——アラン・ステイアート——

この国で何かが起きているようだ。宰相であつたアスカルト伯爵のお屋敷が深夜に前触れも何も無く、突如爆発した。お屋敷のあつた場所には爆発した痕跡である大穴が開いている。深々と開いた穴のせいで、付近の家々は土が降り積もっている。大量な土砂が爆発と同時に噴き上がったそうさ。

「何もかもが粉々です」

現場を捜査している兵士からの報告。死体も粉々に吹き飛んだのだろうか。

その後に発覚したのがシェリー男爵一家が変死しているのが、男爵邸内で発見された。更に、引退した豪商が自分の趣味の道具の中で死んでいた。この国では一体何が起きているのだ？

王城内ではカタリナ・クラエスの呪いだと噂されていた。噂の出所は、カタリナに手を掛けた第一王子と、第二王子の側近達であつた。

不審な出来事が続いたことから、怯えている者達への尋問をし始めた。その結果、カタリナの『人タラシ』スキルを『魅了』と勘違いした件の側近達が、カタリナを魔女と

して、ゴブリンの生息地へ放逐しに行ったことがわかった。ただ、移送中にゴブリン達の襲撃に遭い、カタリナの生死は不明らしい。

お前ら、なんてことをしたんだ?! あれでも一応、第三王子の婚約者だぞ…

——ケン——

久しぶりに隼人から連絡があり、冒険者ギルド本部で待ち合わせすることになった。何の用だ? 場所が場所だけに何かのクエストが発生したのだろうか。

「ケンさん、お久しぶりです」

しばらく会わない間に、ため口から敬語になった隼人。どうした?

「何をおっしゃっているんですか? ケンさんの方が冒険者として、僕よりも格が上ですよ」

ランクSの隼人に言われても、実感がまるで無い。だって、俺はランクAだし。

「冒険者の格って、冒険者ランクは関係ないですよ。ランクSへの昇格条件は国からのクエスト達成ですから」

そう言えば、俺は国からのクエストって受けた事無いなあ。主に冒険者ギルド本部からのクエストが殆どである。ギルド本部案件は移動距離、拘束日数が長い割に、報酬が低い為、受ける冒険者が少ないらしい。その点、

俺は報酬よりも色々な国に行け、色々なコネを作れ、色々な情報が得られる為に、スケジュールに問題が無ければ受けることにしていたので、必然的にギルド本部への貢献度が高くなつたらしい。

「それで、今回は何？」

「幼児が原因不明の高熱でダウンしているそうなんです。その子の救助要請がギルド本部に寄せられたそうです。僕のパーティーは火力は高いんですけど、そっち系のクエストは役立たなくて……」

「で、その子はどこにいるの？」

◇

件の少女は俺の行ったことの無い国、ユルゲンシユミットって封建制の王政国家にいるそうだ。静と萌の情報が入るといいなあ。冒険者ギルド本部から地図を貰い、その場所へ向けて、短距離転移を繰り返している。ギルド本部の資料室で調べて貰った結果、何かを降臨させる儀式があるらしいことがわかった。この国が臭いなあ。

ゴツン！

ナニカにぶつかった。頭が痛い。転移による正面衝突か？

「痛い！何？何が起きたの？ナノちゃん?!」

目の前には額を押さえ蹲る少女がいた。うん？魂が二重になって見える。転生者か

?

「お前、転生者か？」

「えっ!？」

俺の話した日本語を聞き、驚いた顔で俺を見上げた少女。転生者で確定だな。アイテムボックスから、おにぎりと味噌汁を出して差し出した。俺のアイテムボックスは時間停止タイプで、作りたてをそのまま保温状態で収納出来るのであった。

「おにぎり…味噌汁…食べていいの」

目をキラキラさせて訊いてきたので、俺は無言で頷いた。涙をポロポロさせながら、ソウルフードを食べる少女、マイル。食べながら、彼女の事情を聞いた。

日本名は栗原海里で、本名の海里からマイルと言う名を名乗っているそうだ。この世界での本名はアデル・フォン・アスカム。入り婿である父親に祖父と母親を殺されて、父親の再婚相手の子供に、家督を取られたそうで、次は自分が殺される番だと思い、見つかからないように逃亡中だそうだ。

「一緒に来るか？別の大陸で、転生者仲間と暮らして居るんだよ。別の大陸だから、追っ手は来ないと思うぞ」

「えっ? いいの?」

「問題無いよ。冒険者ギルドに顔が効くから、身分証明書も作ってあげる」

冒険者ギルド本部に一旦戻り、マイルの冒険者ギルド証を発行してもらい、パーティーとして組んだ。パーティー名はマイルの発案で『エチゴヤ』に。隠密旅ならちりめん問屋でしょうって。転生者の話せば受けるだろうな。

そして再度、マイルとシロと三人で、奇病に苦しむ女の子の元へと急いだ。

「モフモフ最高ですね！」

ってシロをモフリながら就寝するマイル。一人での逃亡生活から解放されたのか、3モフリ半で爆睡し始めた。

まあ、ゆっくり寝ていいよ。夜の間はね。短距離転移のデメリット、夜間の転移は危険なこと。遠くまで見えないので、昼間より転移距離が短くなる上、障害物が見えないし。消費MPが多くなって、疲れが激しいので、夜は寝ることにしているのだった。

翌日の昼くらいには、目的地に着いた。門番にギルドカードを見せると、女の子の元へ連れて行かれた。門番が女の子の父親だったのだった。

「知り合いの冒険者の隼人に依頼を出したんだ。頼む、娘を助けてくれ」

隼人がギルド本部に持ち込んだ案件のようだ。冒険者同士が知り合いであっても、仲介者としてギルドを通すのがルールである。冒険者同士のいざこざに発展させない為である。知り合い同士での依頼であっても、取り分で揉めたり、責任の所在で揉めたりすることが多々あるそうだ。

家に入り、まずは浄化、清浄の術を掛けた。思いの他、家の中が清潔で無かったのだ。そして、女の子の元へ：この子も魂が二重に見える。転生者であるようだ。

「マイル、この子も転生者だ」

父親に分からない様に、日本語で伝えた。

「なんで、分かるの？」

不思議そうな顔で俺を見るマイル。

「何かのスキルだと思っただけど、転生者だと魂が二重に見えるんだよ」

何のスキルかはわからない。ステイタスには、それらしいスキルは載っていない。

「そうなんだ」

女の子を鑑定する。魔力過多、器である身体が壊れる位、魔力が増加している。彼女の身体は本能的に、魔力を圧縮しているが間に合っていないようだ。取り敢えず、彼女の秘めている魔力の一部をマインドロストしない程度に『強奪』する。効果があったように、呼吸が穏やかになっていった。

魔力の流れを精査していくと、所々魔力が無理矢理圧縮され瘤のようになり、魔力の流れを阻害しているようだ。

「血液の流れで言う動脈瘤だ。魔力の流れで瘤が出来ている」

マイルに日本語で伝えた。

「ナノちゃん、治せる?」

マイルにはナノちゃんっていうアシストピクシーが付いているらしい。いいなあ。俺もナビゲーションピクシーとか欲しい。

『固結び状態だから、気長に解けば消えます』

どうやって、解くんだよ? ステイタスとにらめっこする。あつ! 念動力って、いつ会得したんだ? これで、ほどけるかな?

「マイルは手立てある?」

「うん。ナノちゃん頼みかな?」

父親と相談して、女の子、マインを家に連れ帰ることにした。ここでは、俺達がマインドロストした場合の対処が難しいので、二次災害が起きそうなのだ。

エリクサーもどき

——トウリー——

妹のマインが安心して治療出来る場所に移されることになった。心配していた治療費は要らないそうで、その代わり移住先で働いて欲しいそうだ。移住先は、ここからとても遠くの大陸にある国だそうだけど、主治医の男性が転移術を持っているそうで、一瞬で着いてしまった。先に私とマインだけが移住し、父さんと母さんは、仕事の引き継ぎが終わり次第、こちらに来る事になった。

タスマリア国アルメリア公爵領の領主様のお屋敷。そこが、移住先である。「妹さんが日常生活できるまで、傍にいてあげてね」

領主様のご令嬢であるアイリス様は領主代行として、この地を治めているそう。お屋敷は領都から少し離れた行政区と呼ばれるエリアにあるそう。

ここでは貴族が平民の為に汗水垂らして働いているそう。

「領民の皆さんの納めてくれる税金で、私達貴族が暮らせるんです。ならば、その領民の為に働くのは貴族としての役目だと思うのです」

「この貴族様達は、私達の住んでいた街の貴族様達とは違うらしい。

「志が同じ者ではないと、私の領地の行政には関われないのです」

「腹黒い貴族はケンが退治しちゃうしねえ」

今一、アイリス様とカタリナ様の関係が分からない。後、マインの主治医のケン様の存在も分からない。ケン様曰く、平民の冒険者だと言うが、アイリス様、カタリナ様は、ケン様を慕い、尊敬しているみたいだ。

「ケン？単なる平民とは言いがたいですね。冒険者ギルドランクA+、錬金術ギルドランクS、商業ギルドランクCのスーパー平民になると思います」

錬金術師？商人？それで冒険者も熟しているのかあ。それは凄いなあ。

——ケン——

マインの父親のギウンターに話を聞いたが、あの国が聖女召喚をしているのかは平民では分からないと言う。マインの治療の合間に、神殿に忍び込み、聖典をコピー錬成して貰って来た。あれ？これ鍵付きかあ。翌日鍵をコピー錬成して来て、やっとこさ聖典を見ることが出来た。聖典の内容の精査は、マイルのナノちゃんに依頼した。日本語以外なら古代語でも読めるらしい。

マインの容体は徐々に良くなってきている。固結び状の瘤が徐々にであるが解かれ

ている。ただ、根を詰める作業故、1日に2時間程度が限界である。マリアに頼もうと思つたら、光属性ではほどけない上、彼女には魔力の流れが見えないらしい。で、誰かいないか探すと、スーパードクターのマイルが出来た。

「これ、大変な作業ですよね」

1時間ごとに交代して2セットずつ、ヒモ解く作業を連日行っている。

「でも、日本語で話せる幸せ、日本食が食べられる幸せが、私を幸せにしてくれています」
笑顔のマイル。カタリナ、アイリスの転生組とも日本語で会話していた。周囲の者達には会話の内容が分からない為、結構きわどいガールズトークをしているようだ。

◇

「ケン、私も商会を立ち上げようと思います」

アイリスがそんなことを言い始めた。俺も小さいな商会を持っている。この前『エチゴヤ』に改名したばかりである。

「何を売る?」

「領地でカカオが収穫出来るんです。それを使い、チョコレートを貴族向けに売ろうかなつと」

「いいんじゃないの。領地に特産品を持つのは良いと思うよ」

そういう俺は、ポジションが主力で、他にも様々な便利グッズを販売している。しば

らくするとアイリスは、特産品販売商会の『アズータ商会』を立ち上げた。

商品として開発していたチョコが売れるレベルになってきた頃、アズータ商会の商品視察に、王都からアイリスの母親がやってきた。王都での宣伝部長らしい。

「アイリスちゃん、これ知っている？」

うっ！あれは、俺が王都でこっそり売っている怪しげなグッズでは無いか。何故、挨拶代わりにソレを取り出した？

「えっ？これはなんですか？」

アレを手に取り、アレコレ動作などを検分しているアイリス。

「コレって、簡易マツサージ器って名目なんだけど、実際に売れている理由はねえ…ゴニョゴニョ…」

アイリスの母親が、アイリスの耳元で小声で説明し始めると、みるみる顔が真っ赤になっていった。そして涙目のアイリスが、何故か俺を見つめている。

「ねえ、エチゴヤ商会って知っている？そこが売っているようなんだけど…」

今度はアイリスの母親が、笑顔で俺を見つめていた。

「50本ほど、優遇してくれないかなあ？ねえ、アイリスちゃん、頼めるかな？貴族の奥様方の間で噂の一品なのよね〜」

「わかりました…ケン、後でお話があります」

アイリスには珍しく声が震えている。怒っているのかな。その夜、俺はほぼ徹夜で、件の商品のマツサージ能力を余すこと無くプレゼンテーションをアイリス、カタリナ、ウエンディに披露した。

翌朝、物を見たマイルが、

「これって、バイブ？」

「マイル、これはどこからどう見ても、簡易マツサージ器だ。コリを解するのに効果的なんだ。画期的なのは、電池の代用でゼンマイ式、魔力駆動の2タイプあるのだよ」

「それはマインちゃんのアレ解すのがアイデアかな？」

黙って、頷いた俺。当然だが、簡易マツサージ器では魔力の瘤は解せません。

◇

簡易マツサージ器の一件で、エチゴヤ商会の取り扱い品目に、アイリス、カタリナ、マイルの転生組女性の監査が入った。まさに大人の玩具さんに、女性捜査官が手入れをしている、そんなシーンのようだ。

「これって、ローター？」

マイルに訊かれた。

「いや、簡易マツサージ器2号だよ」

「これは、何ですか？」

アイリスが怪しげなポーションの瓶を眺めながら訊いてきた。

「それは、エリクサーもどきだよ」

「「はあく？」」

そんなに驚かないでも…うん？媚薬とでも思ったのか？媚薬なんか作っても、テスト出来ないだろうに。

「あくまでもどきだよ…効能は最上級ポーションよりも修復、治癒能力が上がった程度だよ。死んだ者は生き返らないので、本物では無い」

いつか作ろうとは思っているが、何を混ぜれば良いのかが、まるで見当つかない。

「これ、いくらで売るんですか？」

アイリスがマジな目つきで訊いてきた。だから、もどきだよ！

「買うヤツはいないだろ？専門ヒーラーがスカウト出来ないから、専門ヒーラーの能力を補う為、開発で努力しました。価格は決めてません」

最上級ポーションの単価が日本の価値で1億円くらいである。その上だと…

「都市部の予算並？」

「売れ無いだろ？」

「誰に使うの？」

「最上級ポーションが作れるという薬用植物研究所に、送りつけてみるとか…」

製造原価はタダに近い。殆ど俺の人件費のみである。あの青汁を濃縮しまくって、ハバネロ並唐辛子のカプサイシンを混ぜたというか。イメージはニトロ口である。心臓さえ再起動すれば生き返るのではという、単純妄想の産物である。

「材料は？」

マイルが興味を持った。俺は青汁の入った樽をアイテムボックスから取り出し、ジョッキに内容物を注いだ。

「臭いって」

「これを濃縮しているから、そのエリクサーもどきの臭さはこの世の地獄だよ」

ジョッキをマイルの前に置き、

「一気に飲まないで、大惨事になるぞ。舐めただけで、乙女の尊厳が無くなる程の大惨事に…」

「これは、飲めないって…」

蒼い顔のマイル。まあ、お薦めはしない。注いだ物は樽に戻せないのです、俺が一気に飲んだ。

「ああ、マズい！」

何度飲んでも慣れない不味さである。だけど、身体のたるさが吹き飛ばし、実際HPとかMPが回復するのが、ステータスの数値を見ても明らかなのだ。マイルに飲ませば

健康になるかな。味をどうにかしないとなあ。

「臭さで生き返るとか?」

「いや、もどきの場合は、介助者にはマスクとゴーグルが必要」

「それ、劇薬でしょ?」

「って、カタリナ。だって、劇薬刺激物が気化するからなあ

「否定はしないが、効果は抜群だよ。細胞の再生速度が上がるし、不整脈程度なら正常になるレベル…:だけど、心臓の再起動には至っていない」

「武器になるレベルなんじゃ…」

「ああ、キズに掛かるだけで死にたくなるレベルだよ。目に入れば失明してからの超回復かな」

武器にはならない。回復薬だしな。効果は自分の身体で人体実験済みである。

奇病の少女 Part 2

——マイン——

意識が戻ると、知らない場所にいた。傍にいたトゥーリに訊くと、私の病気を治す為に移住を決めたそうだ。この地の医学は高レベルらしいのだ。どんだけ治療費を請求されたかと訊いたら、無料だと言う。胡散臭い。まさか、トゥーリの身体はもう清く無いかいな？

「やあ、目覚めたようだな」

「…」

まさかの日本語で話し掛けてきた男性。転生者なのか、彼も。トゥーリを治療の為にいい、部屋の外に出し、部屋には私と男性、そして、女の子が残った。

「俺はケン、召喚された日本人だ」

「私はマイル、あなたと同じ転生をした日本人です」

日本人が目の前に二人いる。話を訊くと、ここには後二人日本人の転生者がいて、その中の一人がこの地の領主代行をしているという。

「おかゆに梅干しで3日、おじやに漬物で3日、そして、和定食って予定だ」

ああ、寝たきりで胃が動いて無かったから、胃のリハビリなのか。

「梅干しあるんですか？」

「ああ、米も味噌も、醤油もある。色々な大陸に行つて、和食に合う食材を探してあるよ。転生者が多く住む地だから、和食は欠かせないだろう？」

口に梅干しを入れてくれた。刺激の少ない蜂蜜漬けみたいだ。美味しい。この酸っぱみ…懐かしい。目尻から暖かな物が流れ出た。これ…食べたかった。

「但し、毎食後に、青汁をコップ一杯飲んで貰う」

青汁？何の罰ゲーム？マイルさんの顔が強ばっている。罰ゲームなのね？

「マズいんですよ？」

「あれよりマズい飲み物は知らない。センブリ茶が甘く感じるレベル」

それはアカンレベルでは…

◇

このお屋敷には本が沢山あった。いや、書庫があったのだ。本好きとして、ここは最良な地である。あの青汁さえ無ければ…

「将来、司書になりたい」

頑張つて青汁を飲んだあとに、ケンさんに将来の夢を言ってみた。

「なりたい仕事に就くのが一番だけど、マインにはヒーラーの道も進んで欲しい。マインの魔力属性って、オールラウンダーだからさあ」

「私に魔力があることに驚き、総ての属性の魔力が備わっていることに驚いた。そして、そのことが私の奇病の原因に繋がるそう。私の尾奇病は血流で言うところの動脈瘤で、それが魔力の流れで起きたらしい。」

「適度に毎日使わないと、また魔力の瘤が出来る。日本の知識で言えば、エコノミー症候群を想像して欲しい。キツイ体勢のまま動かないでいると血栓が出来るだろ？それと同じで、魔力の流れを阻害しないで日々過ごすことが大事だよ。その予防法は魔力の圧縮方法を覚え、毎日マインドロスト近くまで魔力を使い。あの青汁を飲むことだ」

「あの青汁がネックだな。食後に飲んだけど、あれはキツイ。でも、確かに飲んだ後、胃が落ち着くと身体が軽くなっていくのだ。マズいけど、私の病気には効果があるようだ。」

「本のことでも知りたいことがあったら、このソフィアに訊いてくれ。彼女が唯一の司書だから、ソフィア、頼むよ。コイツは将来の司書候補のマインだ」

「はい。マインちゃん、よろしくね」

「絹のような白い髪に、ルビーのような赤い瞳の可愛い女性が、頭をぺこりと下げた。」

「コチラこそ、宜しくお願ひします」

青汁以外、問題は無さそうだな。

——ケン——

冒険者ギルド本部に、マインの件の経過を報告しに来た。まだ完全に解けてはいないけど、マイルとマイン自信で、少しずつ解いている状況である。青汁の補充もしておくかな。何故か冒険者ギルドでしか取り扱いをしていない謎の青汁。レインリヒに見せたが、見た事ない飲み物らしい。

「じゃ、ほぼ終了だね。こちらでもあの症状を調べたのだが、『身食い』と言う症状に酷似していたよ」

身食いとは、平民の子供に稀に発生する魔力過多による肉体損傷で、成人まで生きられない子が殆どのような。貴族の子供の場合だと、幼少期から魔力操作を習う為に、発症する方が稀らしい。

「ところで、ランクS昇格案件があるんだが…」

国絡みか。面倒だな。

「隼人は？」

「ダンジョンの攻略なんだが、隼人のパーティーとは相性が良くないんだ」

ポップする魔物がアンデッドオンリーらしい。隼人のとこの女性メンバーはアン

デッド系がNGだと言う。

「踏破出来なくてもいいの？」

「入り口からあふれ出ないように間引くのがクエスト内容だ」

「報酬は？」

「ドロップ品は貰える。換金も可で、特別価格で装備が買えるそうだ」

う〜ん…シロとマイルはアンデッドでも大丈夫かな？

「パーティーメンバーと相談してみるけど、場所はどこ？」

「聖シユルル協和国聖都シユルルの聖シユルル教会治癒士ギルド本部だ」

「俺、治癒士ギルドに所属してませんけど」

「この際だ、入会してしまえばどうだ？」

「俺、宗教系はNGです」

神様は信じているが、それを強要する団体はNGである。八百万の神を信仰している日本人にとって、一神教などナンセンスである。色々な神様がいるのだ。どの神を信仰しようと思手だろうと思うのだ。

「じゃ、無理だなあ」

「ギルド長、彼がそうなのですか？」

神官らしき者が聖騎士らしき者達を引き連れてやってきた。あれは捕縛目的のよう

に見えるが、本部のギルマスは俺を売ったのか？つて、何の罪でだ？冒険者のルールは破っていないはずだ。

「君の罪を告白する訴状が治癒士ギルド本部に届いた。おい！取り押さえろ！」

聖騎士達が一齐に剣を抜き、俺へと襲い掛かってきた。だけど護衛のシロに駆逐されていく。俺は指令官らしい神官を、冒険者ギルドメラトニ支部にある、あの青汁の大樽の中に強制転移させた。結果、指令官が消え、大量の聖騎士達の死体が床に転がっている。

「これ、正当防衛ですよ」

一応、確認しておく。ギルド内での私闘は御法度だから。

「ああ、分かっている。クエストを依頼しておいて、えん罪で斬り捨てようとは…それも冒険者ギルド本部内での凶行だと。俺達冒険者は舐められているなあ。訴状によると、治療費の価格破壊とあるぞ」

「メラトニ支部で銀貨一枚で治療していたからかな？」

「治癒士ギルドの価格設定がおかしいんだよ。どんな治療でも金貨10枚だからな」

わあ、暴利だろう。そんなの…銀貨一枚で100円くらいとして、金貨10枚だと100万位か？まあ、最上級ポジションの件があるから、俺も他人のことは、

あれこれ言え無いけどな。

「帰っていいですか？」

「ああ、いいぞ」

初めてのダンジョン攻略

—モエ—

近国にある冒険者ギルド支部から、あの最上級ポーションのサンプルと、エリクサーもどきのサンプルが送られて来た。それをセイさん、私、所長の三人で検分をした。

「注意書きによると、そのエリクサーもどきは効果がアップしているものの、取り扱いには劇物扱いでつて書かれていますよ」

劇物扱いの薬つてなんだろうね？心臓病患者の使うニトロのイメージかな？つて…

「まさか、これを作った人つて、転生者だったり」

セイさんも私と同じ想像をしたようだ。二人で見つめ合い、頷きあった。

「所長、私達のいた世界では、劇物を飲んで心臓の動きに喝を入れていました」

「それじゃ、これの制作者は転生者か召喚された彼つてことか？」

研が生きている可能性が出てきた。この世界のどこかで…私と同じ薬用植物研究をしながら…少し嬉しくなった。同じことをしていると思うと。

「人体実験をするとなると…少し怖いなあ」

劇物つて色々ありますよね。所長が瓶の蓋を注意深く開けていくと…目が痛い！これって、カプサイシンだあああ〜！

「所長！閉めてください！」

私は目を押さえながら叫んだ。

「ああ、わかった」

気化したカプサイシンを部屋から出さないと…窓を開けないと…

◇

窓を所長が開けてくれたそうだが、私達三人は部屋で意識を飛ばした状態で発見された。

「危険だろう？これ…」

恐るべきエリクサーもどきの威力。傷んだ髪の毛がツルツルのピカピカになり、所長の口ひげは伸びていた。私とセイさんお人にはお見せできないデリケートな部分のヘアが伸びていた。そのことから細胞の再生力がハンパ無いという結論になった。

「薬を使う場所と、使う薬剤師の注意が必要であるが、これはこれでアリだな」

「出来れば女性が使わない方が良いでしょう」

と、セイさん。同意する私。意識が戻って初めての感覚は脇の下のゴワゴワ感だったなんて言え無い。

「最上級ポーションの方の分析は出来たが、微量であるが、様々な毒が検出されたようだ」

微量であるので、人体に影響は無いものの、適量を飲めば致死性の高い成分らしい。

「毒と薬は紙一重と言うが…」

所長のつぶやき。紙…そういうえば、注意書きの書かれていた紙って、わら半紙だったような…

——ケン——

マインの治療はマインとマイルに任せ、俺一人で移動中である。目指すは聖シユルル協和国聖都シユルールの聖シユルル教会治癒士ギルド本部にあるダンジョンである。

ここには萌達はいないだろう。王国では無いし。でも、無実の罪で刃物を向けるって、どうなの？異教徒は総て死すべきってやつか？ならば、ダンジョンをこつそり攻略で仕返ししようと思う。まず、ダンジョン内に侵入して、転移を自由に出来るようにしておく。深夜なので、入り口は閉まっているが、そんなの短距離転移で、ドア程度開かなくても出入り自由である。

地下に降りる階段が見つからないが、エレベーターらしき物を見つけ、地下に降りた。

その結果、ダンジョンの入り口を見つけた。いざ、ダンジョン内に侵入した。今日はここまで、家へと転移をした。

翌日、オートマツピングスキル持ちのマイルと共にダンジョンに侵入した。シロはデフォルトで俺の背中に貼り付いている。

「これって、浄化で一掃出来るのでは？」

マイルの助言通り、このフロア内を『浄化』し、ドロップ品を総て『強奪』して収集した。

「この床って、ケンさん無属性エクスプロージョンで破壊出来ませんかね？」

攻略も何もない。力業での踏破か。試して見ると何層も一度で抜けたようだ。開いた穴に飛び込む俺達。そして、特に戦闘の無いまま、50階層のボス部屋らしき場所に辿り着いた。穴が開いての各フロアがワンクローズエリアになったことより、ワンルームと見なされたのか、『浄化』一発でダンジョン内の総てのアンデッドを殲滅したように、地下50階にて、とんでも無い量のドロップ品を手に入れた。

「ボス部屋は攻略しないと、ダメだろうな？」

「ですねぇ」

どんなボスが出るのか。まずは飯だな。今日のお弁当は肉じゃがと焼き魚定食である。味噌汁の具はあおさとナメコである。

「ダンジョン内で和定食って、止められませんかえ〜」

シロは和定食では物足り無いみたいなどで、牛串焼きのバーガーである。

◇

食後、少し寝てから、ボス部屋へ：扉を開けて、部屋の中に足を踏み入れた。中にいるボスの全身には至る部位に顔が浮き出ている。怨霊の集合体みたいである。

「ケンさん、鑑定結果はワイトです。浄化一発でどうですかね？」

マイルがナノちゃん達と協議結果を知らせてくれた。では、『浄化』を一発：俺の浄化術を打ち消すようにワイトから闇魔法が放たれていた。だけど、俺の浄化術は魔法では無い為、打ち消せず。ワイトは消えていく。なのに放たれた闇魔法は消えずに俺達に迫って来た。

迫って来た闇魔法を強制転移させた。勿論、地上にある建物にだ。治癒士ギルド本部は、俺の中では敵認定であるから。

ワイトが消えた後には、魔石と魔法書と杖が残っていた。なんか、ラスボスにしてはドロップがしょぼいんだけど。

「ここって、ラスボスの部屋なのか？」

「この魔法書は、禁忌魔法みたいですよ」

「使っちゃマズい系だよな？禁忌って…」

「ですねぇ〜」

つて、俺とマイルは禁忌の魔法書を回し読みした。その後で、俺のアイテムボックスで預かることにした。

悪行ポイントが溜まったおかげか、地面から光輝く扉が生えてきた。この先がラスボスじゃないのか？扉に手を掛けると、俺の魔力が扉に吸い込まれて行く。減った魔力をMP回復ポーションで補っていく。

大量に魔力が吸い込まれた頃、扉が開き始めた。俺のお腹はポーションでタップタップだけど：扉の先には降り階段が、その先にはアンデッドドラゴンが鎮座していた。これがラスボスだろうな。迷わず『浄化』を掛けた。

◇

アンデッドドラゴンのいた場所には金銀財宝、武器、防具、魔法道具に嗜好品まで色々なお宝が現れた。吟味している暇は無いので、総て『強奪』してアイテムボックスに収納した。

「そーいや、ダンジョンコアつて、あったか？」

「無かったですね」

お宝を全部回収すると、ダンジョンコアを探すことなく、ダンジョンの入り口に戻されていた。

「帰るか」
「ですね」

公爵夫人VSケン 商談編

——ルミナ（ルミナリア・アークス・フランシスク）——

聖シユルル協和国戦乙女聖騎士隊長である私ですら、パニック状態に陥っていた。他の聖騎士隊の隊長達も神官、司祭達さえも。突然闇の巨大魔法が、この聖シユルル教会治癒士ギルド本部に撃ち込まれたのだ。崩れる建物：教皇様の部屋へ急いで向かう。

「ルミナ、一緒に来て」

元上司のカトリーヌ様に声を掛けられた。

「はい」

エレベーターで地下へと向かう。地下ダンジョンで何かが起きたのか？急いでダンジョン内に走り込んだのだが、いつもと違う雰囲気です。私達は足を止めた。瘴気がまるで感じられない。これって…

「やはり…ダンジョンが攻略されたようだわ」

膝から崩れる様に蹲ったカトリーヌ様。

「あの闇の魔法は、たぶんダンジョンの奥にいる魔物の攻撃だと思われるわ。それもあ

んな巨大なのは…断末魔の最後の叫びだと思ふ。誰かが、このダンジョンを極秘理に完全攻略したんだわ」

難航不落のアンデッドダンジョン。下に行くほどに瘴気の濃度が濃くなり、幻覚幻聴になやまされ、同士討ちにもなりかねないらしい。

「誰が一体…何の目的で…」

「思い当たる節があります。先日、冒険者ギルド本部で1個小隊の聖騎士が殲滅された。その隊を指揮していた神官は悪徳治癒士からの陳情を受け、無認可の治療士を処罰する為に出向いたそうなのよ。冒険者ギルドが言うには、まったくのえん罪で、斬り殺されそうになり、騎士達が返り討ちにあつたと…」

1個小隊の聖騎士が返り討ちに？何者だ？治癒士の技量ではない

「その者は何者なんですか？」

「冒険者ギルドランクA+…その者の行為は冒険者としてのヒーラー行為から逸脱していないと言われたわ。確かに、冒険者のヒーラー職は治癒士ギルドに入会はしていないけど…」

治癒士とヒーラーの線引きは難しい。

「その彼と対談しないとダメだわね」

カトリーヌ様の顔は苦笑いしているようだった。

——ケン——

マインに軽い本が欲しいと言われた。この世界の本はどれも重い。装丁は革張りです。下手したら金細工が施されていたり、まして自身は羊皮紙の束だし。

「わら半紙ならある。あと鉛筆もどきもある。お前が本でも作るか？」

アイテムボックスからわら半紙の束と鉛筆もどきと米糊を取り出し、マインに手渡した。

「印刷は出来ないの？」

「ガリ版刷りなら準備中で、インクを開発中だよ」

煙突掃除や竹炭を作る際に出る煤を膠で練って作っているのだが、粘度調整で手間取っている。後、インクを塗るローラーの開発も途中である。

「手伝うから作って！」

「じゃ、スポンジの代用になりそうな物を探してくれ。ヘチマで代用したんだが、目が粗すぎてなあ……」

インクの塗り作業でムラがでていた。

「紙ももつとちやんとしたヤツを開発して」

「じゃ、メアりに繊維が細かくてしなやかな木材が無いか調べて貰ってくれ」

印刷出来ると、帳簿用の統一規格な用紙が作れるよなあ。それはあつたらアイリスの仕事が軽減しそうだ。

◇

アイリスのチョコレート事業は大当たりだった。王都で人気の商品となり、他国への輸出も始めた。そんな忙しいご時勢に、王都から宣伝部長との誉れが高いアイリスの母親がやってきた。

メルリス・レゼ・アルメリア。現アルメリア公爵夫人で、ターニャによると、剣を持つと人が変わるといわれている。触らぬ神になんとやららしい。娘をちゃん呼びすることから、アイリスを溺愛しているのだろうね。逆らつてはダメな人物である。

「アイリスちゃんに用じゃなくて、ケンに用があるのよね」

うん、アイリスの悪役面は、こいつの遺伝か？結構な悪役面で俺を見つめている。

「俺の部屋でいいですか？」

「勿論よ。商談だから、応接間じゃ無理よ」

アイリス達に聞かれたくない結構ヤバイ商談のようだ。

「ふん、トリプルサイズのベッドなのね」

って、俺の部屋に入るなり、俺の寝床のチェックしているよ。この人…

「毎晩、4Pしているの？」

ガチャ!

「あつ、失礼しました」

お茶の用意をしていたウエンデイの手元が狂ったのか、茶器同士がぶつかり、音が響いたようだ。

「それよか、商談は何?」

「カカオつて、媚薬効果あるんでしょ?」

「多少は……」

「あなたの濃縮技術で、濃厚な媚薬を作れない? セット販売すれば大ヒット間違いないしよー!」

それは簡易マッサー器1号と2号とセットで売るつてことですか? 純情なアイリスの母親がこんなんでもいいんですか?

「どう? 悪い話じゃないでしょ?」

まあ、良い儲け話だと思うが、公爵夫人の顔は悪人顔である。誰かのスキヤンダルネタでも作るつもりか? アイリスがこの人の娘だと思うと、とても心配になる。

「じゃ、出来上がったら、私の元を持って来なさい。いい? アイリスちゃんには内緒よ。じゃ、よろしく!」

つて、部屋を出て行つた。アイリス母。勿論内緒ですよ。言える訳無いでしょ?

「ウエンデイ…聞こえなかったよな？」

「はい。私は何も聞いていません。でも…あの…実験は私でお願いします」

真っ赤な顔でモジモジしながらウエンデイがそう言った。まあ、アイリス、カタリナで実験は怖いよなあ。ウエンデイでも充分怖いんだが…毎晩、俺が寝た後で、三人で何かをしているみたいである。なんだろうか？まあ、朝になると怠いけどスッキリしているので、気にしないようにしているけど。

ラスボス達の集い

——ディーン——

旅先で事務仕事のアルバイト募集をしている領主がいたので、アルバイトをやってみることにした。何事も経験であり、実際に見聞きすることは重要であるから。

「初めまして。私が領主代行をしているアイリス・ラーナ・アルメリアです。あなたの雇い主になります」

旅先で見かける貴族は横柄な態度の者が多かったが、彼女は所作は整っているものの、割とフランクに話される方であった。仕事内容は、住民から上がってくる希望、要望、苦情を的確に仕分けして、それぞれのセクションに持ち込むことであった。住民の声を出来る限り聞き入れる領主に驚く。大抵の領主はそんなことをしない。自分通りの領地運営をする者が殆どである。

「ここの領主代行に興味を持った。どこまで聞き入れるつもりなのか？単なるお嬢様の領地運営ゲームなのだろうか？」

各部署のトップにいる人材は優秀な者ばかりの上、他国では上流貴族であったのに、

態々この地に移住してきた者が割と多かつた。平民でも優秀であれば組織の上部に組み入れてもいた。

中でも異彩を放つのは、ソルシエ王国の元宰相が、彼女の下で政務を支えていることだ。更には平民である冒険者が、屋敷の一番良い部屋に住んでいる事にも驚いた。

「どうして、平民の彼が公爵邸に住んでいるのですか？」

この国ではあり得ないことだったので訊いてみた。

「どうして、平民と公爵令嬢は結婚出来ないのですか？」

質問を質問で返された。それは彼との身分差の恋つてことか？確か、彼女は第二王子との婚約が破棄されたはず。そうか……きつと傷心していたところをあつた冒険者につけ込まれたのだろうか。

「あなたは第二王子の婚約者だったんですよ。なのに……何故、平民を囲っているのですか？」

本当に理由を知りたく、また質問をしてしまった。

「彼は第二王子であるエド様よりも尊敬しています。そして、お慕いしております。それが何か問題でもありませんか？」

そこまで言い切られると、反論は難しい。雇い主とバイトの関係であるし。

カタリナの専属メイドのアンが現場に復帰した。まだカタリナの介助が必要であるが：主従逆転に見える風景：現場復帰は早いのでは？

俺はデフォルトのシロとマイルと共に、冒険者ギルド本部の案件を熟す毎日を送っていた。案件を熟しながら、必要な材質や人材をチェックし、魂が薄汚れたヤツは即刻で消す方向で動いているけど。

今日は初めての国へお出掛けである。案件内容は、違法奴隷商の殲滅である。ヤーシスに確認を取ったら、真つ黒な商人グループであった。犯罪紛いで手に入れた訳あり物件を、その筋の愛好家に売る手口らしい。アンのような女性を量産するのは許せない。「あれ？この国名って：ねえ、ケンさん、『フリージア王国』って、聞いて何かを思い出しません？」

マイルのオートマツピングスキルは、国境を越えると、どこの国に入学したのか国名が分かるらしい。

「フリージア？ああ、乙女ゲーの『きみひか』だっけ？主人公と攻略対象者で、極悪非道の自己中心の最強外道ラスボスを倒すってヤツだっけ。あのラスボスの目的がよく分からなかったなあ。ああ、正式名称は『君と一筋の光を』だったな。って、まさか：」

今思い返してみると、あのラスボスそんなに極悪非道で最強外道では無い上ラスボ

スってガラでもなかったよな。寧ろ目の前にいるマイルの方が、極悪非道な外道でラスボスタイプだと思っ。

「ケンさん、今思ったことはブーメランしますよ!」

コイツ、俺の心が見えるのか?

「俺はラスボスって言うより、モブキャラでありたい」

平穏なスローライフを送りたいんだよ、俺は…

「どこの世界に、錬金術師ギルドランクSSで商業ギルドランクAのモブキャラがいるんですかあ〜」

「それなあ〜、内緒だから…」

決して、自慢出来ることでは無い。治癒効能が最強レベルでありながら、凶悪な2次被害が出るエリクサーもどきを発売した途端、錬金術ギルドのランクがSSに昇格した上、アイリス母考案のセット販売も加わり、商業ランクまでもAに昇格していた。いいのか? 一歩間違えると犯罪物件商品だぞ。

「で、話を戻しますが、あのラスボスの名前を覚えていますか?」

「う〜ん…確か格闘技系の…そうだ! プライド、プライド・ロイヤル・アイビーだっけ。で、主人公が妹のティアラ・ロイヤル・アイビーだっけ? あのラスボスを最短ターンで倒すことに嵌まったっけ」

女性向けゲームって、男性向けよりエロい画像があったりするし、俺は乙女ゲーに嵌まった時期があった。若気の至りってことで…

「マップ内にその人物を見つけました」

マジかあ。俺、妹の方が好きなんだけど…

——プライド・ロイヤル・アイビ——

8歳の時、前世の記憶を思い出した。このままでは、私は大切な人達に最悪な結末を与えてしまう。

この世界は、前世でやりこんでいたゲーム『君と一筋の光を』、きみひかと呼ばれていた乙女ゲーの世界であった。主人公である第二王女が、攻略対象者達と、乱心した最愛の姉を討伐するゲームである。ハッピーエンドなら姉だけが死に、バッドエンドなら妹を含む家族、攻略対象者を含む仲間達、王国に多大な苦痛や苦難を与え滅ぼしてしまう。まさか、その姉に転生してしまうなんて…

だから私はハッピーエンドを目指したい。どうか、神様…私に死をお与えください。「ゲームからログアウトする方法もあるぞ」

突然、背後から知らない男性の声があった。咄嗟に振り返り剣を構えた。しかし…

「あっ！」

急に下半身に力が入らなくなった。

「何をした…」

全身が悶々としている。

「新薬のテスト。被験者は風下にいる君だよ。プライド・ロイヤル・アイビー」

何？なんで…この人は日本語を話しているんだ？四つん這いになり、背後からオークにやられるシーンで意識が途絶えた。

——ケン——

最強外道なラスボスも、アイリス母ご所望の媚薬を前にして、アへ顔で堕ちた。液状にしたアレをプライドの食道に転移させたのだ。気化した成分が鼻孔を通じ吸収され、脳へ効能が瞬時に届いたのか、速効で堕ちた。

「相変わらず、危険な濃縮薬ですね」

白い目で見るなよ、マイル…

「これ、売って大丈夫なんですか？」

「市販品は効能を薄めてある。ウエンデイとアイナ、ソルテで実験済みだよ」

「プライドよりも外道で鬼畜ですよね？」

「いや、発案者のアイリス母だろ？その称号は…」

「それって、面と向かって言えますか？」

「言えません」

アイリス母とマイルが剣で手合わせをしたのだが、スーパーチャーターのマイルが負けた。マイルって、自己流剣術なものな。最近は、アイリス母の実家であるアンダーソン侯爵家で鍛えられているらしい。あの噂は本当であつた。剣を持つとバケモノになるという…単なる悪人顔では無い。魔王だつたと言われても信用出来るかもしれない。

「ケンさんも鍛えられませんか？」

「俺、しがない錬金術師ですが…」

「剣は必要無いと思う。」

「しがない錬金術師が、極悪非道で最強外道なラスボスを悶絶死に追い込めないでしょ？」

そうかもしれない。お持ち帰りしよう。アイリス母に頼めば、更生させてくれるかな？コイツの穏やかな顔を見てみたいし。ゲームでは怒りに染まった顔、悪役面が殆どだつたからな。

背伸び王女と鬼畜な錬金術師

——プライド・ロイヤル・アイビ——

久しぶりに爽やかな朝を迎えられた。ここはどこだろうか？見た事の無い部屋で目覚めた。見た事の無い寝間着を着ているし。

「お目覚めですか？」

メイドが入って来た。見た事の無いメイドである。ここはどこ？

「ここは？」

「タスマリア国アルメリア公爵領の領主様のお屋敷でございます。昨夜、私のご主人様が、あなた様をお持ち帰りされたのです」

お持ち帰り？そう言えば、オークにやられた覚えがある。助けてくれたのか？いや、違うなあ…記憶が曖昧である。

「その方に会えるかな？」

「今日はフリージア王国に巣くっている悪徳奴隷商人達を殲滅中です」

それって、うちの国じゃない。ここって、タスマリア国って言ったわよね？それって、

聞いたことが無いけど、どこにあるの？

「ここって、どこにあるの？フリージア王国から、どの位離れているの？」

「日本人の感覚で言うと、太平洋を経由して南米から中東くらいの距離です」

部屋に入ってきた幼女が日本語でハッキリと私に告げた。日本語…彼女も転生者なのか？

「ウエンデイさん、後は私が話し相手をお願いします」

「お願いしますね。マイン様」

幼女に一礼をして立ち去るメイド。この世界の共通言語で…。

「聞きました。きみひかのラスボスに転生したそうですね、プライドさん」

この子…間違い無く転生者だわ。

「私をお持ち帰りした人も転生者？」

「ケンさんは召喚されて、この世界にやってきたそうです」

「その彼は私をハーレム要員にしたいの？」

「しないでしよう。ケンさんは、一緒に召喚されて別れ別れになった彼女を探しているから」

「じゃ、なんで私を？」

お持ち帰る理由が分からない。私の身体に用があるなら、多少は納得できるけど。

「私はきみひかをプレイした事無いから、よくわからないんですけど…ハッピーエンドを目指すだろうから、ほっとけないって」

彼はハッピーエンドの意味を知っているのだろう。だから、私を傷つけるであろう者達の前から浚ったのかもしれない。でも…

「私は、このみんなを傷つけるかもしれないわよ」

「それは、あり得ないです。ケンさんとマイルさんのコンビを前にして、あなたが無事に済むとは思えません」

不敵な笑顔で微笑む幼女。背筋がゾクツとした。

「あの二人の破壊力はハンパないですから。敵にならない方が良いですよ。現にマイルさんによると、昨晚は3秒程度でケンさんによつて、悶絶死一步手前まで追い込まれたそうですから」

幼女の口から幼女らしからぬ言葉が飛び出した。悶絶死一步手間？じゃ、あのオークは幻覚で…私の取り乱した姿の一部始終を見られてしまったのか…そう思うと、身体に昨夜の刺激が蘇った気がした。

——ケン——

案件を終え、殲滅証明代わりに、頭部だけを冒険者ギルド本部に納めてから帰宅した。

「ケンさん、プライドさんがお話があるって」

マインに声を掛けられた。なんだろうか？俺は彼女が休んでいる客間に向かった。

「どうした？元氣無さそうじゃないか」

部屋に入るとプライドが落ち込んでいた。

「ねえ、見たのよね？」

「何を？」

「私が悶えて…恥ずかしい顔を…」

「ああ、バツチリ見たよ。相棒のマイルとシロと一緒に…」

「もう…お嫁に行けない。ねえ、責任を取ってね」

「平民は王女とは結婚出来ない。違うか？」

「それは…」

「俺は平民だ。その上で責任取れって言うんなら取るけど、手は出してないぞ。それにお前はまだ成人していないだろ？お前は幾つだ？」

「12…」

「せめて15を越えてから言えよな。そういう台詞は…」

俺の言葉で泣き笑い気味のプライド。俺達の介入で、きつと未来は変わるはずだ。もしもの時は、俺とマイルが止めるから安心しておけ。俺にしたらよっぽどマイルの方が

ラスボス臭がプンプンなんだが…いや、黒幕的要素で言ったら、アイリス母に勝てるヤツはないか？

みつけた！

——ティアアラ・ロイヤル・アイビー——

お姉様が消息を絶った。夜、散歩に出たきり、そのまま。その報告を聞き、胸をなで下ろすお母様。きつと、お母様も見ただのだ。お姉様が共に居る未来の悲しいビジョンを……私達の家系は代々予知能力を持つ女系が王位を継ぐ。お父様は王ではなく王配となる。第一王子であるお兄様は養子であり、将来の王配候補かもしれない。

私のお姉様の未来……悲しい未来である。だからこそ、皆の記憶に深く残る前に、消えたのかもしれない。

「ティアアラ……」

「お母様……」

私のことを優しい眼差しで見つめるお母様。

「初めて、プライドの未来が明るく見えました。あの子は、どこかで幸せになって暮らすのでしよう」

「もう誰も哀しまない？」

「今、哀しんでいる者達が居ます。彼らの心には深く刻まれるかもしれないわ」

でも…お姉様の悲しい未来よりはまし…

——ケン——

冒険者ギルド本部に、スランタニア王国、聖シユール協和国から、俺と会談をした
いと申し込みがあつたそうさ。前者は薬用植物研究所で、後者はダンジョンの件だろ
う。

「神官の方はパス。植物研究所の方は興味ある。乗り込めばいいのか?」

「勝手に乗り込まないでくれ。お前、聖シユール協和国のダンジョンを勝手に踏破し
たようだが…」

「踏破した証拠は?俺は宗教国は嫌いだ」

「証拠は無い。向こうがそう言っているだけだ」

冒険者ギルド本部に文句を入れているのか?もう少し壊せば良かったかな?

「いいな、勝手に乗り込むなよ」

「乗り込めない。俺はスランタニア王国の場所を知らないから」

「お前、どの辺りまで転移で行けるんだ?」

結構方々に行っているよな。クエストとか案件で…本部のギルマスが地図を見なが
ら唸っている。

「うううう、そうか。この前の案件で行ったフリージア王国はどうだ？」

「まあ、行ったことのある場所なら転移出来ます。俺もマイルもねえ」

転移能力者が二人いるパーティーは珍しいらしい。

「じゃ、フリージア王国で会談をセッティングしておく。そうそう、フリージア王国の第一王女が行方不明らしいが、お前、知らないよな？」

「女は間に合っていますし。領主代行が変な女は許してくれませんよ」

「だよな……」

本部のギルマスは俺達がアイリスのお屋敷に住んでいるのを知っている。知っているけど、調査には来ない。なんせ遠いからねえ。飛行機が無いこの世界、遠距離移動は難しい。野盗や奴隷狩り、魔物などが平気で出てくる世界で、陸地の移動は馬か馬車である。怖くて遠距離移動はしない。隼人クラスの冒険者で無い限りは……

◇

フリージア王国の迎賓館に来ている。薬用植物研究所のメンバーとの懇親会という名の会談である。今回のメンバーはいつものメンバーである。俺、マイル、シロの冒険者パーティー『エチゴヤ』である。

お土産にアズータ商会のチョコ菓子詰め合わせを、ティアラ王女に渡してある。因みに女王様には大人パーティーのセットを手渡ししてある。今夜は王配様は大変だろうな。

知らんけど…

「トイレが和式便器のボットン式だったよ〜」

凹んでいるマイル。まあ、あの屋敷の俺の部屋のトイレは、洋式のボットン式であるが、お尻洗浄&乾燥装置付きである。トイレットペーパーの無い世界、そのせいかな、地主様が多いらしい。固い紙や木べらできれいにするからだ。そのことから、転生者の女性達は俺の部屋のトイレを愛用していた。マインは踏み台を持ち込んでいるし。成長不良でまだ4歳児程度の体形のマインには、洋式便器に座るのに背が足り無かったのだった。

「こう考えると、もう他の場所に住めないよ」

口をとがらせて言うマイル。

「いずれ、各々の家が建てられるようになったら、下水とか、下水処理場も作らないとな。洗浄便座があってもボットン式だから」

一応ボットンした後はおがくずを撒いて発酵を促し、メタンガスを取り出す工夫をしている。

「汚物槽を攪拌しないとダメでしょ?あれって」

そんな気はするが、元々建っている屋敷のトイレの改造って、そう簡単では無い。それに、洗浄便座を駆動するには魔力を流さないとダメである。一応、魔力の弱いカタリ

ナ、アイリス用に、魔力を充填した魔石を用意してあるけど。この前、魔石を大量にゲットしたし。

コンコン

「よろしいですか？」

知らない女性の声である。マイルはシロをモフモフしている。俺はベッドで横になっっている。昼間に出来ることは少ないから。

「どうぞぞ」

見た事の無い細身の女性が入って来た。多分、薬用植物研究所の所員だろうけど、魂の色が特殊であることから、転生者か召喚されし者だろう。

「敵じゃないから大丈夫」

俺が身構えたら、モフモフの手を止めず、マイルが鑑定結果を教えてくれた。

「小鳥遊聖さん？セイさんと呼べば良いのか？」

情報が読めるマイルが俺の代わりに訊いてくれた。俺にはそこまで鑑定が出来ないから。

「あなたが転生者なの？」

「……じゃんだから、別荘に行こうよ」

入って来た女性の質問をスルーして、俺がアナザーワールドの魔方陣を出し、そこに

マイルが魔力を注ぐ。すると、空間に扉が現れ、そこに四人で入って行った。

「空間拡張術ですよね」

アイテムボックスの拡張版である。荷物をいれる箱ではなく、家を別空間に作り出すスキルである。しかし、魔力の消費が激しいので魔力の維持はマイル担当で、発動の魔法陣は俺担当である。

「家の中に家って斬新ですね」

「維持コストが高いから、あまり使っていないけど。ここなら盗聴、盗撮の危険は無い。で、お前は何者だ？ 転生者で無いようだが」

俺の言葉で顔色が変わったセイ。

「えっ？ 転生者じゃないの？ じゃ、ケンの探している召喚されし者？」

マイルが笑顔から真顔に切り替わった。

「お前は聖女召喚で呼び出されたのか？」

「ねえ、あなたが牧之原研くん？」

萌達の関係者のようだ。そうなると、スランタニア王国が目的地だな。俺の目配せで、シロが聖女候補者の意識を狩った。さてと奪える物は奪って、奪えない物は破壊するか。

再会

——ティアラ・ロイヤル・アイビー——

タスメリア国アルメリア公爵領の特産品であるチョコレートというお菓子。それを詰め合わせを今回来訪した他国の特使様に頂いた。部屋に持ち帰り、愉しむことに。箱を開けると、なんとも言えない甘い香りが部屋中を漂っていく。一つ摘まみ、口の中に入れ、舌で転がしていく。甘い香りが口いっぱいに広がり、鼻から抜けていく。ああ、幸せな気分になれる。

あれ？箱の中にカードが入っている。カードを手に取り、読んでみる。

『食べ過ぎると鼻血が出ます。食べ過ぎると太ります…』

など、注意書きがカードに書かれていた。我が国の言葉で…えっ！この筆跡…お姉様の…お姉様のクセが文字に反映されている。なんで…カードをひっくり返すと、

『ティアラ、元気かな？私は幸せよ。もう愛しき者達を傷つける心配は無いし、万が一の時、周囲の人達が私を止めてくるって。だから、安心して人生を楽しみなさい』 プライド・ロイヤル・アイビー 追伸、このカードは燃やさない』

お姉様：あなたも未来が見えて、苦しまれていたんですね。そうになると、お姉様は彼らと一緒に暮らしているってことですか。カードを大切にハンカチで包み、机の引き出しに入れ、彼らの部屋へ向かった。

彼らの部屋に着き、ドアをノックするが返事が無い。耳を当てるが、物音一つしない。何かがおかしい。部屋に踏み込むと、薬用植物研究所の研究員の女性がベッドの上に横たわっていた。

——ケン——

フリージア王国の書庫から世界地図関係を総て錬成コピーをして持ち去った。俺とマイルとナノちゃんで、スタンタニア王国の場所を探す。合った！漸く見つけたぞ。

短距離転移を繰り返し、スタンタニア王国へと急いだ。目指すは王城内の神殿及び、魔法書などの資料がある書庫である。召喚の儀は今後行えないようにする。

王城内に潜入すると、神殿風の区画で、見た事のある儀式部屋を見つけた。召喚の為の魔方陣がそのまま残り、魔方陣を描く為の古びた書物もあった。なんて不用心な。それとも、近々また召喚の儀でも行うのか？

神殿にある書物を全部『強奪』し、魔方陣は石床に刻まれていたので、マイルの土魔法でまっさらにして上げた。次は萌達の救出：いや、城にあるあらゆる書物と金と金目

の物も貰っておこうか。『強奪』し、アイテムボックスに収納した。後は人質を救い出すだけだ

二人の探索をするが、見つからない。城にはいないようだ。

「マイル、広域マップにして。ここ以外に敷地に何か建物はあるか？」

「ええっと、薬用植物研究所…後宮…使用人や騎士達の寮…」

後宮って、大奥だっけ？ 聖女召喚して、まさかなあ。だけど、この世界には訳ありの女性をどうにかする文化があるし…まずは後宮へと向かった。

その後宮だが、内部は予想以上に酷い物だった。そこら中に壊れた女体が散らばっていた。まだ息があることから、彼女達にとつては生き地獄だろうな、これ…肉体を修復して、精神まで修復出来るか分からない。そこまで酷い状態の女体達。

「酷い…この主は絶対に許さない」

マイルから表情が抜け落ちていく。怒りがレベルマックスへと向かったのだろう。そんな中、居て欲しくない人物を見つけてしまった。

「おい！ 静…大丈夫か？」

遠目に見ても大丈夫とは思えない身体…損傷が酷い。既に息をしていない。脈も無い…なんで？ 聖女として拉致されて、こんな目に…俺の怒りもレベルマックスへと…

俺は静を含めた犠牲者達の魂を浄化し、彼女達を損壊させた悪しき魂達は闇に沈めて

いき、この場に魂が地縛しないで昇天するようにし、マイルはこの忌まわしき場所をまっさらな場所へとしていく。建物や生き物の亡骸を分子レベルに分解し、粉塵爆発を利用して、後宮を完全粉碎した。

◇

未だ萌が見つかっていない。次に薬用植物研究所へと向かった。部屋を探查していき、研究室の1つで萌を漸く見つけた。

「えっ…おかえりなさい」

俺の姿を確認した萌が俺に抱きついて来た。そのまま俺は無言で萌と共に、四人で帰宅をした。

◇

「なんで、静が…ねえ…うつうつううう」

静の亡骸はアイテムボックスに入れて、持って帰って来た。亡骸を修復した後、死に装束を着せ、棺に横たえ、ささやかだが葬送の儀をした。趣味で覚えていたお経を唱える俺。棺に祈りを捧げてくれる仲間達。そして、棺に縋り泣き続けている萌。

このまま保存は出来ない。完全に修復出来なかったのだ。一部欠損した身体で、茶毘に付すことにした。マイルとマイルが日本式のお墓にするために、石を作り、名前を刻んでいる。ナノちゃんには持って来た書物から、元の世界へ帰れる魔方陣を探して貰っ

ている。

『無いって…その代わり聖女召喚、勇者召喚、賢者召喚なんかの召喚系は抹消してくれ
たって』

静の供養として、この程度しか出来ないが、これで異世界間の拉致事件は起きないはずだ。

明け方、棺に火を入れる。虫眼鏡を錬成し、太陽光を集めて着火した。ゆっくりと白木の棺が燃えていく。それぞれが信じる神様に祈りを捧げていく。俺達元日本人は、それぞれ覚えているお経を読経した。棺全体に炎が回り大きな炎へとなり、棺が灰へと変移し、肉体は灰と骨に分かれていった。

2章 帰還方法探しの異世界行

掛け違えたボタン

——セイ——

気が付くと、医務室らしき場所にいた。所長が心配そうに私を見下ろしていた。

「セイ……大丈夫か？」

なんでこんな場所にいるんだっけ？記憶を呼び覚ます。そうだ！

「彼は召喚された牧之原研くんでした。で、彼は今どこに？」

確か、首に誰かの手が……私は落とされたのか？なんで？混乱する私の記憶……

「我が国に行ったようだ。そこでたぶん……王子に連れて行かれたもう一人の女性の姿を見たのだろう。突然の爆発で、一瞬にして後宮が消えたそうだ。その後、研究所からモエの姿が消えたそうだ」

国から魔術的な伝書鳩が飛んできたそうだ。彼は後宮で何を見た？ちよつと待って、王子に連れて行かれたもう一人が……まさか後宮に……なんで？

「なんでですか？彼女は聖女候補だったんですよね？……なんで、後宮に……」

「王子が性欲に負けたらしい。聖女候補はもう一人いるからって…」
「酷い…」

王子の性欲のはけ口の為に、日本から異世界に拉致されたの？酷すぎる。でも…

「彼がエリクサーを完成させていたら、身体も心も健康になりませんか？」

「それはどうだろうか？壊れた精神は治らないし、死んだ精神は戻らない。薬で治せるのは肉体だけだ。後宮は精神を蝕み易いからね。まして聖女として召喚されて、そんな場所に閉じ込められたら…」

後宮からは生きて出る事が出来ないそうだ。死んでも病死、事故死で無いと出られないとも。大抵は不審死で、後宮で埋葬らしい。

その日、護衛として付いて来てくれた第三騎士団と共に、私達は帰国の途に着いた。

◇

後宮だったという建物は残っていないかった。瓦礫すらない、完全消去状態である。目の前には更地が広がり、惨たらしい死体すら無い。目撃者によると、爆発音だけ盛大で、炎が上がりなかつたそうだ。建物は粉雪のように舞い上がり、消え去つたと言う。考えられるのは粉塵爆発だ。石組みレンガ組の建物を微粒子レベルまで分解させて粉塵を造り出し…

問題は事件の起きた前日、私は彼らと会っていた。とても1日か2日で移動出来る距

離では無い。

「たぶん、空間操作術の一つ、転移術を使ったのだろう」

空間操作術は無属性魔法に分類され、遣い手は珍しいそうさ。そうになると、彼は聖者では無く、無属性魔法の遣い手だったのか？

「幸い、人的被害は無いようだ。いや、その日、後宮に行っていた第一王子だけが行方不明らしい」

きつと王子も細胞レベルに分解され粉塵の一部になったのだろう。何かを見つけた彼の怒りに触れたのだろうか？

——ケン——

アイリスがティアラを気を遣い、お土産の箱の中に、プライドの手紙を混入させたらしい。冒険者ギルド本部からのクエストで、ティアラ・ロイヤル・アイビー王女一行の護衛依頼が出されていた。目的地はここで、国絡みの案件を受けないことにしている俺は拒否して帰って来た。

「アイリス、どうするんだ？面倒な事になったぞ」

「どうしましょうね。良かれと思って実行してしまったの。本当にごめんなさい」
謝って済むなら戦争は起きないぞ。

「プライドはどうしたい？」

当事者に訊いてみた。一番簡単なのはプライドを連れ帰ることだが、その場合、もう二度とお持ち帰りは出来ないだろう。あの国がプライドを手放すとは思えない。予知能力でプライドが国を滅ぼすと見えていたはずなのに、プライドを好きな様に生きさせた王族達。それは前世の記憶を持つ、彼女にとつて、重荷になり苦痛になり、将来の不安しか無かったそうだ。

「私はあなたと一生を終えたい。あの国以外の場所です」

目に涙を溜め、俺の腕に縋るプライド。

「ティアラは王位継承者だから、お持ち帰り出来ないし……どうするか？」

片道半年くらいの旅程を任せられる冒険者って、いないだろうな。海を渡らないといけないから、天候によっては、もっと掛かるだろうし。

「ティアラって、一年以上も王都から出られるのか？」

「王位継承者だし、難しいかな」

じゃ、ここまでは辿り着けないってことで。転移術を持つ隼人には受けるなよと言つてある。受けたら敵認定だとも言つてあるので、転移でここまで来られるヤツはいないだろう。

「じゃ、通常営業だな。プライドは、俺達と冒険者三昧をして貰うよ」

ラスボス並の戦闘能力持つプライドが居れば、スーパーチーターのマイルと共に目立ってくれ、俺はモブになれるだろうな。

「了解」

やっと会えた萌は静の件でヒツキーになっていた。部屋から出て来ない。日本に帰りたいと、ホームシック状態とも言える。しかし、帰る方法は現状は無い。

魔法に詳しい国ってどこだ？

新規事業 Part 1

——ティアラ・ロイヤル・アイビー——

チョコレート菓子を遂に食べきってしまった。毎日一粒：寝る前の幸せな時間が、今夜で最後かあ。箱は記念に取って置こうと思い、ゴミ箱の上で箱を裏返し、底を叩いた。底は二重底だったようで、本当の底から一枚の紙と一粒の魔石が落ちて来た。紙と魔石を拾うと、紙は注文書であった。これでチョコレート菓子を注文出来るんだ。そして、この魔石には魔力が充填されていて、注文書の裏面の魔方陣に当てると、アズータ商会へ発注出来る仕組みらしい。転移の魔方陣なのか？それとも魔石の方に組み込まれているのかな？お試しで、お試しセットを注文してみた。色々なお菓子とお茶が少しずつ入っているようだ。

翌晩、部屋に一組の男女が現れた。私の部屋に直接転移して来た。あつ…この女性：「ご注文ありがとうございます。アズータ謹製お試し茶会セットをお持ちしました」
部屋に置いてある金庫から代金を取り出し、メイド姿の女性と商品と代金を交換した。

「お姉様…」

「これは、次回の注文書になります。魔石の方は後2回使えます。尚、交換用の魔石は有料です」

私のつぶやきをスルーして、私に説明をしてくれるメイド姿の…

「あの…次回も同じ人が届けてくれますか?」

「出来るだけそうします。では、またのご注文をお待ちしています」

男性とメイド姿の女性は、私に一礼をしながら消えていった。また、注文しよう。

——ケン——

通信販売を始めた。印刷用のインクが出来たので、注文書を印刷した。注文書の裏には魔力を注ぐと、エチゴヤの注文センターに転移する魔方陣が印刷されている。配達業も始めた。俺とマイルが転移して届けるのだ。荷物は俺もマイルもアイテムボックスが使えるので大物配送も可能であるし。

「昨夜は問題を起こさなかったの?」

モエに訊かれた。毎回、起こす訳では無く、たまたまが多いのだ。

「プライドが配達助手に徹してくれたから、問題は起きなかったよ」

モエは気持ちの整理が付いたのか、エチゴヤの注文センターで、注文された商品を管理する仕事を率先して始めてくれた。ヒッキーだと食事が一人なので、美味しくないと

しい。

「ケン、来年度の計画書に目を通してくれたかしら？」

アイリスに訊かれた。各部署や住民からの要望を精査して、計画予定をニコルの父親を交えて決めたそうだ。

「銀行？これは統一フォーマットの伝票が印刷出来ないが無理だ。後、紙幣を作るにも紙がいるけど……」

現状羊皮紙で紙幣を作るのもアリだろう。高額紙幣のみを流通させれば、重い金貨の輸送に苦勞することはなくなるし。

「学校は必要だな。領民の識字率を上げて、計算能力を上げてから銀行を作ると良いかもな」

銀行券に書かれている文字の意味を知らないと紙幣として機能しない。小切手とか約束手形なんかもそうである。

「教える学科は決まっている？」

「初等科では自国語の読み書き、簡単な計算、中等科では世界共通語の読み書きと、自国の法律や歴史、高等科では日本語の読み書き、そろばん、加工技術などを予定しているわ」

「そろばんは中等科にしたらどうだ？」

この世界にも高価であるが計算機があるらしいが、そろばんなら手軽で安価に出来るうだ。

「じゃ、高等科は専門コースにしようかな。農業、魔法、建築、木工とか専門のスキルを取得、研究できる場に」

「いいんじゃない？じゃあ、俺は俺に出来る事をする。例えば、下水システムとか」

「各家庭に洗浄便座とか？」

転生女性達の目が輝いている。現状、俺の部屋にしかないからなあ。

「下水システムが出来れば、ポットン式でなく、水洗式になって、都市衛生レベルが上がるな」

ポットン式のトイレすら無い家では、オマルで排泄物はお外にポイがこの世界の常識らしい。なのでスラム街とか悪臭が凄い。衛生レベルも最悪である。

か悪臭が凄い。衛生レベルも最悪である。

「そうなるここもそうだけど、領地全域に下水システムを設置するとして、今有る家屋は総て建て替えて？」

「新たな街を作り、そこに移り住んで貰うのはどうだろうか？工事費用は、土魔法を使えば、圧縮出来ると思うし」

土魔法を使えるのは、マイル、マイン、カタリナである。

「そうだ！大がかりの土魔法だとキースが得意だし、家系的にお父様も使えるかも」
って、カタリナ。それは俺にスカウトして来いってことか？

新規事業 Part 2

——キース・クラエス——

「姉さん…」

或る晩、家に消息不明だった姉さんとアン、アスカルト伯爵と知らない男性が、クラエス公爵邸を訪れた。

「どういうことだ？カタリナ…」

お父様もお母様もそして僕も混乱している。今まで何の連絡もくみださらず、消息不明だった姉、カタリナ。

「お父様、紹介いたします。彼が私の旦那様で、タスメリア国アルメリア公爵名代のケンです」

姉さんの旦那様？なんか、寝耳に水なことを言っている姉。まさか、駆け落ちってオチなのか？

取り敢えず、アスカルト伯爵と姉さんの旦那様？の話聞いたクラエス家の人々。要約すると、アルメリア公爵領に移住して、公務を手伝って欲しいってことだ。

「カタリナ：王家があなたにしたことは本当なの？」

「本当です。ケンが来てくれなかつたら、私はゴブリンに喰われていたでしょう」

姉さんが旦那様？の腕に抱きついて、甘えているように見えた。こんな表情の姉さんは見た事が無い。元？婚約者のジオルド様を前にしても、こんなにも幸せそうな表情は見た事が無い。

「一緒に来て貰えますか？」

「娘が幸せそうに住んでいる地に行きたいが、引越しが大変そうだな」

お父様もお母様も顔が蒼い。公爵邸は広い。故に荷物も多く、引越すには、馬車が何台あつても足り無いだろう。

「問題ないです。アスカルト伯の様に、家ごと転移させますから」

彼がそう言う少し家が揺れた。

「着きましたよ。場所はアスカルト伯のお屋敷の隣です」

「「ええええ〜！」」

家の外に出ると、未開地のような風景が広がっていた。それは一瞬のことであつた。こんなに簡単に転移つて、出来るものなのか？

「ここに新たな行政区を作るんです」

姉の彼は、自信を持ってそう、僕達に告げた。マジですか？

ケン

クラエス家の皆さんが来てくれて、土木工事が捗っている。下水システムと並行して治水対策もしていく。俺は行政区の下水システムを設計中である。下水道は土魔法使い達が、地下2階程度の深さにU字溝を掘り硬化させ、俺の錬成術で逆U字に作った蓋を被せて完成である。地下2階の深度には、マンホールから通じる地下通路にして、メンテをしやすくしておく。下水道を作り地下通路にして、地下1階部分の造成作業に入る。因みに流れを良くするために、下水道は川に向かって徐々に下る感じにしてある。

せ、俺の錬成術で逆U字に作った蓋を被せて完成である。地下2階の深度には、マンホールから通じる地下通路にして、メンテをしやすくしておく。下水道を作り地下通路にして、地下1階部分の造成作業に入る。因みに流れを良くするために、下水道は川に向かって徐々に下る感じにしてある。

どの家も地下1階部分に下水道へ通じる穴を設置してある。その穴に水場からパイプを引き込めば、下水道への流入路は完成する。

現在テスト施工で、新しいアイリス邸を建設している。塩ビ管が無い世界であるので、魔物の腸を腐敗防止加工し、塩ビ管代わりに使っている。これでどのくらい耐用年数を稼げるかな。

「これは何の腸？」

マインに訊かれた。

「ゴブリンとかオークだな」

オークは肉を食べられるが、ゴブリンはGと同じで退治するだけであるので、その小腸を利用することは有効利用とも言える。

下水処理方法は悩んだ結果。汚物を喰わせるとか微生物で分解させるとかの生物頼みの浄化システムにした。当面は雑食性のスライムを入れて、汚物分解出来るかをテストだ。臭いの問題は密閉施設にして対処である。

冒険者ギルドでの魔物討伐クエストに積極的に参加し、汚物を食べる魔物や動物を採取して、浄化システムに強制転移させている。

「どんなのが処理しているの？」

「殆どが雑食性のスライムだよ。水しか排泄しないからね」

スライムは培養土を出してはくれなかった。ミミズのような生物が欲しいのだが、ワームというミミズ系の魔物は肉食だった。汚物は食うには食うが、スライムごと喰う始末である。NGだろうな。

「そうだ、マイン。紙の方はどうだ？」

「わら半紙は順調。白い紙は木材を液状パルプにするのに難航中です」
紙すき場を作って上げたら、マインが楽しそうに紙をすいていた。

再開発

——アイーリヤ・フォン・タスメリア——

離宮にアルメリア公爵夫人であるメルリス・レゼ・アルメリアを呼び出した。

「何でしようか、王太后様」

メルリスが他人行儀である。

「今度、王宮で行われるパーティーにアイリスを呼ぼうと思うの」

「第二王子に婚約破棄されたのですよ。迷惑です。それに、あの子には良い人が見つかり、幸せそうなんですよ」

「訊けば、その者は平民では無いの?」

「王子様に婚約破棄をされた時点で、あの子が貴族と結婚することはまず無理ですわ」

「醒めた目で私を見るメルリス。エドワードめええええく!あのバカ孫は、私の親友の娘に、なんてことをしてくれたのだ。」

「実はねえ、第一王子がアイリスのことを気にしているのよ」

「あら、そうですか。おほほほ…今更ですか?第二王子との婚約前に気にして欲しかつ

たです」

笑顔を顔面に貼り付けてはいるが、目がまったく笑っていないメルリス。第二王子のエドワードの所業に、王族に対して完全にキレているようだ。

「アイリスと孫との結婚は私の悲願であることは、メルリスも分かっているであろう」「そんな昔のことを言われても……ああ、因みに我が領にケンカを売ると、知りませんよ、この国がどうなってもねえ」

王太后である私を脅すのか……情報は入ってきているぞ。あの謎の冒険者集団のことか？

「私の目から見ても、ヤバイヤツが3名ほどいますわ。ふふふふ」

不敵な笑いをするメルリス。メルリスの目からみてヤバイのが3名だと……うむ、危険だな。

「たぶんですが、未来のアルメリア領は大国になっていても、おかしくは無いですわ。アルメリア領がこの国から飛び出さないように、無理難題はお控えくださいね」

言いたいことを言って帰って行ったメルリス。エドワードがもたらしたアイリスのキズは深いと言うことか。

「アルはどう思う？」

部屋に潜んでいた孫のアルフレッドに訊いてみた。

「アイリスを前にして、公爵夫人は平民と結婚出来ない王国貴族の慣例に憤慨していました」

そこまで、その平民のことを？

「彼は敵にしない方が良いです。既に2カ国ほど、彼にケンカを売ってボロ負けしたそうです」

「うん？小さな国？」

「我が国よりも遥かに戦力のある大国ですよ。敗戦後、彼と友好条約を結ぼうか迷っているそうです」

確かにヤバイヤツのようだ。

—— ケン ——

アイリスの館から渡り廊下で繋がる俺の館の建築に入った。俺の錬成術とマイルの土魔法のコラボで、短納期で作り上げている。見た目は洋風建築であるが、中身は和風である。土間があり、和室があり、囲炉裏、掘りごたつ、大きな露天風呂……

「夜間はケンの館に住むから」

と、アイリスとカタリナ。アイリスの館は、仕事と接客用らしい。何故か混浴状態の露天風呂……一人でノンビリするスペースが……

「だって、石けん、シャンプー、リンスが備え付けだもの」

って、マイル、マインまで一緒に入浴って…モエだけは恥ずかしいと、内風呂に入っているのだ。余裕を持って作った筈の客間は既に空きは殆ど無く、現在増設工事中である。

入浴後、地下1階の倉庫から、地下2階のメンテナンス通路に降りた。水漏れ、汚水漏れが無いかを、チェックして回る。今現在、下水システムに繋がっているのは、行政区にある俺の館、アイリス邸、クラエス邸、アスカルト邸だけである。次は、アルメリア領領主の館と領都の街の再開発になる。

「スラム街はどうする?」

「公営アパートみたいな建物にしようと思います。街を囲む塀のように出来れば…」

アイリスが構想を口にした。団地みたいな建物なら土魔法だけで行けるか。各棟の1階に、共同の風呂、トイレ、水場を用意すれば、配管も面倒では無いし。

◇

翌日、下水処理場の余力を確認して、領都の再開発事業を始めた。まず、スラム街と老朽化した教会の新設である。教会の土地と建物は、教会本部の持ち物で私有地扱いなので、領主と言え、勝手に補修などは出来ないのだ。なので、新設することにした。教会には孤児院が併設されているのだが、今より広い敷地にする。孤児をより多く預か

り、将来の人材として教育をしていく方針である。

予定区画の地面に穴を開け、下水パイプへのバイパス管をつなげ、万が一、溢れた時の為に、汚水貯水槽を地下2階部分に作っておく。イメージは浄化槽である。浄化槽である程度浄化した汚水を、下水パイプに流す感じである。これで詰まりは低減するはずである。

じである。これで詰まりは低減するはずである。

因みに土魔法と錬金術で、工事費は俺達の労力以外には微々たるものである。

昼間に下水工事をしている関係で、配送、配達業務は夜間になってしまう。お風呂に入って、清潔にしないとマズい。

「また、ティアラ?」

プライドに訊かれたので、頷いた俺。配送伝票にはそう書かれている。

「まあ上得意なんだから、営業スマイルを頼むよ、プライド」

2週間に1回程度、プライドの妹から注文が入る。姉の無事を確かめたいのだろう。いつも通り、ティアラの部屋に転移をすると…妹の姿を見て固まったプライド。いや、いつかこうなるのではと俺は思っていたが。目の前には旅姿のティアラとセイが待っていた。

「なんで…何をしているの?」

「お姉様の住んでる場所に行きたい。どんな暮らしをしているか確認したのです」

「私はどんな風にポーシオンを作っているのか、見てみたいです。モエちゃんのことも心配ですし」

俺、最近、下水工事ばかりで、ポーシオンを作っていないけど…：お金に困っていないし。青汁の自家消費が増えたし。俺とマイン以外にも、プライド、カタリナ、アイリス、アイナ、ソルテ…が毎食後、ジョッキで飲み干していた。マインだけはティーカップであるが。

あの青汁、マズいことを除けば良いこと尽くめなのだ。スタミナや消費魔力が低減するし、状態異常になりにくいし、最大MP，HPが増えるし、HP，MPが手っ取り早く回復するから…

「俺はポーシオン作っていない。最近は配送業者だよ」

「なんでですか？薬剤師なのに？」

「ここであついてもしょうが無いので、ティアラに置き手紙書かせて、4人で転移をしました。」

波乱の幕開け

——セイ——

転移した先は、お屋敷だった。見た目はこの世界にありがちのお屋敷であったが、内
部は日本家屋であり、畳のある部屋を見て目尻に涙が……。なんか元の世界へ帰ってきた
気分になれたのだった。

「お前ら、二人同部屋だからな」

ティアアラ様と同部屋？

「モエちゃんと同じ部屋で良いんですが……」

「私はお姉様と同じ部屋で……」

「モエの部屋は……カプセルホテルみたいな感じだぞ」

へ？カプセルホテル？連れて行ってもらったのだが、確かにカプセルホテルのような
部屋だった。ベッド回りにだけ家具がある。床は板張りで畳では無い。

「ヒツキーをしていた時にこうしたら、安眠できたらいい」

ヒツキー？引き籠もりしていたのか。

「この暮らしに慣れていないんだったら、連れ帰りますよ」

環境の変化に弱いのかな？なんで、こんなにも殺風景な部屋で引き籠もったんだ？

「連れ戻りは禁止だよ。アイツはエチゴヤ商会の戦力だから」

エチゴヤ？越後のちりめん問屋？

——ティアアラ・ロイヤル・アイビー——

セイさんは知り合いの部屋に置き去りにされ、私はお姉様の部屋へ案内された。そこは大きな部屋であった。ベッドの幅が広い：4〜5人並んで寝られるくらい：つて、まさか：ハーレム部屋？

「この部屋で暮らして居る。元々俺の部屋だったが…」

彼は床にひかれた布団の上で横になった。

「お姉様…これは？」

「そういうことよ。私と同じ部屋で寝ると言うことは、彼と一緒に寝ることになるわ」

お姉様…私のお姉様が男の人と…夜はあんなこと、こんなこと？

「ケン、またお持ち帰り？」

とてもきれいな女性が二人、部屋に入ってきた。お姉様よりも歳上に見える。

「いや、プライドの妹だ。プライドの生活を見ておきたいんだそうだ」

「ふくん…意外にかわいいじゃない。プライドに似てなくて」
似ていない？そんなことは無い。同じくらいかわいいはずだ。

——ケン——

翌日、ティアラをお城まで送っていくと、プライドの母親にお願いされた。

「毎週末、この子をプライドの元で、過ごさせて欲しい。仕事をさせてもいい。嫁に欲しいなら、あなたが王配になってもいい。だから、お願い出来ないですか？」

家系的にプライドだけで無く、ティアラ、母親も未来予知能力持ちで、あのハッピーエンドが見えたそうさ。ゲームとは違い、本当の意味でのハッピーエンドでは無かったそうさ。泣きながら、辛そうな表情をしながら、プライドを討伐するプライドの愛しき者達…国を破滅へと追い込もうとした極悪非道王女が死ぬと、皆に惜しまれつつ国葬をした。そんなビジョンが見えたそうさ。未来ビジョンでは、突然プライドがラスボスに変身したそうさ。ゲームでもそうだったなく。その上、原因については明かされていないかったような。

「今は違います。未来ビジョンに見えるプライドは、幸せそうな顔であり、皆が祝福している情景が見えるようになりました」

柔らかな表情の女王。

「でも俺は平民だよ。王女と結婚は出来ないはず」

「ですから、あの子達を平民の嫁として貰ってください。あの子も、ずっとプライドと共に一緒にいられるなら、幸せだと思います。幸い、我が国は女系君主制です。あなたの元では平民として暮らし、国に戻れば女王になれば良いのです。ですから、どうかティアラも貰ってくださいませんか？」

「なれば良いのです。ですから、どうかティアラも貰ってくださいませんか？」

「あれ？プライドだけじゃないの??」

「プライドには女王の座は渡せません。いつ変貌するかわからないし、そもそも変貌する理由が分からないのですから。プライドは差し上げます。その上で、ティアラも貰ってください。たまには里帰りはさせてくださいね」

「でもいいのか？平民の俺が第一王女と第二王女を貰っても？未来予知が見えるから、事件が起こりそうな時に俺達と共に戻れば良いのか？」

「プライドが認めたあなたなら、ティアラも安心ですよ」

「俺が安心では無い。アイリスとカタリナはきつと『ずつる』って合唱しそうだ。」

「なんか分からないが、その後に行くめられ次期王配にされてしまった。勿論、ティアラを貰った場合であるが…王女が二人とも側室になるのだが、女王からは文句はなかった。本当にいいのか？ダメって言われても、アイリスの正室、正妻の座は揺るが

無いと思うけど。

「何か有れば、我が国の名を出していいですから」

アイリスには迷惑料として、フリージア王国は、タスマリア国とでは無く、アルメリア公爵領と友好条約を締結した。

建国記念パーティー

——アイリス・ラーナ・アルメリア——

ケンのお持ち帰りしたものは、国に目を付けられるのには充分であった。フリージア王国との友好条約を公爵領として締結したのは、父も母も王太后様も目が点になるほどのビックリな出来事であった。こういった条約というものは普通、国同士が締結するものであるからだ。

「アイリスちゃん、どういうこと?」

王都から母が駆けつけた。

「ケン、あなたは、アイリスちゃんという良い女がいるのに、何をしているの?」

そこなの?

「え?俺が悪いの?」

「いい?正妻の座はアイリスちゃんにしなさいよ!」

母の剣幕にケンはコクコクと頷いていた。問題はそこなの?公爵領として大国と条約を結んだことでなくて?

ケン

「いい？正妻の座はアイリスちゃんにしなさいよ！」

モエの立場は…無いなあ。モエは結婚まで考えていないみたいだし。帰れば、元の世界に帰りたいらしい。俺は、もう帰れなくてもいいかな。無責任に放りだして、元の世界には帰れない。帰っても浦島太郎状態はイヤだしな。

「ちよつと待った！俺はアイリスとは結婚が出来ないんだろ？」

アイリス母の言葉に流されそうになったが、平民と公爵令嬢は、この国の貴族ルールでは結婚出来ない。

「ふふふ…フリージア王国で結婚式をあげちゃいなさい。友好国でしょ？」

アイリス母の顔が悪人顔になっている。結婚証明書もフリージア王国で貰えば、この国では撤回出来ないらしい。悪代官夫人が俺の目の前にいた。

「それにあちらの王女様達は、平民としてあなたと結婚をするんでしょ？」

「まあ、確かに…」

「ふふふ…ならば、アイリスちゃんが正妻の座でも問題は無いわ」

平民と公爵令嬢では、公爵令嬢の方が正妻の座に座れるが…フリージア王国に王配になれば、立場的にアイリスと問題なく結婚出来るのでは？

「ねえねえ、私も公爵令嬢よ。両手に花な結婚式にしようね」

って、もう一人の悪役令嬢が、悪代官夫人の案に載っかってきた。ああ、これ逃げられないヤツだあ。なんかフラグが立った気がする。

「ケン、身から出た錆ってことで、責任は取ってね」

と、アイリスが笑顔で抱きついて来た。錆びは無いと思う。俺から求めたことは無い。裸を見たかもしれないが、あれは男湯に入ってきた女性陣が悪いんだし……

だが救いはある。プライドは12、ティアラは2歳下の10である。成人が15の世界では、二人共まだ結婚出来る年齢では無い。アイリスとカタリナは問題無い年齢であるけど……ティアラが成人するまで5年は逃げられる計算である。そうだ、結婚よりも領内の再開発を優先にして貰えば。

—— アイリス・ラーナ・アルメリア ——

王宮内で行われている建国記念のパーティーに招待され、目の前にはエド様とその婚約者ユーリがいた。護衛としてケンとプライドが付いていたが、二人共、王太后様の事情聴取が行われており、私一人でエド様達に対応しないとダメな事態になっていた。

「ユーリが、お前の着ている物が欲しいそうだ。今すぐ脱いで献上しろ」

エド様がいきなり無理難題を言う。それはパーティー会場内で私に下着姿になれと

言うのか？

「そもそも、お前のような者が呼ばれるのがおかしい。おい、チンケな国と友好を結んだくらいで、いい気になるなよ！」

エド様の側近達に押さえられ、エド様の手により、服を脱がされていき、ついには下着まで…その場に身をかがめて、男性達の視線から見えないようにする。

「おい！衛兵！この裸女を牢にぶち込んでおけ！」

エド様の冷たい声。側近やユーリの笑う声…なんで、こんな目に…

パサッ

あれ？頭の上に何かを被せられたわ。

「ポンチョだ、アイリス」

ケンの声だ。言われるままにポンチョを羽織った。これでひと安心だ。周囲の状況を確認すると、エド様は何故か玉座に座っていた。私を取り押さえようとしていた衛兵達は、装備を剥ぎ取られたのか、下着姿である。そして、私の周囲には、ケン、プライド、シロちゃん、マイルちゃんが臨戦態勢で私を護るように立っていた。

「これはどういうこと？」

王太后様が異変に気づき近づいて来た。

「お前が俺達から話を聞いていた間、てめえの孫の命令で、アイリスが全裸にされていた

んだが、俺達をアイリスから引き離れたのも、あんたの罠だったのか？」

ケンの声が届いたのか、王太后様の顔色が変わり、目つきが厳しいものになった気がする。

「アイリスが全裸に？誰の命令？」

「だから、今、玉座に座っているヤツにだ」

一斉に玉座を見るみんな。そこには第二王子のエド様が、座っていた。

「エドワード！なんで、そこに座っているの！そこは王以外、座れないのよ」

「エドワード様が事実上の王様だから、問題ないでしょ？」

ユーリが王太后様に答えた。ああ、王族のルールを沢山破っているんだけど…エド様が玉座に座る為の条件は、第一王子が死に、王様が死んだ場合だけである。ユーリの発言が事実だとすると、王様と第一王子はエド様の勢力に暗殺された可能性があるということである。

「あなたは誰だったかしら？」

王太后様が嫌みを込めてユーリに尋ねた。

「おばあちゃんはボケちゃたかな？私はエドワード様の正妻、女王よ。無礼な、膝を付きなさい。ああ、おばあちゃんだから、目と耳と膝が悪いのかしら？」

王太后様をおばあちゃん呼び、その上で女王って言い切っているし。バリバリの不敬

罪である。その上、侮辱罪も付くのでは…

「アイリス、帰るぞ」

ケンに手を引かれ、広間から出ると転移して帰宅した。

◇

「アイリスの全裸の拝観料だよ」

目の前に金貨が山のように積まれていた。ケンは、参加者の財布から金貨以上の貨幣をこっそり『強奪』したようだ。後、衛兵の装備品もだよ。

「コレを材料に、領兵達の装備品を作るか。おおく、ミスリル銀みたいだ。流石は王族の近衛兵だねえ」

衛兵の装備品を楽しそうにインゴット化し始めたケン。

「しかし、極悪非道ですよ。転移間際に広間に改良版もどきを投げ込むとは」

マイルちゃんからの目撃証言：ケンはあの密閉空間に改良版エリクサーもどきを投げ込んだって。確か今回の改良版って、全身の毛が急激に伸びて剛毛化するんじゃないかってつけ。

「ハゲている人が多いから感謝されるかな？」

「脇腹が痛そうですねえ」

脇毛が刺さるくらいに剛毛になったって、言っていなかったか？今回の改良点は細胞

の再生スピードの強化だけで無く、細胞自体の堅牢化だった気がする。

「ああ、アイリス母は、強制転移させて、王都邸に返してあるから、問題は無いよ」
問題大ありの気がするのは気のせいだろうか？

——ケン——

アイリス全裸事件から数日後、王都からアイリス母がやってきた。

「あの第二王子はダメね。玉座はもう俺のもんだ、だって：アイリスちゃん、婚約破棄は正解よ。まだケンの方が良い物件よ」

何故、俺と比べる。心外である。俺は単なるモブ平民風情だぞ！

「婚約者のユーリ様は。不敬罪になりましたか？」

「ならないわ。第二王子派閥の貴族達が、かばいまくりよ。バックには現王妃様が付いているし、王様はふぬけだし、暗殺を恐れて第一王子は雲隠れ。この国は終わったかしらねえ」

アイリス母は、何故楽しそうな顔で話しているんだ？

「消すんなら、いつでも言ってくれよ」

いくら俺やマイルでも、領地ごとの引越しは無理だから。ジャマを排除した方が楽である。

「暗殺？ケン、あんなヤツ、暗殺する価値も無いわ」

アイリス母はどうしたいんだ？暗殺する価値がないって、あの凶太さは中々自然死しないぞ。

「後、あのユーリって、他国の工作員だぞ」

「それは何情報？」

俺の情報で驚いた顔になったアイリス母。

「エチゴヤの取引相手だよ。最近、北の国にジャガとトマトを輸出して、農業指導もしているんだ」

ポテチ工場を作ろうと思っている。廃熱を利用すれば、暖房に利用出来そうだし。トマトのリコピンは身体に良いし。

「ねえ、ケンは北の国をコントロール出来る？」

「そうだな。取引相手が結構有能な商人だから、時間を貰えば……」

北の国は凍てつく大地が広々とある。商材を選べば、大儲けできそうである。それにジャガが大量に生産出来れば、食料問題も少しは解決するだろう。

俺達があこの国の問題である食料事情を解決すれば、あこの国の上層部を民意で打倒できるであろう。

隼人来る

——アラン・ステイアート——

カタリナとカタリナの関係者が消えた。遂にカタリナの実家であるクラエス公爵邸もアスカルト伯爵邸のように爆破されてしまった。一連の出来事を兄達の派閥の貴族達によるものだとしてジオルドは考え、ジオルドは王位争いに名乗りを上げた。

仮にジオルドが王になった場合、兄達を含む派閥全員の粛正が行われるだろうな。

俺は王位継承権を放棄し、旅に出た。そして今、旅のバイオリン弾きとして生計を立てている。ある街で冒険者の隼人と意気投合し、近くにいる隼人の友人と一緒に訪ねる事になった。

「僕、初めてなんですよ。ケンさんが開発する街に行くのは」

楽しそうに話す隼人。ケンと言う人物を慕っているようだ。

「錬金術師としての腕は確かだし、最近は商業ギルドランクも上げていますよ」

自分で錬金した物を自分の商店で売っているのか？

「今から行く街はデカイのか？」

「どうだろう？再開発中だと言ってましたから」

再開発？田舎の村か何かか？一度出来上がってしまった街は、再開発する土地は無いから。

「ああ、見えて来ましたよ。はあ？何だ、あの扉は…」

扉というか城壁のような壁で囲まれている街が見えて来た。デカイ…こんな街の再開発しているのか？

街に出入りする門はどこかの城の門のようで、門自体が建物でもあるようだ。

「この街では、普通の貨幣は使えないから、両替商で両替をまですした方が良いぞ」

と、門番。普通の貨幣は使えない？どうしてだ？隼人達と両替商へと行く。その店は門を入れて直ぐのところにあった。両替は持っているコインに含まれる銅、銀、金、白金の含有量で、ここで使えるコインに交換してくれるようだ。

「金貨以上の貨幣は紙幣に交換になるが、良いのかな？」

「え？紙幣ですか？珍しいでのお願ひします」

隼人は金貨を一枚取り出し、両替商に渡した。

「これではダメだ。3枚くらいないと紙幣にはならない。この金貨の金の含有率は低いぞ」

何かの機械に入れると含有率が分かるようだ。あれは魔導具か？

◇

紙幣：文字がアレコレ書かれているが、どここの言葉だ？見た事の無い文字だ。

「へえ、銀行券だ。アルメリア公爵銀行券かあ。流石はケンさんだな」

隼人にはあの謎文字が読めるようだ。

「なあ、これはどこの言葉だ？」

「僕達のソウルランゲージですよ」

ソウルランゲージ？魂の言語？どういう意味だ？

「独自貨幣だと、盗まれる心配は少ないですね。他領や他国では使えませんから。それに金貨をジャラジャラ持ち歩くこともないし、何よりも軽いですからね」

まあ、それは分かる。下手に大金を持ち歩くのには、護衛が必要であるから。だが：「この街の者に盗まれる心配があるだろ？」

「それも無いですよ。この領内で悪意を持つと、天に召し上げられますから。悪意除去の结界を張っているからですから、悪意を抱いて生きていますと、突然倒れ、衛兵に回収されるそうですよ」

錬金術師って、そんな物まで作れるのか：開いた口が塞がらないぞ。

屋台では見た事の無い食い物が並んでいた。それを隼人は懐かしそうに買い食いし

ている。この街に来たのは初めてじゃ無いのか？

——ケン——

隼人のパーティーが領都に来たようだ。外周部の公営アパートは完成したので、再開発は一段落している。領都からスラム街は消え、衛生レベルが1つ上がった感じである。ポロポロだった教会は新設され、併設されていた孤児院も以前より広くなっていた。教会には学校も併設され、初等科だけが開校している。この初等科は誰でも無料である。中等科以上は有料であるが、初等科は最低限知って欲しいことだけを教える、領民にとつての義務教育と言う位置づけであるのだ。

「運営資金はケン持ち？」

何故か、まだ逗留しているアイリス母に訊かれた。

「まあ、エチゴヤ商会が儲かっている間は、開発資金も含めて俺が持つよ。ただ、税収が上がったら、お小遣いは貰うけどな」

敵対勢力から、金貨以上のコインをこつそり『強奪』で奪い取っているのは内緒である。

「ねえ、アイリスちゃんを一生護ってあげてね」

「俺はモブな平民ですよ」

鑑定

— セイ —

この男、薬剤師じゃなかった。ポーシヨンの作り方が、私とまるで違うし。なんか、騙された気分である。

「錬成術って、ずるいよ〜」

熱や媒体を使わずに、異なる物質を混ぜ合わせるスキル。私が調薬するよりも魔力の消費も少ないらしい。

「まあ、錬成術師の特権だな」

スキルを見せて貰ったのだが、

スキル：剣術、回復術、治療術、浄化術、錬成術↓錬金術、修復術、魔法（無、時、聖、闇）、念動力、祝福、

龍殺し、封印無効、結界無効、状態異常無効

って…あなた、聖者でしょ？『祝福』があるじゃない。私には無いのに…

ギルドカードも見せて貰ったのだが、

冒険者ギルドランクSランク、錬金術ギルドランクSS、商業ギルドランクA

「これって、勇者クラス？」

「ランクSSって、何？」

「ああ、エリクサーもどきを作ったから…」

「どうやって、作ったの？」

「これを濃縮したんだよ」

ケンがアイテムボックスから樽を取り出し、青汁のような物をジョッキに注いだ。臭い…臭すぎる…涙が止まらない。鼻水も…女性の品格に関わる臭さである。

「これ、何？」

「うちでは青汁って呼んでいる。販売元の冒険者ギルドでは物体Xって呼ばれていたかな」

「これ、販売されているの？何の為に？」

「これ自体に、効能ってあるの？」

「飲んだ瞬間からHPとMPの回復速度が上がり、HPとMPの最大値が上がる。レベルが上がらなくなるみたいだけど、スキルの覚えが良いかな。俺、未だにレベル1だし」
「はあい？レベル1？レベルが上がると、スキルがどう変化するんだ？すでに攻撃職、生産職、回復職には良い感じにスキルが揃っているし。研究所に戻って所長に訊いてみるかな？」

「なあ、青汁の共同研究をしないか？これ、最新のもどきなんだけど……」
脇腹に刺さると言われているヤツかな？

「しなやかさは欲しいって、現場から要望が出ているんだよ」

出るでしょ？腕を動かすと脇毛が脇腹に刺さる回復薬って、あり得ないし。

——ケン——

セイに共同研究を持ちかけた後、マインが聖シユルル協和国の神殿書庫から錬成コ
ピーしてきた書物から、物体Xについて書かれた記述を見つけた。

『正式名称：神々の嘆き、仮称：物体X 開発者：いにしえの賢者 効能：飲んでいる期
間は冒険者の潜在能力を覚醒させる。 元々は色々な薬草、龍の心臓、精霊の水、世界
樹の根などを混ぜ合わせて開発された丸薬であったが、魔導具で作り始めると液状化し
てしまった。 飲んでいる期間は、レベルがとも上がりづらくなり、性欲が減衰する
ことがデメリット効果……』

メリツトの効果は、俺の推察通りであったのだが、性欲が減衰する？それは、飲むの
を止めると、アイツらの全裸に悶々とすることになるのだろうか？待て待て……アイツ
ら、俺が寝た後に何かやらしているけど、減衰してあの頻度なのか……少し、逃げたくな
る俺がいた。

「何？そのデメリットは…」

セイが息を飲んだ。

「多分、性欲を生命力に変換しているのだろう。性欲って子孫を残す欲だし、死にやすい種族って子だくさんだろ？」

「それは否定しないけど…ケン…婚約者達って、飲んでるんだよね？」

「ティアラも最近は飲んでるから、全員飲んではいら。1日3回ジョッキ一杯…」

「なんか、鳥肌が立ってきた。アイツら、物体Xを飲まなくなると、どうなるんだ？反動って起きるのか？」

「検証しないとダメだね」

◇

翌日、セイと共に、スランタニア王国の薬用植物研究所に向かった。物体Xについて、専門家の意見を訊くために…デメリット情報はマインの口から、婚約者の皆さんに伝わっている頃だろうし。

「これが、エリクサーもどきの原料なのか？」

所長が青汁の臭いを嗅いで、咳き込んでいる。あれ、臭いを吸い込んだら負けである。息をせずに一気に飲まない、飲みきれない。

「く、苦さあ…で、正式名称が神々の嘆きなのか…嘆くよな。この臭さは…元々は丸

薬って、納得だな。これを液状で飲むのは何の拷問だ？」

俺もそう思う。拷問でしょう。何の効果も無ければね。でも効果があるからなあ。一種のドーピング中毒に近いか。

「で、これを濃縮して、更に薬草を加えてエリクサーもどきになったと？」

頷く俺。

「濃縮の方法がチートなんですよ、この男は……」

セイから『この男』呼ばわりされている。

「この青汁から水分だけを取り除くスキルを持っているんですよ。熱を加えずに取り除くってズルいでしょ？」

「温度変化させずに濃縮出来るのか。それはズルいというか。薬剤師には欲しいスキルだな」

と所長。

「錬成術を学べば出来るようになるのかい？」

「いや、別のスキルです」

うん？なんで、コイツ、俺のスキルを知っているんだ？

「別？」

「切り札なので、言えませんが」

『強奪』スキルは他人に言わない方が良いだろう。使い方によっては犯罪行為になりかねない。

「まさか、念動力ですか？」

セイには『強奪』と『隷属術』があることは見せていない。犯罪行為を疑われるのは心外であるから。

「まあ、そんな感じだね」

「では、本題だ。君の称号を見せてくれないか？」

本題？それは、俺が聖者かどうかってことか？

「無理やり見せてくれとは言わないが…先ほど、こっそり『鑑定』をさせてもらったのだが…」

鑑定をした？俺のステータスか？盗み見たのか？一言断るのが礼儀じゃ無いのか？

——セイ——

「無理やり見せてくれとは言わないが…先ほど、こっそり『鑑定』をさせてもらったのだが…」

所長の言葉で、部屋の空気の質が変化した。全身の毛穴が全部開き、冷や汗が溢れ出て行く。全身の穴と言う穴から液体が浸み出していく感覚もある。これ、マズイヤツ

だ。女性の尊厳を踏みにじる結果になりそうな。

「待て！怒りを鎮めてくれ」

所長のかすれるような声。瞳が血走っている。涙には血が混じっている気がする。

「なあ、そういうのって、無断で見るのは禁止だよな？敵対勢力以外は…この国は未だに俺の敵って、ことでいいか？」

「違う…」

「どう違うんだ？」

「止めて…助けて…」

彼に縋り付いている私。死にたくないと言う本能だろうか？何も考えずに、自分の身体を彼に押し当て、アピールしている。

彼の手の私が私を抱き締め…そう言えば、コイツ、今日青汁飲んだっけ？

——ケン——

『威圧』の上位スキルである『畏怖』を発動した俺。その途端、二人共、変な汗や赤い涙を流し始めた。あれ？『畏怖』ってヤバイスキルだったのかな。

やがて酷い顔になっていくセイが命乞いをし始めた。なんか、エロく見える。あつ！今日はまだ青汁を飲んで無かった。性欲が減衰していないのか…マズいなあ。性欲に

飲まれると、どうなるんだ？

大惨事

— セイ —

一息ついた。いつの間にか意識が飛んでいたようだ。ここは研究所の私の部屋…朝日が差し込んでいる。もう朝だ。あれ？いつ寝たんだけ？記憶が混乱している。ふと、横を見ると…なんで、ここに…あれ？応接間で会っていたはず。ここにいてことは、私が誘い込んだってことであろう。

自分の身体をチェックすると全裸であった。下腹部に違和感がある。手で確認してみると、全身から冷や汗が吹き出し、思い出した。所長がやっちゃいけないことをして、彼がキレて、私は必死に命乞いをしたんだ。なんでもするから助けてと…その結果である。なんで、こんなことに…性欲を減衰する薬を常用していたはずの彼なのに…

あつ！そう言えば、昨日は青汁を飲んでいない。ジョッキに注いだアレを飲み干す前に、所長がやかしたんだ…ベッドから抜け出すと、下腹部に妙な感覚がある。何かが流れる出る様な…ドンだけ溜めていたんだ、この男は…

◇ ベッドで寝るあの男の表情は、どこか満足げに見えた。

シャワーで全身を洗い流し、服を着て、部屋を出るが、いつもと雰囲気が違う。窓から見える風景は、どこか殺風景で、妙に色彩が無い気がする。葉草が枯れた花壇。木々は枯れ、小動物達が地面に落ちている。所長の行為は、彼の怒りに触れたのだろうか。その代償は大きいようだ。

応接間に向かうと、所長らしきミイラがソファに座っていた。白髪なんかなかった頭髪だったのだが、真つ白であり、体内の水分が全部抜け出たのか、足下の床はビシヨビシヨに濡れていた。

これが、彼の怒りの力なのか。いや、青汁で抑えていない彼の本来の力と言った方が
良いのか？

「えっー」

後ろから誰かに抱きつかれた。いや、誰かは分かっている。彼しかない。抱きかかえられて、私の部屋に連れ込まれた。

翌日、シャワーを浴びずに、応接間に行き、ジョッキに青汁を注いで、部屋に戻った。漏斗とスポイトを使って、彼の口の中に青汁を滴下させていく。これで、理性が戻るだろう。いやそうでも有って欲しい。このままでは、私が疲労でダウンしてしまうだろう。前世では未体験だったけど、大人の行為って、思ったよりも体力を使うのね。

お昼頃にはジョッキに注がれた青汁を、彼に総て飲ませる事に成功した。これで安心

か？シャワーを浴びよう。昨日も出し切ったのか、今朝の下腹部はゴワゴワ程度で済んだようだ。

「おはよう」

シャワーから出ると彼に挨拶された。あんなにも激しかったのに、まるで覚えていないのか？その上、私は全裸であつたのだが、彼は私に見向きもせず、シャワー室に消えていった。ここまで性欲って減衰するんだ。物体X、恐るべし…

「ねえ、なんで、誰もいないんだ？俺達以外、まるで生き物の気配を感じないんだけど。セイって研究所に一人暮らし？」

シャワー室から出てきた彼がそんなことを言う。下手に怒らせるとマズい。でも、事実を認識して貰わないと。

「覚えていないの？」

「うくん…とてもスッキリした記憶しか無い。なんで、こんなにスッキリしているんだ、俺…」

それはそうでしょう。あんなに盛大に排出すれば、

「あなたが、したのよ」

セイが俺を真っ直ぐに見つめて言った。

「あなたが、したのよ」

何を？ 記憶を思い出す。薄らと感覚的な物を思い出す。セイは俺の手を引き、所長と会った応接間に連れて行った。そこには変わり果てた姿の所長がいた。ああ、思い出した。コイツらは俺に敵対行為をしたんだ。

「そうだ！ 許可無く、俺のステイタスを鑑定したんだ。俺のレベルが1なのを良いことに」

怒りがこみ上げて来た。爆発する前に、自ら青汁をジョッキに注ぎ、一気に飲み干した。飲むことで怒りの限界値までも上がる気がするのだ。

「あっ！ もしかして、俺はセイに何かをしたのか？」

謎のスッキリ感の正体に思い当たった俺。青汁のデメリットが無い状態だとしたら

：

「青汁を飲まないあなたは危険ってことがわかったわ」

つまりは、そういうことをしてしまったのだろう。

「ねえ、あなたは何をしたの？ どこまでの範囲が影響を受けたの？」

それは『威圧』の上位バージョンの威力ってことだな。

「わからない。初めて使ったから。まさか、共同研究の場で敵対行為をされるなんて思

わなかったから、咄嗟に……」

——セイ——

彼の使ったスキルは『畏怖』：彼的には『威圧』の上位バージョンだと言うけど、生死に関わるクリティカルな精神ダメージ攻撃のようだった。試しに瞬間的に使ってくれた。そして、彼が検証をしてくれたのだ。

「このスキルは危険だな。ここに一番に使おう」

って……意識が飛び、気が付くとシャワー室で彼が私を洗ってくれていた。

「全身の穴という穴から体液とかが漏れていたぞ」

私の女性としての尊厳は、彼の前で脆くも崩れ去ったようだ。

「誰にも見られたく無い姿を見られたんですから、責任を取ってくださいよ！」

「すまん、側室になるけど……」

まあ、婚約者が既に4人もいるものね。

その後、二人で被害状況を見て回った。王城敷地内は全滅、王都はセーフであったが、王城にいた王族、貴族、騎士達はほぼ全滅であった。どうするんだ、この国は？

フであったが、王城にいた王族、貴族、騎士達はほぼ全滅であった。どうするんだ、こ

の国は？

「隣国と併合するか？」

隣国？ 確か…フリージア王国でしたっけ？ それって、未来のあなたの国じゃないの？

—— アイーリヤ・フォン・タスメリア ——

各大陸に散っていた密偵の一人から連絡が届いた。スランタニア王国が、隣国であるフリージア王国の次期王配に敵対行為をし、滅ぼされたと…次期王配って、あの男だ。アイリスの婚約者の平民…密偵からの情報では、フリージア王国から兵は一兵卒も進撃していなかったそうだ。続報では、あの男が単独で王城だけを落とすと言った。建物の損傷は無く、ただ植物と生物だけが死に絶えていたそうだ。

「アルフレッドは、どう思う？」

第一王子である孫に訊いた。

「彼は転移術を使えるのでしょうか。色々な大陸を縦横無尽に飛び回っているようです」

転移術だと無属性魔法だ。遣い手が僅かな上、防御する方法は無い。

「敵にしてはダメです。彼一人で、国一つを奪えるのですよ」

メルリスの目から見てヤバいのが三人いると言っていた。彼クラスが後二人いるの

か。

「アルフレッド、王妃と第二王子を早急に失脚させるわよ。アイリスに害が及ぶと、この国も終わる」

「ええ…そう思います」

——ケン——

セイと共に帰ってきた。忘れていた。青汁のデメリットを彼女達は知ってしまったことを…その晩から、夕食時に青汁を飲むことが禁止されたのだった。

翌日、青汁を飲んで体力を補充し、スランタニア王国で起きた事をアイリスとプライドに話した。

「まあ、敵対行為をしたんだから、落とすのはいいけど、フリージア王国への負担が凄いくらいにならないですか？」

プライドに訊かれた。

「トップがすげ替えられるだけだし、スランタニア王国の貴族が治めるなら、譲れば良い」

統治はしたいヤツがすれば良い。

「そうなるか鑑定防止策が要りますね」

アイリスが心配そうに俺に言った。

「セイに訊いたら、相手よりレベルが高ければ、防止できるそうさ。当分、スランタニア王国の森で、魔物狩りをしてレベルをあげてくるよ」

騎士団の代わりに魔物を殲滅させて来ようと思う。ステイタスを確認すると、大量殺戮をしたおかげか、レベルが予想外に上がっていたのは、内緒にしておくか。

「で、セイさんは5人目の婚約者ですか？」

アイリスに訊かれた。

「すまない。青汁を飲まないと、あんなことになるなんて……」

「セイさんに訊きましたよ。溜まり過ぎていただけです。これからは適度に抜いてくださいね」

アイリスの目が輝いたように見えたのは気のせいだろうか？

結婚式

— セイ —

行政区に薬用植物研究所を作つて貰つた。薬用植物と銘打つてはいるけど、普通の植物の研究もすることになっている。管轄は農政部でカタリナさんの配下になるそうだ。

和食に欠かせない食材の開拓、改良がメインで、薬用植物もそこそこ研究するらしい。特に物体Xをエリクサーに変える薬草の研究：剛毛でなくしなやかな毛になるように

：「海藻類かな？」

ケンがワカメ、昆布などを近海で採取してきた。

「ついでにカニ、イカを取つてきましたよ」

とマイルちゃん。食材担当らしい。

この地の良いところ、仕事の後の露天風呂タイムである。召喚されたアノ地では、シャワーだったから…なんか、日本人で良かったと思う瞬間でもある。

「何度も言うが、ここは男湯だ！」

ケンの言葉を皆がスルーしている。青汁効果か、全裸の女性を見ても、普段通りのケンであった。なんか不憫だなあ〜

「そうだ、セイ。明日、冒険者ギルドへ行つて、冒険者登録するぞ」

「なんで？ 私は研究員であつて冒険者じゃないわよ」

騎士団のいない領地である。採取しに行くには自分達が戦力にならざる負えないの
だろうか？

「お前もヒーラーだろ？ 手伝えよ」

ヒーラーは後衛職で戦闘は出来ないんだよ！

◇

翌日、冒険者ギルドで冒険者登録をし、飲食コーナーで青汁をジャツキであり、地下の闘技場に来た。ここで、ケン達は不定期で、銀貨1枚でどんな病や怪我也も治す、ボランティア活動をしていた。治癒士を頼るとどんな程度でも金貨10枚も掛かるそうで、治癒会場は大盛況であった。マイルちゃんもヒーラーしている。護衛はシロちゃんとプライド、後冒険者の皆さんだった。

「冒険者は魔物を倒すだけが仕事では無いんだよ。たまに治癒士ギルドの雇ったゴロツキとか暗殺者が来るから、護衛陣は注意しているよ」

確かに騎士とか戦士崩れとかが、乱入してきた。だけど、私達に近づくと前にボコられ

捕縛されていた。

「また、次回も頼むぞ」

ギルマスに青汁の入った樽をプレゼントされ、また違う街でも治癒祭りを繰り広げ、銀貨をたつぷりと稼いでいた。正式名称は、聖者様の変革祭で聖変の日と呼ばれているとギルマスに教えて貰った。

「ボランティアならタダでもいいんじゃないの?」

「タダだと、気兼ねして遠慮するヤツが出るんだ。タダより怖い物は無いと言うし。だからワンコインサービスにしたんだ。最初に行った冒険者ギルドのギルマスがなあ」

発案者はギルマスのようだ。

◇

聖変の日行脚をして3日目、聖シユルール協和国の教皇の間にいた。

「やつと来てくれたのか?」

「ああ…」

教皇と話すことが、冒険者ギルド本部からのクエストらしい。

「お主がダンジョンを制覇したのか?」

「だとしたら?」

ケンが教皇様と相対していた。ここは元いた世界で言うバチカンのような場所らし

い。各地にある教会、神殿のトップが目の前にいる教皇様だと言う。

「手に入れた物を提出して欲しい」

「イヤだと言ったら、敵対し、滅びるか？」

おい！この男、教皇様を脅すのか？

「以前のえん罪に件は誠に申し訳なかつた」

ケンに頭を下げる教皇様。この男は過去に何をやらかしたんだ？

「治癒士が請求する代金高すぎるだろ？一律金貨10枚つて、どういう計算だ？貧乏人は死ぬと言うことか？そんな彼らを助けた俺は、営業妨害で捕縛つて、おかしくないか？更に冒険者が街中でヒールをすると無資格治療行為つてなんだ？」

あの治癒祭りつて、治癒士達から、あれこれ難癖を付けられてたいのか。

「なら、お主も治癒士ギルドへ入会するか？」

「はあ？問題をすり替えるな。入会すれば、毎月、毎年お布施を払う義務が生まれるだろ？冒険者には無理だよ。そんな制度は」

えっ？毎月お布施…流石はバックに宗教を掲げると、そういう上前をはねる行為も正当化出来るのか？

「お主が入会し、このシステムを改良せぬか？」

「しない。それよりも交渉だ。ダンジョンの底で手に入れた聖龍の骨を一部やる。その

報酬で、タスメリア国アルメリア公爵領の領都に建立した教会を正式に認可しろ。後、そこで俺が結婚式を挙げる際、司祭を派遣して欲しい」

結婚式：…考えてくれていたのか…まあ、嫌いじゃ無いから、受けてあげるよ。って、私には彼を選択する余地はあつたのだろうか？婚約者指定を受けても、拒否しなかつた私が悪いのか？

「わかつた。ところでダンジョンコアはどうした？」

「見つからなかつたから、戦闘中に破壊した感じだな」

「そうか…では、その教会にはお主との連絡役である司祭を置くようしよう」

「後、その司祭で今日、コイツとの結婚式を執り行つて欲しい」

ケンが私の腕を掴み、彼の隣に引き寄せた。はあく？今日…結婚式…私との…かあ…と耳が熱くなる。コイツ、その為に私を連れて来たのか？って、私抜きに話を進めすぎじゃ無い？

「良いだろう。その前に、お主ら二人のステータスを確認したい。良いか？」

「ああ、いいぞ」

◇

荘厳な神殿に純白のドレスとベールを身に付けた私がいた。指には指輪が嵌められている。ケンが用意していなかつたので、教皇様が用意してくれた。荘厳すぎて鳥肌が

立っているんですけど……どうしてこうなった。心の準備をする時間がまるで無いのはどういうことだ。

「では、ここに今代の聖者と聖女の婚姻を認めよう」

教皇様が宣言をした。私達を聖者と聖女と認定してしまっただが、良いのだろうか？ 教皇様が私達のステイタスを精査し、吟味した結論だから、正しいのだろうけど。

「お主らは、この世界を存続させることも破滅させることも出来る。それだけのスキル、能力を持ち合わせている。くれぐれも早まった行為はするなよ」

早まった行為って、ケンに言っているのよね？

「ではこれでお二人は夫婦と認定いたします」

司祭様から祝福を受けた。え……はあ。実感がまるで無いんですけど……ええ、夢のよくな時間でした。夢であって欲しいと思う私があった。

「私もこんな感じで結婚式を迎えるのか」

プライドが感慨深く呟いている。プライドを含む4名は、準備万端して、領都の教会で執り行われるのかあ。って、側室4号が最初に結婚って良かったのか？

糸口

——アイリス——

出張から帰ってきたケンの持ち返ったお土産が、途轍も無く重かった。聖シユルルール協和国のトップである教皇と友好条約を締結して帰って来たのだ。その上、領都に建立した教会を教皇自ら認定、聖シユルルール協和国から司祭が駐留することになったと言
う。

王都から母が来たのと言うまでも無い。あの国と友好条約を結ぶのは難しいのだ。なんせ政治に介入はしないと断言している国だから、まさか政治的要素が強い友好条約を、締結するなどあり得ないレベルである。

「ケン：どんな手を使ったの。吐きなさない。いや、吐け！」
母がケンに迫っている。

「いや、俺とセイの認定をさせてあげたお礼だよ」

認定をさせてあげた？

「何の認定……」

恐る恐る訊いてみた。

「今代の聖者と聖女の認定だよ。ステイタスを詳細まで見せたら、認定させてくれって……」

「聖者と聖女……この国の王よりも上位の存在じゃない……」

「ああ、黙っておけばわからないし」

暢気なことを言うケン。事の重大さが分かっていないようだ。

「何を言っているのよ！ 教皇が自ら認定したのでしょ？ それは、全世界に宣言されるわよ」

面倒臭そうな表情の母。

「えっ！ そんな大事に？ あのババア、黙っていろって言ったのに……俺のモブ平民生活は……」

「そんなものは最初から無いの！ だって、アイリスちゃんと結婚するんだからね！ 次期公爵補佐は決定事項だからね」

凹んだケン。詰め寄る母。なんか、面倒事にならないといいなあ。

——アルベルト・ホーク——

あの日、難を逃れたのは所用で王城にいなかった宰相と兄である宮廷魔道師団副師団

長、そして第三騎士団団長の私。あの惨事で幼なじみのヨハン、兄エアハルトの上司であるユーリ・ドレヴェスを亡くした。フリージア王国から統治権を返却され、残った我々で自治を行っている。幸い、王城の敷地に居た者だけが被害に遭っただけで済んだのだった。

「聖シユルール協和国の教皇から宣言が為されたぞ」

宰相であるドミニクが通信室から走ってきた。

「どんな宣言だ？」

教会、神殿、治癒士、聖騎士達のトップである教皇。全世界に広がる教会、神殿、治癒士ギルドのトップである。

「今代の聖者と聖女の婚姻を認めたらそうだ」

聖者と聖女だって…それはセイと聖者との婚姻ってことか…

「じゃ、王城を襲ったのは聖者で、セイを浚ったのか。そして、教皇の前に連れて行き、婚姻を認めさせたと言うことか！」

「まあ、そんな感じだろう。ただ、浚ったのか、どうかはわからない。セイとは交流があつたかもしれない。アルベルト、冷静になれ！セイは今まで我が国のいいなりになるしか無かつた。彼女の行ける場所はここ以外に無かつたのだからな。だが、聖者という選択肢が増えたのだろうか」

異世界から召喚された女性、セイ。王子の不手際で、国に愛想を尽かし、一度は国から出ようと考えていた。

「お前とセイが恋仲だったのは皆知っていた。だが、その聖者が知っていたかはわからない」

だが…俺はセイと…

——セイ——

ケンが私達と教皇の間に行った本来の目的を、後日知る事になった。そう、私との結婚さえもカモフラージュ要素があったのだった。教皇サイドを油断させ、とあるミツシヨンを完遂する為に。

「魔導大国って国が以前あったようです。その国を建国した者が異世界人だったと記されてました」

ケンが教皇の間にあつた書物を総てこっそり錬成コピーし、うちの書庫に蔵書し、マインちゃんとソフィアちゃんに調べさせていた。

「そうなるとその国の研究資料があれば、萌を帰すことが出来るかもしれないなあ」

ケンの本来の目的はソレであつた。私との結婚をダシに大それたことをしでかしていた、この男。目的の為であれば、手段を選ばないタイプなのだろう。

「どこの国が滅ぼしたんだ？」

「周辺の国で今も残っているのは、龍王国とウエザード王国です」

その国に乗り込むつもりなのか？

「場所は？」

「不明ですわねえ」

「ダメじゃん…いや、今まで行ったことの無い大陸とか島かな」

それは難しいのでは？この世界には世界地図なんて物は無い。なので、この星の全体像が分からないのだった。

「オーストラリア大陸に当たる場所とか、ムー大陸に当たる場所は行った事無いなあ」

元いた世界基準で考えている、この男…

「いずれにしろ、行ったことが無い場所には転移出来ないし、目で見える範囲にしか転移出来ないし…そうだ！ついでにセイと新婚旅行をしよう」

また、私を巻き込むつもりか…それもついでとは、嬉しいやら悲しいやら。

「初夜は？」

カタリナに訊かれた。

「まだ…してないわよ」

する気が無いのか、この男は初夜の寝る前に青汁を飲んで、性欲を抑え込んでいた。

まさか、また一気に放出する為に、溜め込んでいるのか？

「そうなるかと船旅かしらね」

って、アイリス。陸地伝いなら短距離転移で移動出来る。それが無理ならば、船での移動になるよね。

「いや、どこかで、グリフォンとかコカトリスとか捕まえて、騎乗するのは？」

無い無い。どこのラノベのチートカップルだ？私には無理だって…

「ああ、それはいい手ですね」

乗る気満々のマイルちゃん。あの…私、一般人なんですよ。

訳あり物件

— ケン —

久しぶりに、冒険者ギルド経由で、ヤーシスから連絡が来た。

『掘り出し物あり』

と…何をサルベージしたんだ？あの奴隷商は…早速、一人でヤーシスの元へ轉移した。

「これ、なんですけど…」

立派な棺の蓋を開けたヤーシス。中にはしなやかそうなブロンドヘアの女性が横たわっていた。死に装束すら着ず、全裸の状態であり、胸元には奴隷紋が刻まれている。

「この奴隷紋は見たこと無いけど？」

「これは犯罪奴隷の奴隷紋です。罪状は国家反逆罪で刑期は10年とあります」

添付資料を読んでいるヤーシス。問題は、この女性、呼吸をしていないこと。死人の割に体温があり、肌には張り艶が残っていることだな。

「呪いも受けているよね？」

「履歴には呪いについては記述がありません。なので所謂訳あり物件かと思えます」

訳ありかあ。

「どこの誰かはわかる?」

「某国の公爵令嬢とあります」

身体をチェックしていく。脈を打ってはいない。未使用なのか、きれいなピンク色である。年齢は20代かな?

「いくら?」

「2000万でいかがですか?」

ヤーススの前に3000万を置いた。

「追加情報を宜しくな」

「はい、わかりました」

◇

領都の教会のモルグに、棺を運び込んだ。屋敷に戻り、マイル、マイン、マリア、セイ、シロ、プライドを連れてきた。

「この方は死んでいるんですか?」

セイに訊かれた。

「うん…分らない。脈は無い、呼吸も無い。だけど、肌に艶と張りがあるんだよ。問題は死んだら奴隷紋は消えるらしい」

なので、死んではいけないのだろう。敢えて言うなら仮死状態とでも言うのかな。

「マイルはナノちゃんどどんな呪いか調べて、マイン、マリア、セイと俺は浄化術や治療術を一通り試してみよう。シロとプライドは、万が一、ゾンビとかリビングデッド化した時に無力化してくれる」

アレコレと試すが、呪いが解けない。心臓の鼓動、呼吸による肋骨の運動も感じられない。

「ああ、これ呪いじゃ無いみたいですよ」

と、マイル。

「彼女の生の時間が止まっただけみたいなの…」

時間経過しないアイテムボックスに入っている感じか？もしかして、この棺がアイテムボックスだとしたら？彼女をお姫様抱っこして、棺から取りだして見た。

「ぷっはあ〜」

呼吸をし始め、脈が弱いながらも打ち始めた。彼女を床の上に下ろして、損傷箇所を修復していき、回復術や浄化を掛けていく。だけど、目覚めない。この奴隷紋のせいかな？

「マイル、この奴隷紋を解析して」

「了解です…：刑期10年永眠の刑のようです」

王子様のキスで目覚めるあれか？眠っている女性にキスを試みるが、目覚めない。
「それはベタすぎるでしょ？」

S

確かに…後は？あつ！懐からポジションを取り出した俺。ソレを見て、みんなが俺から距離を取っていく。

「モルグで、それはテロ攻撃ですよ」

物騒なことを言うマイル。一応回復薬であるけど…臭いがなあ。濃縮度を高めた為、臭いがもの凄いことになっている。回復薬であるのに、嗅いだけで意識が飛びそうになるのだ。モルグは密閉空間だからなあ。

「改良版だよ。剛毛になって刺さることは無い」

「じゃ、みんなで上に上がってますよ」

うちの女性陣がモルグから出て行った。残ってくれたのはシロとプライドだけだ。では。目覚めない女性の口から、改良版を流し込んでいった。

ピクツとした直後、女性の身体がノッキングし始めた。まるでオカルト映画でもみているようだ。身体が臭いを拒絶しているのか？

「リビングデッド化だけはカンベンしてくださいね」

って、プライド。それは俺もカンベンして欲しい。アイツら、ただでさえ息が臭いん

だから…

激突

——オリヴィエ・アルウエイ——

ウエザード王国アルウエイ公爵家の令嬢である。今年で27歳の行き遅れであるが、一応婚約者はいる。敵の罠に嵌まり、敵の手に落ち、恥ずかしい姿を敵に見られ、無理矢理奴隷に墮とされ、売られてしまった。そして、暗い箱の中に入れられ、どこかに運ばれている途中で意識が失せた。

久しぶりの柔らかい感触の寝床で目が醒めた。ここはどこだろうか？ベッドから降りると、何も着ていなかった。ここって、売られた先なのか。いや、奴隷にこんな良いベッドは与えられない。もしかして性奴隷とか、ペット枠なのだろうか？

窓から外の様子を窺う。どこかの貴族街のようで、広めのお屋敷が並んでいた。

「目覚めたか？」

見た目、私よりも若い男性が部屋に入ってきて、私に声を掛けてきた。

「お前の名前は？」

「オリヴィエ・アルウエイです。ウエザード王国のアルウエイ公爵家の長女です」

「何?!ウエザード王国だと。お前のいた国には、魔導大国の情報は残っているか？」

魔導大国？

「大昔に滅んだ国ですよ？たぶん、残っていないと思います」

「そうか。で、ウエザード王国って、どこにあるんだ？」

どこって？うん？

「ここはどこですか？」

「ここはタスマリア王国のアルメリア公爵領の行政区だ」

行政区…この男性は領主なのか？

「タスマリア王国って？それよりも、私をどうするおつもりですか？」

「お前を30000万で買った。それだけの価値を見せてみる」

貨幣価値が分からない。

「私の身体に価値は無いですよ。若くないし」

20代後半だもの…

「身体？女体は間に合っている。俺の欲しているのウエザード王国の情報だ。覚えてい
る情報は全部吐けよ。お前は犯罪奴隷として買い、刑期が10年あるそうだ」

犯罪奴隷ですって…それも10年って…10年働かないと帰国出来ないのか…

「彼女の奴隷紋が完全に外せない。服を着られない呪いつて何？青汁を飲み忘れると危険が一杯な予感だ。20代後半らしいが、そそると言えばそそるような気がする。」

「いいんじゃないの？ケンの奴隷だし、好きにすればさあ」

とカタリナ。

「でも、好きにした後…」

当然、婚約者達を満足させないとダメだろう。青汁を飲んだ上で、満足させる自信がまるで無い。

「当然でしょ？成人している婚約者とセイさんに奉仕してくださいね」

って、アイリス。いや、俺の性欲はそこまでは…無い。婚約者二人、セイと奴隷の4人って、保たない。栄養ドリンク代わりに青汁を飲めないし。どうするかな。

それよりもウエザード王国の場所をどう探すかな。直接行って、古文書の類いを錬成コピーして来ないと、情報が得られそうも無いな。

「あーケンさあくん！教皇様に訊けば分かるのでは？世界的に教会、神殿のネットワークがあるんでしょ？」

◇ マイルの閃き、それは良い案だ。そう言えば、そうだな。よし、善は急げだな。

地理的な問題は解決した。教皇に訊いたら、ウエザード王国の王都にある教会への転

移陣をくれた。今、ソレを使って、王都に來ている。一度來てしまえば、俺とマイルの転移術で何度でも來られる。今回のメンバーは俺、セイ、マイル、シロ、プライドと言ういつものメンバーである。

「まず、どうしますか？ 一気に城を落としますか？」

笑顔で物騒なことを言うマイル。

「先ず、アルウエイ公爵に会おう。で、協力を煽ぐ。拒否されたら、その時にポーシオンを使って逃げるか」

今回のポーシオンは全身に雷撃が走り、心臓の再起動を促す効果があつた。オリヴィエの全身がノックキングしたのも頷ける。

翌日、アルウエイ公爵と会う事が出来た。

「うん？ 娘を奴隷商から買われたのですか？」

「訳あり物件でしたよ。10年刑期の犯罪奴隷として売られてました。なので現状は、返したくても返せません」

犯罪奴隷は転売に次ぐ転売は出来ないらしい。しっかりと懲役を受けさせる為、1箇所に最低1年はお勤めしないとイケないそうだ。

「犯罪奴隷ですと！ なんてことをしてくれただ、アイツらは……」

政敵に嵌められたらしい。

「娘は無事なんですか？」

「まあ……」

「で、あなた様の身分は？」

「俺は平民だけ……」

「「ダウト！」」

何故、味方からダウトされるんだ？解せない。

「おい！オリヴィエ様を返せ」

完全武装した男が突然、俺の目の前に立って、そんな事を言う。

「タダでは返さない。刑期が終わったら、1億で返してやる」

貰えるところからは貰おう。

「何を言っている。今すぐ返せ！」

男はナイフを抜き、俺に襲い掛かってきた。だけどシロに止められ、次の瞬間、今度は魔法攻撃を放ってきた。これはプライドの剣が魔法攻撃自体を斬り裂き、無効化してくれた。

「これが公爵の返事ってことですか？」

「待ってくれ。ジャレッドくん、落ち着きたまえ、ここは私が交渉をする」

「交渉する余地なんか無いですよ。今すぐ力尽くまで返して貰う。どうせ、コイツらもア

イツらと一緒になんでしょう？」

「おい！三下！アイツらつて、ドイツらだ？」

なんか、腹ただしい。ザコと一緒にされた気分である。

「マイル、みんなを連れて帰れ」

「了解！」

俺以外の仲間達が転移して帰っていった。ここが、多分使いどころだろう。『畏怖』を発動した俺。俺の周囲にいたヤツラが、次々と跪いていく。俺に攻撃をしようとした男だけが耐えているよう見える。

「おおおおお〜」

屋根をぶち抜いて、突然ドラゴンが俺を襲ってきた。コイツ、ドラゴンテイマーなのか？聖魔力を左手に集めて、聖剣を錬成していく。

「食らえ！エクスカリバー！」

聖なる斬撃がドラゴンの腹部に穴を開けた。

「まだやるか？次はドラゴンスレイヤーで、殺すぞ」

エクスカリバーをアスカロンに再錬成すると、龍殺しオーラを感じたのか、ドラゴンが逃げていく。

「死ねえ〜！」

今度は目の前から槍が降ってきた。空間を斬り裂いて、別の空間から吐き出す。降ってきた槍は、総てこの城へ向けて放たれていく。

「これでどうだああ〜！」

床が盛り上がり、土の槍が俺に襲い掛かって来た。コイツ土魔法使いか？目の前の空間にブラックホールを発生させ、攻撃を吸い込んで、やっぱり、この城へと排出していく。

「これならどうだああ〜！」

ヤツの周囲の物が石化していく。今度は石化魔法か？状態異常無効持ちの俺に石化攻撃は効かないはず。では、『強奪』で富と情報を奪わせて貰うか。ヤツが俺の懐に入った時点で、転移して帰った。

◇

目の前に金貨や白金貨の山がいくつも出来ていた。古文書は書庫に収めてきた。劣化して傷むと困るから。

「今回も稼いで来たわね」

って、アイリス。別に出稼ぎに行った訳では無い。

「おい！あの石化魔法の遣い手は誰だ？」

オリヴィエに訊いてみた。

「私の婚約者のジャレット・マフィーです」

「そうか。疲れたので抱き枕になってくれ」

と言うだけ言って、その場に倒れた。これって、魔力の使い過ぎによるマインドロストだな。

交渉事

——オリヴィエ・アルウエイ——

私に抱き枕になれと命じた男が、目の前で倒れた。

「マインドロストだわ。あなたの彼氏のせいみたいだから、あなたが癒やして上げてね」
倒れた男をベッドまで運び、彼の隣に置かれた私。

「ケンがマインドロストかあく。敵の戦力は高そうだね」

「で、向こうの言い分は？」

「タダで、直ぐに返せって。無茶ぶりでしょ？」

ジャレットが交渉のテーブルをひっくり返し、武力で私の奪還を目指したらしい。

「まあ、今回稼いで来たからタダでの返却はいいとして、直ぐには無理よね。犯罪奴隷だから、契約後最低1年は所有権を移せないから」

穏便に返却してくれるらしいのだが、今日のジャレットの態度で、方針を変えるのか
もしれない。

「明日、一筆書いて貰います。教会経由であなたの父上に送ります。今回の慰謝料と賠

償金は貰う方向です。大事な事ですが、あなたの任期についても書いてくださいね。後、あなたの現状もね」

服が着られない呪いがキツイ。外出が出来ない。部屋から出られない。家に帰れない……

——マイル——

交渉相手を攫って来た。

「ここはどこだね」

ウエザード王国の国王ホルスト・W・フェアリーガーが狼狽えている。

「ここは聖シユルル協和国の教会本部の会議室ですよ」

コチラの住処の場所を知られる訳には行かない。セイさんが教皇に頼んで、会議室を借りてくれた。

「君は何者かね？」

「このたびの交渉人です」

ケンさんはマインドロストから、未だ目覚めていない。目覚めていない状態で青汁の効果切れ、今猛獣状態でオリヴィエ、ウエンデイに癒やされている最中である。きっと、理性を持って目覚めても、記憶に残らないのだろう。いい思いの記憶が残らないっ

て、不憫だなあ。」

「オリヴィエの返還の件かね？」

「そういうことです。ああ、これは彼女からの手紙です。交渉前にお読みください」

「待て！彼女の父親のアルウエイ公爵では無く、何故、交渉相手が私なんだ？」

「それは、昨日交渉に参った次期王配との話し合いをスルーして、そちらの国民が攻撃を仕掛けた為です。次期王配が襲われたんですから、交渉相手は王様に格上げされて当然でしょ？」

「次期王配だと…どこの国のだ？」

更に狼狽えている王様。

「フリージア王国ですよ」

「フリージア王国…」

顔が青白くなつていく王様。フリージア王国つて戦力と王族への忠誠心が高いと有名らしい。

「言わせて貰うが、彼はここの次期教皇候補でもある」

戦乙女聖騎士隊長のルミナリアさんが口を挟んできた。まあ、聖者だからねえ。候補にはなるかあ。ケンさんの性格、目的の為ならば手段を選ばない行動原理などを教皇が気に入ったようだし。

「ちよつと待つてくれ。フリージア王国の次期王配で、聖シユルール協和国の次期教皇候補だと言うのかね」

私とルミナリアさんが頷いた。実際問題、どちらもケンさんは断ると思うけど、候補は候補であり、次期は次期である。交渉術的には、相手にこちらの立場が上かを知らせる必要がある。

「そんな方を相手に、無礼な振る舞いをしたのか…」

「少し、慰謝料を考えてくださいね」

王様を彼の国の玉間に強制転移させた。今日のお仕事は終了だ。教皇様に付け届けをしておくかな。アイリスさんお手製のチョコの盛り合わせセットを。

——ケン——

うゝここはどこだ。右にウエンデイがいて、左にオリヴィエがいる。

「お目覚めですか？まずは目覚めの一杯をどうぞ」

ウエンデイからジョッキを渡され、一気に飲み干した。

「ああ、マズい」

また性欲が爆発してのか？で、俺の奴隷であるウエンデイとオリヴィエで防波堤を作ったのだろうか？

「どの位、寝ていたんだ？」

「3日くらいです。多少、問題が起きていますが、些細な問題かと思えます」

と、ウエンデイ。どんな問題だ？

俺が眠っている間に、マイルが代わりに交渉をしてくれ、向こうが人質を差し出す方向だと言う。

「奴隷かな？」

「いや、奴隷じゃ人質にならないですよ……うっ！」

急に目の前でオリヴィエが光の渦に飲み込まれていった。青白い魔方陣がオリヴィエを中心にして発現していた。何が起こっているんだ？

「ウエンデイ、マズい事態だ。護衛陣とマイル、セイを呼んできてくれ」

「わかりました」

ウエンデイは急を要する事態だと分かったのか、全裸で部屋から飛び出して行った。目の前のオリヴィエの体内魔力が高まっている。このままではオリヴィエの身体が保たない。どうするかな。

「旦那様……私にはわかりません。ものすごい力が、私の中にあるのです。でもその力がすべて、違う誰かに奪われていく。そんな感覚が……」

憑依か？なら

『強奪』オリヴィエに憑依した者よ」

オリヴィエから何か飛び出し、光の渦と魔方陣が消え去ると同時に、その場に崩れる様に倒れたオリヴィエ。俺の左手には、何かの魂がある。それを鑑定してみると……

「……ああ……ようやくだ。長い長い時間を経て、ようやく私は復活出来る。なのに、何故、貴様はジャマをするのだ？」

何かから情報を読み取り、不要になったソレを『浄化』した

パリン！

俺の手の中で粉々になって消えていくソレ。

「大丈夫？」

セイが走り込んできた。

「マイルに、あの時を止める棺を持って来させて、オリヴィエをぶち込んでおいてくれ」

「どこかに行くの？」

「ちよつと野暮用だよ」

SS：野暮用

— ケン —

「萌、やっと帰す方法が分かったよ」

萌の部屋を訪れた俺。俺の言葉に怪訝な表情を浮かべている。

「帰す？一緒に帰るんじゃないやなくて？」

「ああ、俺は帰れない。俺は…この世界に永住して、骨を埋めるよ」

決心が鈍りそうなので、萌の意識を刈り取った。そして、人里離れた森へ転移して、萌を手に掛け、その魂を手に入れた。

オリヴィエに憑依した者、始祖魔導王で、初めての召喚者から得た情報：誰かの魂に帰りたい者の魂を憑依させて、憑依をした者を死なすことで、魂が元の世界に帰ることが出来るらしい。

だから他人の魂を取り込めるように、転生者、召喚されし者の魂は二重に見えたのだろう。この世界仕様の魂を着た本来の魂。この世界の魂を憑依させた者にあてがい、本来の魂は本来あった世界に戻る。だから、アレはオリヴィエに憑依し、元の世界へ帰ろうとしたのかもしれない。

魂が二重に見える俺は、理不尽に召喚された者や、転生した来た者を本来の世界へと帰還させる為に、この世界に呼ばれたのだろう。もしかすると、ステイタスには表示されない帰還スキルを持っている可能性がある。

萌の器だった肉体を茶毘に付し、その場に墓を作った。萌の墓の隣には、静の骨の入ったロケットを埋め、静の墓を作った。あとは、萌の魂を誰かに憑依させて、葬れば良いだけだ。

オリヴィエに魔方陣を施した人物を探し出す。裏でアレコレと動いていたので、割と簡単に見つかった。そして、魂を憑依させて、その者の生の時間を止め、器を焼却した。これで、帰還できたはずだ。

万が一出来なかつたら、無駄死にかな…

—— 若草萌 ——

「私は身体は興味無いの！彼の知識を借りるだけよ！」
「彼はあなたの猫型ロボットじゃ無いのよ！」

いつもの日常である。彼の元力ノである静との言い合い…あれ？彼って、誰？

「ねえ、彼って、誰？」

「そうねえ。誰だったかしら？」

静にも分からないようだ。まさか、エアー彼氏を巡って言い合い？それも日常的に：私達病んでいないか？

「静の元カレって誰？」

「いないわよ。どこかにいい男はいないかしら」

いたら、私も欲しい。

その時からだ。心に何かぼつかりと穴が開いた感覚を感じたのは。それは、帰宅後も感じていた。何かを忘れている感覚もある。大切に、大事な事：

◇

帰宅し、お風呂に：衣服を脱衣していると、見慣れないロケットを持つている事に気が付いた。ロケットの中には何も入っていない。これって、誰にもらったんだっけ？

入浴後、自分の部屋に戻る。なんか懐かしい気分になる。なんでだろうか？毎日いるのに：ふと、日記帳が目に入り、パラパラとめくっていると、伏せ字の箇所が何か所もあることに気づいた。誰かがマジックで塗りつぶしたというより、そこだけ黒で印刷されている感じだ。

『●●から告白を受けた。もちろんオーケーした』

誰かの名前のようだ。誰かに告白って、されつつたっけ？思い出せないのです、告白を受けたらしい日付のスマホの予定表を確認してみた。

『1500ケンと待ち合わせ 体育館裏』

とある。ケン？誰だっけ？記憶の引き出しを片っ端から開けていくように、思い出していく。と…

走馬灯のようにカレとの記憶が脳裏に浮かび上がっては消えていく。嬉しかったこと、楽しかったこと、悲しかったこと、辛かったこと…なんで忘れていたのか？思い出せもしないなんて。私って、若年性健忘症かな

そうだ！ケンに連絡を試みよう。将来、介護してもらおう約束を取り付けよう。

『お客様がおかけになった番号は、電波の届かないところにあります』

どこかに道草でもしているのか？メッセージアプリでお願いを送っておくか。

3章 問題解決の為の異世界行

指名依頼

——ケン——

野暮用を終えて戻ると、棺の中にオリヴィエがいた。

「これ、どんな状態なんですか？」

マイルに訊かれた。

「たぶん、マインと同じ身食いなんだと思う。ただ、誰かがオリヴィエに魔力の増加を抑える封印を施し、ある時期になると、その封印が解かれ、何かを身体にリロードする魔方阵も発動するようにしたようだ」

「何かって？」

「称号に『始祖魔王を葬り去った者』ってあったから、始祖魔王なんじゃ無いか？魔王って言っても悪魔王で無く、推測だけど、魔導大国を建国した最初の異世界人である魔導王のことだと思う」

アレから読み取った情報だから、推測でなくて事実である。オリヴィエは始祖の血筋で、保有魔力も膨大になる器であった。だから、依り代に選ばれたのだ。

「どうするの?」

「リミツタを外されたから、マインよりも急激に身体にダメージが入りそうだな。うん、青汁につけ込んでみるか? いや、青汁のお風呂に漬け込むというか。青汁なら最大MPを増加させてくれるし、身体へのダメージも自動回復してくれそうだよな?」

確信は無いが魔力を馴染ませるには良さそうな気がする。濃縮すればエリクサーになるんだし。

マイルの土魔法でモルグに湯船を作って貰い、その間、俺は冒険者ギルド本部で青汁をいつもの3倍ほど買い込み、モルグに戻った。湯船にオリヴィエを置き、首から上が潜らないように固定してから、湯船に青汁を並々と注いだ。これで大丈夫か?

◇

俺が一人になった瞬間、セイが俺に詰め寄って来た。

「ねえ、萌ちゃんをどうしたの?」

「帰したよ。方法がわかったから、萌を帰すことにした」

「なんで言ってくれなかつたんですか? お別れくらいしたかつたよ」

涙を蓄えた瞳で俺を見るセイ。

「帰還方法がちよつと問題があつて、みんなには見せられなかつた。誰かの魂に帰りたい者の魂を憑依させて、憑依をした者を死なすことで、魂が元の世界に帰ることが出来

るらしい。だから他人の魂を取り込めるように、転生者、召喚されし者の魂は二重に見えたのだろう。この世界仕様の魂を着た本来の魂。この世界の魂を憑依させた者にあてがい、本来の魂は本来あつた世界に戻る。だから、アレはオリヴィエに憑依し、元の世界へ帰ろうとしたのかもしれない」

「その理論だと、ケン、あなたは…」

俺は俺の手で大切な存在である萌を殺し、その魂を憑依させた者を殺した。俺の手は血で汚れている。まあ、今更であるが…

「一人で背負わなくていいんだよ」

セイが俺を優しく抱き締めた。

『浄化』

俺を浄化するセイ。しかし、血にまみれた俺は聖属性の『浄化』では効果は無い。魔が差したのでは無く、闇に堕ちたのだから。

「ねっ。私達は夫婦なんだから…」

こんな俺の為に、涙をこぼしてくれたセイ。それだけで、俺の心は少し救われた気がした。

オリヴィエの婚約者の横暴により、私が人質となり、抗争相手に引き渡されることになった。当初、カサンドラ・ハーゲンドルフ公爵が人質候補であったが、神隠しにあつたのか、消息不明になったことで、私にお鉢が回ってきたのだ。

「いいか？ 相手は、我が国よりも強大な組織である。その事を肝に刻み、我が国を護る為に出来る事をしてくれ」

つて、国王様のお言葉…なんで、オリヴィエの婚約者の尻拭いをしないとイケないの？ 沸々とアレコレ考えている間に、目隠しをされ抗争相手に引き渡された。

一瞬、浮遊感を感じると、懐かしい声が聞こえてきた。

「ヴェロニカ…なんで、あなたが旦那様の婚約者になったの？」

オリヴィエの声だ。あれ？ ここはどこ？ 自宅である王宮にいたはずだけど…目隠しを外されると、目の前に異民族の服装を着たオリヴィエがいた。

「()は？」

「旦那様のお屋敷です」

旦那様？ オリヴィエの？ あれ？ それって、ジャレット・マーフィーじゃないの？

「オリヴィエ、人質って婚約者にする者なのか？」

「貴族、王族の場合はそうですよ」

「俺、平民だよ」

はい？オリヴィエの旦那様って、平民なの？

「平民はダウトですよ。少なくとも教皇候補ではあるでしょ？」

女の子がオリヴィエの旦那？に言い聞かせるように言葉を投げつけていた。

「うーん、セイが教皇候補でいいじゃないか。俺は平民つてことで…」

「はあ、諦めが悪いようですね。次期王配と次期公爵補佐からは逃げられないでしょう？」

何者だ、この男…

——ケン——

最近、婚約者が増えている気がする。オリヴィエも俺の婚約者になると言う。マインと同じ身食い発症者の為、完治するまで、俺の傍にいないといけないのだった。それが刑期より長くなる可能性もあるし。それ以前に完治するのだろうか？まだマインも完治していないぞ。その結果、オリヴィエの父親と極秘理に相談をし、そのような決定になったのだった。

ヴェロニカの方は、ウエザード王国からの誠意ある慰謝料代わりと言うが、オリヴィエよりも歳上らしい。訳あり令嬢だけでなく、難あり令嬢すら集まって来ているのはどういうことだ。別に曰く付きの令嬢が好みつてことでは無いんだけど、誤解をされてい

ないか？

そうそうオリヴィエの服が着られない問題は解決した。肌襦袢なら羽織れた。肌襦袢に限らず和装ならオーケーらしいが、俺の好みの問題で肌襦袢を羽織って貰っている。この世界の理では衣服は洋服であって、和装は洋服では無いってことらしい。

萌のことは、セイがみんなに話してしまった。それによって、何かが変わるって事も無く、今日も平常運転であるけど……セイとは彼女の要望で、二人でお墓参りをしてある。平和で穏やかな日……萌は無事に帰れただろうか？そんなことを考えていると、隼人經由で冒険者ギルド本部からの連絡が届いた。いつものメンバーで本部へと向かった。

本部には大人しそうな女性が待っていた。俺が着くと、ギルマスが目配せをし、一通の書状を俺に手渡して来た。

『問題が解決するまで預かってくれ エルグランド王国クレスター伯爵家』と……エルグランド王国ってどこだ？知らない貴族からのクエスト。面倒なことに巻き込まれそう
だ。

「これ、どういうこと？」

ギルマスに訊いた。

「どこかでお前の噂を聞いて、お前に預ければ安全と判断したようだぞ」

どう安全なんだ？青汁を飲み忘れると野獣になるらしいんだけど……

「クレスター伯の話では、国王の指名で、そのお嬢様を後宮に差し出せって、命令が来たそうさ。クレスター伯的には、お嬢様を後宮に上げたく無いそうさ」

いや好き好んで後宮に娘を上げる親はいないだろう。居るとすれば、娘は政治の駒だと錯覚している貴族くらいだろう。

「俺、後宮は嫌いなんだけど…」

「最適な人選だろ？お前なら、後宮から護り切れると踏んでいるのだろう」

「報酬は？」

ギルマスの視線がお嬢様に向いた。マジかあ。婚約者にしろって？俺、婚約者コレクターで無いぞ。

再開発計画

——ダイアナ・クレスター——

我が家は代々、悪人顔の家系である。そのせいで、『王国を裏から支配する、悪の帝王家系』と思われていて、長女の私ですら『社交界きつての悪女』と言われている。そんな私に、正義を志す若き国王、ジューク・ド・レイル・エルグランドから一通の通達が届いた。

『名付きの上級側室として後宮入りせよ』

と…悪女である私を後宮に入れて、どうにかしようと言うのだろうか？拷問責め？それとも見世物にするのか？不安ばかりが先走る。そんな私に父が救いの手を差し伸べてくれた。

「海外留学中で、直ぐには対応出来ないことにする。お前は冒険者ギルドへ自ら向かい、ケンという冒険者に保護して貰え」

1 通の書状を渡され、私付きのメイドであるリタと共に、馬車に乗せられ、裏口から旅立った。

◇

「報酬は？」

ケンと言う冒険者がギルドマスターに訊いた。ギルドマスターは視線で私を指している。つまりは後宮より、この冒険者の妻か愛人になれば、安全ということなのだろうか？

彼に引き渡されてから驚きの連続である。遣い手の少ない転移術を使い、一瞬で知らない国に転移していた。

「ここはタスマリア国アルメリア公爵領だ。たぶん、知らない国だろ？俺もお前の住んでいた国を知らないし」

着いた場所は見ただ事の無い様式のお屋敷だった。冒険者つて、お屋敷に住めるんだと感心したり。

「まずは、ここでの暮らしに慣れる。基本、働かないヤツに飯は無いからな」

彼は冒険で身を立てているのでは無かった。商会を持ち、自ら運営し、この公爵領の統治に尽力していた。この人は何者なんだ？

——ケン——

「今度の子も訳ありなの？」

「後宮逃れで俺に預けるって。知らない貴族なんだけど…」

受け取った書状をアイリスに見せる。

「ああ、クレスター伯かあ。そこなら、お爺様が知っていたはずだ」

アイリスの祖父の知り合いみたいだ。そうなると、戦闘バカ系か？

「報酬が娘自体なんだけど…」

「貴族ルールだとそういうものよ。娘は政治の駒であり、宝でもあるんだから。娘を報酬に出すって、一番の宝を差し出すのに等しい行為なのよ」

って、アイリス。

「だけど…」

本末転倒だろうに。後宮逃れで、俺の嫁って…俺は金庫では無い。記憶に残っていないが、青汁がないと理性の無い野獣になるって話だし。

「ケンには理解出来ないと思うけど、返却は争いの元。貰っておきなさい」
貴族ルールは未だに馴染めない。どうするか。

◇

領都の再開発計画の第二弾に頭を悩ませる。

「領都に隣接するエリアをもらっていいか？」

アイリスにお伺いを立てておく。

「いいですけど、何をされるんですか？」

「戦力増強の為の誘致だよ。冒険者ギルド本部、錬金術師ギルド本部、商業ギルド本部を、この地に引っ越して貰うのさ」

各ギルド本部のある領地に戦争を仕掛けるバカは少ないはずだ。領都には教皇の認定教会もあるし。冒険者と聖騎士を敵に回すバカがいるとも思えない。いとすれば、この国の第二王子くらいだろう。

「勝算はあるの？」

「錬金術師ギルド本部と冒険者ギルド本部は、既に内定済みだよ」

引っ越しは、建物ごと転移させる約束である。身食いが二人に、魔力底なしが二人いるので、魔力的には問題は無い。俺が発現させる魔方陣に魔力を叩き込んで貰えば、手間無しである。

「それぞれのギルマスに、乾燥機能付き温水洗浄便座のプレゼンをしたんだよ。そうしたら、見事喰い付いたと言うか」

「ああ……この世界に於いて、欲しい魔導具第一位商品よねえ。さすが、商業ギルドランクAの商会会頭だわ」

嬉しそうな顔のアイリス。喜んで貰えたので、良しにしておこう。

それぞれのギルド建屋の図面を見て、引っ越し先に印を付け、下水道工事を行ってお

く。それぞれ地下1階は倉庫として使うらしいので、地下2階に浄化槽を設置して、そのまま下水道に流すように設計をして、マイルの土魔法で基礎部分の建築を行って貰った。魔物の腸で作ったパイプは気持ちが悪いつてことで、鉄筋コンクリートの配管に変えた。錬成術で工夫したら出来たので、そのまま採用されたのだ。勿論、今まで設置した分も交換済みである。

「今度から青汁は、自領で買えるんですね」

今まで、冒険者ギルド自体が無かったから、これで近場で買える。俺でなくても買える。

「そうなるな」

「毎朝、ギルド本部で飲んでくださいね」

日課にすれば飲み忘れも減るかあ。

蹂躪

——ディーン——

久しぶりにアイリスの元を訪ねたのだが：なんで、ここに冒険者ギルド本部、錬金術師ギルド本部、商業ギルド本部が移転しているんだ？領都と行政区を繋ぐ道沿いに並んでいた。王都よりも利便性が良い気がする。街中では無いので、それぞれが割と広めの敷地となり、建屋同士が隣接していても、圧迫感が無いのが良い。

行政区も様変わりしていた。見事なお屋敷街に変貌していた。真新しい建物が目に入った。植物の研究所か？温室が幾つも並んでいるし。ますます王都よりも王都らしく変貌していくな。

「こんにちわ」

アイリスの執務室へ入っていた。

「あら、ディーン。久しぶりね」

アイリスの表情は少女のものから、大人の女性のものに変貌していた。何があったんだ？まさか、建国記念パーティーの事件で、心が壊れたのか？

「どう？ 街の変貌ぶりは」

「驚きました」

前回の訪問から半年くらいで、こうも変貌するだろうか？ 領都の堅牢さは王都よりも固そうである。各ギルド本部があることにより、ここにケンカを売るバカはいなくなつただろう。一番の驚きは、領都に教皇公認の教会があることだろうか。王都にすら無いのに：まあ、王都には国教の教皇公認の協会があるけど。我が国だけの宗教な為、そんなに威厳は無いし、国教の教皇は不正に塗れているし、碌な者では無い。

「後、貨幣の改革もしましたのよ」

私の目の前に紙の貨幣が置かれた。

「これ、ここの領内では使えませんが、これが金貨の代わりになるんですの」

偽造防止の為か、透かしが入っているようだ。こんな高度な紙製造技術があるのか。

「紙幣専門の紙すき工場や、印刷工場もあるんです」

これではどつちが王都か分からない。ここには世界中に展開している二大商会の本拠地もあるし。

「まだまだ、発展させます。領民達が平和に暮らせるようにね」

アイリスの野望は広がりを見せているようだった。こんな豊かで将来性のある領地では、第二王子が手を出しそうだ。無理矢理無謀な命令を下しそうで、心配である。

——ケン——

頭の弱い第二王子が領地を寄越せと言ってきた。何をバカなことを言っているんだ？ 渡さないと、国家反逆罪に問う言う。

「自分の直轄地にしたいみたい」

アイリスは相手にしない方向である。いや、努力の末に領地が潤ったのに、王家が取り上げるって、あり得ないだろうに。この国では当たり前のことなのか？

「攻めて来たら、返り討ちにしよう」

そんなことを考えていたが、宣戦布告も無しにいきなり、第二王子を担ぎ上げる貴族達が兵を率いて攻めてきた。プライド、マイルのラスボス2TOPがいるのに、コイツらアホか？ 更に、聖女と認定聖者もいるし、身食いが二人いるのだ。第二王子はバカに違い無い。

「なんか失礼なことを思いましたか？」

マイルが俺の心を読んだのか、妙なことを言う。

「いや、思っていない。妥当線を想像しただけだよ」

俺は後方支援に徹する。攻めてきた敵軍の後方で、『強奪』しまくっている。武器、防具、魔導具や、攻めてきた貴族達の本邸から金、宝飾品などを情け容赦なく頂いていく。

所謂、戦利品であり、窃盗行為では無い。

「エゲツ無いなあ。補給路を断つよりエゲツ無いですよ。逃げ帰った先に安らぎすら残さないなんて」

つて、セイ。俺が敵領地で強奪三昧して居る間、マリア、マイン、オリヴィエと共に、敵領地にて平民達へ治療祭りをしている。ガードはチーム隼人である。欲深いヤツラは街中にいないので、隼人達は暇で、子供のお守りをしているし。

◇

短期決戦となった。相手の補給物資は、総て自領に強制転移させたので、半年ほど籠城しても大丈夫なくらい、潤っているアルメリア公爵領。

敵の大将の第二王子は、戦乱に乗じて行方不明に：アイリスを虐めていた第二王子の婚約者は、オークの群れに襲われて見るも無惨な姿に：意味の無い内乱は、呆気なく終わった。

戦後、処理が楽しみである。勝てば官軍だよなあ。問題は相手に、払うだけの財力が残っているかだな。

—— アイーリヤ・フォン・タスメリア ——

あの出来損ないの第二王子が、急激に発展をしているアイリスの領地を奪い取ろうと

動いた。第二王子と共に第二王子派閥の貴族達も決起し、戦力差的に第二王子が負ける訳が無いと思つたのか、勝ち馬に乗るべく中立派閥までも決起に参加した。

『一人勝ちの領地は許せない』

と…あそこは努力を重ねて、潤つた領地なのに、それに気づかぬ愚かな貴族達。仮に勝ち取つたとして、維持管理できるはずも無く…本当に愚かな者どもである。

結果は圧倒的な戦力差があるはずだったが、第二王子軍は一つの領地に負けた。大敗であつた。戦力差なんか無にするほど、情け容赦の無い戦略、一騎当千の側近達。群V S個で個が勝つてしまう理不尽さ。

「領内にすら入れなかつたそうですよ」

戦にもならなかつた蹂躪劇を見てきたアルフレッドが語つた。

「領地境に結界が張り巡らされ、アルメリア公爵領に害意、悪意、殺意を持つ者は、アルメリア公爵領の領内に入れられないようになっていました」

「そんな広い範囲の結界なんて可能なんですか？」

第一王子派閥の貴族が訊いた。

「可能です。大容量の魔力持ちが、5名以上確認されています」

聖者、聖女、身食いが二人に、メルリスが目を付けた二人…そこに勇者パーティーま
でいた。桁違いの戦力である。

「敵対したら、この国は存続出来ないでしょう」

第一王子ががつくりと肩を落とした。狙っていたアイリスに、付けいる隙が無かつたらしい。

「反乱軍に戦勝したあの領地に褒賞を出そうと思います。絶え間ない努力の末、あのよ
うな豊かで強い領地にした褒美です」

愚か者の第二王子達を反乱軍と位置づけた第一王子。これで、愚かな貴族が減り、多
少は国政もよくなるだろうが：

——ケン——

ここにケンカを売った隣接する貴族達の領地は、この地に併合されることになった。
「領地が広くなつた分、色々面倒ねえ」

アイリスは不満顔である。

「行政区だけ引つ越すか？どこか、ノンビリ出来そうな土地にさあ」
「魅力的な提案だけど、現実的じゃないわね」

俺に笑顔を向けてきたアイリス。

「領民を捨てて行くことは出来ない。私達だけ、苦勞を捨てることは出来ないわ」
アイリスらしい回答である。

「じゃ、俺は俺らしく、傍にいるよ」

「うん。これからもよろしくね、あなた…」

今日だけは平和を満喫するか。問題はまだまだ山積みだし。

戦後補償

——ケン——

戦後補償……しかし王国には払えるだけの財力が無いらしい。敗戦した参加貴族達に、殆ど財がないそうさ。そこで打診されたのが、タスマリア国からアルメリア公爵領の独立である。独立の際、治める領主を排除した上で、隣接する敗戦した領地もくれるという。アルメリア公国誕生である。タスマリア国の属国であるが、税収は独立採算制で良いそうさ。

「はあく、また治める面積が増えたわね」

ため息を吐くアイリス。だけど、どこか嬉しそうである。王都にあるアルメリア公爵邸は、今後大使館扱いになるそうさ。

「我が国も治めて貰えませんか？」

トワイル国の商人デイヴァンが相乗りを狙っているようだ。こいつ現場が大好きな諜報員であり、国を取り仕切ることには好きでは無いようだ。

「編入すれば、ジャガイモとトマトの生産地だし、Win-Winで、救える命は多くな

るだろうな」

荒れた国土であり、農地改革に力を入れずに、戦力拡大路線を突き進む上層部達。国民に麻薬を与え、ドラムカー状態にして無理矢理バーサーカーという戦力に仕立てあげると、褒められた治政をしていない。

「余力があれば…増援が出せるまでティヴァンがコントロールしてくれ。サポートはしていくから」

「約束だからな」

渋々了承して去って行くティヴァン。あの国まで領土にすると、隣国はカタリナが住んでいた、あの国になる。

「ねえ、ソルシエ王国を落とさない？」

地図を見ていたカタリナが悪そうな笑顔を浮かべ言った。流石、元悪役令嬢、堂に入った表情である。

「あのドS腹黒王子を王子の座から引きずり下ろしたいの。城に監禁して、国外追放だなんて、ドS過ぎるでしょ？」

悪役令嬢顔で甘えた声…ギャップがありすぎて、背筋に冷たいものが…

「落とすだけなら簡単だけど…その後はどうする？人材が足り無いぞ」

「うーん…」

カタリナの私情も大切だが、事後処理の問題が大きすぎる。今更、カタリナ、ニコルの両親を戻すことも出来ない。この国に必要な人材であるから。

「人材育成が先だ。落とすのはいつでも出来る」

「人材の育成かあゝ」

「高校卒業する人材待ちだ。卒業生で、公国に仕える気があるヤツは、代官補佐を経験してもらって、代官にする予定だから」

この国では読み書きソロバンまでは義務教育である。高等教育を受けた者なら、ヤル気と経験と忠誠心があれば、代官くらいは出来るだろう。他国の代官、領主ってレベルが低いし。

そんなお気楽な考えをしていたのだが、事態は急変する。ソルシエ王国の第三王子が国王になり、第一、第二王子と側近を排除した挙げ句、『カタリナを返せ』と、攻め込んで来た。この国に悪意を持っていないヤツは弾けない為、カタリナ探しのスパイの出入りは自由だった為で、カタリナの存在が見つかつたようだ。しかし、ソルシエ王国の軍勢は結界に弾かれ、ダメージを受けている。内乱後のせいなのか、軍勢自体も小規模である。「そちらの宣戦布告は受理した。さて、戦後の補償だが、前王：アンタだよ、アンタ！前王が王に復帰して、国内を安定させること」

第三王子を捕獲して、ソルシエ王国の王城で前王と交渉を始めた。それは開戦5分後

のことである。なんで、この大陸の王子はバカばかりなんだ？相手の戦力を考え無いか？

「第三王子は国外、いや大陸から追放だ」

大陸から追放すれば、カタリナへの害は少ないだろう。転移術無しでは、ここまでの移動が困難なプライドの国辺りに平民として捨てて来るかな。

「あと、この国は、アルメリア公国の傘下にする。 taxation の 2 割を徴収する。こちらで人材の育成が済み次第、この国の改革をする。それまで王族で国内の安定を図ってくれ給え」

戦勝国なので、上から目線で言い放しておく。頼むから、アイリスの負担は増やさないでくれよ。

——アラン・ステイアート——

住み着いたアルメリア公爵領がいつの間にかアルメリア公国として独立国家になっていた。

「流石はケンさんですね。スマートな方法で領地を拡大していますよ」

事情通の隼人が教えてくれた。祖国ソルシエ王国がこの国に宣戦布告し、俺達国民の知らない間に戦争は終結し、この国の一部となっていた。

「いつ、戦争が行われたんだ？」

「ついこの間ですよ。まあ、開戦後5分程度でケリが着きましたが」

5分で戦争が終わったのか？ どんだけ弱いんだ、ソルシエ王国って…

「王位争いで国内が疲弊しているのに、王位に就いた元第三王子が、元婚約者を奪う為に、宣戦布告したそうですよ」

元第三王子って、ジオルドか？ アイツが王位に就いたのか。で、元婚約者って…カタリナか？

「なあ、隼人。カタリナ・クラエスはこの国にいるのか？」

「何を言っているんですか？ この国の農業担当大臣ですよ、カタリナさんは」

はあく！ この国の大臣なのか…まさか、国外追放されて、この国に亡命したのだろうか？

「この国は世界一安全な国家で、戦力も最強クラスですよ、きつと」

えっ！ こんなにも長閑な国が、戦力が最強クラスなのか？

「この国の軍隊なんか見た事はないぞ」

「この国に軍隊は無いです。徴兵制度もありません。個々の力がバケモノクラスですからね。ああ、僕も有事の際は、戦力の一つですし、冒険者達も味方ですからね」

冒険者ギルド本部がある恩恵か？

「勇者なのに、一つの国に肩入れしていいのか？」

「問題無いですよ。だって、聖女、聖者すらこの国の戦力ですし、勇者レベルの者は僕だけで無いですよ。実際、僕でさえ敵対はしたくない戦力ですもの」

おい…隼人すら戦いたくない相手にケンカを売ったのか？なあ、ジオルドよ…

理不尽な追放

——コゼット・エーデルワイス——

「アタシ？アタシはアンジェ。この世界の主人公よ!!」

知らない少女が、私の大切なお花畑の真ん中で、宣言をした。誰？この子…

「そうですよ、アンジェ様とおっしゃるのね。ところでお伺いしたいのですが、この花畑は当家の私有地でございますの。本日はお茶会を催していたのですが、招待客の中にアンジェ様というお名前は無かったように思うのですが……」

私からの問い掛け

「招待状なんて知らないわ。アタシ……私は、ここでイベント……じゃない。花を摘みに来たんだもの！病弱なお母さまのための花をね！」

不敵な笑みを浮かべて、お花畑を舞台にして、まるで花形女優のように周囲に向けて言い切った。私の大切なお花畑が踏み荒らされていく。イベント？私のお花畑を蹂躪するイベントって何？こんな展開は悲しすぎる…涙が零れていく。

「花を摘みに来ていただけなのに！なっ、な、なにをなさるんですか！」

そう言いながら、お花畑にボディープレスをする少女。ああ、私のお花畑が…丹精

を込めて育てた花々が：無惨にも潰れている。何の罰ゲームなのよ！

「なにをしている!!」

いきなり私の胸ぐらが掴まれ：突然のことで放心していると、

「なにをしていると聞いているのだ！言え無いことをしているのか?!」

更に私に怒声をぶつけて来た王太子殿下。まさか、王太子殿下のお連れ様とか？それでも招待状が無いので、マナー違反ですよ。なんて王太子殿下に言え無い。

「私はお花を摘んでいたのです。病気のお母さまのためのお花を……そうしたら、この方が……」

私を指差し、事実無根なことを言う少女。私は何もしていない。問い掛けただけである。寧ろ、貴族の私有地に、それも私のお茶会で私が丹精込めて育てたお花畑に無断で入って来たあの少女の頭がおかしいと思う。

「花を摘んでいただけのアンジェに暴力を振るうなんて、それでも、伯爵令嬢か！君には失望した！帰ってくれたまえ！もう二度と戻って来るなよ!!」

門の外へと放り出された私。帰って……ここは私の家なのに：理不尽過ぎる。家に戻ろうにも、王太子殿下の取り巻き達に追い立てられ、森の中へと逃げ込んだ。どうしよう……家にもう帰れない。

——ケン——

日課にしているお散歩中である。マイルの脳内マップの空白を埋める為、短距離転移で未だ訪れていない地域を転移している。そんな時、どこかの森の中で、転生者を発見した。凄い重量級の令嬢ぽいが、森の中を移動する服装で無いのが妙である。

「敵がいるかもしれない。探査をしておいて」

マイルが黙って頷いた。

「こんな森の中でどうしたんだ？」

どこかで見覚えのあるキャラに見える。その上、魂が二重に見えているし。ええっと……確か……そうだ！『エンジエリック！恋の令嬢勝ち抜き戦！』の悪役令嬢の取り巻きBだったか。

「取り巻きBさんでしょ？」

「あなたも転生者？」

そう言い残し、取り巻きBさんが崩れる様にして倒れた。どうしようかな。放置は出来ないよな。転生者なら人材になるかな。うん、ダイエットはして貰おうか。

——コゼット・エーデルワイス——

転生者の男子に見つけて貰えた瞬間、走馬灯のように前世の記憶が脳裏に浮かんだ。

そうだ、前世では娘がいるオバチャンだった。そうだわ、あのアンジェって、娘の嵌まっていた乙女ゲーの主人公で……ここって、ゲームの世界なのかしら？

走馬灯を見ているうちに意識がブラックアウトし、気づいたら知らない部屋のベッドで寝ていた。

「……は？」

「ここは、アルメリア公国の公爵補佐のお屋敷です」

ああ、この人見たことがある。娘の嵌まったゲームのラスボスだわ。じゃ……

「あなたも転生者？」

「そうです。『きみひか』のプライド・ロイヤル・アイビーと申します」

そう、『きみひか』……正式名称は『君と一筋の光を』だわ。

「わたしはコゼット・エーデルワイス。アルトリア王国、エーデルワイス伯爵家の娘です」

「アルトリア？どこにあるのかしら」

どこに？って、アルメリア公国って、どこ？

「ここってどこですか？」

「アルメリア公国の公都だけど……日本の知識で言えば、ここは北米、あなたがいたのは欧州って言えば、大体の位置が分かるかな？」

私に声を掛けてくれた男子が部屋に入ってきて、教えてくれた。アメリカとフランス？それは遠い…へえ？もう帰れない距離じゃないの？一体、旅費はいくら位掛かるのやら…

「あなたの選択肢は一択よ。ダイエットをして領主補佐をして貰います。これ、決定事項だからね」

ラスボスが凄んだ顔で迫って来た。イヤと言え無い雰囲気であるが、実際問題、帰る当てが無さそうである。

「ダイエット？」

「そんな体形じゃ、仕事に支障が出るからね」

うくん…ダイエット…なんで、こんな体形になっていたの、私？

死の森

——ケン——

今回の拾い者は大当たりの予感がする。転生前年齢で言えば、最年長クラスの上、出産経験者である。経験豊富な転生者は大歓迎である。

「順調にダイエツトしているみたいよ」

と、アイリス。現在、コゼットは食事制限付きのブートキャンプをしている。講師は鬼のアイリス母だ。剣士組を鍛えて貰っているのです、ついでのお仕事を頼んだら、心良く引き受けてくれた。コゼットはアイリス母に任せて、今日も散歩をしてくるか。

コゼットを拾った場所から、マイルの脳内マップの空白領域を埋める様に、短距離転移を繰り返していく。

「あつー山脈に囲まれた領域がありますよ」

マイルが広域マップで、面白そうな領域を見つけたようだ。

「エリア名称は『死の森』って出ていますけど…」

「そこへ行ってみよう」

マイルの転移術で、死の森へと向かった。そこはその名の通り、森であった。手付かず、魔物の気配しかない、原生林のような森。マイル、プライド、シロが楽しそうに狩りをしている。

「この大きな巨木がランドマークかな？」

マイルによると、死の森の中心部分には巨木が生えていた。

「そうなんじゃ無いの？」

セイは植生に興味を持っているのか、何の変哲も無い巨木には興味が無いようだ。

「この樹木って、見た事の無い種類よね」

固い。剣で叩くと、金属のような音がする。地面も固い。樹木の根が固いのだろう

か。地面の固い部分を錬成して、家の柱を作っていく。頑丈な柱が出来た。

「ねえ、ここに家を作るの？」

「山脈に囲まれていて、魔物しかいないんだろ？安全そうじゃないか」

幸い、錬成術で、この樹木、地面を加工出来そうであるし。

「ブートキャンプとか冒険者育成とか用途がありそうだろ？」

「うん…、アイリスには内緒？」

「セイとの新居？」

「アイリスとは別居？」

「じゃ、別荘では？」

実際問題として、アルメリア公国では、戦闘訓練が出来ない。魔物がいない、ダンジョンが無いなど、冒険者の育成には向かない上、新たな食材の入手が難しい。ここなら、オークを繁殖しても問題が少ない気がする。オークは登山をしないだろうから、周囲に迷惑を掛けることなく、オーク、いやミノタウロスなんかでも良い。贅沢を言えば、牛、ブタ、鶏であるな。

「マイル！水源は無いか？川とか、湧き水、池とか」

「ええ〜と…あります。あつちです」

川があつた。川から水路を引いて、巨木近くにため池を作つた。

「ここ、土魔法じゃ開墾できませんよ〜」

マイルの悲鳴。俺の錬成術で加工するからいいや。

「畑をつくるには、どこまで掘れば良いんだ？」

錬成は単一物質の状態変化であり、表面の固い物質は加工し放題であるので、普通の土壌に行き着くまで、家のパーツを錬成して作りながら、掘り進んでいく。で、3メートルほど掘ると、水が湧いてきた。井戸にするかな。

「この固い地面って、あの樹木の根っこが絡み合った物みたいですよ」

地質を鑑定してくれたマイル。

「畑になりそうか？」

「この固い部分の下は、普通の土壌みたいですよ」

じゃ、家のパーツを錬成しまくって、普通の土壌まで掘るか。

「セイ、植物はあつたか？」

「こんな固い地面で植物は生えないって……この木って、何かしら？」

マイルの鑑定によると『謎の樹木』と出たそうだ。チーターのマイルにも分からない樹木……謎である。

「マイル、普通の土壌部分の工事を頼む。浄化槽を埋めて、水洗トイレの設置と、風呂の設置をしたい」

「12畳くらいの開けた土地を作ってください」

チーター揃いの俺達でも、ここの開拓が難儀である。他の者が手を出さない理由はそれか？

「あつ！ケンさん、この材質でサイディングボードを作れば、アイリス邸がより堅固になりそうですよ」

マイルのエアーカーター、俺のエクスプロージョンでも傷つかない建材……並の兵器、魔法に対して無敵感を感じる新素材である。それ、採用だな。ここに来る理由にもなる

し。

◇

今日、見つけた場所の報告を帰宅後、アイリス達にした。

「無敵の建材：確かに僕の剣技でもキズ一つ付きませんでした」

隼人があの建材を手にとって、調べていた。勇者の剣技で傷つかないって、どんだけ丈夫なんだ？

「問題は地表が硬いってこと。土魔法、木魔法などで加工も出来ない。現在分かっているのは、俺の錬成術だけだ」

「3メートル掘っただけで、水が湧いたことから、水はけも問題ありますね」

「水の湧いた普通の土壌は、土魔法で加工が出来た。湧き水も治水池を作って対処をする。いざとなれば、アイテムボックスに保管すれば良いし」

「領内の再開発計画はどうするの？」

アイリスから待ったの声。

「まあ、交互にだな。新しい建材、食材、訓練場の確保も大事だし…」

領地が増えた分、再開発計画も壮大に…

「訓練場、狩り場の確保は大切ねえ。ケンがやりたいなら、止めない。でも、お仕事はしてね」

と、仕事が増え、散歩と言う名の地図製作は休止になった。しょうがないよな。俺とマイルにしかできないし。

指名依頼

——レオンハルト・アルトリア——

私はアルトリア王国国王が第一子、レオンハルト・アルトリア。この王国の王太子だ。どうして、こんな事態になってしまったのだ？冷静に考えれば、コゼットには何の非も無かった。彼女の家のお茶会で、彼女が丹精を込めて育てたお花畑なのだ。なのに、私はあろうことか、コゼットを追放してしまった。彼女の家から彼女を追い出し、帰ってくるなど……

「殿下、どういうことですか？」

コゼットのお父上であるエドワード・エーデルワイス伯爵に詰め寄られていた。

「彼女が……父上の最愛の者にそっくりであったので……」

国王である父上のプライベートルームに飾られていた女性の肖像画。その顔が、あの時乱入していたアンジュにソックリだったのだ。それにしても、なんでコゼットにあんなことをしてしまったのだ？

「だからって、娘を家から追い出すって……あれ以来、娘の姿を見つけられないのですよ。」

どうしてくれるんですか?!」

「探させている。コゼットはあの体形故、そう遠くへは行けぬはずである」

超肥満体な彼女。少しの運動で息が上がる。その為、遠くへは行けないはずなのだ。

「もう2週間ですよ」

「浚われる心配も無いだろ?」

その体形故に、荷馬車でないと運べない。

「ですが…」

神隠しにあったように消えてしまったコゼット…

——レーナ——

冒険者養成学校で同期だった、ポーリン、メーヴィスと冒険者パーティー『赤き誓い』を結成して、岩トカゲの討伐クエストに参加したのだが、何故か、目の前にはロックゴレムが2体もいたりする。

「これで、どうだあああ〜!」

剣士のメーヴィアスが斬りかかったのだが、無情にも剣が折れた。私とポーリンの最大攻撃魔法も効かない。もう、ここまでなのか?

終わった…初クエストで玉砕…

「ケンさん、面白いのがいますよ。関節が球体関節だし」

「おお、これは珍しいな。貰つとこ。その三人さんはそれでいいか？」

私達のことかな？助かるなら、どうでもいいです。頷く私達。

「じゃ、マイルとプライドで、倒しておいて、セイは治療、俺とシロは付近を探索だ」
「了解」

あのロックゴーレム2体が、容易く動きを止め、どこかに消えた。

「付近には、もう魔物はいないぞ。じゃなあ！」

目の前から消えた。一団…あれつて、転移術か…

——ケン——

指名依頼を終えた帰り、球体関節持ちのロックゴーレムをゲットした。一応、冒険者ギルドに報告しておく。

「あと、この依頼は頼めますか？」

人捜しの依頼のようだ。『アデル・フォン・アスカム』…速効でマイルが断っている。その探し人はマイルの本名である。彼女は貴族籍を奪われて、命も狙われているのだ。帰ろう。俺達は人捜しをしないし、国からの依頼は受けないからな」

青白い顔のマイルの頭をポンポンと叩いて、冒険者ギルドから転移をして帰宅した。

「未だに探しているんですね」

「それだけ、マイルがジャマなのか？」

「現当主である私の父親は入り婿で血縁者では無いですから」

前当主である母親の実子はマイルだけで、唯一の血縁者だと言う。

「強引に来たら、その国には消えて貰うから、心配するな」

「はい！ケンさんにおまかせします。今日は死の森の開拓をしたい気分です」

「じゃ、行くうか」

アイリス領の再開発は朝からやらないと無駄が多くなる。たまに指名依頼が入る俺は、毎日再開発出来ない身分である。

死の森ではあの巨木の傍に、お屋敷を建てた。現在は、周りの地面を開墾する作業と、治水対策、生き物調査をしている。ラスボスクラスが2、聖女、聖者にモフモフ担当のシロ、俺達はたぶん最強パーティーである。更に、お留守番として隼人達が住んでいるし。

「隼人、どう？」

「敵らしい敵はいないです。単発でミノタウロスが数体です」

隼人達の狩ったミノタウロスは既にアイテムボックスにしまい込まれていた。アイテムボックスは、俺、マイル、隼人、アイリス邸の倉庫が、内部共有している。これに

より、アイリス邸で自由に獲物が取り出せるようになり、解体の授業が捗るようになったそうだ。授業で解体された食材は、セントラルキッチンで料理され、行政区の食堂や学校の給食で消費される仕組みになっていた。

◇

教皇から冒険者ギルド本部経由で、指名依頼が入った。俺とセイの名義の書面で改革案を出したのだが、その答えらしい。世界各地の王国が設置している後宮の廃止を視野に入れてくれと、改革案を出したのだ。

だって、王一人の為に、女体が数百人規模で拘束されるって、不条理に思えたのだよ。後宮に女体が大量に保管されるってことは、独身男性は増える一方で、平民層が薄くなるってことである。平民層が薄くなれば、農業、商業、工業のなり手は不足し、国財にいずれダメージが入ると思う。いや、奴隷でまかなう方向性だと、人種差別になりかねない。その辺りを教皇的にはどう考えているんだと、物申した訳だ。

その答え：じや、潰しておいでってことである。手始めは、エルグランド王国、ディアナの故郷であった。

「潰すって、どうするの？」

「後宮内の良識派を神隠しで浚う？それとも国庫を漁るか？」

内情を訊く為にクレスター伯爵家を訪れた。

「後宮を無くすのですか……少人数で残す方向にして欲しい」

王に子供が居ない事態は避けたいようだ。

「人数を減らせないのでいいか？」

「後宮も派閥争いの場であるから……必要悪って感じですよ」

「ディアナを入れて内部から破壊するの？」

「ディアナは入れたくない。きつと、王はディアナを辱めるつもりだと思っ」

クレスター伯爵家はエルグランド王国において、悪の巣窟と思われるそうで、王はそんなクレスター伯爵家に罰を与えたいらしい。

「えん罪で、後宮内で拷問か？ディアナを合法的に甚振るのか……」

それはそれで興味はあるが……どんなAVシーンが見られるのだろうか？

「ケン、ニヤけているよ」

妄想を膨らませていたら、脇腹にセイの肘鉄を食らった。

「それは避けたいってことだな。どうするかな」

「名付きの側室が5名おり、それ以外は無くす方向で良いのですが……」

政治力の綱引ききつてことか。自分の娘がいないと、政治的弱者になり得る。そこから改革ではないのか？

「最悪、公国の属国扱いでも構いませんよ。多少の自治権を認めて頂ければ」

「飛び地過ぎるでしょ。無理です」

プライドが俺の代わりに返答した。死の森の開拓もあるし。教皇に丸投げするか？
でも、宗教戦争になるとマズいかあ。

逃げ場なし

——ダイアナ・クレスター——

一人で玉間にいらっしやる王の下へ向かった。

「漸く来たな、ダイアナ・クレスターよ」

覚悟はしていたが、王の視線が痛い。舐める様に私の全身を見ている。

「では、ここで味見をする。準備をせい！」

「ここで？玉間で？着ている物を総て脱がされ、首に隷属の首輪を嵌められ、怪しげな薬を飲まされた。全身を何かが走り回っている。下腹部が濡れ、勝手に腰が動いている。」

「悪女でも媚薬に溺れるのだな。どれ、塩梅はどんなものかな」

王の手が私の腰を掴み、私の中に入って来る。こんなのはイヤ！

「そこまでにして貰おうか！」

旦那様の声……王が弾き飛ばされ、私はセイさんに浄化され、肌襦袢を掛けてもらっていた。

「貴様！何者だ?!」

私を護る様に旦那様とプライドさんが立っていた。

「私はプライド・ロイヤル・アイビー。フリージア王国の次期女王よ。こちらは私の将来の旦那様で、聖シユルル協和国次期教皇候補で、アルメリア公国王配のケン・マキノハラですよ。頭が高いのはどちらかしら?」

プライドさんから威圧するようなオーラが放たれていた。王やその側近が強制的に跪かされていた。

「ダイアナに薬を盛って味見?随分と勿体無いことをするな。なあ、ここの後宮に入るには皆、その儀式をしているのか?」

旦那様の一言で空気が重く苦しくなっていく。畏怖させるオーラか?長時間当てられると危険である。

「おい!その者達を取り押さえろ!」

跪きながら、王令を下す王。だけど、誰も動けない。畏怖に逆らえば死が訪れるはずだ。それ以前に、逆らうことすら出来ない威圧:

「なあ、一人で100名近くの女体を手にして、どうして子供が出来ない?お前、タネがないんだろ?何人あてがっても子供は出来ないだろうな。お情けだ。後宮から一人選べ、子供を授けてやる」

聖者にそんなスキルがあるのかな？

「ぐ、ぐ、愚弄するな！誰がタネ無しだああああ！」

顔を真っ赤にして反論する王。

「お前だよ。お、ま、え、だ！ああ、そうか破綻した性癖を満たす為だけの後宮か。で、本命は別に確保か？女を玩具にしすぎるだろう。天罰でも与えるか。『天罰！』」

王の身体が一瞬、光に包まれた。

「お前は2年間ほど、女を抱け無い身体にした。後宮のオンナ達は全員、聖シユルル協和国の修道院で2年間、修行をし、魂に汚れの無い者だけ、後宮に戻してやる。今回の代金はディアナ・クレスターの身柄でチャラにしてやる。じゃ、良き人生を送れよ」
次の瞬間、アイリスさんの館に戻っていた。

——ケン——

教皇の話では半年ほどで、選別できるってことである。本人の意思で後宮に入った者は、後宮に戻す。本人の意思とは反して無理矢理の場合は、親に罰を与えて、家に戻す。それ以外の政争の種の場合は、魂の汚れ具合で扱いを決めるそうだ。

「これで良かったのか？」

「まあ、これで維持経費など、国庫への圧迫は減るでしょうね」

と、満足そうなクレスタ―伯爵。

「ディアナは返そうか？」

女体に困っていない。いや、青汁のせいで性欲が無いんだが…

「預かっていてください。ディアナの意思でもありますから。あなたの傍なら、我々も安心ですしね」

あんなこと、こんなことをしたいんだけど…気力は無い。性欲も無い。脳内で妄想だけが暴走していく。

「ディアナが嫌がらない程度は、お好きにしてください」

おい！嫌がれよな。両親の見ている前で、全裸で俺に抱きついているディアナ。ピクリとも反応しない俺のアレ…なんか哀しい

ディアナを引き剥がし、クレスタ―伯爵達を伯爵邸に送りつつ、死の森の開拓へと向かった。

◇

囲っている山脈の麓近くにやってきた。山は普通の植生のようだ。雑草が生い茂り、キノコも生えている。この囲まれている盆地部分だけ、謎の樹木のみと言う変な植生のようだ。

「どう思う、マイル？」

「ここが特別な地なんでしょうね。地下に何かがあるとか」

埋蔵されている何かを隠す為に、硬い地盤で地表を覆っているってことか？どう調査するかな。シロもミヤも猫だしなあ。犬が居れば、ここ掘れワンワンになるんだらうか？

「隼人は、何か、そつち系のスキルある？」

「無いですよ。僕は勇者ですよ。シーフ系、レンジャー系のスキルは無いです」

「無いんかあ。そうなるってシーフ系の人材も欲しいなあ。いや、鉱山師でもいいか。巨大な猪みつけ！」

マイルが瞬殺して、アイテムボックスへ放り込んだ。今夜はボタン鍋でもするか？

「兎とか、食べられるキノコとか豊富ですよ」

隼人が山の幸を確認している。兎は解体初心者の教材になるかあ。

「うん？コカトリスか？」

一刀両断で首を刎ねたプライド。うん？何かがある。草むらを入れて行くと二匹の子犬がいた。抱きかかえて、皆の元へと戻った。チエックをすると怪我をしているようなので、セイに丸投げした。

「この犬…魔犬かな」

ヒールをしていたセイがそんなことを言った。その言葉を受け、直ぐにマイルが鑑定

していく。

「わっ！なんで、ここにいたのかな？フェンリルの幼体とケルベロスの幼体ですよ」

神喰い犬と地獄の番犬の幼体？なんで、ここに？

「まあ、保護して、番犬にしよう。狩猟犬とか、ここ掘れワンワン犬になるかもしれない」
魔犬であつても犬は犬である。鼻が効くだろう。

「聖者がケルベロスを飼うのって、問題になりませんか？」

セイに訊かれた。

「死の森限定だよ。アイリスの元とか、教皇の傍に連れて行ったら問題だろうな」

それは、俺でも分かるぞ。成長すれば、ケルベロスは三つ首になるし、フェンリルはバカデカくなるし。

「ケルベロスも大きくなりますよ」

つと、マイル。そうなのか。まあ、いいか。エサが問題か？屋敷に戻り、猪肉を二頭の前に出すと、勢いよく食べ始めた。エサが問題かあ。俺達の喰わない内臓肉をあげれば良いのか？解体実習があるため、毎日、結構な量のホルモンが出るはずだ。

◇

名前を付けてみた。白銀色のフェンリルのオスはシロガネ、黒いケルベロスのメスはクロである。解体実習で得た内臓肉や骨でスクスクと育っている。可愛かった幼体の

時期は短かった。一月もすると、成獣になっていた。デカイ…

「フェンリルとケルベロスで子供って出来るんですかね？」

マイルに訊かれたが、俺には分からない。シロガネとクロに聞いてくれ。

って、どうかマイルの質問がフラグになったのか、その日、帰宅すると晩ご飯は赤飯だった。

「出来たわ。逃げないでね」

って、アイリス。

「うーん、私は出来ていない。なんか、ズルい」

とは、カタリナ。出来たって、アレだよな？俺の記憶には、した記憶が無いんだけど、野獣になった時か？

「と、いうことで、結婚式をしましょう。プライドちゃんには申し訳ないけど、今回は私とカタリナだけでね」

なんか、俺抜きで話が進行している。アイリス母の俺を見る顔が笑顔なんだが、どこか怖いのはどうしてだ。

「教皇様に式を頼んだら、喜んでやってくれるそうよ」

アイリス母よ、どうして教皇に頼んだ？大事になるでは無いか。翌日、俺はアルメリア公国の王配となった。今回の式の代金代わりに、次期教皇はセイで、俺は次期教皇補

佐で決定と、結婚式で宣言までされた。教皇の発言は世界を駆け巡っていく。結婚記念日は国の記念日にもなる。どうして、こうなった。逃げ場は無い。

「やることやったからよ〜」

ヨツパのアイリス母に絡まれている。お宅の娘さんと寝た記憶はあるが、やった記憶が無いんだけど…

「間違い無い。ケンの子供よ」

と、セイ。聖女様は生まれる前の子供の父親を見分けることが出来るらしい。

スパイダーシルク

——ケン——

アイリスが身籠もったから、俺の生活が変わるわけでは無い。産気付く瞬間まで、女王としての仕事を熟すらしい。俺が傍にいても野獣化する恐れが有るものの、役立つことは無いので、前世で出産経験のあるコゼット、ヒールの遣い手のセイが俺の代わりにアイリスの世話をしてくれるそうだ。

俺はシロ、マイル、プライドと死の森の開拓にやってきた。アイリスが産後に産休するのだが、ここで産休療養すると言うのだ。公都では仕事が気になつてしようがないらしい。アイリス不在時、アイリス父が代わりに執務してくれるそうだ。マンパワー不足の折には、プライドの妹のティアラを貸してくれるそうだ。ディアナ、オリヴィエが文官として側近に入っているので、事務仕事においてマンパワーの不足はあまり無いと思いたい。

死の森の館に改良を加えていく。先ずは赤子用の乾燥機能付き洗浄便座。大人用だと便座をすり抜けてしまうので、小さいヤツを被せるようにした。大人用の方には温暖

機能も付けてみた。こころ冬は寒いらしいので。周囲を山脈に囲まれ盆地状態なので、留守番役の隼人によると、寒暖差が激しいようだ。

畑も徐々に作付けし、田んぼも作っている。これで米と野菜、肉と自給自足出来そう
だ。足り無ければ、アイテムボックスから取り出せば済むし。

感慨に浸りながら畑を見回していると、シロガネが俺を呼びに来た。何かを見つけた
ようだ。俺達のパーティーがシロガネの後に付いていくと、白い巨大な繭が数個あり、
その中心に黒くて平たい物体があり、まるで黒いザブトンが鎮座しているように見え
た。これって、あれだよな？

注意深く見ると、身体が二畳ぐらいの正方形に8本の足：間違い無い。アレだ。タラ
ンチュラ系か？そうなると、あの繭の中は獲物が入っているのか？こうして見ると、蚕
の繭に見えなくも無い。アレを紡げば、シルクが取れるのだろうか。スパイダーシルク
：超のつく程の高級品である。

取れるのだろうか。スパイダーシルク：超のつく程の高級品である。

目の前の蜘蛛と目が合った気がした。すると蜘蛛はお尻から糸を出し、足を使い器用
に何かを作り、俺にプレゼントしてきた。これって、シルクのハンカチか。敵では無い
アピールなのか。

「分かった。お前の名前はザブトンにする。敵対はしない。だけど、その繭をくれるか

「紡ぎたい」

「はい？誰が紡ぐんですかあああ〜！」

マイルのイヤそうな声。チーターなマイルでしょ。紡ぐのは…いや、俺も手伝うけど…そうだ！マイルの母と姉が紡ぐ経験持ちなので、紡ぐ為の道具のアイデアを出して貰い、紡ぎ機を作る事にしよう。

ザブトンは繭を俺達の前に差し出してくれた。その数は8個。繭を持ち上げてみると、結構重い。何を入れたんだ？館の作業場に強制転移させておく。

館に戻り、謎の樹木を錬成した糸紡ぎ機で、トゥーリ指導の元、みんなで糸を紡いでいく。紡いでいくと…中身の全容が見えて来た。人型の何かが入っている。ゴブリンか？オークか？

「これって、人じゃ無い？」

マイルの声…俺は即座にセイをこの場に『強奪』した。

「どうしたの？緊急事態？って…これって？」

「蜘蛛に囚われた人間の皆さんだ。生きている者だけ、ケアを頼む。マイルもだ」

8個中三人は息がまだあるようだ。息絶えている5人の死因は蜘蛛による物では無かく、別の魔物による殺戮のようだ。ザブトンは彼らを護る為に、蜘蛛の繭に困ったのかも知れない。

「ねえ、この服装って、軽装すぎない?」

隼人の声。確かに、死の森の探索にしては軽装である。これって、どういうことだ? 軽装備の騎士っぽい服装のおっさんと女、そして神殿勤務風の衣装の少女。ここに強制転移されたのか? 亡骸達は護衛兵っぽい服装である。

「どこの国か、わかるか?」

「巫女っぽい服装だから、教皇に聞いてくれば、どうかな?」

俺の問いに隼人が反応した。なるほど、教皇か? 少女の来ていた物を脱がし、それを持って教皇の間に転移した。

その結果ファーレーンという大国の巫女らしいと判明した、首都はウルスと言うらしい。大国と言っても、そこまで領地は広く無さそうで、フリージア王国から近いことも分かった。いざとなれば併合も出来そうだ。

「隼人、場所はわかるか?」

「たぶん、冒険者ギルド本部から転移で行ける筈だよ」

なるほど。じゃ、目覚めるのを待つか。いや、亡骸だけ、冒険者ギルド本部へ届けるか。早速転移した。

◇

冒険者ギルド本部で、ファーレーンのキナ臭い話を仕入れた。王太子とその上の妾腹

の兄、それから三つ下の弟が水面下で継承権争いをしているらしい。今の王家は正室の子供が三人、側室の子供が五人いて、現在王妃が懐妊していて、継承権争いが激化しているらしい。その上、王太子の姉に当たる第二王女が、原因不明の不治の病にかかっている。正室の子である第五王女が年齢的に巫女姿の少女に近いという。

子供が多くて継承権争いって、後宮でもあるのか？有るなら潰しておくか。

「どうだった？」

死の森の館に戻ると、セイに訊かれた。

「ファレーンの第五王女じゃないかって話だ。一応、いつでも転移出来る様に、近くまで行ってきたよ。プライドの国に近い感じだ。大体馬車で1週間以上だな」

「それは遠いって言うのですよ」

「そうなのか…」

「まあ、ここからはエライ遠いわ。ここがハワイ辺りだとすると、中東辺りにある」

「なんで、ここに強制転移？」

「それも聞いてきた。死の森って、迷い込んだら生きて出られないそうさ。だから、確実に死体を残さない方向で、ここに強制転移させたんじゃ無いかな」

「確かに、拠点が無いと、ここで生きられる自信は無いです」

と隼人。謎の樹木しか生えない森だしな。食い物にまず困る。そして、水に…俺達

は、掘る方法があるから良いが、普通は掘れないだろうな、ここの地盤は…それも3メートルも…

◇

翌日はマイン、マイン母とトゥーリも連れて死の森の館へ。スパイダーシルクを反物にして貰うのだ。織機は謎の樹木で錬成してある。下手な金属よりも硬い為、謎の樹木オンリーで織機が完成した。薄くすると硬いだけで無く、しなやかさもあるのが良い。バネ類に丁度良い材質である。

「で、これで何を作るんですか？」

トゥーリに訊かれた。

「産まれる子供の産着とかおしめだな」

「スパイダーシルクって、高級品ですよ。分かっていますか？」

「肌荒れ防止になるだろ？」

「それはそうですが…なんか、納得出来ません。ドレスとか作りたいです」

「じゃ、アイリスのを頼む。結構な量の反物ができるだろ？」

足り無ければ、ザブトンに繭を作ってもらおうし。

「このバネ、印刷機に使えませんか？」

試作のバネを前にしてマインは、期待感からか機織りの事を忘れていた。そうそう、

最近、マインとマイルで『日本ふかし話』という童話の絵本を制作し始めた。ペンネームはマイマイだという。エチゴヤ出版から絶賛発売中である。産まれて来る子供に読みたいかな。日本語ベースの絵本で、日本語を学ぶ教材扱いにしたらしい。

売中である。産まれて来る子供に読み聞かせようかな。日本語ベースの絵本で、日本語を学ぶ教材扱いにしたらしい。

「()…()ですか？」

巫女姿だった少女が目覚めた。現在はバジヤマを着せてある。

「お目覚めですか？()は死の森ですよ」

プライドの言葉に真っ青になる少女。

「死の森…まさか…だったら、なんで暮らして居るんですか？」

「私達以外、人がいないから」

そう、俺達のルールで生きられるように、他の国に干渉されないこの地を、永住の地を選んで俺。俺のスキルと相性も良いしねえ。

「何者ですか？」

「冒険者パーティー『エチゴヤ』、ランクはSよ」

「ランクSですか…」

ランクSのパーティーはそうそう多くは無い。現在、隼人のパーティーも『エチゴヤ』

の一部だ。混乱する少女に、救出してからの話をしてくれたプライド。

「フリージア王国の第一王女様ですか…」

「ええ」

プライドの身分を聞いて、少し落ち着いた少女。

「私はファアレーンの第五王女のエアリスと申します」

エアリスの話によれば、神殿へ儀式に向かう途中で、パラライズされての強制転移をさせられて、死の森に來たそうで、ケンタウロスの群れに襲われたそうだ。全身が麻痺状態で騎士も護衛も役に立たず、自分自身に防御の魔法を掛けたところで、ザプトンの繭に囲われたようだった。

「あの…謝礼は出しますから、助けてください」

エアリスの出産が重ならないといいが…

「まだ、3ヶ月くらい安心ですよ」

と、マイル。なら、助けて上げられるかな？

「いざとなったら占領すれば良いんですよ」

と、胸を張って言い切るマイル。簡単に言うなよ。占領後が大変なんだからな。自慢じゃないが俺に統治は無理だからな。

拷問？いえ、治療です

——ケン——

エアリスの従者はドーガ卿とレイナだそうだ。オツサンがドーガ卿で、女騎士がレイナだな。レイナの方は目覚めるなり、俺に襲い掛かってきたが、マイルとプライドに排除され、現在はザブトンと遊んでいる。

「レイナが申し訳無い。好きなようにしてくれていいぞ」

ザブトンがレイナを亀甲縛りしているんだが…どこで覚えたんだ？それ…

「姫から聞きました。Sランクパーティーだそうで…助けてくれませんか？」

「指名依頼？」

「ええ、国からの指名依頼にします」

それは貢献ポイントが付くなあ。

「内容によりますよ」

敏腕交渉人のマイルがドーガ卿と仕事内容を詰めてくれる。

「えっ！聖女様もいらっしやるんですか。是非、第二王女の病も治して下さい」

それは、エリクサーもどきの被験者になつてくれるのかな?もう脇毛が刺さることは無い。死人は生き返らないが、生きている限り、治せるだけ治せる薬に成長している。問題は味と臭いだが、こればかりはどうしようもない。原料の青汁自体がマズくて臭い上、それを濃縮しているんだから…

その日の夜、ドーガ卿と二人で城に忍び込み、第二王女を無事に拉致してきた。早速、マイルに鑑定をして貰う。

「これは病気でなくて、毒ですね」

そうか、毒かあ…ならばやはり、エリクサーもどき最新バージョンを第二王女に飲ませた。部屋に充満する臭さ。今回のバージョンは今まで以上の臭さである。

「うっ…何をしたのだ…おえええ」

ドーガ卿は窓から放出した。苦痛に歪んだ表情のマイルは風魔法で臭いをドーガ卿に押しつけていた。俺は…慣れつて怖い。

「マイル、これでどうだ?」

「いい感じで中和されていますね。少し青汁が勝っているのか、誤飲に注意です」

戻す物が気管に流れ込むと危険つてことだな。食道を逆流してきた物を、窓の外へ強制転移させていく。

「これ、治療つていうより、拷問に近いんじゃない?」

俺とマイルの力業治療を見て、固まっているマイン。

——エアリス——

目の前に、元気そうなお姉様がいる。ケンさん以外の者は、お姉様の吐息の臭いでやられる為、近寄れない。

「臭いだけが問題の良薬だ。毎食後にコップ一杯を飲んでくれ」

嫌そうな顔のお姉様。臭いだけで無く、味もヤバいらしい。

「慣れだよ。家の者は、ジョッキで飲んでるし」

私よりも幼いマインちゃんもジョッキで飲んでるのには驚いた。

「お姉様は、もう治ったのですか?」

「治ったというより、毒は抜けたはずだ。後は体力の回復待ちだな」

体力は直ぐに回復しそうである。この家の食事は旨いのだ。神殿生活に戻るか不安になるくらいに。

「誰にやられたんだ?」

「たぶん…カタリナお姉様かと」

「カタリナ…悪女っぽい名前だな。そうそう、神殿の浄化はしておいたよ」

えっ…

「教皇からの指名依頼で、エアリスの代わりに浄化して来たよ」

「そ、そんなんですか…」

依頼しようと思っていたんだけど…さすが教皇様ですわ。状況が分かっているしやっつたのね。

「神殿に巣くっていたヤツラも、浄化ついでに掃除しておいたから、お前ら帰っても大丈夫だぞ」

それは、私達を早く追い出したいのかな？美味しい食事…食いだめしないと…

——ケン——

舌の肥えたエアリスが帰るの渋った。神殿での質素な食事に耐えられないと言う。

「王宮の食事よりも美味しいわよ」

元気になったエアリス姉まで…

「エアリスは神殿勤務だろ？帰らないとダメだろうに」

「じゃ、食事の配達を指名依頼していいですか？」

面倒な出前だな。エアリスの出産とか開拓とかで忙しいんだけど…チョココの配達時に出前もすれば良いか。指名依頼を受けると漸く姉妹は帰ってくれた。

◇

謎の樹木で板バネを錬成してみた。靴の踵部分に付けてエアクッション代わりにしてみたのだ。死の森の地面は固い。チーターのマイル、プライド、シロなら問題は無いが、産後にやって来るアイリスには、ちよつとシンドそうな固さであったのだ。

「馬車に付ければ、サスペンションになるんじゃないですか？」

産後のアイリス用の馬車でも作るかな。謎の樹木の用途を増やさないと、開拓が進まないのだった。錬成以外に取り除く方法が無い為、何かに加工せざる負えないのだった。サイディングボード用途も一区切り付いてしまったし。さて、どうするか。

トウリーがアイリスの子供為に、スパイダーシルクで産着を作ってくれた。早速、アイリスの元へ届けてみた。

「これ…スパイダーシルクじゃないの?!」

アイリス母が興奮して俺に詰め寄って来た。

「そうですか…何か？」

「最高級素材よ。これで私にドレスを作りなさいよ」

いつに無くアイリス母が高飛車である。訊けば、失われた素材らしい。昔は養蚕ならぬ養蜘蛛して、糸を紡いでいたらしいが、今は養蜘蛛業者が無くなり、悪徳商人の間では紡いだ糸状態で高値で転がしてあっているらしく、品質は年々劣化していると言う。

「スパイダーシルクなら、今後も出荷出来ますよ」

「本当に?!ねえ、私にドレスを…」

甘えたような声のアイリス母。背筋に冷たい物が走る。なんか怖い…
「トゥーリが担当なんで、伝えておきます」

死の森で働ける針子さんをスカウトしないとダメかな。

それでいいのか、聖女よ

——ケン——

「おめでとう！女の子よ」

ついにアイリスが子供を出産。名前はアリスと、既にアイリス母が命名していた。父親に相談無しですか？

「じゃ、私とアイリスちゃんとアリスちゃんを別邸に連れて行きなさい」

と、アイリス母。お世話係としてコゼットもらしい。コゼットには褒美？にブートキャンプを死の森でも行うとか。4人を連れて、死の森へ転移した。

「お赤飯を作らないとね」

とマイル。マインとトゥーリがアリスをあやしてくれている。暇なのだろうか？アリスが何故か俺に甘えている。こんな態度のアイリスなんて、初めてでは無いのか？戸惑う俺…

俺の目の前では鬼軍曹であるアイリス母が、テキパキと指示を飛ばしている。現在の住民は、俺、マイル、プライド、シロ、セイ、マイン親子、アイリス、アイリス母、ア

リス、コゼットに隼人パーティーである。こき使われるのはマイルとコゼット、それに隼人パーティーである。が…オロオロする隼人。鬼軍曹に命令されることに慣れていないようだ。

「尾頭付きも要るか」

海に行つて、鯛もどきを数匹手に入れ、塩焼きにしていく。料理中も俺に甘えるアイリス。これつて、幼児退行か？

◇

そんなこんなで慌ただしい日常を迎えた俺に、冒険者ギルド本部経由でヤーシスから連絡が入った。

『掘り出し物あり』と…

急いでヤーシスの元へ向かうと、檻に入った腐った肉塊があつた。肉塊は辛うじて人の形を留め居ているが、性別も年齢も分からない状態である。

「とある盗賊が所持していました。まだ息があるが救えるか？」

肉塊だぞ…救えるのか？肉塊にヒールを掛けながら、目の前の肉塊を錬成していく。イメージは人であるが…何だろうか、人間にしては違和感がある。ミスター・ス●ックのような切れ長な耳…エルフかな？体内に魔力塊がある。これつて身食いの末期か？人間であれば、器が保たないが…エルフだとなまじ頑丈な為に、こんなに膨れて肉塊の

よくなるのだろうか？

ええ、エリクサーもどきをかけていく。鍊成が進めると俺好みの女性になりそうだし、エリクサーもどきであれば、正しい形に修復されるだろう。バスタブに入れて、頭からかけ、口らしき場所からもエリクサーもどきを注ぎ込む。徐々に顔ダチやら体形やらが判別出来るようになっていく。女性のエルフっぽい。髪は金髪…

疲れて来たので、セイとマリアとマイルを『強奪』で引き寄せた。

「末期の身食いみたいだ。俺は少し寝るから、現状維持で構わないから、後を頼む」

と…俺の意識が消えていった。

◇

意識が戻ると、自分の屋敷のベッドの上にいた。俺の上には金髪で青い瞳のエルフの少女が載っていた。

「マインドロストしていたのよ」

と、セイ。肉体疲労ではなく、魔力切れで疲れたのか。

「その子がケンの鞆になってくれて、今回は被害が少ないわよ」

左からはディアアナが抱きついていて。俺はまた野獣化したようだ。まったく記憶に無いのだけだ。

「その子、記憶が無いみたい。名前はアルファって付けておいたわ」

その名付けは安直であるが、今後肉塊に遭遇するってフラグなのか？ ベータとかシータとか増えていきそうだよ。

「この子の代金は？」

「要らないって。治す過程が見られただけで儲けものだそうよ。身食いが酷くなると膨れて肉塊のようになるのね。教皇には報告しておいたわよ」

セイは聖女としての仕事をしたようだ。原因不明の奇病である身食い：原因は俺達の推測では、魔力溜まりが体内に出来ることだと思われる。なんで体内に魔力溜まりが出来るのか、その原因は今だ不明である。

世間的には治療方法がこれとって無い。体内の魔力溜まりを解消し、身体の欠損を治すことくらいである。魔力溜まりを解消するには、単なるヒーラーでは無理で、魔力操作のできる者が必要になる。

◆ 今後の決定打になる治療法は：エリクサーもどきかな？ 今後実験を重ねないと。

アリスが離乳食になった頃、セイのお腹が：

「てへへへ…」

苦笑いしているセイ。

「この前の野獣化の折に、ちよつとねえ」

ちよつとねえくじやないぞ！俺はやった記憶が無いんだけど…

「間違い無くケンの子供だからね」

つて、笑顔を俺に向けるなあ。お前、一応、聖女なんだから、腹ぼてはマズいだろ
うに…

「うん、なんで出来ないかな」

つて、カタリナ。いや、お前とやった記憶すら無いぞ。

「毎回、たらふくぶちまけてもらっているのに…なんでかな」

俺つて、そんなに溜めているのか…それはそれでシヨックだけど。

セイがリタイヤする為、パーティーメンバーを変更することに。セイの代わりにはマ
リアかな。

「聖女をスカウトしてきてもいいわよ」

と、アイリス。おい、我が家は大奥じゃ無いんだから…と言うよりも、やった記憶が
無いのは虚しい…

◇

最近多いのだが、冒険者ギルド本部から指名依頼が入った。誘拐されたカゲノ男爵
家令嬢の捜索だと言う。誘拐現場へ向かうSランククラン『エチゴヤ』。クランとは複
数パーティーの集合体で、所属パーティーはエチゴヤと隼人パーティーである。

捜索者は寝込みを襲われ、寝室から連れ渡われたようだ。部屋には争った形跡は無く、窓には外から強引に開けた痕跡が残っていた。

「どう思う、隼人」

「手当たり次第では無く、ピンポイントだよ。そうなると性奴隷が濃厚かな」

目を付けた女性を浚って、高値で売るか、地下牢で飼うってヤツか。そうなると生きている可能性はデカイか。被害者のブラシの臭いをシロガネに嗅がせ、後を追跡する。シロガネは臭いだけで無く、残留オーラも探知出来るらしい。

着いた場所は、オルバ子爵邸だった。わらわらと湧き出る怪しい用心棒らしき者達を制圧していく俺達。中でもアルファが良い働きをしていた。確実に相手を仕留めていく。エルフって魔法職のイメーじだったのだが、アイリス母のブートキャンプのおかげで徒手空拳の遣い手になっていた。

「隼人、地下への入り口を探すぞ」

「了解です」

入り口は俺、隼人よりも早くシロガネが見つけた。突入していた。人間は犬に勝て無いなあ。

地下通路を経て、地下牢エリアになっていた。そこで鎖に繋がれていた少女を発見。生地の薄いネグリジエ姿で、豊かな胸の膨らみと瑞々しい太ももが露わになっていた。

イタズラした後か？

地下牢エリアにいた者達は、アルファとシロガネ、マイル、シロ、隼人によって制圧されていた。マリアが被害者に駆け寄り、ヒールを掛けていく。

「ケンさん、この子…」

何か異変を察知したマリア。俺も近寄り、診断をしてみると…

「身食いかあ…連れ帰って、治療をするぞ。隼人、後をまかせていいか？」

「まかせてください」

俺は被害者の少女、クレア・カゲノートと、マリア、アルファ、シロガネと共に帰宅し、治療を開始した。治療室のバスタブにはアルファと同じ様な少女の肉塊が置かれていてエリクサーもどきに浸かっている。隣のバスタブに全裸にしたクレアを横たえ、エリクサーもどきを注いでいく。1週間も漬ければ大丈夫だろう。

リーシエの憂鬱

——クレア・カゲノー——

臭い…何の拷問だ？手足を拘束され、臭い液体に漬けられている。その臭い液体は、口の中に滴下されているし。文句を言おうと、頭から臭い液体を掛けられるし…

隣のバスタブには銀髪のエルフが浸かっていた。どんなプレイなんだ？これ…

「だいぶ良くなってきたわね。もう少しで退院できるわよ」

巡回に来た優しそうな女性がそう告げてきた。私は病気じゃない。誘拐犯であるオ
ルバ子爵から救い出してくれたのはありがたいが、この仕打ちは納得出来ない。

「(ハハ)は(ヒハ)？」

「うーん、なんて言えば良いのかな。死の森にあるアルメリア公国王配の別邸って言え
ば良いのかな？」

アルメリア公国って、周辺の国々を併合している大国だっけ？その王配の別邸？

「まさか…王配のハーレム？」

「それはちよつと違うかな。女王様も聖女様もいるから…」

へ？聖女すらハーレム要員なの…まさか、この臭い液体は媚薬なのかな…

——ケン——

ディアボロスの呪い、英雄の子孫、そして……悪魔憑きの真実。オルバ子爵邸から押収した資料に書かれていたキーワードである。身食いの症状なんだけど……悪魔なんか憑いていなかった。呪いも掛かっていなかった。英雄の子孫かどうかは身食いに関係は無いし。あの資料を作ったヤツは厨二病なのだろうか？

「どう思う、隼人」

「身食いに関してはケンさんの方が専門家ですよ。問題は彼女が狙われた理由ですよ。ね。地下飼育が濃厚じゃないですか？」

俺もそう思うが、あの子爵は性的な行為目的では無いと言っていた。

「供述調書と資料を冒険者ギルド本部に丸投げするか。俺達は名探偵では無いからな」
「ですよね」

隼人は勇者で俺は錬成士だしなあ。

◇

アルファとベータは出先で身食いを見つけると、俺に知らせ、保護を求めてくる。おかげで、ガンマ、デルタ、イプシロン、ニュー、ラムダと7名もの記憶喪失少女達が、戦力に加わった。ガンマ以外、アイリス母のブートキャンプの卒業生の為、そこそこ強い。

唯一卒業出来なかったガンマは藍色の髪に深い青い瞳のエルフの女性で、頭脳労働系のようなのだ。現在、ミツゴシ商会を設立し、商會長に収まっている。これでアルメリア公国には、チョコレート菓子のアズータ商会、健康系グッズのエチゴヤ、そしてミツゴシ商会という三つの商会の本店を公都に揃えた。尚、ミツゴシ商会では、死の森産の商品を扱って貰う事にした。棲み分けは大事であるからね。

尚、イプシロンは表の顔はピアニストで、隼人パーティーの楽師であるバイオリン弾きのアランと共に演奏行脚をしつつ、各地での情報収集活動もしているらしい。

——リーシェ・イルムガルド・ヴェルツナー——

現在、七周目の人生ループを経験中である。毎回、王太子の婚約者になり、夜会で婚約破棄イベントが起こり、家に居られなくなり、5年後に死ぬ人生だった。商人、薬師、侍女、男装騎士などの人生を経て、すべての死因が同じで、最悪最低の最凶外道魔王であるフリージア王国の女王プライド・ロイヤル・アイビーが起こす世界大戦に巻き込まれてだ。今回は今までの人生とは違うイレギュラーな要因を見つけた。アルメリア公国である。今までの人生には無かった国で、元々は公爵領だったらしいが、富国強兵な領で、独立戦争に勝利し、周辺の国を次々と併合、今や大国にのし上がっていた。もし、この国の国民になれば…生き残れるのでは。

毎回起きる夜会での婚約破棄イベントをパスし、荷物をまとめ、アルメリア公国へと旅立った。旅費は冒険者となり、冒険者ギルドでの依頼で稼ぎ、冒険者としてのランクも上げていく。今までの人生で得たスキルや魔法などが、今回は有効なことが役立っている。今までとは違う運命を感じる。今度こそ、長生きしてやるんだ。

アルメリア公国は遠かった。船を乗り継ぎ、漸く公国内に入れた。国境から公都までが遠い。国境の町は港町であったのだが、賑わっていた。田園風景地帯を馬で駆け、長かったゴールである公都へと着いた。

そこは高い防御壁で囲まれた街で、見た事の無い高い建物が理路整然と並ぶ町並みであった。この街では金貨などのコインは使えず、紙幣と言う紙のお金のみ使えるようで、街に入ると門の隣に両替商が並んでいた。交換するコインの発行した国別になっているそうだ。

見る物、聞く事の総てが珍しい。特に食べ物美味しく、見た事のない料理の屋台が並んでいた。この世の楽園と呼ばれているアルメリア公国の公都、その理由が分かった気になっていた。

仕事をやる為に冒険者ギルドを目指す。この街には冒険者ギルド本部があるそう、公都と行政区を繋ぐ道沿いにあるそうで、一旦、公都を出て冒険者ギルド本部へと……えっ？商業ギルド本部もあるんだ。錬金術師ギルド本部も……世界の中心か、ここは……う

ん？銀行って、なんだろうか？

お上りさん状態で冒険者ギルド本部に着き、求人情報に目を通した。

『王配別邸の住み込みメイド募集 衣食住支給、月金貨1枚』

とある。衣食住支給で月に金貨1枚って、高待遇じゃないか。王配の別邸なら、生き残る可能性も高まりそうだ。行政区で応募しているようなので、応募を試してみる。

◇

即決された。こんなにも高待遇なのに、なり手がいないらしい。なんで？イヤな予感がするが、即決された以上、断れない。

「じゃ、行きましよう」

私よりも歳下の少女が近寄り、私に触れると目の前の風景が一瞬で切り替わった。これって、転移術かな。探査スキルで周囲に危険生物がいることを感じている。そこは森の中で、見た事のない様式の建物が一棟が、ポツンと建っていた。ここって、どこ？

「紹介しますね。番犬のシロガネとクロです。あつちはこの森の主のザブトンです」

番犬？どう見てもフェンリルとケルベロスに見える。それにアレって災害級の蜘蛛じゃないのか？これなら、あのプライドが攻めて来ても、生き残れるかな。

「さあ、屋敷の中に」

屋敷の中に入ったのだが、なんか来ちゃいけない場所に来た気分である。あの人っ

て、一騎当千な剣姫のメルリス・レゼ・アルメリアじゃ無いのか？あつ！アルメリア公国だものね。そりゃ、いるか？そして、会いたくない人までいるよ。なんでここに、最悪最低の最凶外道魔王であるフリージア王国の女王プライド・ロイヤル・アイビーがいるんだ。

説明を訊くとメルリスは公国女王の母親で、プライドは王配の婚約者らしい。そうすると外道魔王は外道魔王にならないってことか？私が殺され続けたプライドは独身だったし。

「この子は新人さん？じゃ、ブートキャンプの参加者ねえ」

笑顔のメルリス。ブートキャンプって、なんだろうか？イヤな予感しかしない。

こうして私は、5年後に死ぬ運命から逃れ、メルリスと言う鬼軍曹の元で地獄の日々を送ることになった。

——クレア・カゲノ——

身食いつて病気だったらしい。病状が安定したらしく、一般病棟に移る事が出来た。この病の怖いところは、完治することが難しく、今後年一回の検診が必要らしい。そして再発すると、あの拷問と呼べる治療を受けることとなるそうだ。

「この青汁を毎食後に飲ませてください。量はジョッキ一杯が良いのですが、味が：

まあ、ティーカップなら3杯くらい飲ませてやってください」

見舞いに来た父親に主治医が説明していた。あの液体を毎食後に適量飲まないと再発する危険性が高いらしい。ここは、信者数世界最大の宗教の教皇公認で、世界唯一の身食いの治療施設らしい。

「この臭い……これを飲ませるのですか？」

臭いに既にヤラれている父親。

「現状は、これしか進行を遅らせる薬は無いです。冒険者ギルドで販売されているので、怪しい液体では無いですが……」

怪しくは無いが、この臭いは無いでしょう。うら若き乙女が常飲する液体では無いと思う。飲んだ後、数時間は吐いた息で私も周囲の者もヤラれるし。

「まあ臭いは慣れですよ。ここに住んでいる者の殆どが常飲していますし」

こここの住民は、きつと鼻が壊れているのだろう。

一触即発

— ケン —

新人の戦闘メイドは知識が豊富で良い。名前は…なんだっけかな。ええつと…：そうそう、リーシエ・イルムガルド・ヴェルツナだ。アイリス母のブートキャンプに付いてこれるらしく。中々有望な新人である。元々公爵令嬢で、悪役令嬢界ではテンプレの婚約破棄イベントから逃げて来たそうだ。その為、礼儀やマナーが完璧である。パーティー『エチゴヤ』に参加させることにした。

で、リーシエの薬師としての知識により、謎の樹木の正体が判明した。なんと、世界樹：ユグドラシルだと言う。

「だから、禁則事項で鑑定出来なかつたんですね」

と納得顔のマイル。世界樹と言えば、万能薬の原料である。葉を煎じて飲むだけで万能薬になるそう。この万能薬は無味無臭で、これではエリクサーもどきの立つ瀬が無い。

「蘇生まで出来る万能薬だけど、身食いには効果無さそうですよ」

とセイ。魔力留が出来はじめたマインに飲ませたが解消することは無く、エリクサーもどきを飲ませると解消したそうだ。

エリクサーもどきに世界樹の葉の成分を添加することで、完全万能薬、エリクサーもどき最新バージョンになった。今回の目玉は、死んで直ぐなら生き返ることである。たぶん、初七日までは魂は器回りに漂っているはずなので、死んでから七日以内なら蘇生は出来るはずである。まあ、試さないけど……いや試したよ。試したんだけど、蘇生すると魂の色が汚れるのだ。汚れた魂は地獄行き決定なので、なるべく蘇生はしない方向で運用しようと思う。

◇

また教皇から指名依頼が入った。身食いらしい患者を救って欲しいと言う依頼である。患者のいるサンデイス王国の離宮に向かった俺達。

そして今、目の前には、乙女ゲー『君に恋して』の悪役令嬢のアルベルティーナ・フォン・ラティツチエがいる。現在は王家の養女となりアルベルティーナ・フォン・サンデイスと名前が変わったそうであるが、確実に転生した日本人であろう。意識は無い。体内には魔力留が出来ている。身食いの末期症状のようだ。エルフなどの亜人であれば身体が腫れていくいくのだろうが、人間である以上、次の発作が生死の分かれ目であろう。

「治りますか」

彼女の主治医に訊かれた。

「たぶん、治ると思いますが、ここでは治療は出来ません」

「どうしてですか？」

どうしてって…あの臭いを王城に充満させていいのか？見た目が拷問な治療を王城内で出来ないと思う。きつとクレームの嵐だろうに。

「我々の治療施設で無いと無理です」

あの青汁専用のバスタブが無いと無理だな。ここまで酷いと、意識が戻るまで青汁に漬け込まないとなあ。それに万が一の場合、門外不出にした万能薬があるから、死んでも安心だし。

「そこをなんとか…」

「無理です。診察は終わりました。彼女をピックアップさせる気が無いなら、もう帰りたいんですがね」

もう一件指名依頼が入っている。この国の隣国であるゴラン国を殲滅し、アルメリア公国領にしてくれと言う依頼である。

ゴラン国はメインの産業が奴隷業と言うダークな国家らしい。王家は酒池肉林状態で王位継承権で血生臭い状況が続いている上、不老不死を求めて回復、治癒、蘇生、魂の輪廻、ありとあらゆる死を克服する研究しているらしい。全く以て教皇的にはアウト

の国家で、冒険者ギルド本部としてもアウト判定だそうだ。なので、潰してくれと…ゴユラン国の蓄えている古代の魔導具や研究資料や財宝を総て報酬として良いと言う好条件だったので、その依頼を受けた。

「国王と相談してみます」

「じゃ、1週間後にまた立ち寄りますよ」

離宮から立ち去り、その足で、ゴユラン国に侵攻したクラン『エチゴヤ』。開戦1時間ほどで制圧完了である。1週間掛けて報酬の精査と、国政の仕組みの改善、現地での有能な人材の確保をして、飛び地運営の下準備をしておく。

◇

1週間後、サンデイス王国の玉間で国王との謁見に臨んだ。

「なんだって…ゴユラン国が消えて、アルメリア公国領ゴユラン市になったと言うのですか?」

目が点になっている国王。

「聖シユルル協和国と冒険者ギルド本部からの要請で、アルメリア公国領としました」
「…」

「で、アルベルティーナ・フォン・サンデイスの件はどうされますか?こちらはどちらでも構いません。まあ、このまま死なせて上げるのも良いんじゃないですか?聞けば、嫌

がる彼女を無理矢理王家の養女にしたようですし」

「断れば、この国も落とすのですな？」

「飛び地運営は面倒です。敵対しない限りは、落としませんよ。落とされたいなら、そうですね30分貰えれば、落としますけど」

仲間を避難させて、王城内で『畏怖』すれば、簡単に王城は落ちると思う。

「お前は魔王か？」

「俺を魔王認定すると聖シユルル協和国、アルメリア公国、フリージア王国が敵対行動に出ますが、覚悟は出来ていますか？」

教皇に聖者認定されているのに、この国独自に魔王認定すれば、それこそ宗教戦争が勃発である。

「うっ……」

「今の国王の言葉を聞かなかったことにしてあげますよ。慰謝料としてアルベルティーナを頂きます」

「ち、ちよつと待てー！」

待てと命令？待つ訳無いだろ？こっちは譲歩しているんだからな。救える命は救いたいので、アルベルティーナをお持ち帰りにして、死の森に帰る俺達。

連れ帰ったアルベルティーナを全裸にしてバスタブに入れ、青汁に漬け込んだ。口か

らユグドラシル入りのエリクサーもどきを飲ませていく。

「魔力留が解消していきます」

風魔法で臭い除けをしながら、鑑定をしているマイルの声は弾んでいる。これで身食いの特效薬が出来たかな？治療と並行して、リーシェ、マイン、ソフィアにはゴユランから持って来た資料を読み込んで貰い、内容をまとめて貰っている。身食い関連があれば、御の字だな。

——クレア・カゲノ——

一般病棟に移り、体力回復プログラムとしてブートキャンプに参加させられている。なんだ、これは…参加者のほとんどが私よりも強い。油断すると殺されかける。

「瀕死なら大丈夫だから、死なないようにね」

パーフェクトヒール持ちがいるらしい。神官の最高魔法じゃ無いのか、それって…ここって、病院じゃ無いの？祖国では騎士団にスカウトされる位の剣技を持っているのだが、ここでは赤子同然に扱われている。なんで、みんな…いや、皆様はそんなにお強いのですか？

「ほとんどがSランクの冒険者よ。近衛程度じゃ勝ち目は無いわ。いい？一騎当千になりなさい」

無茶なあ……この病院はどここの国と戦っているんだ？世界地理学で習った戦ってはいけない国、聖シユルル協和国、アルメリア公国、フリージア王国って習ったけど、その辺りと戦うのか？無理だ……早く、退院しないと、兵役を課せられそうさ。そう
思っ、焦っていました……

退院の日に知ったこと……この病院を運営しているのはアルメリア公国で、後ろ盾は聖シユルル協和国……私のブートキャンプの相棒はフリージア王国の次期王女だった。

カルチャーショック

——ケン——

あの新薬が効いたのか、アルベルティーナが意識を取り戻した。

「くさああああ〜」

が、第一声である。まあ、そうなるか。目覚めた彼女に、コレまでの経緯とこれからを知らせておく。

「ここに住まないと、危険が一杯なんです。そうか、完治は出来ないまでも、軽減は出来るんですね」

「魔力留の発生原因が分からないと、完治させられない。現状、ここには同じ身食いの者が十名近く、住んでいたりする。アルベルはどうする？」

「うん……ここって日本人の転生者が多いんですね。出来れば、ここに住みたいけど、王様が許してくれるかな」

王位継承者の証である王家の瞳と言われる目を持っているアルベルティーナ。王家が簡単に手放すとは思えないらしい。

「患者さんファーストだから、王家の言い分は聞かない。そうだ、君の義弟君に会って、君の置かれている状況を聞いてきた」

アルベルティーナに骨ツボを手渡した。

「これって、お父様の？」

「そうだ。靈廟に保管すると、また盗難されるかもしれないから、ここの君の部屋に安置しておくが良い」

アルベルティーナの義弟と義母と話し合った結果、ここにアルベルティーナを住まわせる方向になった。ここなら、王家からの茶々入れは無いと思うし。あつたら、潰すだけだな。

「あと、うちの公都に君の商会の本店を置いて貰う」

アルベルティーナはラティツチェのローズ商会の商会長だそうだ。

「あの…公都に住めますか？」

「もう少し、症状が和らげばね」

「呼んで欲しい人がいます」

「義弟、義母を含めて領民ごと、アルメリア公国に転移させてある。場所は公都から馬車で1時間の距離だよ。ラティツチェ市って名称にしてある」

「ありがとうございます…」

骨ツボを抱き締めて泣き崩れていくアルベルティーナ。

——アルベルティーナ・フォン・サンデイス——

商会の名義名がサンデイス姓にしてしまったので、この名前で生きる事になった。まあ、ただのアルベルティーナとして生きていくだけだな。体調の変化に対応しやすいように、私は侍女のアンナと公都に住む事にした。私の体調に変化があれば、私の影であるレイヴンが冒険者ギルド本部経由で別邸に知らせしてくれることになっている。

「ここは住みやすいですね」

まだベッド生活の私。侍女のアンナが身の回りの世話をしてくれている。

「そっちな？」

私は別邸とこの部屋しか知らない。まだ公都の散策には出られていない。別邸では畳に布団を敷いていたのだが、アンナが和室の扱いに慣れていないので、現在住んでいるマンションは和室も洋室もある部屋である。

流星は公国のトップ陣に元日本人の転生者が多い為か、日本の住環境を再現してくれていた。洗浄乾燥便座付きの水洗トイレ、シャワー完備、ゆったり寛げるバスタブがある風呂場、システムキッチン、畳に押し入れ、和食の給食などなど。行政区などの食事はセントラルキッチンで調理する関係で、住民には有料であるが宅配弁当が配達される

そうだ。味噌汁に焼き魚に卵かけご飯：アンナが卵かけご飯に面を喰らい、箸に手こずっている。

「なんで、お嬢様は平気なんですか？」

「慣れかな？」

別邸での慣れつてことにしてある。実際、元日本人の人口密度の高い別邸だったので、食事は和食中心で箸で食べる生活であった。一番の驚きは、別邸での公用語は日本語であったことか。

それにしても、領地ごと転移つて、凄く荒技だよ。きつと、王家は驚いているだろうな。ラティツチェ領にはもう誰も住んでいないんだから。公都に商業ギルド本部がある為、本店移転の影響は少なかった。まさか公都にアズータ商会の本店があるとは：毎日アンナにチョコレート菓子を買ってきて貰っている。

「エチゴヤの本店と、最近流行りだしたミツゴシ商会の本店も、公都にあるんですよ」

別邸で知ったこと。アズータ商会、エチゴヤ、ミツゴシ商会は、アルメリア公国の国営企業に近いこと。ローズ商会も準国営企業にしてくれるみたいだ。国営企業になると、エチゴヤの通運事業を利用でき、遠方の国々への配達が可能になるそうだ。実際、アズータ商会はチョコレート菓子の通販を世界規模で行っているし。

この前、ミツゴシ商会からスパイダーシルクを融通してもらい、義母様のドレスを

ローズ商会で作ってプレゼントしたら、凄く喜んでくれた。グループ企業間の取引は無理の無い範囲で融通してくれるそうだ。

——ガンダルフ・フォン・フォルトウナ——

「どうだ？アルベルティーナの行方は分かったか？」

アルベルティーナの行方を捜させている諜報員のリーダーに訊いた。

「申し訳ありません、依然として不明ですが、ローズ商会の本店がアルメリア公国の公都に移転したことから、そこにいると思われれます」

孫娘であるアルベルティーナが離宮から消えた。王が教皇公認の聖者を魔王と呼んだことの報復だったらしい。なんと浅はかな言動だろうか。しかもその相手は、ゴユラン国を短時間で征服した勢力が味方らしい。あまり責つ付くと、この国すら落とされる危機があるそうだ。

「見つけ次第、穩便にアルベルティーナを連れて帰ってこい」

「そう言いますが、アルメリア公国は遠いのです。まだ、誰もアルメリア公国の領内に到達していないようです」

船を乗り継いで行くしか無い大陸にある国。そんな遠くから隣国を攻め落としたのか。全く戦争の予兆も、戦争自体も感知出来なかった。どうやって移動したんだ？

「冒険者ギルドからの情報ですと、アルメリア公国の戦力には転移術遣いが数名いるそうです」

転移術だと…そんな夢物語にしか登場しない魔法が使えるのか。それならば、納得であるが、それは脅威である。ダイレクトに玉間に転移をして王を殺害することが可能ではないか。

「分かっている戦力はSランクの冒険者パーティーが2、Aランクの冒険者パーティーが1で、勇者、聖女が含まれているそうです」

勇者と聖女が加担しているのか？魔王相手でも勝てる戦力じゃ無いか。うーん…

「厄介なことに、アルメリア公国は聖シユルール協和国、フリージア王国と同盟を結んでいるそうです」

ケンカを売るには危険な相手だな。穏便にアルベルティーナを連れ帰らないと、この国は消えるな。

婚約破棄は突然に

——ケン——

「この国を目指してサンデイス王国の間者や隠者達が放たれているようです」

アルファから定時連絡を聞いている。アルファは独自に諜報組織を作り上げ、世界中の情報を集めてくれているようだ。

「目的はアルベルティーナの奪還かあ……彼女の意思は無視なんだろうな」

「どうします？羽虫は消しますか？」

「無理はしなくて良いが、ヤルなら証拠は残すなよ」

「わかりました」

王家の瞳を返せば、諦めてくれるのか？下手に奪うと、アルベルティーナが失明しちゃうしなあ。どうするかな。

「王家の瞳の組成を分析して、王家の誰かの瞳を錬成するのは？」

と、俺の心を読んだのかマイルが、そんな提案を上げて来た。

「マイルは分析出来るか？」

「やってみます」

目の前からマイルが消えた。アルベルティーナの元へ転移したようだ。じゃ、アルベルティーナを強引に王家に引き渡した人物の瞳を錬成するかな。でも爺だから老い先が短いか。若いやつで誰かいらないか？王子は二人いるはずだが…碌な王家でも無いし、潰すか？

そんなことを悩んで居る俺の元に、冒険者ギルド本部のギルマスがやってきた。

「支部のギルマスが、あなたたちの個人情報をもサンデイス王国の重鎮に漏らしたようです」

「この国に向けて隠者や間者を大量に撒いたらしいんだが…潰してもいいかな？」

「こちらでもサンデイス王国を調べましたが、公にはなっておりませんが、二人の王子は共に犯罪歴ありのようです。碌な王家では無いでしょう。アルベルティーナ様の件も、拉致して離宮に監禁した後に、強引に養女にしたようですし、宰相の息子は麻薬中毒らしいです」

「こんな王家は要らないだろう。どう考えても…ゴユラン国の王家も酷かったが、その隣国も酷いなあ。」

「代わりになる人材はいるか？飛び地過ぎて統治は無理だよ」

「隣国だったゴユラン市と併合して、統治は無理ですか？」

「無理だろうな。規模がデカ過ぎる」

「では代わりの人材を見つけ次第、掃除をお願いします」

冒険者ギルド本部から指名依頼になりそうだ。

——ダリヤ・ロセツティ——

「すまない、ダリヤ。婚約を破棄させてほしい」

結婚式を明日に控え、新居に引っ越しをした私の目の前で、そんなことを言う婚約者。頭の中が真っ白になった。婚約して2年も経つのに……

「どうして……」

「俺は……俺は真実の愛に目覚めたんだ！」

自信有り気と言う婚約者。私と彼は、双方の父親同士が決めた婚約者であるが、目の前でそんなことを言われると、流石にショックである。既に、新居に家具などを家から運び込んだ後だよ。どうするの？

この新居には、新しい婚約者と住むから、出て行ってくれと言う。理不尽過ぎる。言いたいことを言い終えると婚約者は新居から出て行った。

私も新居から出て、引っ越しを手伝ってくれた友人宅へ向かう。取り敢えず、家具を

回収しないと、処分されてしまうかもしれない。

「いよいよ、明日だね。よっ！幸せ者」

と、はやし立ててくる友人。

「婚約を破棄されたの。申し訳ないけど、家具を私の住処に戻してください」
輸送業をしている友人の旦那様にお願いをし、頭を下げる。

「え？冗談だろ？式は明日…なあ、マジか？あの野郎…」

怒り心頭になる私と婚約者との共通の友人である彼。

「もう、あの人のことは考えたくないの。お願い、引き受けてください」
「分かった。後で運ぶよ。アイツを見つけたら殴っておくよ」

殴っても何も変わらないと思う。

◇

婚約破棄をされたので、婚約時の契約書を破棄しに商業ギルドを訪れた。受付で婚約時の契約書の履行立ち会いと、共同名義の仕事清算の為の公証人をお願いして、婚約者との契約破棄をする予約をした。

重い身体を引きずるように、家に帰り着いてしばらくすると、婚約者が訪れた。

「悪いんだけど、婚約の腕輪を返して欲しいんだ」

この世界では、いやこの国では婚約指輪では無く、婚約指輪と結婚指輪を足した意味

合いで、婚約の腕輪を男性から女性に送る習慣がある。

「すまない。エミリヤに婚約の腕輪を急いで作りたいんだが、時間と、その…色々ゆとりがなくて……」

エミリヤとは、彼の新しい結婚相手である。アクセサリーケースから、彼から貰ったアクセサリー類を取り出し、その辺にあつた袋に入れて、彼に差し出した。

「商業ギルドから連絡を貰った。じゃ、また明日」

そう言つて、彼は去つて行つた。なんで、こんな男の為に2年間も尽くして来たんだろうか。

翌日、本来なら結婚式だった日なのに、商業ギルドで婚約破棄の手続きを二人でしている。共同財産の精算もする。私も彼も魔導具師であるため、魔導具の売り上げを商業ギルドの共有口座に預けてあつた。残高は金貨40枚の為、20枚ずつ分配された。

そして婚約時の契約により、破棄の原因となつた者は違約金を金貨12枚払うとあり、彼の取り分から金貨12枚を受け取つた。

そして問題は発生した。共同名義の家である。お互いに金貨50枚ずつ出して購入したので、保有する方が相手に金貨50枚を払えば、保有することが出来るのだが……「私が保有しますので、代金を払います」

彼は金貨28枚を私の目の前に置いた。はあ？足り無いぞ。

「お支払いが終わるまで、名義のご変更はできませんよ?」

ギルド職員である立会人から待ったが掛かる。

「ええ、足りない分は、直接ダリヤに返していきます。ダリヤの了承があれば、役所で名義の変更は可能ですよね?」

絶句する私。何を言っているんだ? 婚約破棄の原因が言う台詞では無い。逆に謝料を貰いたい気分である。どこの世界に婚約を破棄した女から、浮気相手と住む家の代金を借りようとする男がいるのか? それも立ち会い人、公証人の目の前で…

「支払いの無い状態での名義変更は大変トラブルになりやすいので、お勧めできませんが……いかがなさいますか?」

公証人が彼に待ったを掛けた。

「名義の変更は支払い後でお願いします」

勿論、私も拒否である。原因は彼にあるのに、なんで私が後始末に参加しなければいけないのだ?

「それは困る! エミリヤに、すぐあそこで暮らすと約束したんだ!」

私に詰め寄り、言い切った彼。開いた口がふさがらない。何を言っているんだ、コイツは……決定事項にするなよ!

「オルランドさんなら信用がありますから、商業ギルドでお貸しできますよ」

コイツはダメだと思ったのか、立会人から助け舟が出された。

「今後のお仕事もありますから、毎月の分割でお貸ししましょう。新しい女性とお住みになるのであれば、『清算』はしつかりなさらないと、嫌われますわよ」

「……すみません、お願いします……」

ギルド職員からの声に、蚊の鳴くような声で返事をした彼。コイツは……ああ、結婚しなくて良かったのかもしれない。その後、沈黙が支配する部屋で、婚約破棄の関連と借金の書類を書き終えると、彼は逃げ出すように部屋から出て行った。これで、アイツとは無関係だ。

「ダリヤ嬢、お疲れ様でした」

そう言いながら、ギルドマスターが知らない男性二人と一緒に入って来た。

「心機一転出来る話を持って来ましたよ」

「はあい？」

スカウト

— ケン —

商業ギルド本部のギルマスから掘り出し物クラスの人材がいると聞いた。

「魔導具師なんだが、結婚式の前日に婚約破棄されたそうなんだよ」

悪役令嬢か？

「魔導具界のサラブレッドなんだが、環境が良くないみたいだ。どうかな？」

どうかなって、俺がパトロンになれってことか？

「彼女自体はドライヤーを発明し、父親は給湯器を、祖父は魔導ランタンを発明したんだよ」

どれも、別邸で使っている。勿論、俺やマイルが作った物だが。

「力になって貰えないか？」

「公都に連れてきていいのかわか？」

「ああ、彼女が望めばだが……」

彼女？女性なのか……悪役令嬢の可能性が高いなあ。

◇

翌日、本部のギルドマスターと共に、件の女性が婚約破棄の手続きをしている商業ギルドの支部へと向かった。彼女を見たのだが、魂が二重になっている。間違ひなく転生者だろう。なんとか助けて上げたいなあ。

手続きが終わったのか、男性が部屋から飛びだして行つた。その部屋に三人で押し掛けた。

「ダリヤ嬢、お疲れ様でした」

支部のマスターがそう彼女に告げた。怪訝な表情で俺達を見つめている彼女。

「心機一転出来る話を持って来ましたよ。こちらは商業ギルド本部のグランドマスターで、隣にいらつしやるのは、アルメリア公国に本店があるエチゴヤの商会長殿だ。君をスカウトしに来たそうだよ」

「スカウトですか？」

「そうだよ。君のこだわっている緑の塔と共に、引越さないか？新天地の新しい環境で、魔導具を作り続けて欲しいんだ」

怪訝な表情は崩れない。

「君の思い入れのある緑の塔を、俺達の領土にまるまる転移させる。魔導具作りや、古代

の魔導具の研究をして欲しいんだよ」

彼女の目の前にゴラン国からせしめた古代の魔導具を置いた。

「これは…」

「失われた技術が使われているかもしれない。公都には魔導具のプロが居なくて、研究が出来ないんだ。協力してくれないか？」

怪訝な表情は崩れ、興味を持った表情になり、古代の魔導具を調べている。

「君、転生者だろ？」

彼女の耳元で、囁く様に伝えた。はっとして表情で俺を見た彼女。

——ダリヤ・ロセツティ——

運命的な出会いをした日に、彼の転移術で、アルメリア公国の行政区に緑の塔と共に転移した。凄い、敷地まるごと転移出来るんだ。

「取り敢えず、今日は別邸において。日本を味わって欲しい」

彼は私と同じ元日本人だった。いや、今もかもしれない。彼は私と違い、この世界に召喚されたようだ。彼の言う別邸へ一緒に転移した。そこには元日本人が集まっていた。こんなに多くの元日本人が、この世界にはいたんだ。畳敷きの部屋に案内され、イグサもどきの臭いを嗅いだ。押し入れを開けると、そこに布団一式が入っていた。

「今日は布団で寝るといい。希望があれば、緑の塔に和室を作っても良いよ」

「本当ですか。作って貰おうかな?」

「ここに住んでもいいし、行政区にある和式の寮に住んでもいいよ。選択するのは君だよ」

問題は食事だな。

「食事はどうなりますか?」

「緑の塔の場合は自炊か宅配弁当、寮の場合は作り置きのパイキング形式、ここなら出来たての和食が食べられる。実際、転生者のほぼ全員がここで暮らし、朝になると王都に出勤していく」

緑の塔は仕事場である。ならば、ここに住んで出勤もありかな。

——イルマ・ヌヴオラーリ——

正式に婚約破棄をした翌日、緑の塔を訪ねたのだが、塔のあった場所は更地になっていた。ダリヤはどこに行ったんだ? 幼なじみの私を置いて…何も言わずに…商業ギルドを訪ねて、ダリヤの行方を訊いた。

ダリヤは、昨日引越しをしたそう。緑の塔ごと…はあ? 塔をどうやって引越したんだ? 頭の中に疑問符が埋めていく。

「魔導師の転移術で塔と一緒に、新天地に転移していったよ」

転移術って、お伽噺の中の事で無く、実際に存在したのか。って、

「どこにですか？」

「アルメリア公国の公都だよ」

アルメリア公国の公都って、商業ギルド本部がある場所だったわねえ。ここからは船を乗り継いで、1ヶ月くらいかな。

「連絡は取れますか？」

「手紙であれば、届けられる」

じゃ、手紙を書こう。私も一緒に生きたい。ダリヤを一人になんかささせられないよ。

幼なじみとしては…

服飾職人をスカウト

— ケン —

別邸にある非売品の魔導具を見て、調べているダリヤ。現在、温風乾燥付き洗浄便座の水洗トイレに釘付け状態である。あれを魔導具と言っているのだろうか？まあ、魔力が無いと洗浄出来ないし、水洗で出した物を流せないけど。魔力無し of 者の為に、魔力の充填装置が取り付けてあり、魔力のある者が魔力を充填させる決まりになっている。

次に興味を持ったのが、風呂場に置いてあるシャンプーと液体石けんと、その容器である。魔導具では無いんだけど…

「これって、魔導具では無いんですか？」

「そうだよ。錬成で作ってあるんだ。だから、量産は出来ないから、非売品だよ」
行政区で働く者には分けているけど…

「錬成術ですか。便利ですね」

便利である。単一の物質であれば、想像したイメージ通りに錬成出来るし。錬金術で合成した物質であれば、単一の物質と見なされて、錬成の対象にもなるし。

現在、錬成士は俺とマイルの他、身食い対象者であるマイン達である。身食い対象者は魔力が溢れないように毎日一定量以上放出しないといけないので、錬成術を教え、毎日何かしらを錬成させていた。主に世界樹の端材で錬成するフィギュア人形であるけど：フィギュア職人モードのマイルは関節部分に球体関節を組み込み、可動できるようにしてたり：

いので、錬成術を教え、毎日何かしらを錬成させていた。主に世界樹の端材で錬成するフィギュア人形であるけど：フィギュア職人モードのマイルは関節部分に球体関節を組み込み、可動できるようにしてたり：

「魔力が少ないけど、魔力量を増やせば、錬成術を教えてもいいぞ」

「お願いします」

商業ギルドで見た時は暗い女性であったが、今ではコゼット、セイと仲良くなり、笑顔で生活している。前世の年齢の関係で、成人前だったマイル、マインとは世代が違うらしく、話題が合わないらしい。前世の年齢的にはセイに近いようなことを言っていたかな。女性に年齢を訊くのはタブーなので、詳しくは分からないけど。

—— イルマ・ヌヴォラーリ ——

ダリヤと手紙をやりとりをして、アルメリア公国への移住を決めた。亭主の転職先を

確保してくれたそうで、夫婦二人でアルメリア公国へと旅立った。船を乗り継ぎ約1ヶ月：漸くアルメリア公国の土を踏めた。ここからは馬車で2週間かあ。

やっと着いた公都は、どこかのお城かって感じの防壁が高くそびえ立っていた。

「あれは壁でなくて、集合住宅なのよ」

と、ダリヤが教えてくれた。街の中の建物はデカイものばかり。こんな都市は見た事が無い。

「今日は王都の宿を予約してあるの。疲れただろうから、今日は休んでね」

街は中心へ向かう程に、建物の高さが低くなっていき、中心部は広場になっていた。その広場に面した通りに、

「ここが私のお店：：ロセツティ商会よ。上の階の空き店舗がイルマのお店になるの」

お店を用意してくれていた。

「ありがとう：：ダリヤ：：」

「ううん、イルマ、いつもありがとう。何も言わずに立ち去ったお詫びだから：：」

ダリヤは笑みを浮かべて、そう言った。あの町では、こんな風な笑顔は見る事が減っていたのに。

「ねえ、幸せ？」

「とつても。いい上司に巡り会えたし。魔導具を切磋琢磨して作っているの」

ダリヤはどこかの商会から独立したそうだ。

「その上司には会える？」

幼なじみとして挨拶をしたい。

「昼間は難しいかな。世界中を飛び廻っているつから」

その上司は世界を股に掛ける商人なのか？

——ケン——

セイが女の子を産んだ。名前はリーアだそうだ。既に決めてあったらしい。

「この子が聖女だったら、次期教皇の座をプレゼントしよう」

この聖女は、娘に重責をパスするようだ。で、出産リレーが途切れたと思ったたら、デイアナの妊娠が発覚した。

「間違いなく、あなたの子供よ」

とセイ。ええ、やった覚えが無いんだが…最近、野獣化していないはずだぞ。なんか納得できなくて…久しぶりの散歩に出た。マイルと共に…

「父親になった実感がまるで無いんだけど…」

「そうですか？私もマインもケンさんのことを父親のように慕っていますよ」

「実年齢は変わらないはずだけど…」

ちよつとシヨックだな。せめて兄と思つてくれると嬉しいのだが。

「ケンさん、歳を誤魔化していたり…」

いや、まだ高校生のはずだ。召喚前の世界でならば、子供が居ることは無かつただろうに。

「あれ？川に浮いているのつて、人では？」

マイルの指差した先には谷があり、底を川が流れているのだが、マネキンのような物が浮いている。咄嗟に『強奪』で、ソレを引き寄せた。

「全裸の女性…息は無い…脈も触れていない…」

門外不出のアレを取り出し飲ませてみる。

「ぐふっ！」

あまりの臭さでむせたようだが、呼吸が再開したようだ。全身を見ると擦り傷、切り傷が無数にある。エリクサーもどきを頭から掛け流し、三人で別邸に転移した。

—— アナスタジア・シャデラン ——

小さい頃から、私は母親の着せ替え人形だった。まるで生きているみたいねえと、私の髪に櫛を入れる母親、生きているみたいじゃなくて、生きているんだよ！

私には妹がいたが、母親の目には妹が入っていないようで、私だけを着せ替え人形と

してかわいがっていた。

結婚適齢期になると、両親は私の嫁ぎ先探しに躍起になっていた。少しでも良い家柄で、相手の性格、年齢は問わないらしい。嫁ぐのは私なのに、私には選択の自由は無いそうだ。部屋に閉じ込められ、日焼けすることを禁じられ、不自由極まりない生活を強いられた。

妹マリーは幼い頃から、馬車馬のように働かされていた。父親の代わりに商売相手と交渉したり、重い荷物を運んだり：私達姉妹には自由がなかった。人間として扱われていないのかもしれない。

嫁ぎ先が決まり馬車で送り出されたのだが、馬車の御者に襲われた。ドレスを斬り刻まれ、私から衣服を剥ぎ取っていく。服飾職人になりたかった私は、裁縫道具を身に付けていた。ハサミで御者の男を威嚇し、身が汚れる前に自ら谷へと身を投げた：

◇

柔らかい物に包まれている。はっとして、目覚めると知らない部屋にいた。フワフワの布団に包まれていた。私の物では無いネグリジエを着ている。ここはどこ？

「君をスカウトしたい。服飾職人なんだろう？」

知らない男性が現れ、そんなことを言う。服飾職人になることは夢である。その服飾職人としてスカウトされている。戸惑う私。

「ここはどこですか？」

夢なら醒めないで…お願い…

「ここはアルメリア公国の別邸だよ」

アルメリア公国？どこ、それ…

「日課の散歩をしていたら、川に浮いていた君を見つけて、保護したんだよ」

そうだ！襲われて、川に身投げしたんだ。

「仕事については、トウーリ。君が教えてやってくれ」

「トウーリです、宜しくね」

可愛らし女性が、そう私に告げた。

珍客到来

— ケン —

棚からぼた餅風に、念願だった針子をスカウト出来た。後は聖女だなあ。教皇に紹介して貰おうかな。聖女要員はセイとマリアと修行中のマインがいるが、まだ足り無い。聖女もどきとして俺とマイルもいるのだが、胡散臭さ満載であるし、あのエリクサーもどきは無茶苦茶臭いし。今後の身食い治療要員として、2, 3名は魔力制御の出来るヒーラー職が欲しいところである。

教皇に聞いたのだが、各国で聖女の基準がまちまちらしい。マリアのように光属性持ちを聖女としている国があれば、セイのような聖属性持ちを聖女とする国もあるようだ。いや、下手するとヒール持ちも聖女になる国もあるらしい。光の場合は癒やし中心で、聖の場合は祝福中心と役割が違うはずなのだが

：

「近々、聖女が一人廃業するらしい。それをスカウトしてみてはどうだ？」

教皇の話によれば、お決まりの婚約破棄イベントを計画している神殿長のバカ息子が

いるそうだ。そのイベントの被害者が聖女だと言う。

「で、その子は本物?」

「ああ、本物だよ。後、聖属性の強い子がいるんだが、それは手配中だ。手配が出来たら知らせる」

この教皇も腹黒いからなあ。何を計画しているんだ?

最近、冒険者ギルド本部と教皇の指名依頼をバシバシと受け付けていたせいか、冒険者ランクがSSに上がっていた。これは喜んでいいのか? 厄介ごとが増えるのだろうか?

王家の瞳問題は、解決した。王子二人の瞳を錬成して、王家の瞳にしてあげた。因みに見た目だけなので、子供には100%遺伝子しない。この事実は王家には内緒である。術料はアルベルティーナの身柄の確保である。これで、浚われる心配はなくなるであらう。

——セイ——

子供を産んだのに胸が大きくなる。うーん、ちよつと納得がいかない。そんなことを授乳時に悩んで居た頃、懐かしい人が、私を訪ねてアルメリア公国の公都にやってきてくれた。別邸から行政区の屋敷に転移させて貰い、出迎えの準備をしていく。

「セイ！」

駆け寄って来た少女。私の召喚後に初めて友人になってくれたエリザベス・アシユレイである。

「ベス……久しぶりねえ」

彼女を愛称で呼ぶと優しい笑顔を向けてきた。問題は彼女の護衛達である。元スラントニア王国第三騎士団……その団長であるアルベルト・ホーク様。ケンが手をくださった所長と友人であつた人物である。

「セイ、迎えに来たぞ」

「迎え？」

「迎えてどういふことですか？ 私はこの国の国民ですけど……」

「可哀想に。洗脳されたのか？ さあ、一緒に帰ろう、スラントニア共和国に」

「帰るべき場所は別にあります。娘が待っていますし」

「娘？」 孕まされたのか？ アイツに……」

私に詰め寄って来たホーク様。その彼を払いのける私の護衛であるリーシエ。

「聖女様に詰め寄るなよ」

切っ先をホーク様に向けるリーシエ。

「貴様……アイツの仲間か？」

「それは、この国に敵対するってことだよな？」

突然、ホーク様を含めた第三騎士団の姿が消えた。この国に敵対する者は結界により総て、聖シユルール協和国の地下牢へ送られる。突然のことにベスが固まってしまった。

「この国の防衛システムで、この国に敵意、悪意を持つ者は、聖シユルール協和国の地下牢へ転送されるんですよ」

「聖シユルール協和国の地下牢に？」

「ええ、その上で取り調べをして、正当な裁判を受け…罪があると判断されれば、それ相応な場所で教育されるんです」

「ホーク様は…」

「分かりません。教皇様が適切に処置を為さるでしょう」

聖女と聖者のいる国に敵対したんだもの…それ相当の罰は与えられるのでしょいうね。

「セイ…洗脳されたの？」

心配そうに私の顔をのぞき込むリス。

「洗脳なんてされないわよ。聖女を洗脳って、出来る人はいないと思う」

「それよりも、娘って？」

「産まれたばかりでリーアって言うのよ」

「誰との子供？」

「結婚をした相手の子供だよ」

「ええええええ！結婚したの？」

リズの問いに頷く私。結婚出来ない女と思われていたのかな？

「旦那様はどんな人？」

「毎日仕事で飛び回っているわ。そういう点では真面目かな」

「商人？」

「でもあるし。この国の王配だよ」

「王配？じゃ、セイは側室？」

「そうなるわね」

「それでいいの？セイは…」

心配そうに、泣きそうな顔で私を見つめるリズ。

「うん。子作りは私が主導権を握ったしね。私も彼も統治には興味が無いし」

「ああ、だから王配なんだ」

そう、女王の配偶者なんだよ、彼は…表的には聖女の夫って立場になるんだろうけど

…うふっ

次期教皇候補から逃げる為の人材

——ケン——

アナスタジアはプライド向けの男装衣装を何点かデザインしていた。向こうの世界的に言えば、ツカ好きってことになるのか？

「プライドさんは男装も女装も似合いますね。デザインのしがいがあります」
「そうか…女装って言われると、妙な気分になるけど…」

プライドとティアラとの新郎新婦デザイン画は、ティアラとアイリス母が取り合いをしていた。それはそれで絵になるデザイン画であった。

「針子仕事はどうだ？」

「トウーリさんに習っています。デザインから裁断に持ち込む勉強中です」

どう裁断すれば、生地が無駄が少なくて済むかが難しいらしい。趣味ならば気にしないで良いが、商売だから無駄は少ない方が儲けが出るのだ。

「まあ、時間はある。無理のない範囲でがんばれ」

「ありがとうございます」

生地が別邸ではスパイダーシルクしか無い。綿花とか羊毛も手に入れた方がいいかな。行政区にある植物研究所でセイが綿花の改良をしているそうだ。羊毛は：牧場を作らないとダメだな。アルベルティーナの領民に頼むかな。

セイを訪ねて来たエリザベス・アシュレイは、この国に亡命した。元スランタニア王国は貴族制度を無くし共和国になったせいで、貴族であるエリザベスの生活が苦しいらしい。貴族がいきなり平民並の生活水準って、拷問レベルらしい。贅沢三昧が出来ない。現在、エリザベスはセイの秘書官になっていた。

ここ、アルメリア公国でも貴族制は廃止の方向で、爵位から部長、課長、係長など、役職制に意向中である。国内全戸常備政策の切り札である温風乾燥お尻洗浄便座などにより、生活レベルは、以前より向上しているせいかな、元貴族からも不平は出ていない。



日課の散歩：マイルと共に。今日の散歩はダリヤの住んでいた王都周辺である。新しい魔物や植物、食材があると嬉しいのだが。王都の周辺には森があり、そこを探索することにした。森と言えば魔物とキノコだよ。道沿いを進んでいくと河原に出た。川魚もいいなあ。川海老いいかな。

川海老を探していると藪の方からガサゴソと音がした。俺とマイルは咄嗟に臨戦態勢を取ると、

「……やつと、道……」

藪から遭難者が出てきた男性が一名。なんか血まみれなんですけど……

「あれって、魔物の血みたいですよ」

マイルが鑑定をしてくれた。返り血だったみたいだ。

「……み、水……もらえ……な……?」

マイルがウォーターボールを遭難者の口に打ち込んだ。

「……生き返った……ありがとう……」

男はその場に倒れ込んだ。ここに放置しておく、後味が悪いので、遭難者を商業ギルド支部へ強制転移させておいた。あそこなら誰か助けしてくれるでしょう。さて、散歩を続けるか。

——カロリーナ・サンチエス——

我が家は代々優秀な人材を輩出してきた名家である。なのに私は……見た目も中身も只の凡人であった。対して姉のフローラは才色兼備の上、聖女としての才能があった。見比べられれば、私はポンコツに見えるだろう。

そんな私にある話が舞い込んだ。

「聖シユルル協和国の教皇様より、そなたを侍女として雇いたいと申し入れがあった。これは名誉なことだぞ」

と、王様。名誉なのは国であつて、私では無い。教皇様に人材を送り出したとなれば、国にとつては名誉なことであろう。

「ゆくゆくは次期教皇様の愛人と言うことになるかもしれない」

それは、我が家にとつての名誉か？

そして、私は国と家によつて、教皇様へと売られた。

◇

教皇様の使いの者と教皇様の元へ。

「ケン、どう？この子なのよ」

「確かに聖属性だな。魔力制御が出来ていないのか駄々漏れなのが気になるが……」

教皇様と男性が私について話をしている。彼が次期教皇様なのだろうか。

「魔力制御できれば素晴らしいですよ？」

「ああ、次期教皇も夢では無いな。もし、この子が次期教皇になれば、俺達はお役御免で

いよいよな。」

へ？次期教皇の座？私が……何かの間違いでは無いのか？

「それは彼女しだい。現状の候補はセイとケン、あとリーナちゃんだからね」

「じゃ、コイツを一人前の聖女にすれば、俺達はお役御免でいいよな？」

「聖女と教皇は別物よ」

「じゃ、行くぞ」

男性が私の肩に手を乗せると、目の前の風景が一瞬で変わった。教皇様の部屋であったのに、森の中にいた。

「今日から、この家で暮らしてもらおう。聖女見習いとしてな。現在、ここには聖女が二名、見習いが一名いるから、一緒に研鑽をしろよ」

家の中に連れ込まれた。へ？玄関では靴を脱げって？ここって、どこの様式の建物なんだ？

教皇の掌の上

— ケン —

あの聖女見習いの教育は、教皇からの指名依頼扱いとなった。経費をたんまりと貰うか。聖女の力が駄々漏れのせいか、植物の発育が良い感じである。

「いいなあ。祈りを捧げずに聖女の力が出るなんて」

セイが羨ましそうにカロリーナを見つめていた。

「凄いですね」

光の聖女のマリアは驚いている。聖なる力が目で見えているのだろう。

「でも、駄々漏れが無くなると、身食いになりそうですね」

と、マイルが警鐘を鳴らした。確かにそれはあるな。どうするかな。このまま駄々漏れでもいい気がするな。

「取り敢えず、意識して流すようにしてみても。漏らす分は地面に流す感じで」

電気と同じで漏電予防はアース接続だ。

「分かりました。やってみます」

聖女組と別れて、緑の塔にある魔導具研究所と書かれた部屋に移った。魔導具研究室は俺とマイル、ダリヤである。現在研究しているのはキッチンカーである。内燃機関付きの屋台だ。

「小型のボイラーを作ってみました」

ダリヤが試作品をテーブルに載せた。

「これって貯水タンクはSL並だよな？」

「パワー重視であれば」

「やはりゴーレム方式がいいよ」

マイルの案は小さいゴーレムが、内燃機関内でピストン運動するって物だ。

「そんなに高速で腰を振れるのか？」

タコメーターの単位ってrpmだったよな。それってアイドリングで2000回転／分ってことで…

「腰が折れるかな」

「モーター駆動として、電気を作り出した方がいいんじゃないか？例えば、水魔法のウォーターフォールとか」

ウォーターフォールは水を落とす系で滝をイメージするらしい。

「水力発電ですか？キッチンカーの高さなんか、低すぎるでしょ？」

「ダリヤ、空気で発電は出来ないか？」

「空気でですか？ う〜ん…」

「例えば、空気中に漂う魔素を集めて、ソレを使えないか？」

「魔素を何かで反応させて、力を発生させるんですね」

「マイルは頑丈で軽い車体部分を試作してくれ」

「了解です」

「取り敢えずは馬で引つ張る方式だ」

全然魔導具では無いが…

◇

そして、また教皇からの指名依頼…

「今度は何ですか？ まだ聖女に仕上がってません。いつそ、教皇にしちやうのはどうですか？」

祈らずに聖女の魔力が駄々漏れなんだし。

「まだまだ現役なんだが…」

このオババはまだ引退する気は無いらしい。

依頼内容は、とある伯爵が結婚をしたいが王家から許可が下りないと言う苦情の解消だそう。探りを入れると、王家としては伯爵に王女を、伯爵の婚約者に第二王子をあ

てがいたいらしい。

「それは伯爵家の力を王家に取り込みたいってことですか？」

「じやろうな」

「国を出るか、教皇が豪腕をふるって結婚させるかですよね？」

「両方でどうじゃ？」

じや言葉で威厳を出そうとする教皇。

「領地ごと転移させて、公都の教会で式ですか？豪腕すぎるでしょ？って、その国と戦争はカンベンしてくださいよ」

平和が一番である。地図を見せてくれたのだが、結構広い領地である。これを転移かあ…元々辺境伯の砦だった城も込みかあ。アルメリア公国にしては物々しい重厚感なデザインであるなあ。

「この無骨さはアルメリア公国の雰囲気には合わないけど…」

いや、待てよ。あの国を潰して、転移させるか？

「なあ、元スランタニア王国とフリージア王国の国境でもいいか？」

「構わんぞ。元スランタニア王国には罰が必要じゃ。好きなかだけ国土を奪っていいぞ」

あとはプライドに話を通して、フリージア王国の辺境伯に据えて貰えば…

◇

プライドに話を持ちかけるとオーケーと言われた。グラナド辺境伯の噂は知っているそうだ。富国強兵時代の生き残りで、城の使用人達の戦力までもがデカイらしい。

「フリージア王国としても、強化出来る上、税収も期待できるし、いいこと尽くめだわ」と、ティアアラも頷いている。

では、グラナド伯爵に話を通して、転移陣を設置するかな。転移陣設置の際に王家からの妨害予防として、克蘭『エチゴヤ』にガードを任した。俺とマイルは陣の設置で手一杯であるから、襲撃された時に戦力にならないし。

王家の妨害が入る兆しがあつたが、アルファの組織した影の軍団が暗躍して、有耶無耶にしてくれたそうだ。

そして、領地ごとの転移…

次に結婚式の準備である。グラナド伯のフリージア王国への編入歓迎会をしながら、結婚式の準備を詰めて行く。

「ウエディングドレスはスパイダーシルクで作ります。今日はデザインナーと作り手をお連れしましたので、サイズを計らせて貰います」

デザインナーとしてアナスタジア、作り手代表としてトゥーリを連れてきた。

うん？アナスタジアと新婦のマリー嬢が見つめ合っていた。

「マリー？マリーなの？」

「お姉様……」

二人はそれぞれの元へと走り寄り、抱きあっている。これはどういう展開だ？

「主様、この子が生き別れた妹のマリーです」

と、アナスタジア。

「ありがとうございます。お姉様と旦那様を助けて頂いて……」

二人から感謝された俺。なんで、こうなった？教皇の手の平の上で踊らされたのか？感謝される事に慣れていない俺は戸惑うばかりである。

涙の再会后、アナスタジアはマリーの採寸が終わると、デザイン画を提示していた。そのデザイン画とは別に、プライド、ティアラの新郎新婦デザイン画を希望しているプライド母。姉妹で結婚をさせたいのだろうか？

「だって、素敵なカップルに見えるでしょ？私のプライベートルームに飾るのよ。プライドちゃんが全然里帰りしないし」

って……俺が悪いのか？ティアラなら、ちよくちよく遊びに来てくれるけど……

王家の瞳問題終結

——ケン——

元スランタニア王国の国民に歓迎されたグラナド辺境伯。税金を低くし、商業の復興に力を入れたようだ。奪い取らなかつた元スランタニア王国の国民達は、グラナド辺境伯領への併合を望み、スランタニア共和国は辺境伯領に総て飲み込まれた。生き残つた貴族だけでは国政は回せなく、国民に負担ばかりを掛けていたようだ。

このことにより、周辺国がフリージア王国を警戒することになった。大国の静かなる侵攻に恐怖を抱いたのかもしれない。未来予知が出来るテイアラとプライド母が、悪い未来を見たら知らせてくれるだろう。その時は改革に協力しようつと。

そして王家の瞳問題：解決した筈なのに、アルベルティーナの母方の祖父が問題を蒸し返していた。孫娘を帰せと密偵を多数、アルメリア公国に送り込んで来ていた。そもそもコイツが、アルベルティーナを王家に差し出した張本人だろうが：だけど、どの密偵も国境上に展開している結界を知らずに踏み入れ、痛い目に遭つていた。この国とこの国の住民への害意、悪意、殺意を抱く者は、誰一人国境を越えられないのだから。

だが、肝心の爺、ガンダルフ・フォン・フォルトウナは国境を越えてきた。孫娘に対して、害意とか悪意とか思っていないようだった。アルベルティーナを別邸に回収して、様子を見てみると、公都の家々に無断で上がり込みアルベルティーナを探し始めた。なんと迷惑な行為だ。だけど本人は悪意や害意を抱いていない為、結界が有効にならない。ならば、力尽くでケリをつけるか。

「おい！ガンダルフ・フォン・フォルトウナよ！勝手に他人の家に上がり込むな。単なる強盗に成り下がったのか？」

「おい！アルベルティーナを出せ。どこに監禁したのだ、この魔王がつー！」

ガンダルフにだけ『畏怖』を向けた。冷や汗を流しながらも、俺を睨む爺。

「誰が、魔王だ！俺は単なる一般人だぞ」

周囲からダウトって声が多数上がっている。何でよ…

「おい！孫娘を返せ！儂のカワイイ孫娘を」

「何がかわいいだよ。お前は王家にその孫娘を差し出したんだろ？彼女の意思に関係無く。その挙げ句、彼女は嫌々、あのクソ王家の養女になり、離宮に監禁される羽目になり、王家がクソ貴族を管理出来ない為に、彼女の病は最悪に至ったんだよ。それがなんで、分からないんだ、クソジジイ！」

「有るべき場所に戻したただけだ…王家の瞳を持つ彼女は、王家を継ぐ者にふさわしいの

だ。何故分かん、若造よ！」

「分かりたくも無い。彼女の意思を無視しても、為すべきことなのか？」

「アルベルティーナもわかってくれるはずじゃ。王家を継ぐ者なんじやからな。ここで死ぬ、魔王よ！アルベルティーナを解放しろ！」

手にしていた槍を俺に突き出したクソ爺。しかし、プライドとマイルが槍先を防いでくれた。

「おい、魔王。女子供に護られるとは情けないのう〜」

「分かった、アルベルティーナを永久に見守るが良い。『強奪 ガンダルフの魂』『強制転移 別邸のランドマーク』『贈呈 糧』」

俺の能力により魂を抜かれ、その場に倒れたジジイ。その身体はミイラのように乾いていく。魂はあの世界樹の巨木の糧にしてあげた。彼は永久に世界樹の巨木と共に生き、アルベルティーナの成長を見守れるだろう。

と…目の前がブラックアウトしていく。マインドロストのようだ。

◇

「ごめんなさい…お願い、死なないで…お願いですから…」

遠くでアルベルティーナの声が聞こえる。あのジジイの死体に泣き縋っているのか？

徐々に身体感覚と意識が戻っていく俺。何故か、俺の耳元でアルベルティーナの聲が聞こえる。ジジイの死体の傍にいたんじや？

「ねえ…あつ！息をして始めた」

「いや、死んでいないし…仮死状態だったから、呼吸は浅かっただけだよ」

なんでかな？プライドが上に載っている。右にダリヤ、左にはアルベルティーナがいた。はて？野獣化はしなかったのかな。

「お帰りなさい、旦那様」

って、いきなりのプライドによるデーブキス。

「沢山、ありがとうございます」

って、俺のアレはプライドの体内に吸い込まれていた。おい…

「私も大きくなって、健康になったら、おねがいします」

って、アルベルティーナ。何がどうなったんだ？事態が分からずに狼狽えた俺。

◇

結論から言えば、プライドは結婚出来る年齢に達したってことだ。なので、マインドロストの機会を有効に、俺の遺伝子を大量に体内に注入したようだ。アルベルティーナは、あの現場にいて、俺とジジイの言い合いを見学していたそうだ。MP切れでマインドロストした俺を見て、命がけで護られたと感じたそうだ。たぶんマインドロストでは

死なないはずだ。

で、ダリヤ：彼女は彼女で俺に恩儀を感じていたそうで、傍に寄り添ってくれていたらしい。何故か全裸で：

「プライドも母親になるのかあゝ」

とリーシエ。過去6回プライドに殺された女の言葉は重いなあ。そして、別邸のランドマークの根元にジジイの顔に似た模様が現れたそう。そこからスカートの中を覗く作戦か？死んでも迷惑なヤツだ。

—— セイデイ・オフラハティ ——

「セイデイ・オフラハティ！ 僕はキミとの婚約を破棄する。キミがそんな女性だったなんて、見損なつたよ」

「……はあ」

ため息しか出ない。何を言いたいんだ？婚約破棄？すればいいんじゃない。

リア王国の中心部にあるヤーノルド神殿、そこで聖女として従事していた私。そんな私に、神殿長の息子である彼から婚約破棄を言われた。

「セイデイはレイラを実家で虐めていたそうじゃないか。僕は、レイラからそれを聞いた。だから、キミとは結婚できない！」

「……はあ」

レイラは私の腹違いの妹である。事実無根であり、私の方が虐められていたんだけど……

「それから、セイデイの聖女の力は偽物だ。それも、レイラが僕に教えてくれた。……まったく、次期神官長である僕が、小汚い女に騙されるところだた……」

要するに私から聖女としての地位を奪いたいんでしょ？あの妹は……

「お義姉様。これからは偽物の聖女だったお義姉様の代わりに、私が聖女の座に就きますわ。なので、お義姉様は安心して罪を認めてくださいませ……」

「まあ、がんばってね」

あなたが思っている程、聖女の仕事は甘くないんだから。

◇

婚約破棄と告げられた翌日、違う領地へと向かっていた。もう聖女では無いので神殿には居られない上、父親から勘当されて、天涯孤独の放浪者となっていた。

「セイデイ・オフラハテイさん？」

いきなり知らない男性に声を掛けられた。

「そうですが…」

「教皇から紹介されました」

男性から教皇様からの推薦状を受け取った。

『セイデイ・オフラハティ殿 貴殿はこの書状を持つ者と共に、アルメリア公国で聖女としての職を全うしなさい』

とある。

「じゃ、行くのか？」

はい？ 肩に手を乗せられると、目の前の風景が一瞬で森になった。あれ？

アインズヘイルの問題

——ケン——

今度の聖女は、魔力制御が出来るようだ。その上メイドとしての仕事も出来るらしい。

「ここはどこですか？」

「死の森だけ……」

「なんで、神殿関係者が、そんな場所に入り浸るんですか？」

「そこに家があるから。あれが君が住み込む家だよ」

メイドが出来る聖女って、お徳感が満載である。身食いの患者が増えると、メイドはいくらいても足り無いから。

「ああ、玄関で靴は脱いでね。室内は土足厳禁だぞ」

室内を興味深そうに見渡しているセイデイ。転生者ではない者にとって日本建築は珍しいのだろうか。

「君の上司は……セイだ」

「セイです。あなたと同じく教皇様公認の聖女をしています」

セイがセイデイに挨拶をした。

「あなたも聖女？ここで何をするんですか？神殿じゃ無いですよね？」

身食い関係の書類を手渡し、目を通すように言い渡した。

——セイデイ・オフラハティ——

衣食住完全補償で、月に金貨1枚が支給されるそうだ。なんと言う高待遇なんだ？問題は周囲に店が無いことだな。って、なんで死の森に家を建てているんだ？ここって、踏み入れたら生きて出られない場所だよね？

「ここなら他人にアレコレ言われないだろ？要するに好き勝手出来るってことだよ」

と、私をスカウトした男性が言い切った。彼は教皇様公認の聖者だと言う。神殿での教えによると、聖者って聖女よりも能力も地位も上だよなあ。

「ここでは、身食いの治療方法と、魔導具の研究を主にしています」

上司であるセイさんに説明を受けている。聖女は私を含めて3名で、見習いが2名いるそうだ。後はあの聖者と、護衛である冒険者達ということだが…魔導具の研究もしているんだよな？

番犬…なんでフェンリルとケルベロスがいるんだ。本当に神殿関係の施設なのか？

神喰い狼と地獄の番犬を、家の番犬に据えるって、どういう神経なんだ？それに災害級魔物に指定されているイリーガルデーモンスパイダーがペット枠って…あの聖者はイカれているのだろうか？

護衛陣は勇者を含むSランク冒険者が殆どで、Aランク冒険者もいるそうだ。なんで勇者がイカれ聖者と行動を共にしているんだ？なんかおかしいぞ、ここは…

まずは勇者である隼人君と仲良くなっておく。あのイカれ聖者から身を守る術にしたい。

——ケン——

今度は冒険者ギルド本部からの指名依頼である。面倒そうな案件なんだろうな。

「ある国の領主がな、国の政策方針が気に入らないと独立するらしいんだよ。で、冒険者ギルド本部としての依頼内容は、独立戦争の阻止だ」

「…」

それは仲介しろってことか？どう言い返せばいいのか、分からない。

「その領地っているのは、お前に馴染みの深いところなんだよ」

俺の馴染み深いところ？俺を召喚した国は既に無い。後、どこだ？プライドのところで、反乱を起こしそうな領主はいないよな。俺が考え込んでいると、ギルマスが呆れた

ような表情で教えてくれた。

「アインズヘイルなんだが……」

ああ……ヤーシス、レインリヒのいる場所かあ。

「あそこの領主って知らないんだけど、バカなのか？」

あの領内に戦力があると思えない。アイナ達のパーティーが最強レベルだったような……Aランクに毛が生えた程度かな。

「あの領内は亜人との共存をしているんだが、あの国は人間至上主義で、亜人達へ迫害、差別を容認しているんだ」

ああ、なるほど……アイナはハーフだったし、ソルテは亜人に分類されるか。

「穏便に解決して欲しい。無理なら、飛び地になってしまおうがお前の処に編入してくれないか」

ここに……うん……

◇

取り敢えず、現地調査を。お供にマイル、プライド、アイナ、ソルテを連れて、レインリヒに会いに行く。

「元気か？」

錬金術ギルドに入るなり、声を掛けた。

「随分と久しぶりじゃな。新作は何か無いか？」

新作か？ そうだ。俺はアレのハツパを1枚レインリヒに手渡した。

「いくらで買ってくれる？」

アレの葉を鑑定したのか、レインリヒの顔から血の気が失せていく。

「お、お、お、前…これって…世界樹の葉かあ？」

頷く俺。

「うっ…初めて本物を見たぞ。そうだな…白金貨100枚でどうだ？」

「いいよ、売った！」

「そうかあ。これが世界樹の葉かあ…万能薬が作れるなあ」

感動しているレインリヒの目の前に、死んでも生き返る万能薬を置いた。

「何…お前…」

鑑定したのだろうか。レインリヒが震えている。

「で、こつちが、エリクサーもどきの新バージョンだ。身食いに対する特効薬になる」

世界樹の成分はあくまで肉体の修復能力であり、身食いのような体内魔力には効果は無い。だが、あの青汁が主成分のエリクサーもどきは、体内魔力の調整に効果を見せるのだった。

「完成したのか？」

「まだ身食いの発生原因が分からない。だから、根本からの治療はまだだよ。だけど、死にそうなのヤツを風邪程度には出来る」

「そうか…って、お前、世界樹を見つけたのか？」

「ああ、家の周囲に群生しているぞ。欲しいなら1万枚位なら用意できる。収穫してもまた生えるし…白金貨100枚は忘れないでね」

「おに…」

初めてレインリヒに言い勝った気がする。

神殿とオークション

——ケン——

レインリヒに紹介状を書いて貰い、領主の館へと向かった。呼び鈴を押すと、玄関に出てきたのは女の子…

「お兄ちゃん、何の用？」

レインリヒからの紹介状を手渡した。マイルとプライドがいつでも斬れるように待機している。女の子でなくて、巫人なのか。それも、二人が警戒するほどのバケモノか。

「そんなに警戒しなくてもいいよ。ボクが領主のオリゴールだよ、お兄ちゃん」

コイツが…

「ボクは敵対する気は無い。取り敢えず、中で話そうか」

執務室に通された俺達。未だにマイルとプライドの警戒は解かれていない。

「お前…病気か？」

オリゴールの纏うオーラに歪な感じを得た俺が訊いた。

「えっ？ 凄いなあ、お兄ちゃんには分かるのか…でも病気で無くて毒だよ」

毒？ふふふ……ここに完全無比な解毒剤があるんだが……俺も研究をした。なまじ口から注ぎ込むから臭いのマズいの言われることに。ならば、ダイレクトに胃の中に転移させれば問題ないのではと。なので、あのエリクサーもどき最新バージョンをオリゴールの胃の中にダイレクトインさせた。

「うっ！何をしたの……ええええええ、くっさああああ〜！」

床を転げ回るオリゴール。あれ？なんで？

「ダイレクトインさせたんですか？胃液に反応して発生したガスが鼻腔内に達したんでしょうね」

って、笑顔のマイル。ああ、そういうことか。目の前には涙目のオリゴールがいるが、彼女の纏うオーラは正常なものになっていた。

「あつ、毒の効果を感じないけど、臭いよおおお〜」

泣き叫ぶオリゴール。

◇

何をしたのかをオリゴールの側近の者に話し、オリゴールが落ち着くのを待った。確かにアイツの吐く息のせいかな、室内が臭い。窓を開けて、換気する。胃酸に反応して発生したガスって、臭いってもんじゃ無い。多分体内の汚れた空気も混合しているのかもしれない。

「凄い解毒剤だけど、臭いはどうにかならないの？」

涙、鼻水、涎をダダ漏れしているオリゴールに訊かれた。その絵面は、淑女としての尊厳が風化しているように見える。

「原料自体が臭いの、それを濃縮しているからなあ。無理な相談だな」

「そうか…で、独立問題だっけ？」

冒険者ギルド本部からの依頼内容を伝えた。

「戦争を回避…無理かもしれない。国王陛下は慎重派であるから、今すぐにどうこうでなくて…でも国王の側近達はヤル気満々だからね」

「まあ、戦争されると、冒険者としては困るから…第三勢力が参戦する用意があると心に刻んでくれればいいよ」

どこの国が参戦とは言わない。

◇

せっかくだし、ヤーススのところに顔を出すと、王都で闇オークションが開かれると言う。せっかくだから寄ってみるか。軍資金として白金貨100枚があるし…

と、いうことで他国の王都であるロシアユにやってきた。護衛はプライド、マイル、シロだけである。アイナ達はアインズヘイルに置いてきた。アルファからの定時連絡で、既に国が動いていることを知ったのだ。もうアインズヘイル付近で新兵訓練を行い、そ

の者達を先遣隊として向かわせ、その後ろには正規騎士団が続いていると言う。まだ、アインズヘイルは独立宣言もしていず、国として宣戦布告もせず、アインズヘイルで新兵訓練と表した軍事行動に出るようだ。

「向こうに行かないでいいのか？」

アナスタジアの製作した男装衣装を着込んでいるプライドに訊かれた。

「転移術でグラナド騎士団、アルメリア公国騎士団、シロガネ、クロ、隼人パーティーを展開しているし、アルファ達の影の軍団も撒いてあるから。オーバーキルかも」

俺がここにいることで、アインズヘイルの防衛はしていかないと思わせるのも手である
と、軍師ティアアラに助言されているし。

「他人の王都を楽しむましようよ」

とマイルが屋台の食い物をリサーチしている。俺は魔導具を物色だな。それぞれが興味の有る物を物色し時間を潰し、いざオークション会場へと向かった。そうそう、レインリヒがあの世界樹の葉っぱ一枚をオークションに掛けたそう。最低価格は白金貨100枚だそう。儲ける気か？

入り口で仮装舞踏会で被るような仮面を渡された。買手の顔が割れることを防ぐ為らしい。尚、この裏オークションの主催は、この国の神殿で、神殿の地下に裏オークション解除が設置されているそう。いいのか？神殿がそんなことをして…教皇的にはア

ウト案件かな。

「売り上げの一部が寄付として神殿に渡るそうで、教皇様も見ない振りをしているらしいですよ」

と、いつの間にか傍にガンマがいて、教えてくれた。巨額の寄付かあ。まあ、目を瞑るか。得た寄付の使い道が真つ当な資金使用であれば…

「最初の商品は10代の男性犯罪奴隷です。男盛りでペットにしてよし！盗賊団の団長をしております男ですから、反骨精神が強いかと思えますがそんな男を調教してみた人には絶品ですよ。それでは、10万ノールから」

神殿で奴隷を売ること…なんか、この国はおかしくないか？王族がクソなのか？それとも傀儡で、側近にアホがいるのか？神殿開催のオークションとしては、いいのか、これは…って、出品が続く。天使のミイラとか、人魚の奴隷とか…何を信仰しているんだ？この国では、妖精や天使も亜人扱いなのかと思えて来た。

「今回のメインです。なんと幻と言われた世界樹の葉っぱ一枚が出品されました。最低価格は白金貨100枚です。ではスタートです」

白金貨10枚単位で値が上がっていく。うーん、安く売りすぎたかな。結果、白金貨500枚で落札された。どこのバカが買ったんだ？相当腕の良い錬金術師でないと、エリクサーには出来ないはずだが…

「次はハーフェルフの少女です」

「主様、買いですよ」

と、ガンマ。舞台上にいるハーフェルフの少女は衰弱しきつている。怪我もしいているようだ。虐待の結果だろうか？

「このハーフェルフは様々なスキル抵抗があり、当然それは奴隷契約も含まれますので、触れず、弄れず、命令できずですが、鑑賞用にいかがでしょうか？」

「主様……」

ヤーシスの狙いも、コイツなのか？最低限の食事しか与えられていないのだろうか。これが人間至上主義の国の現実か……

「分かった。資金はある。落とそう、この国も……」

◇

オークションの帰り、お城へ行き王様とお話をしました。アインズヘイルへの侵攻した戦力は殲滅した知らせの後だったらしく、特に抵抗もなく、アインズヘイルの独立を認めてくれました。ついでに洗脳されているようだったので、アレを使い正気に戻してあげました。

「で、お前を傀儡にしたヤツは、わかるか？」

「たぶん……ゲルガー公爵かと……」

ソイツが元凶か…

別邸に戻る際に、ガンマにゲルガー公爵の調査を依頼した。その後、俺達は漸く、あのハーフェルフの少女と別邸に戻った。

翌朝、俺の上にはウエンデイが載っていた。昨晚、あの少女にマインドヒールをしていてマインドロストになったようだ。あの少女、ミゼラと言うらしいのが、だいぶ元気になったそうだ。全身にあったキズは既にセイとセイデイによつて治療したそうだし。

朝飯のTKGに納豆、味噌汁を食していると、ミゼラが食卓にやってきた。

「これ、腐っているんじゃない？」

俺の食している納豆を指差して言う。

「これは豆を発酵させた物だ。腐敗と発酵は別物だ。あとでダリヤに教えて貰え」

納豆を作る魔導具を発明したダリヤ。が、納豆は転生者で無いと敷居が高い。今のミゼラのような指摘をされてしまう。

「ここでの生活に慣れたら、学校へ通つて学べ。いいな」

「わかった…」

今日は呼び出しが無いから、錬成作業でもするかな。

王家の証

——ケン——

開拓予定地に生えている世界樹をパーツに錬成して、除去していく。設計はマイルで、作っているのは訪問販売用の屋台である。車内にはダリヤの発明した調理器具が設置してある。

「IH器具にしたのは正解だな。温度調節が楽だし」

IHとは「電磁誘導加熱」のことで、金属の近くで磁石を動かすことで電気が生じる現象である。この時に発生するのが渦電流で、対象物を直接加熱し暖めることが出来る。その工程の磁石を動かすことを魔導具にやらせたのだ。パーツ類は俺の錬成であるけど、金属類の生成はマイルが行ってくれた。そんな俺達3人の様子を興味深そうにミゼラが見つめていた。

「興味あるのか？」

「うん……今日はどんな料理が出来る器具なの？」

興味は食い物なのか。

自走式馬車の件は、魔力モーターにしてみた。魔力を注ぐことで電気を発生させ、電気自動車を動かす感じである。注ぐ魔力は電気属性、所謂雷系か無属性に限る。魔石は大量にあるので、魔力をチャージ出来る魔力バッテリーを作り、ソレを搭載することで、該当魔力の無い者でも運転出来るようにする予定である。

「錬成士…便利だよね？」

ミゼラに訊かれた。

「上級職である錬金術師になれないと不便だよ。金属の精製が出来ないし。錬成では単一物質しか扱えなくて、不純物が取り除けないんだ」

不純物があると電気抵抗値が変わってしまう。

「そうなんだ…」

ダリヤに錬成を教える時に、一緒に教えてみるかな。

◇

まったりと開発三昧の日々を過ごしていると、教皇から指名依頼が入った。マインのいた国からの依頼で、王家継承の証を探して欲しいって。はあい？なんだ、それは？

「それはどういう物なんだ？」

「王家の者しか立ち入れない場所に資料があるらしい。なので聖女が王家に養子縁組をせねばならないそうじゃ」

「それは聖女を献上せよって？」

「直接的に言えば、そうだな」

「拒否でいいか？アルベルティーナの悲劇の繰り返しになりそうだ」

本人の意思を無視しての王家への縁組み…碌なことにならない。

「結界無効スキルをお主は持っていたよのう」

「ああ、確か…」

久しぶりにステイタスを確認した。確かに持っているなあ。

「俺に探せと言うのか？」

「どこでも制限無く入れるだろ？」

「それはそうだが…」

◇

教皇の命を受けて、エーレンフェストの街の神殿の神殿長として赴任することになった。側仕え聖女としてカロリーナ、見習いであるがマイン、側仕えとしては男装の麗人になったプライド、マイル、メイドはアルファにしようと思ったがエルフはダメと言うことで、戦闘メイドのリーシェにした。

そして、神殿に着いて、直ぐに問題が発生した。前任者の神殿長が辞める気が全く無く、内政干渉だと教皇の指示を無効だと王に訴えたのだ。そして、玉間…

「どうして、このような形で参ったのだ。縁組みで来て欲しいとお願いしたはずだ」

「教皇の命を受けて参ったのです。それに縁組みならば、この件は受けないと伝えただけです」

「貴様、平民の分際で頭が高いだろ！」

と王は怒り心頭で、前神殿長が高飛車な態度でいる。どうやら、この前神殿長は高位貴族らしく、王ですら邪険に出来ないようだ。

「ならば、この話は無かったことに」

「待て！聖女は置いて行け！」

「断る！」

「平民が口答えをするな！おい近衛よ、こいつを引つ捕らえよ！」

つて、王ではなく前神殿長が叫んだ。玉間に騎士達が入って来た。カロリーナ以外、全員戦闘職である。臨戦態勢を取る。

「聖女様はこちらへ」

とガキがカロリーナに近づいたので、プライドがそれをはねのけた。

「貴様！第一王子に何をするんだ！聖女以外は殺せ！」

前神殿長である神職が殺せと命じていいのか？この国はダメだな。

「わかった。今の言葉は戦線布告と取らせてもらう」

プライドがキレた

「私はフリージア王国第一王女プライド・ロイヤル・アイビー。貴様らが侮辱した新しい神殿長は我が婚約者で、教皇様認定の聖者様であるぞ。頭が高いのはどちらかな？」

葵のご紋が出そうなフラグを立てたな。仲間以外に『畏怖』を発動してみた。空気の質が一気が変わる。王や騎士達が震えている。前神殿長は既に意識が無く倒れている。

「アルメリア公国の王配もしている」

一応、正妻の存在も出しておく。妻に男装させる趣味があると思われるのは心外であるから。

「アルメリア公国だと……」

フリージア王国はグラナド卿が来たことで、周辺各国に恐れられている。アルメリア公国は売られたケンカは買う国と思われているし。

「貴様……謀ったのか。この国を落とすのか？」

「落とすも何も、教皇命令で赴任しただけです。俺は王配で国の運営にはノータッチですから」

「主様は、シャドーガーデンの王でもあるぞ。頭が高いぞ」

いつの間にか現れた耳を隠したアルファ。シャドーガーデンとは、アルファの組織した影の軍団のことらしい。

「あの殺戮集団のボスだと…」

へ？殺戮集団？アルファ、お前、何をしているんだ？

「おい！コイツらを捕らえよ！」

王の命令…だが騎士達で動ける者は既にいない。アルファ達とシロ、マイルが一気にケリをつけていた。

「まさか、この人数で…」

俺の意図しないことで、エーレンフェストは落ちたらしい。で、俺が王だと思っていた人物は只の領主だったらしい。この後、本物の王と対談することになった。所謂戦後処理らしいが、戦争でなくて小競り合いだったのに…

王家の証 Part 2

——ケン——

「王は体調が悪いゆえ、私、ジギスヴァルトが戦後処理を任せました」

「コイツは何者なんだ？俺の同行者は、守護者である男装麗人なプライドと交渉人であるマイルだ。」

「あなたは何者ですか？」

俺の思った疑問をマイルが訊いてくれた。

「私は王太子であり、次期国王である」

「で、戦争をした訳でも無いのに、戦後処理とは？」

「コチラからの要求は、聖女の引き渡しである。それが為されれば、そちらのした事を許そう」

敗戦国が何を言っているんだ？

「待て！そちらが負けたのだから？」

「ふふふ、お前らは一領主を倒しただけで、我が国には勝て無い。直ぐに聖女を引き渡せ

「！」

話し合いでは無く、命令なのか…

ズドーン！

あっ！しまった。怒りにまかせて、天井にエクスペロージョンを撃ち込んでしまった。上を見上げると青空が見える。目の前の次期国王が固まっている。

「お話し合いの為に俺達を呼んだんだよな？」

「そ、そうだ…」

彼の顔から血の気は失せていた。

「でも、一方的な命令だよな？」

「当たり前だ。貴様らが我が国に勝てる訳無いだろう。我が国は魔法大国であり、大陸の覇者であるぞ」

震える声で言われても、なんにも怖くない。

「教皇の指示で来たんだが…それは教皇にウソの情報を流したってことでいいか？」

「教皇には内政干渉する資格は無い。たがが、神殿の名誉職だろ」

「わかった。正式に宣戦布告をされたと、教皇に報告する」

話し合いは成立しないと判断をし、その場から転移をして、教皇の元へと飛んだ。

◇

1週間後：目の前に、王族一家が並んでいる。今回は教皇も同席している。流石に、この前のやりとりには、温厚が売り物の教皇がキレたようだ。

「前回と同じ話でしたら、拒否します」

「息子が何を言ったのですか？」

本物の国王に訊かれた。息子から報告が上がっていないのか？

「無条件で聖女を引き渡せと言われました。その上で、教皇様は神殿の名誉職のクセに、内政干渉は許さないと…」

「ジギスヴァルト！貴様はなんてことを言うんだ。コチラがお願いする立場だろうが…」

本物の王は真面な神経の持ち主か？頭の悪そうな王太子はダンマリを決め込んでいるようだ。

「次期国王の発言ですから、こちらもそのように対処したいです」

俺の言葉に、あの次期国王以外の者達の顔色が変わった。

「まさか、コイツは次期国王を名乗ったのですか？」

「違うのですか？上からの物言いです：そちらの国の態度と受け止めております」

「違います。王家継承の証を持たぬ者は国王と名乗れない…」

そういえば、その証を探せって依頼だったなあ。俺に次期国王と名乗った王子は、王

により拘束された。そして、王の口から語られた真実：目の間にいる王も証を持っていないので、本物の王では無いという。そして、本物の王を得る為に証を探して欲しいってことらしい。

「在処の予想は出来ているの？後、どういう物？」

物が分かれば『強奪』で引き寄せられるはず。古い資料を見たが、結局『強奪』で引き寄せられなかった。

「では、せめて聖女を息子の嫁に貰えぬか？」

何を言っているんだ、この偽りの王は…

「拒否に決まっているだろ？」

「そうじゃ、探す努力もせずに、献上しろとは…聖女は物では無い。尊き存在であるのに…」

教皇がブツブツ言っている。

「で、何を貰えます？」

敗戦国として、何を差し出すのかな？

「聖女の代金か？無償で引き渡せ、この錢ゲバめ！」

あの自称次期王が酷いことを言う。引き渡さないと言っているだろうに…

「わかりました。今後一切関わりたくないです。教皇、いいでしょ？」

「ああ、ここまで酷い王族とは思わなかった。好きにおし」

好きにする。前以て目を付けていた図書館があるんだ。ソレを貰っちゃおう。どこの学校の図書館らしいのだが、魔導具がたくさんあるのだった。

◇

貰って来た図書館をアルメリア公国王配公邸の庭に設置した。別邸の庭には整地した土地が未だ無いから。いずれ移転させる予定だ。

「凄く良い図書館ですね」

マインとソフィアが目録作りをし始め、ダリヤは魔導具の仕組みを調べ始めた。その結果、この図書館の魔導具は触れるだけで魔力を注ぎ込める。それは身食いの予防に使えると言うことである。

我ながら良い物をがめてきたと思う。

魔導コンロ

——レーナ——

パーティー『赤き誓い』はアルメリア公国の冒険者ギルド本部に辿り着いた。

「おおく、ここの冒険者養成学校に入るのだな」

パーティーリーダーのメーヴィスが吠える。ゴレムから私達を救ってくれたパーティーが、ここ冒険者ギルド本部の所属と聞き、あの時のお礼を言う為と、冒険者ギルド本部直営の冒険者養成学校へ入る為に、遠路はるばるやってきた。

「本部で養成学校は運営していないわよ」

と、受付嬢：：はあい？事前情報と違うのか？

「そんな訳無い。私達は冒険者から聞いたのだ、ここの養成学校を出れば、冒険者としてクラスアップ出来るって」

「ああく、それはアルメリア公国の養成学校のことね。確かに暮らしのレベルがアップすると思うわ。私もあの学校の卒業生なのよ」

え？聞き間違いなのか。

「国立の学校で、まず文字を習い、次に計算、あと法律の3つが基本で、剣術や魔法も習えるわよ。入学試験とかは無いし、国民になれば授業料も発生しないし、衣食住も卒業まで面倒を見てくれるわよ」

なんか、良い事尽くめで逆に怖いんですが…

「体験入学も出来るから行って見るよいいわよ。ああ、これが入学の願書」

願書を三人分貰い、取り敢えず宿へチェックインした。

「どう思う?」

「剣術が学べるなら、私は通おうと思う」

「魔法の勉強が出来るなら…」

メーヴィスとポーリンの二人は乗る気である。願書に目を通していくか…そこには甘い言葉が書かれていた。「全科目を履修し卒業すれば、望む仕事に就けるかも」と…初級クラスは文字の読み書きと計算と一般的なルールを学び、中級になると剣術、魔法などの戦闘スキルと一般教養を学び、高等クラスでは専門分野を学ぶようだ。専門分野は代官、騎士、魔法師など高収入が見込める職の知識が学べるらしい。

「商人コースもあるんだあ」

ポーリンの目が輝いている。メーヴィスは騎士一択だろうな

◇

翌日、宿を出て、養成学校へと向かい、入学手続きをした。全寮制で集団生活を学ぶとある。私達は三人で一部屋を貰い、卒業まで住み続けることになるはずだ。

「このトイレ…魔導具が設置してあるわ。お風呂場にも…」

いや、部屋の灯りも魔導具だし、魔導具師のコースもあるのか。資料を見るとあった。うーん、レベルの高そうな学校だな。

食事は食堂で食べるそうだ。入り口で食べたい定食の食券を貰い、配膳場で定食と食券を交換するそうだ。食事は一日に何食でも食べられるが、成績不振者や学習意欲の無い者は即退学らしい。タダ飯狙いはダメってことだな。

服や下着など、最低限の物は支給されるそうだ。それ以外に欲しい場合は、バイトをして街で買えってことのようなのだ。バイトは学校内で斡旋されているそうで、安全な仕事かメインであるようだ。高収入を狙うなら冒険者ギルドでクエストを受けるか。

ノートや筆記具なども支給された。見た事の無い筆記具、羊皮紙では無い紙…この国は独自文化なのか。

まず文字の読み書きから…世界共通言語は良いとして、日本語というアルメリア公国の公用語も学べるようだった。他の言語と違い、文字数が多い。だけど、この国の子供達は、この日本語を使って会話しているようだ。基本文字は平仮名55文字であるが、片仮名55文字、アルファベット52文字、数字10文字に、漢字と言う文字セットが

数千文字あるらしい。

「なんで、こんなに文字数が多いのに、公用語に？」

「共通言語だと長い文字数で表す文字が1文字に置き換えられるの。便利でしょ？」

と、先生がこやかに言う。例えば「ウォーターボール」が「水玉」と置き換えられる
 そうで、魔方阵でこの文字セットを使うと、細やかな設定が出来ると言う。

「どこの国の言葉なんですか？」

「古代文字らしいわよ。この国の上層部の方々が発見して、用いているのがルーツらしいわ」

先生自体もこの学校の卒業生で、詳しい事は分からないらしい。

「専門コースで研究してみるといいわよ」

って…

——ケン——

ディアナの予定日が近いので、公邸庭の図書館で読書をしていると、商業ギルド本部から呼び出しが掛かった。そう言えば、今日はダリヤがIH調理器具の出願に向かった。何か問題でも発生したのかと、急いで向かった。

この世界でも特許制度に似た物がある。商業ギルドに登録した魔導具は、売り上げ利

益があがる度、一定の金額が開発者に入る仕組みである。登録した魔導具に問題が発生した場合、開発者が責任を負うことになるが、取りつばぐれが無く、特許侵害時には商業ギルドが責任を以て対処してくれる。Win-Winな制度である。

「何か、問題が起きたのか？」

「私が登録した魔導コンロの名義が知らない間に変更になって、利益が入らなくなっていたんです」

と、悔しそうなダリヤ。話を聞くと、元婚約者が、婚約破棄前に、夫婦の共同財産につき、亭主に名義をまとめることになったと、名義変更をしたらしい。

「ダリヤの同意書はあったのか？」

夫婦と言え、権利問題なので、名義変更時には同意書が必要である。

「支部の職員が、夫婦の共同財産という言葉で確認を怠ったらしい」

「ダリヤが貰うべき金額は、商業ギルドで補填してくれるよな？後、名義の再登録もだ」
「訴えるの？」

「それで戻るなら、提訴する。エチゴヤとしては傘下の商会に不利益が生じたとして、詐欺、公文書偽造辺りで提訴したい。相手は個人か？」

「いや、オルランド商会として登録してあった」

「そんな…」

シヨックを受けたダリヤ。

「個人なら賠償金と違約金だけで済ませるが、相手は商会か…徹底抗戦する。相手のランクは？」

「件の魔導コンロのおかげでランクBに昇格しようだ」

「俺達が勝訴したら、どうなる？」

「2段階降格でランクDに落とすよ。ギルド本部のグランドマスターの私が、自ら事実確認をしたから提訴しなくてもだ。ケン達が勝訴すれば、更に2段階降格でランクFなんだが、ランクEまでにしか落とせない。相手は商会だからな。ただ商会ぐるみの不正となれば、所属する魔導師総てがランクFになる」

結構重い罪だな。

「こういうのは舐められると同様の被害が出やすいから、徹底的に叩くよ」

提訴

——トビアス・オルランド——

兄であり、オルランド商会長であるイレネオ・オルランドに呼ばれ、彼の執務室に向かった。

「どうしたんだ？」

「商業ギルド本部から呼び出しを喰らった。小型魔導コンロの件で公聴会が開かれるそうだ」

商業ギルドの公聴会：権利に関してのトラブル解消の為の話し合いの場であり、本部で行われる公聴会は裁判と同じである。

「彼女が個人で提訴したのか？」

個人で商会を提訴するのにはリスクが多い。個人で提訴費用、書類提出や証拠固めなどを総て個人で行わないと行けないのだ。

「いや、商会が提訴してきた。ダリヤが務めている商会なのだろう」

提訴状の提訴した商会名は『ロセッティ商会』とある。

「これって、ダリヤの個人商会では？」

「なるほど……恐れるに足りぬな。新規商会であれば、ランクEで信用は少ない。我がオランダ商会はランクBで、商業ギルド内でもそこそこの信用がある。適切な公証人と立会人を送り出せば、権利が確定できるな」

小型魔導コンロの権利をダリヤに戻すのは単に忘れていたのだが、その利益が配分され兄に知られることになり、その利益の大きさから権利は俺からオランダ商会に委譲する形を取った。

「わが商会の虎の子を返すことは無い。あの権利は慰謝料代わりにお前がダリヤから貰った物だからな。その証拠を出せば、権利は確定さ」

そんな証拠は無い。俺の母親が兄にそう説明しただけである。寧ろ、慰謝料は俺達が払うべきである。

——ケン——

商業ギルド本部の公聴会には、商会長が自ら出廷する決まりであるが、忙しさを理由に、公証人と立会人を送り込んで来た。そして、彼らの提出して来た証拠はバカにしているとしか言え無い物だった。

「婚約破棄を結婚式の前日に言い出し、共同で購入した新居をせしめたのはトビアス氏

です。それなのに、慰謝料として権利をもらい受けた？バカを言うな。その時の婚約破棄時の財産分与の取り決め、件の権利が入っていないのは、どうしてだ？」

「オルランド商会によると、名義をトビアス氏にしたのは、婚約破棄前であり、財産分与の共同資産に当たらないということですよ」

「それは計画的に権利を奪ったことで、計画詐欺罪でも提訴いたします」

うちの弁護士役はマイルとガンマである。

「ランクBのオルランド商会と個人商店のロセッティ商会では、信用度がまるで違います。違いますか、ブランドマスター」

勝ち誇った表情の相手の公証人。

「商業ギルドランクを盾にする方針ですか？心証は悪いですよ、オルランド商会はねえ」
本部のギルマスって、ブランドマスターって言うのか：

「それに、商業ギルドランクの信用度での審査だと、オルランド商会なんか信用はまるで無いに近い。いいですか？訴状にも書いた通り、提訴したのはランクSSの商会です。わかっていますか？」

訴状にはロセッティ商会と連名でエチゴヤ、アズータ商会、ミツゴシ商会の名を記しておいたのだが、目を通していないようだ。

「ロセッティ商会はエチゴヤの傘下で、同じ傘下であるアズータ商会、ミツゴシ商会も仲

間の権利を護る為に、それぞれの法律部門が調べ上げてくれました」

グランドマスターが相手の公証人、立会人に集めた証拠、証言を手渡した。

「時系列で見ても明らかでしょ？ 婚約期間が2年もあるのに、結婚式の前日に婚約破棄を申し渡し、結婚式だった日に婚約破棄の手続きをし、その翌日には違う相手と結婚：明らかになりや嬢から権利を奪う気があったのでしょ？ 悪質なのは、日程的にもダリヤ嬢が権利が委譲されていることに気づく暇が無い。この辺りの説明はいかがですか？」

グランドマスターの声は冷たい。しかし相手の代理人達は、勝つ気満々で怯んでいない。

「ですから、権利に関しては慰謝料としてもらい受けたそうです」

「その際の契約書は？」

「夫婦の話し合いに書記など、一々同席しないものですよ。そんな事は、一般的な常識ですよ」

相手の公証人が笑いながらのたまう。

「お話になりませんね。これは婚約破棄の問題解決の場では無く、商業の権利を明確にする場です。そもそも、あなた方は民事の公証人と立会人ですよ？ 商業ギルドの公証人と立会人は用意されていないのですか？」

「我々は弁護士資格を持っています。なぜ、商業ギルド…言ってしまうえば相手に肩入

れるする者を弁護団に入れなければならないのですか？」

なるほど：相手の商会は婚約破棄問題の延長と捉えているようだ。商業の権利を争う時には、商業ギルドの公証人と立会人最低1名ずつ参加させることになっている。これは商業ギルドのルールで、一般的なルールでは無い。

たぶん、オランダ商会は単一支部しか利用しておらず、今まで商会の信用でなああで済ましていたのだろう。だから、正式なルールを知らないであろう。

「では決定を言い渡します。小型魔導コンロの権利をダリヤ・ロセツティ殿に委譲し、今までに不当に得た金額の3倍の額をオランダ商会からロセツティ商会へ払い込むこと、オランダ商会は3ランク降格とし商業ギルドランクをBからEといたします。以上、公聴会を終了いたします」

「異議あり！」

この会はグランドマスターがルールブックで、彼の終了宣言後はもう受け付けない。「我々はあなたたちを名誉侵害で訴えます。何様ですか？勝手にギルドランクを降格させ、権利を無断で委譲させる？あなたには、そんな権利はありません。今回の件は高等裁判所に提訴いたします」

商業ギルド本部を提訴？どこにだ？国の裁判所で裁けない組織なんだが…

「面白い。商業ギルド本部を提訴するのか。やれるものならやってみるといい」

泥沼化の予感である。

「この場合、裁けるのは聖シユルル協和国の神殿裁判所だけです。各国の方針に左右されずに、独立性を保つ組織であるギルドは、聖シユルル協和国の教皇様の名の下に、世界共通ルールで運営することになっています」

と、ガンマ。だから、どこの国のギルドでも、同じ権利が保障されるのか。

後日：件の商業ギルド支部はグラントマスターの決定を重く受け止め、グラントマスターの決定通りに強制執行した。ダリヤの権利を取り戻し、ダリヤに今までの分の利益の3倍の額が振り込まれた。その上、ダリヤの受け取った額と同額が罰金としてギルドの得る金額だと言う。オルランド商会の口座は差し押さえられ、足り無い額は、商会の財産を差し押さえたとすうだ。

商売繁盛

——トビアス・オルランド——

冒険者達と商業ギルドの職員達が、オルランド商会にやってきた。

「差し押さえだど？ どういうことだ？」

兄が商会長として対応している。

「あなた方の雇った弁護士から聞いてませんか？」

「高等裁判所に提訴する手筈だが……」

「裁判所は、民事、犯罪行為を裁く場ですよ。商業ギルドの案件は、裁判所では裁けないのを、ご存じでは無いのですか？」

建前はそうだ。だけど、支部利用者にはその辺りのルールはグレーである。顔見知りの職員相手には、慣例で通ってしまうし。

「民事案件だろ？ ダリヤに一言詫びれば良いだろう？ こんな大事にするな。商会の信用問題になるだろうが！」

「あれ？ 弁護士から聞いていませんか？ ギルドランクがEに降格されたことを。もう、

これ以上の降格は無いですから信用問題は気にされなくても良いんですよ。それに商會長のクセに、商業ギルドのルールをご存じないようですね」

「おい！この商會のバックには子爵様がついているんだぞ。弟の妻は子爵令嬢だと知つてのことか？」

「あれあれ？身内のことなのに、ご存じないのですか？弟君の奥方様は、子爵の血をひいているようですが、子爵は認知をしません。そもそも、ギルドには王族も貴族も介入出来ません。国に属さない独立組織ですからね」

「な、な、なんだと……おい！トビアス、どういうことだ」

今更のことを訊かれても……

「俺は何度も兄さんに言った。だけど、母さんの言葉を間に受けて……」

母は、兄さんにもダリヤにも『エミリアは子爵の血を引いて、商會として結婚は止められないの』と、子爵の威光を盾に、俺と結婚したと言いつらしていた。

「おい……じゃ、慰謝料代わりに差し出したって話は？」

兄さんの顔から血の気は引いていた。俺は一言も差し出されたとは言っていない。

「母さんの思い込みだ。婚約破棄の際、俺が慰謝料を払ったんだよ。それなのに、ダリヤが差し出すはずが無いだろう？」

「そんな……」

よろけながら、店の奥へ引つ込む兄。この商会はどうなるんだ？

——ケン——

小型魔導コンロ、IH調理器具の他、防水幌、雨合羽、長靴：ロセツテイ商会の扱品は多々有り、サスペンション付き馬車、防水幌の関係で、運送ギルド本部も、アルメリア公国に転移してきた。運送業に必要な魔導具が手に入る上、通運業務を行っているエチゴヤと話し合いがしやすいという立地条件があつたらしい。

「マジックバックを安価に作つて貰えないか？」

連日、エチゴヤに運送ギルド本部のギルマス：いやグランドマスターが、お願いをしに来ていた。

「価格が合わない」

「そこをなんとか…」

エチゴヤの配達員：要するに俺の様に、一度に沢山の荷物を運べるようにしたいってことらしい。

「冒険者ギルド本部、商業ギルド本部、錬金術師ギルド本部と値段を決めてくれ」

基本ダンジョンで拾つて来られるアイテムバッグ。拾えば一攫千金が狙えるお宝である。それを安価で提供すると、値崩れが起きて、冒険者、商人、錬金術師の生活に支

障が出てしまうのだ。俺は、それぞれのギルド会員であるので、それぞれのギルド本部の納得出来る価格でなら、出荷制限を掛けるなりして、卸しても良いと言ったのだが、運送ギルド本部で想定している価格と雲泥の開きがあるらしい。

「後は、レンタル方式だな」

「毎月支払うのか？」

「レンタルだからな。使用料はギルド本部で払って貰う上、誰に貸したかギルド本部で管理し、毎月転売されていないかの確認もして貰う」

転売が怖い。闇で売られるとマズい。闇商人は武器商人の手に渡ると、犯罪の温床アイテムになりかねないからだ。

「うゝむ…」

この問題は、もう少し掛かりそうだ。アイテムバッグ以外の商談は成立しており、商会の運営には問題は少ないそうだ。

◇

「産まれたよ。母子共に健康ですよ」

と、マイルから連絡が入った。ついにディアナに息子が生まれ、デインと名付けたそうだ。今後ディアナの体調が良くなったら、彼女の家で俺達の結婚式をあげる予定だそうだ。俺に前以て話が無いのは何で？

「次こそは私だよね?」

って、カタリナ:…どうなんだろうか?俺は誰ともヤツタ記憶は無いんだから。と、悩みながらのサスペンション付き馬車の開発:ミゼラと娘のアリスが興味深そうに、俺とダリヤの作業を見つめていた。

「とーさま、おやつは?」

アリスに訊かれた。馬車の調理器具で鯛焼きを焼いてみた。そして、アリス、ミゼラ、ダリヤに配った。

「たこ焼きは?」

ダリヤに訊かれた。

「タコが手に入らない。イカなら手に入りやすいんだけど…」

イカの魔物のクラーケンは良く出現をするので手に入り安いが、タコの魔物のテンタクルは中々出て来ない。

「後、紅シヨウガが必要だよな?鰹節とソースも…」

マヨは手に入るが、ソースが難しい。中々中濃ソースの味が再現出来ないのだ。鰹節は未だ量産体制になっていないし。

「まあ、和風なエリアが見つかれば、手に入るかもしれないし」

アルファ達に探して貰っているが、彼女達が和風を知らないのです、手こずっているよ

う
だ
っ
た。
。

アマツクニの商人

——ケン——

アインズヘイルの件で、隼人達は国に敵対した。隼人達の屋敷は、あの国の王都にあつたのだが、アインズヘイル防衛戦を契機に、アルメリア公国の行政区に敷地ごと転移していた。そして、今日、俺はその屋敷に呼び出されていた。行政区なので特にガードは必要無いのだが、マイルとプライド、そしてアイリスが同行している。

「今日は紹介したい方がいるんですよ」

笑顔の隼人。

「婚約者か？」

「仲間に背中から刺されそうなことを言わないでくださいよ」

まあ、隼人のパーティーはハーレムパーティーなものな。

「じゃ、新しい嫁？」

「違いますよ。アマツクニの商人さんです」

アマツクニ？まさか…

「ソウルカルチャー?」

領く隼人。おおく!!

「入ってください」

部屋に、着物を着飾った少女が入って来た。

「初めまして、某はユウキ。アマツクニの豪商の娘で、普段は冒険者の傍ら、行商人をしております」

某…江戸時代くらいのも文化レベルかな?

「俺はこの国の王配のケンだ」

一応、行政区なので『王配』と名乗っておく。

「なあ、作務衣は扱っていないか?」

早速、商談だ。

「着物では無くてですか?」

「着物は動き難い。藍染めの作務衣を欲しい」

「今回はお持ちしていませんが、国に帰ればありますので、今度お持ちします」

「後、大豆、米、麦が欲しい。脱穀しない状態で。間違っても米は精米せず、大豆、麦はまるのままです」

「えっ?」

「色々な種類が欲しい。俺達の必要としている品種に改良をしたいんだ」

「あ…あの…この国でも米、麦、大豆を栽培しているのですか？」

「しているよ。品種改良中で、売るほどは収穫できていないけど」

アイテムボックスから炊きたての米、納豆、味噌汁、鰯の開き定食を取り出し、ユウキの前に配膳した。

「おいしい…米がこんなに甘いとは…この黒い液体は？」

「醤油だ。俺達のソウルソースだ」

アマツクニには醤油が無いのか？

「製法を売ってください。この干物も…」

えっ？俺達を買手では無いのか？

◇

「文化大革命ですよ。こんなにも知らない商品があつたなんて…」

アルメリア公国の方が和風文化色が強いつて、どういうことだ？

足袋に対抗して、ダリヤの開発した5本指靴下を見せたら、買いたいと言われた。あとアズータ商会のチョコ、エチゴヤの羊羹、ミツゴシ商会のエアクツションソールのサングルなど…買う気満々だった俺達の国から買いたい物が沢山出て…

「本国から様々な種を取り寄せますので、今後もご最厚にお願ひします」

お土産に、おかきとおせんべいを貰ったのだが、醬油が無い為に塩味だけだった。

「品物が入りしたい、お持ちしますので、今後とも宜しく願います」

と、ユウキが帰って行つた。貿易収支が黒字になりそうなんだが……まあ、作務衣と、様々な種子が手に入るし、製法を売れば、アマツクニで製造しての逆輸入が出来そうである。

「作務衣……本当はジーンズ生地が良かったんだが、そこまで丈夫な生地では無いのが残念だ」

「ジーンズ生地は、専用織機が無いと無理ですよ」

ダリヤとマイルが設計図の打ち合わせをし始めた。

◇

アルファからの定時連絡……アインズヘイルの北東に温泉街であるユートポラがあると言う。

「温泉地か……別荘も良いなあ」

温泉街かあ……温泉まんじゅうに、温泉卵、湯上がりの珈琲牛乳……

「日本と同じ文化とは限りませんよ」

と、隼人。俺達は湯治旅行の計画を練っていた。護衛に隼人パーティー、俺、プライド、マイル、シロがメンバーで、別荘を手にいれ次第、他の転生者も転移で連れ出す計

画である。セイはアマツクニから送られて来た米の品種改良があるので、一緒に旅は出来ない。あの垂れ流し聖女の能力、植物の成長を爆発的に早めるのであった。おかげで米は年に5回ほど収穫できるらしい。

4章 再召喚からの異世界行

幕間 一時帰国

——ケン?——

目が醒めると、知らない場所にいた。ここはどこだ?まるで見覚えが無い。ベッドから抜け出すと、畳敷きだった。ここは日本か?ダンスや押し入れが目に入る。

鏡台を見つけ、鏡を覗き込むと、俺は子供になっていた。転生したのか?俺はいつ死んだんだ?もしかして寝首をかかれたのか。誰に?疑問が脳内を走り回っている。

部屋を出て、リビングルームらしき部屋に入ると、知らない男性がいた。

「君を生まれた世界に召喚した。元々の時代より少し早いけどな」

俺を見るなり、そう告げてきた。生まれた世界に?俺は戻ってきたのか?

「君の名前はこれからは神野翼だ。小学校を卒業したばかり。これからの6年間は英国に留学してもらう」

言っていることが良くわからない。留学?なんで?そもそも何で俺は小学生なんだ?高校生だったのに。

「英国で魔法を叩き込まれてきてもらう。君は再度、あの世界に召喚される運命だからな」

あの世界：プライド、マイル、カタリナ：みんなのいる世界か？つて言うか、

「アンタ、誰だ？」

「私は神野司、この世界の神の代行者で、君の義父になる。アチラの世界の神が粗相をしてね。人間に異世界召喚の術を授けてしまったのが始まりだよ。魂の状態で召喚されると異世界転生になり、生きたまま召喚されると異世界召喚になるのだ」

「なんで、その神は異世界召喚なんかを授けたんだ？」

「自分で行うと、神としての職務に違反するからだ。どこで聞いたのか、異世界から魂を引き込むと、神の格が上がると信じていたそうさ。そんなことは無いんだけど」

なんと迷惑な神だ：

「そうさ！なあ、萌と静は戻れたのか？」

「ああ、戻れたよ。君の記憶を無くしたけどな」

そうか、良かった。方法は間違っていないかったようだ。

「この世界線では、同級生にならず、彼女達は会えないがな」

それは問題では無い。彼女達が無事であれば良い。

◇

魔素の無いこの世界で魔法を使えば、向こうでは更に魔法が使えるようになるらしい。この世界でも英国では魔法使いが実在し、修行をすれば会得が出来た。『ワーロツク』『サモナー』『ネクロマンサー』『ソーサリアン』の称号を得て、6年後、魔法を極めて帰国した。

「次はどうするんだ？」

「大学に行き、農業や牧畜業、建築技術を学んで貰う。後、家庭教師のバイトをしてもらうよ」

この世界での俺の人生の線路は決まっているそうだ。再召喚は避けられない運命らしい。再召喚されるまでに、アチラの世界で利用出来る技術、知識を叩き込む計画らしい。

家庭教師の生徒として、カタリナ、マイル、マインなどの前世持ち予備軍達がいた。彼女達が死ぬ前に接触し、転生後に向こうでスムーズに合流する為の顔合わせらしい。

「向こうに行ったら、できるだけ転生者、召喚者と一緒に行動して欲しい。悪意持ちに育つと、世界の脅威になりかねないからね」

召喚する世界とされる世界は一心同体の関係らしい。向こうが滅亡すると、余波でこちらの世界もマズいらしい。

「そうだ！あの世界って、なんで乙女ゲーの設定が生きているんだ？」

色々な乙女ゲーの設定が混在していた。

「アチラのバカ神が、こちらの乙女ゲーやラノベに嵌まって…自分の世界でドラマでも見る様にしたようだ」

なんて迷惑なバカ神がいたんだ。

「職務を全うしない神達は娯楽に飢えている。私なんか、職務で手一杯なのに…」

目の前に居る義父である神の代行者は凹んでいる。この人は代行者では無く、神その者なんじゃ？

◇

大学を無事に卒業すると、義父の経営しているゲーム会社に就職した。開発しているゲームは、あの世界その物の気がする。異世界から召喚をする神の行為を止める目的…再召喚されたら、俺はアツチの世界のバカ神と戦う羽目になるのだろうか。

「プレイヤーはプレイヤー専用大陸から出られない」

と義父。何の為のゲーム開発なんだ？神のすることは意味が分からない。きっと深く考えてはいけないのだろう。

会社では後輩である女性とチームを組み、毎日終電までデバッグ作業をしている。再召喚までに、出来る限りデバッグしておかないと、イレギュラーイベントが起きるらしい。そんなことを言われても、である。神同士決着を着けて欲しい。なんで俺が巻き込

まれているんだ？

そんなこんなの或る日、義父から再召喚が近いと知らされた。それを受けて、俺は毎日一緒にいる彼女にプロポーズをした。

「先輩…今日はトコトン飲みましょう」

久しぶりの定時上がり、久しぶりの居酒屋である。

「小鳥遊、程ほどにしておけよ」

再召喚前に、俺の生きた証として、後輩の彼女に指輪をプレゼントした。指輪を見て、俺のことを覚えておいて欲しい、と言う俺の身勝手な行為である。俺がこの世界に居られるのは後数日だろうから。

ヨッパな後輩をオンブし、彼女のアパートに向かう。今夜、大人の階段を二人で昇る儀式をする予定である。彼女の部屋に入り、玄関で彼女を降ろすと、俺達の足下が光輝いていた。

再び集結

——ツバサ——

酔いが醒め、気が付くと全裸で牢屋にいた。後輩と二人、異世界召喚された模様で、今回も聖女召喚だった。あのバカ王子と目が合ったし…

後輩と抱き合っていた状態で召喚され、引き離されて、身ぐるみ剥がれて牢屋にぶち込まれたのだった。そういうや、後輩の名前つて、聖だったつけ…自己紹介の時、「たかなし」と言っただけだったので、あの聖とは気づかなかった。いや、敢えて気づかないように記憶を操作されていたのかもな。

全裸では、アレなので、俺の持ち物を強奪で引き寄せ、服を着てから、セイとセイの持ち物も強奪し、牢屋から転移して逃げた。逃げた場所には世界樹の生い茂る森である。ここが一番安全であるからだ。近くに人里すら無いし。

「ハハハはっ」

「異世界だ」

「…先輩、落ち着いていますね」

「俺、二度目だから」

「…はあい？」

「異世界召喚の経験者だよ」

亜空間収納には、前回に収納した物と、収納した覚えの無い物が入っていた。屋敷なんか収納した覚えは無いけど、世界樹を錬成して空き地を作り、そこに屋敷を設置した。俺の行動に絶句しているセイ。まあ、異世界生活は手慣れた物だ。俺は経験者だしねえ。セイを連れて屋敷の中に入り、彼女に前回の召喚の際の話を伝えた。

「並行世界で、私は先輩とここに住んでいたんですか？」

俺の薦めでラノベを愛読書として読んでいたセイの理解は早かった。

「そうだよ」

屋敷の中には家電が既に設置されていた。電気の供給は受けていないけど、家電は機能している。まあ、深くは考えないようにするか。いや、魔素を取り込んで発電出来る様にしたのかな。いやいや、太陽光発電を組み入れた気もする。その辺りの記憶が曖昧である。

異世界召喚で俺的に問題だったのはトイレ事情である。乾燥機能付き温水洗浄便座無しでは、ストレスフリーに生きられそうも無い気がしたのだ。しかし、この屋敷のおかげで問題はナッシングである。冷凍庫には冷凍食品が満載され、電子レンジもあるの

で飢えることも無いだろう。水は魔法で作れるし。

「なんかこのお屋敷は至れり尽くせりですね、先輩」

「元の世界に帰りたいか？」

前回学習をして、元の世界への返し方は既に知っている。

「新婚生活が異世界って、粋ですよ。ここでノンビリ生きるのも悪くないかな。先輩は経験者だって言うし」

毎日終電生活より、このの方が人間的な暮らしは出来ると思う。

世界樹の葉っぱを回収しつつ、世界樹を様々なパーツに錬成して、空き地を増やしていく。その辺りは前回の経験が生きる。

地図マップはマイル頼みだったが、転移する場所は記憶に残っていたので、まずマイル、カタリナ、プライドと接触をした。時が来たら合流してもらおうである。彼女達は俺と会うと前回の記憶がうっすら蘇ったようだった。直ぐに合流しない者には、マズいと思つたら、俺を呼ぶようにして貰い、その為のエマージェンシー用の魔方陣を手渡した。

——カタリナ・クラエス——

或る日、知らない男性が目の前に現れ：前世の記憶が走馬灯の様に蘇つた来た。

「神野先生？」

目の前に現れたのは、家庭教師をしてくれた神野翼先生だった。

「そうだよ」

私が乙女ゲーの悪役令嬢の代表格であるカタリナ・クラエスに転生したことを先生から説明を受けた。

「学校へ入学する前に合流をする。それまでに貴族の振るまい、農業、地理、歴史を学んでおいて欲しい」

先生は拠点を設けていて、そこに転生者や召喚された者達を集める計画だと言う。

「がんばります。ねえ、あっちゃんも転生していますか？」

親友のあっちゃん：彼女も先生の教え子である。

「ああ、しているはずだ。前回はソフィア・アスカルトだったと思う」

「わかりました」

あっちゃんと再会出来るようだ。

先生と会つてすぐ、ゲームにおいて腹黒ドSだった王子とお見合いをした。私は拒否をしてのだが、何故か王子が私を気に入り、婚約が成立してしまった。そんなにイジメがないかのように見えたのだろうか？

キースという弟も出来た。一人っ子の私が王子と結婚をすると、次期当主候補がいな

くなるので、養子を迎えたようだった。そもそも、なんであの王子は一人っ子の私を婚約者にしたのだ？公爵家に対する嫌がらせか？流石は腹黒ドS王子である。

——アデル・フォン・アスカム——

アスカム家の次期当主であるけど、当主であつた祖父が亡くなり、次期当主であつた母も亡くなり、入り婿の父親と再婚相手の義母と義妹に家乗つ取られ、下働きの様に扱われていた。そんな或る日、先生と再会した。その瞬間、前世の記憶が蘇つて来た。そして、私に備わっていた能力も理解していった。

「海里、一緒に来ないか？」

「はい、先生。私を連れて行ってください」

もう下働きの身分はイヤである。先生なら酷い扱いはしないだろう。

「じゃ、今日この時点から、お前は海里、いやマイルと言ふ名乗れよ」

「はい。」

私は下働きから解放され、先生と共に冒険者になるべく、冒険者ギルドで登録をした。ギルドカードに表示されたマイルと言ふ名前が、とても嬉しい。

「家ではフィギュア人形を作つても良いぞ」

連れて行かれた先生のお屋敷には、生前の私の部屋があつた。

「どうして……この部屋が……ここに？」

「異世界マジックだ。深く考えるな」

と、笑顔の先生。

——プライド・ロイヤル・アイビ——

「先生？」

目の前に、高校3年生の時に家庭教師をしてくれていた神野先生がいた。前世の記憶が蘇って来た。そうだ！短大に受かって、入学式までの長期休暇中に交通事故に遭ったんだ。

「どうする？今一緒に行くか？それとも、ラスボスに覚醒してから一緒にくるか？」

私は最低最悪の外道ラスボスに転生していた。このまま成長すると愛する家族や家臣達を傷つけてしまう。

「誰も傷つけない。だから、私を連れて行ってください」

先生は笑顔で私を受け入れてくれた。そして、森の中のお屋敷に転移をした。

「ハハハハ。」

「死の森と呼ばれる魔王国に隣接するエリアだよ」

周囲を山脈に囲まれ、東西南北の4つ住処に4匹の龍がそれぞれ住んでいて、この森

に封印されている者を見守っていると言われている。そんな伝説がある場所だった。

「ここなら人里が近くに無いし、落ち着いて生活出来る」

そうだけど……まあ、私が覚醒すれば怖い者無しよね。

「現状、同居するのは、聖女のセイ、チーターのマイル、ラスボスのプライドと俺だけだ」
先生もたぶんチーターでしょうね。授業の合間に見せてくれた手品……あれってタネ無しのチート技だったんだと思うし。リクエストに応じて色々な手品を見せてくれたけど、仕込む時間も無しに披露してくれたし……

絶望的な場所の天国

——ツバサ——

4人でパーティーを組んだ。チーター3ヒーラー1のパーティーである。ラスボスクラスの敵で無ければ問題が無い戦力だと思う。前回よりも俺のスキルや魔法がパワーアップしているし。

冒険者としての拠点はアインズヘイルにした。ここなら、レインリヒ、ヤーシスがいるので、色々と便利であるからだ。レインリヒに世界樹の葉っぱ1枚を買い取って貰った。当面の活動資金である。

「これをどこで？」

「後何枚買ってくれる？」

「後何枚あるんだ？」

「1000枚は有ると思う」

「それは群生地を知っているのか？」

「ノーコメント。要り用の枚数を売るよ」

「…」

レインリヒには、そうそう買えるだけの資金は無いだろう。今回は白金貨1枚での買い上げだし。まあ、オークションに出せば白金貨100枚にはなるだろうけど。大量に抱え込んでも、そうそう売れる物では無い。大量に売り出せば、レインリヒ自体の首を絞めるだろうし。

その世界樹の葉っぱ絡みで隼人とも知り合いになり、早々と協力関係を築いた。

「うーん、冒険者ランクFっておかしいでしょう？」

隼人と手合わせをして、クレームが付いた。

「登録したばかりで、ランクを上げていないからな」

隼人の剣技は、俺、マイル、プライドに通用しなかった。新米勇者には、ラスボスクラス相手では荷が重いのだろう。

そして、ヤーシスの店に：軍資金に白金貨1枚があるので、メイド目的でウエンディを買うと、もれなくシロが付いてきた。お釣りは金貨9000枚だった。

「ご主人様、よろしくお願ひします」

「こちらこそ、よろしくな」

ウエンディは美人だと思う。だけどデカ過ぎる為、アレの対象にはならない。俺の好みは、人並みであり、手の平から少し零れる位が丁度いい。そう、セイくらいのも…

——ウエンディ・ティアクラウン——

私のご主人様は転移持ちだった。あつと言う間に知らない場所に連れて来られてしまった。

「ハハハは？」

「死の森と呼ばれている場所だ」

死の森…別の大陸じゃないか。周囲を見回すと、世界樹の群生地帯だった。

「これ、全部、世界樹ですか？」

「だと思っ」

伝説的な物は絶望的な場所にあつたようだ。ここに侵入するには、魔王国に入り、魔物達が闊歩する森を越え、龍の住む山脈を越えないと、侵入出来ないはずだ。転移持ちで無い限りは…

「屋敷の中は、セイに案内してもらってくれ」

セイさんと言うのは奥様の事である。屋敷の中は見た事の無い魔導具だらけであつた。ここに住んだら、他に住めなくなる魔性のトイレ…女性専用のシャワーなど…快適さを追求した魔導具がある。

「ここ以外には、もう住めないよ」

とマイルさん。ご主人様とマイルさんが転移持ちだそうなので、泊まりのクエストでも、進んだ場所をマーキングしてから一旦帰宅し、翌朝出勤するそうだな。

「基本、外泊はしないよ。帰宅すれば、食事もお風呂もトイレも最適だし」
死の森には天国があった。

——ツバサ——

冒険者ギルドで物体Xを仕入れて来た。エリクサーもどきの開発再開である。前回のレシピは亜空間収納に入っている。それを見ながら、症状ごとのレシピを完成させていく。エリクサーもどきを作り、早速マイルと姉のトゥーリだけを回収してきた。

「先生、なんで生前の私の部屋があるんですか？」

「深く考えたら負けだぞ、マイルン」

マイルの生前の部屋、四面に本棚がある。ドア以外、本棚に囲まれている感じで、圧迫感がある。確か、コイツ生前に本雪崩に遭って亡くなっただよな。納得する部屋である。本が落下しないように、本棚を改造しておく。

マイルの両親は仕事があるので、一緒には来なかった。まあ、こんな場所では仕事が無いし。アイリスを回収出来れば、人間の集落に住めるはずだよな。

——アイリス・ラーナ・アルメリア——

痛みで前世の記憶が蘇って来た。そうだ、私は日本人だった。ここは…異世界…異世界に転生したのだけわ。

数人の男達に押さえ込まれ、身体中を弄られている。公開陵辱である。もう嫁には行けないだろう。

私はアイリス・ラーナ・アルメリア、タスメリア王国筆頭公爵アルメリア公爵の第一子で16歳である。なのに、王子主催のパーティーで、身に覚えのない罪で断罪され、陵辱刑を受けていた。

「この女を無茶苦茶にしていぞ。俺が許す」

父は宰相、母は將軍の娘で文武官僚トップの家柄を両親に持つ私が、みんなの前で辱めに遭っている。王子様が助けにきれくれないだろうか？いや、その王子により刑を執行されているのだから、絶望的である。ドレスが剣で切り刻まれ、下着をナイフで剥ぎ取られていく。

「申し開きがあるなら聞こう、アイリス。ユーリにした数々の嫌がらせについて」

「身に覚えがありません。もう止めて下さい」

「認めないのか…おい、四つん這いにしろ。汚らわしい、コイツの相手はブタがお似合いだ」

パーティー会場にブタが連れて来られた。まさか…

「そこまでだ。アイリスに手を出すな、クソガキ共！」

私は誰かに抱きかかえられ、その場から転移した。えっ…転移術って、高位魔法、いや最上位魔法だわ。目の前の景色がパーティー会場から、どこかのお屋敷に変わった。

「セイ！治療を頼む」

「わかったわ。これ…酷い…マイルちゃん、替えの部屋着を持って来て」

「わかりました」

「暫く、休むと良い。『マインドヒール』」

マインドヒール…これも最上位魔法だわ。心が癒やされていき、それに伴い眠気が襲ってきた。

イレギュラーイベント

——ツバサ——

前回よりもアイリスの扱いが酷くなっている。これって義父が言っていたバグ取りが出来ておらずのイレギュラーイベントなのだろうか？

「身体の傷は総て治したわ」

セイとマイルのヒールで怪我は治せたようだ。問題は心だが、マインドヒールで癒やしたけど、どうだろうか？

「助かった。礼を言う」

目の前にはアイリスの両親がいる。とても連れ帰れる状態では無いので、両親を死の森の屋敷に連れて来た。

「あんたの国は、公開であんなことをするのか？」

イレギュラー要素なのか確認しておく。

「しない…裁判にも掛けずに、刑の執行なぞしない。まして公開陵辱刑なる刑は存在しない」

「踏み込むのが遅かったら、娘さんはブタにやられていたぞ」

公開での猥姦刑って…何を考えているんだ？止めるヤツがいなかったし、あの王子の世代は腐っているのか？

「王様には抗議する。君には礼をしたい。だが、どうして、娘を助けてくれたんだ？」

「クエストの帰りに近くを通りかかったら、娘さんの悲鳴を聞いた気がしたんだ。だから行ってみたんだよ。そしたらあの光景だろ？助けない訳ないだろ」

と嘘ぶく。あの日に断罪イベントがあるのは知っていた。だけど、あそこまで酷いイベントとは思わなかった。

「あんな姿の女性を見捨てられないだろ？」

前回、彼女にはとてもお世話になったとは言え無い。

「もう、娘は嫁に行けない。お礼代わりに娘を貰ってくれないか？」

「俺には妻がいるが、一夫多妻でも大丈夫か？」

「問題無い。その代わり、ここでは無く、アルメリア領で娘と暮らして欲しい。娘を領主代行にと考えているのだよ」

「まあ、前向きに考えて置くよ」

◇

アルメリア公爵領の領主の館に、アイリス、マインを運び入れ、そこで治療をすることにし、マイルとセイが領主の館に毎朝出勤するようにした。

死の森の快適な住環境は捨てられないから。その代わりでは無いが俺とプライド、シロ、ウエンデイで、死の森の開拓を受け持った。快適さをアツプグレードする為には、畑を作り、水路を作りなど、やるが多々有るのだ。

「前回と違う?」

「ああ、あそこまで酷くなかった。これって、イレギュラーイベントになるのかな?」

アイリスの件を転生組であるマイル、プライドと話し合った。

「そうなるよ、私のラスボス化…大丈夫だろうか?」

イレギュラーイベントに怯えているのか、プライドの声が震えている。

「それは大丈夫だ。万が一の時は俺とマイルで無力化する」

プライドのラスボス化の原因は分かっている。義父の伝手を頼り、あのゲームや設定資料などを読み込んだ結果、どこぞの国の者に洗脳されたのが原因であり、俺のマインドヒールで元に戻せることが分かっているのだ。

問題は王子の新しい恋人の男爵令嬢だろう。コイツがイレギュラーなのだろうな。もしかすると転生者で悪役令嬢キラナーなのかもしれない。ラノベではよくあるパターンである。前回のコゼット・エーデルワイスは、転生者であるヒロインにズタボロにされたっけ。

「探る?」

シロが訊いてきた。

「いや、いい。次に手を出してきたら、本気で潰すから」

俺の手は既に汚れている。汚れ仕事は俺の担当である。

翌日、マインドヒールを掛けにアイリスの元を訪ねた。

「どう？」

「怖い…あの人達の顔は見たく無い」

アイリスの視線はどこか虚ろである。マインドヒールで心が完全に癒やされ訳では無い。深くまで踏み込むと記憶障害が出る可能性がある。程度問題なのだ。身体の傷とは違い、目に見えない傷を治癒するのは難しいのだ。

アイリスの母が言うには、加害者サイドに実の弟がいたことが原因では無いかと言う。

◇

風の噂で、アイリスの元婚約者が婚約者と愛の行為の最中に腹上死しそうだ。その婚約者も元婚約者の肉体の一部が内臓を突き破って…真実は王宮からの発表が無いので不明であるが…

——アイリス——

第二王子であるエド様が亡くなったそう。激しい愛の行為の末だったらしい。第二王子派は主を失い第一王女派と第一王子派に別れたらしい。

「調子はどう？」

私の王子様に訊かれた。

「だいぶ良くなりました。ありがとうございます」

あの日以来、定期的にマインドヒールを掛けてくれている私の王子様。現在の私の婚約者様である。生まれたままの私の姿を見ても、動揺せずに治療をしてくれる。私の肉体って魅力無いのかな？

「私と奥様のどっちが…いえ、なんでもありません」

彼には既に奥様がいて、私は側室である。ただ、政治的な場面では私が正妻扱いになるそう。

「比べられない。セイはセイだし、アイリスはアイリスだ。分野が違う」

分かったような、分からないお答えである。

「それに見た目だけでは分からない」

何が？ 訊いていいのかな？ 訊くのが怖いような…

「そろそろ、下着を着るようにしたらどうだ？」

あの日以来、下着を着けていない。ワンピースの服を着ている。下着と肌の間に差し

込まれたナイフの感覚が蘇りそうで、下着が着けられないでいる。

「下着を着けないと、体形が崩れるぞ」

えっ！そうなの？それは困った。付けないとダメだな。奥様と体形のギャップが広がってしまう。

物体X

——ツバサ——

セイ、シロと共に、あのアンデッド系の迷宮に挑んだ。勿論、今回も無許可である。

「この迷宮はアンデッド系だから、セイだけでもクリア出来るはずだよ」

「あれ？先輩……この迷宮って、開発中だったゲームに似ているような……」

「気のせいだよ。さあ、さっさとクリアをしまおう」

深く考えたら負けだと思ふ。前回は床をぶち抜いたような……今回は正攻法で、ドロツプ品は強奪で拾い、俺とセイの浄化術で次々と迷える魂を成仏させていった。

そして、クリアして、聖なる龍の骨一式と今回はダンジョンコアをゲットして離脱した。

——ルミナ（ルミナリア・アークス・フランシスク）——

聖シユルール協和国戦乙女聖騎士隊隊長である私ですら、パニック状態に陥っていた。神殿を取り囲んでいた結界が突如消え去ったのだ。

「まさか、誰かがダンジョンをクリアして、ダンジョンコアを持ち去ったとか」

元上司のカトリーヌ様と共にダンジョンの入り口に向かう。そこにはダンジョンとは思えない只の洞窟が広がっていた。禍々しい気で充満していた洞窟は、清々しい程に浄化されきっていた。

「ダンジョンをまるまる浄化って…そんな聖女っている？」

カトリーヌ様の問い掛けに、正解を答えることが出来ない。

「そう言えば、最近、聖女召喚したらしい国があるそうですから、そこに問い合わせしてみるのは？」

苦し紛れの答えだったが、正解に近づくことになるとは。

◇

聖女召喚をしている国、スランタニア王国に問い合わせてみると、前回の召喚時に、聖女一人とそれに付き添う男が一名が、忽然と姿を消したそうだ。

「その者達の仕業でしょうか？」

「何故、聖女召喚で男が…」

教皇様が違うことに興味を持たれた。

「まさか、聖女の上位存在である聖者だったのでは無いか？」

聖者…聖女は後衛で癒やしがメインであるが、聖者は前衛で、癒やしも出来る聖騎士

の上位互換とされている者である。

「魔力量にもよるが、その聖者かもしれぬ」

その日、教皇の名で聖者の搜索が、各国の神殿、教会に依頼された。

——セイ——

先輩の前回の記憶を元に、マインちゃんの病気がほぼ治った。予防として、毎日魔力を使い、物体Xを飲むこと……この物体Xが厄介であった。マズい青汁の味なのだ。それをジョッキで1日に3杯飲むと言う。一緒に先輩が飲んでいるので、私も飲んでいるけど、慣れない不味さである。

効能は魔力の流れをスムーズにし、精力は減退……先輩は溜まっているようだ。そう言えば、大人の階段を昇る前に召喚されて、それつきりだし。目の毒とも言えるアイリスさんの全裸姿を見ての診察と診療。誰かで出して貰わないとダメかな？

「いや、俺は発情なんかしていないぞ」

と先輩……本当か？

「いいか？アイリスもプライドも教え子だよ。教え子に手なんか出さない」

それは、教え子で無い私と奴隷であるウエンデイさんが危険ってことか？

「セイは俺の妻だし、ウエンデイは俺の奴隷だろ？問題は少ないだろうに……それに物体

Xのおかげで、性衝動が起きない」

いいのか？それで…ねえ、先輩。

その夜、女性だけの話し合いをした。先輩の下の処理問題である。成人しているのは私とアイリスさんとウエンデイさんである。三人で抜いた方が良いのか？

「私は構いませんよ。婚約者ですから」

と、アイリスさん。

「私も大丈夫です」

と、ウエンデイさん。覚悟が出来ていないのは私だけのようだ。

「問題は私達が迫っても、行為に及ばないんですよ」

って、二人は既に先輩に迫っていた。なんか、出遅れた感が強い私でした。

—— ツバサ ——

久しぶりに冒険者ギルドに行くと、スランタニア王国から脱走した聖者と聖女が指名手配されていた。脱走したくなるだろうに。異世界から拉致され牢屋に監禁されていたんだから。あの国は今回もアウトかな。

「男と抱き合っている聖女なんかいないって、私なんか、後宮に監禁されていたんですよ」

と、セイ。扱いから言って、俺とセイは聖者と聖女では無いと思われるので、無視だな。人捜しクエストは俺達には無理だし。

「ねえ、ツバサさん…」

隼人が寄って来た。

「僕は言いませんから」

って…

「俺達は違う。俺は召喚されて牢屋にぶち込まれ、セイは召喚後後宮行きだったんだ。聖者と聖女にそんな扱いはないだろ？」

「無いですね」

隼人は、俺とセイが召喚された者であると伝えある。

「拉致されて監禁って、脱走じゃなくて脱出ですね。何かあったら、僕達も協力しますよ」

バレバレである。

◇

レインリヒが世界樹の葉っぱをオークションに出して、白金貨100枚を手にしたらしく。50枚を白金貨75枚で売ってくれと言う。迷わず売る。量産体制は出来ている。1000程度なら売っても問題は無い。

「枝は売って貰えるか？」

「いいけど、いくらで？」

「杖が作れる大きさなら白金貨一枚でどうだ？」

「迷わず売る。」

「これが世界樹の枝かい。：硬い。どう加工するんじや？」

マイルの本気の斬撃でも傷が付かなかった、この世界で最も硬いと思われる物質である。普通の加工具では削れない。

「加工賃も白金貨一枚かな？」

「錢ゲバか？加工方法くらい開示せえ！」

「秘匿する技術ですから……」

俺の言い分に折れたレインリヒからの依頼で、後日錬成した杖を手渡した。毎度あり！

まさか加工方法が錬成術のみとは思わないだろう。錬金術師は錬成を出来ない場合が多いのだ。錬成士をマスターして錬金術師になるのが正解ルートになる。だけど錬成術師は軽視され、錬金術師にいきなりなる者がほとんどである。錬成では単一物質にしか効果が無いからだ。液体錬成などは、錬金術師でも出来るが、木材加工は錬金術師の範囲外である。

指名手配されました

——カタリナ・クラエス——

婚約破棄をしない王子：腹黒でDSな為、バッドエンドに怯える私。学校には行かずに家出することを義弟のキースとあっちゃんであるソフィアとお付きのメイドであるアンには知らせた。理由は「王子がDSな為」と：家出にアンとソフィアが付いてくるという。家出当日にしか先生と連絡が取れないけど、大丈夫かな？

そして、運命の日を迎えた。学校の門を潜り、ソフィアとアンと合流をして、先生に浚って貰った。

——キース・クラエス——

姉さんが家出をした。「ジオルド王子のイジメに耐えきれなく、アンとソフィアと共に家出をします。探さないでください」と、学校の寮に書き置きを残して：問題にならない訳がない。姉さんはそのジオルド王子の婚約者である。

僕は姉さん達の行き先を知っているが、王子には言え無い。王子のDS度を知ってい

るので。公爵家の一人娘を婚約者にするって、おかしな話である。第三王子なんだから、婿入りするなら分かるのだが。何故、嫁に取る必要があるのだろうか？

義父に質問をしてみた。

「まあ、俺様王子で、王位継承者だと思っっているのだろうな。公爵家の存続なんか考えてもないバカ王子だよ」

「バカ王子」と一刀両断である。もし姉さんがジオルド王子と結婚をして、彼が王位継承しない場合、王弟妃としてお飾りの立場になるだけであるそうさ。姉さん的には許せないだろうな。

姉さんの家出を知ったジオルド王子は、魔法省に命じて、姉さんの行方を捜し出すことにしたそうさ。迷惑極まりない行為である。家出の原因はジオルド王子にあるのだから。

「私はカタリナを虐めていない。何かの間違いだ」

と、ジオルド王子が義父に言った。

「我が公爵家へ婿入りして選択肢は無かったですか？王子4人とも婚約者をお持ちです。その場合、王弟妃が3名も存在することになり、国庫に負担が掛かるのですよ」

宰相としてジオルド王子に苦言を呈した義父。

「我が国の国力から見て、王弟妃が3名いても問題は無いでしょう」

その返答に頭を抱えている義父。王弟3人、王弟妃3人の生活費、遊行費などは総て税金で賄われるのだから…

——ツバサ——

カタリナを迎えに行くと、予定よりも人数が多かったが連れ帰った。

「先生、お久しぶりです」

俺を目にしたことでソフィアが前世の記憶を取り戻したそうだ。

「まあ、ここでノンビリ暮らしていこう」

「はい」

カタリナ達を迎えて、落ち着きを取り戻した日常に戻り、久しぶりに冒険者ギルドへ向かうと、カタリナが指名手配されていた。生きたまま捕獲して欲しいそうだ。他にもプライド・ロイヤル・アイビー、アデル・フォン・アスカムが指名手配されていた。

俺達、何か罪を犯したのか？人捜しで無く、指名手配ってなんだ？

「なあ、人捜しで指名手配って、この世界で普通なのか？」

隼人に訊いてみた。

「普通じゃないです。指名手配って犯罪者に対して行うものですよ」

プライドの罪ってなんだ？マイルの罪ってなんだ？カタリナの罪って？おかしいぞ。

まさかイレギュラーイベントってやつか？この世界の神を叩かないとダメなのか？どこに居るんだ？

更にイレギュラーイベントが俺達を襲う。アイリスが第一王子の婚約者に指名されたそうだ。

「どういうこと？」

アイリス母に訊いてみた。

「王妃と第一王子がアイリスを気に入ったそうなのよ。バカにしているわよね。第二王子のした行為を忘れたのかしら？」

アイリス母も激おこ状態だった。王族の行為により、嫁に行けない娘ならば、貰って上げるよ的な行為らしい。

「アイリスちゃんはずバサ君に貰って貰う。これは我が公爵家の決まり事よ。王家に抗議してくるわ」

って…公爵家が王家に抗議して結果って変わるのか？イレギュラー状態のこの世界の常識が分からない。

◇

「情報を仕入れて来ました」

と、マイル。

「私の場合は、入り婿である父親によるお家乗っ取りが明るみに出て、生きているか死んでいるか分からない私を探し出す方が便利です。プライドさんも同様のようです。単なる人捜し案件よりも指名手配案件にした方が、冒険者も躍起になって捜索するかららしいです」

「でも、見つかった場合、犯罪者待遇なんだろう？」

「ええ、そのようです。生かしていれば、何をしても良いですよ」

もはや他人事のマイル。生きていければ、陵辱オーケーってことか？ふざけるな！許せないなあ。

「まずはプライドの案件を片付ける。俺とプライドで、フリージア王国に乗り込んで、プライドの両親を納得させる。ダメだったら、多少は暴れてくる」

俺とプライドで転移をした。フリージア王国の王妃であるプライドの母親は予知能力持ちであるので、プライドを返却した場合の未来を見て貰う事にした。

◇

プライドの案件は片付いた。プライドのラスボス化を防ぐ意味で、俺に身柄を預けることにしてくれた。

次はマイルの案件だが…相手の言い分では貴族の数が減るのは困ると言う。だけど、マイルを次期当主にするには難しい現状を説明した。貴族令嬢として育てられておら

ず、下女扱いで育てられたことが大きな波紋を呼びつつも、マイルの身柄を俺に預けて貰えた。袖の下で白金貨10枚ほど掛かったけど…結局は金目当てなのか？

そして、問題はアイリスの案件である。王太子からの指名婚約宣言である。王妃が後ろ盾である。彼らの言い分は王妃教育を受けたアイリスならば、次期王妃を問題無く務めることが出来ると言う。

だけど、アイリスの心情的にはノーである。違う王子とは言え、同じ王族から公開で処刑されたことが拒否理由であるが、王妃になれば問題無いと言う王妃様。王都では、あの時のアイリスの裸体画が多数出回っているのだ。王家は回収すらしていない。それすら問題では無いのか?!!

「娘本人の気持ちは問題では無いのですか？」

「国の為だ。そんなちっぽけな問題は問題にならない」

と、王様。ちっぽけな問題って、なんだ？アイリスに取っては大事なことなのに…
「ツバサくん、お願い。アイリスと駆け落ちして、次期当主には息子を据えるから」

アイリス母からの駆け落ち願ひ…取り敢えず、アイリスの身柄を死の森に移した。これで解決か？ああ、俺とセイの案件はスルーである。これ以上、問題を拗らせるなら、前回と同じく、あの国を潰すことにしたのだ。

VS 教皇サイド

——ルミナリア・アークス・フランシスク——

スランタニア王国の冒険者ギルドへの依頼の仕方が問題であった。指名手配扱いで搜索依頼を出していた。これは犯罪者に対する搜索依頼であるが、我々は彼らを犯罪者として探していない。

「どういうことですか？」

スランタニア王国の王に訊いてみた。指名手配では見つかる者も見つからない。

「どうとは？」

「あなた方が召喚した者達を指名手配した件ですよ」

「なんのことだね？ 私は訊いていないんだが…」

王に話を通っていない上、王には召喚したことも伏せられていた。

「責任者はどなたですか？」

「第一王子のカイルである。おい、カイルを呼び出せ！」

「聖女様の教育で忙しいそうです」

「召喚した聖女は我が国にいるのか？」

「はい」

それは聖シユルル協和国に報告されたことと違う。

「我々が問い合わせた時と、違うのはどういうことですか？」

「どのような報告を受けたのですか？」

「前回の召喚時に、聖女一人とそれに付き添う男が一名が、忽然と姿を消したと」

「それは事実です。前回聖女候補が2名と、男性が1名召喚されたのです。カイル殿下の判断で男は牢屋へ、男性と一緒にいた聖女候補は後宮へ入れたのですが、その後行方知れず、脱走したものと判断し、生死不明で良いから、脱走罪として指名手配で依頼をせよとカイル殿下から指示がありました」

異世界から拉致して牢屋と後宮に監禁したのか。それは脱出するだろう。

「バツカもん！勝手に異世界から連れさり、意味が分からないままに牢屋と後宮に監禁したのか？おい！カイルを至急呼び出せ！」

「はっ！」

なんとも頭の痛い事態になっていた。脱出と脱走では意味合いがまるで違うのに。

◇

「ようやく指名手配犯が見つかったのですか？さて、どのような罰を与えようかな」

笑いながらカイル殿下が現れた。

「貴様！何を勝手にやっているんだ？どうして牢屋と後宮に監禁したのだ？」

「どうして？そんなの決まっているでしょ？聖女召喚で男が召喚されたのです。偽証罪で処刑にすべきで、聖女なのに男と抱き合っていたんです。侮辱罪で後宮で陵辱刑にすべき案件ですよ」

コイツ、頭が腐っているのか？そもそも異世界召喚は禁忌の犯罪行為であり、諸事情でやもなく国家で行う場合は、事前に我々聖シュルル神殿本部に召喚目的などを連絡をするルールである。

「異世界からの召喚はコチラ都合で呼び出しているのですよ。分かっていますか？」

「何を言っているんだ？異世界の者は基本、平民だ。王族である私の決済でどうにでもなるんです」

ああ、分かっている。人知れず何名の召喚された者が消されているやら。

「なる訳ないだろうが、おい、カイルを牢へ入れろ、コイツから王族の権利を剥奪する」
「陛下がご乱心だ。独房へお連れしろ。後、そのどこぞの使者もだ。早くしろ！私は聖女の教育で忙しいのだよ」

この国では王よりもエライ王族がいるのか？

「おい！何をするんだ？ご乱心したのは陛下だ。私では無い」

抵抗しながら、近衛騎士達に捕縛される第一王子。

「アイツは、なんてことをしでかしたんだ…」

「指名手配を解除をしてください。指名手配されていると知ったら、名乗り出る者も名乗り出られないでしょう」

「ああ、そのように手配をする」

今更、解除をしても手遅れ感が濃い…

——ツバサ——

隼人に呼び出された。護衛にシロ、マイル、プライドが付いてきた。

「どうした、隼人」

「指名依頼で…聖者と聖女を連れて来たって…」

「断れないのか？」

「無理…聖シルール協和国の教皇からの指名依頼だから…」

あの婆さんからの依頼か…Sランク冒険者である隼人は、指名依頼を断れない。特に聖シルール協和国の教皇からの物は無理だろう。俺達の世界で言うバチカンのような国だから…他国の国益に左右されず、厳格な教えとルールを護って運営されている組織である。

「俺達を売るのか？」

「そんな事を言わないでください。避けられない事態なんです。ごめんなさい」

この指示を無視するには、隼人達を消すしか無い。隼人達も死ぬ気で俺達とやり合うのだろう。隼人の目は真つ赤で腫れていた。悩んだ末の行動のようだ。

「わかった。俺が教皇とやり合えば良いんだな。」

「それも困る。無力化しないとダメだから…本当にごめんなさい」

隼人の手で俺の首に隼人の首輪が嵌められた。

「ごめんなさい…ごめんなさい…」

俺に隼人の首輪を嵌めた罪悪感に押しつぶされそうな隼人。マイル達には影から見守ってもらうとして、俺は隼人のお縄に付いた。セイはスルーだ。俺だけ出頭すれば良いだろう。隼人もセイに関しては何も触れないし。俺達は教皇の元へ向かった。



教皇の目の前へ後ろで縛られ、隼人の首輪を嵌められた状態で連れて行かれた。

「聖者と思しき人物を捕らえました」

聖騎士に連れられて、教皇のお目通りを受ける。

「あなたが聖者ですか？」

「わかりません。異世界から召喚されて、いきなり身ぐるみ剥がされて牢屋に叩き込ま

れ、現状隷属の首輪で奴隷に落ちさせられていますから」

「奴隷落ち？なんで？」

「聖騎士が首輪を嵌めたのは、教皇様の指示なんですよ？」

実際に嵌めたのは隼人だが、ここは聖騎士のせいにしておく。

「私はそのような指示を出しておりません。直ぐに外してあげなさい」

「当教会には隷属術を使える闇魔法師はおりませんので、外せません。どうせ犯罪者なのです、奴隷のままでも良いでしょ？」

笑みを浮かべている聖騎士。コイツから負のオーラがダダ漏れしている。悪意塗れだな。

「彼は犯罪者ではありません。重要参考人です」

「指名手配犯だと訊いております。証言を得たら、打ち首にすると法務部から訊いておられます」

どうやらこれもイレギュラーイベントのようだ。この世界の神は俺を退場させたがっているようだ。

「そのような指示は出していませんよ」

「では忬度されたのでしょうか。今ここで打ち首に……」

聖騎士が剣を抜き、迷いなき剣筋で俺の首に剣を振り下ろした。カキン！その剣を

人の剣が止めた。

「聖騎士とは教皇様の指示が絶対では無いですか？」

「冒険者風情がつ！教皇様に忖度をせよ。ジャマ立てをするなあ」

ああ、これって俺を絶対に殺すって意志表示だな。この世界のババアは権力が無いのか？これ以上は隼人に迷惑がかかるので、聖騎士の魂を弄び、この場から消えて貰い、隸属の首輪を破壊した。剣を握った聖騎士はその場に崩れるようにして、床に倒れ込んだ。

「お前…何者だ？」

教皇の顔は青ざめ、お付きの騎士達、メイド達が身構えた。

「この世界は、勝手に召喚と言う異世界拉致をした上、身ぐるみ剥いで全裸で牢に監禁する最低な世界だな。教皇…お前が黒幕でいいのか？」

隼人達を除いて『畏怖』を発動し、教皇サイドの者達の精神を恐怖へと叩き込む。

「違う…私は何も指示していない…」

ガタガタと震え、足下が濡れていく。信者には見せられない姿だな。威圧の耐久力の無いメイド、騎士達が白目を剥いて、泡を吹き、その場に倒れていく。

「俺の相棒は、異世界拉致されて、後宮に監禁されていた。そんな行為をお前は許しているのか？」

『畏怖』のギアを一段上げた。教皇以外の者達が様々な体液を垂れ流し、次々に倒れていく。

「お前は…何者だ？」

教皇はノドが詰まったような声で訊いてきた。

「聖女召喚された男だ。そして、貴様に犯罪者の烙印を押され、指名手配された男だよ。どう責任を取ってくれる？」

あつ！教皇が白目を剥き泡を吹いて倒れた。さてと、帰るか。

「ツバサさん、やりすぎだよ」

振り返ると、隼人が苦笑いしていた。

人間を墮落させる魔導具

——ルミナリア・アークス・フランシスク——

教皇様の元に戻ると、えらい騒ぎになっていた。教皇様は弱々しい姿でベッドに横になられていて、お付きの者達は、私の部下である戦乙女聖騎士隊が務めていた。

「どういう状況だ？」

「指名手配犯に襲撃を受けたようです。本部内の一部の聖騎士達なのですが、死亡が確認されております。死亡原因は不明です」

襲撃？ 嚴重に警戒されている本部の教皇の間が…

「単独でか？」

「いえ、ランクSの冒険者が捕らえ、隷属の首輪を嵌めた状態で、運び込まれています」
隷属の首輪だと…完全に犯罪者扱いじゃないか。彼らは被害者なのに。教皇様は黒幕と判断されて、反撃に遭ったのか？ いや、待てよ…

「隷属の首輪を嵌めていたのだな？」

「それが、破壊されて、ここに落ちていました」

それは隷属の首輪程度では縛れない存在ってことか。あのクソ王子は何者を呼び出したんだ？

「急ぎ、聖者に関する資料を集めよ」

「はっ！」

聖者とは聖女の上位の存在と思われるが、それ以上の存在の場合、人間の敵になりかねない。

——ツバサ——

目の前には哀れなオッサンが震えて俺を見つめていた。

「お前の息子にボロボロにされたのに、何も手を差し出さず、もう一人の息子の婚約者に王命で指名するって、どういうことだ？」

教皇をズタボロにしたんだ。王にだって牙を剥くさあ。

「いや…だが…王妃教育は一朝一夕では難しい。アイリスなら…」

「アイリスの気持ちを全く考慮していないのが問題だろ？アイリスは王族の駒じゃないし、奴隷でもない。それとも、この国の国民は王族の奴隷だと言いたいのか？」

目の前の哀れなオッサンの魂を鷲掴みにした。

「うっ…もう止めてくれ…」

目、鼻、耳、口から汚い液体を流している汚いオッサン。

「もう、そこまでにしなさい。お願いだから…もうこれ以上、私の娘の為に汚れ役にならないで」

俺の背中に抱きついて、俺の行為を止めようとしているアイリス母。王妃はアイリスと同じ目に遭わせてやった。どれだけ屈辱かを教え込む為に…

「このオッサン、反省していないけど、いいのか？」

「もういいわよ。こんな最低な男が国のトップだなんて…吐き気が起きるわ。ここで宣言をします。我がタスマリア国アルメリア公爵家は、国から独立を宣言し、アルメリア公国として立国をいたします。ですので、我が娘、アイリスには、もう関わらないでください。これ、夫からの絶縁状ですわ」

アイリス母は王の目の前に書状を叩き付けた。なんか、前回よりも早い立国だな。これもイレギュラーイベントってことか？

城内にある金目の物と書物類を総てを『強奪』し、アイリス母と共に、アルメリア領へ転移をした。

◇

公都を首都とし、堅牢な壁で覆っていく。材質はこの世界で最も硬い材質である世界樹である。あの樹木、油断すると増殖している。伐採したら根っこも処分しないとダメ

なようだ。地下茎での増殖かもしれない。あの樹木の繊維で衣服を作ると、オリハルコンの鎧並の強度があつたりする。アルメリア公国の特産品にするかな。

今回も商業ギルドにエチゴヤで登録済みである。本店は勿論アルメリア公国の公都である。公都とタスマリア国の国境地帯の公都寄りの森には、迷宮の入り口を作つた。折角ダンジョンコアがあるので、アルメリアダンジョンを作つてみたのだ。監修は俺と隼人である。二人でダンジョンを設計し、配置したいモンスターを選んでいった。

「低層階は採取系メインで、中層階には食べられる系にするか」

食べられる系のモンスターは結構いる。

「罨を少なめにして、で、宝箱部屋にはミミックを混ぜておくとか」

前世でゲーム会社のシステムエンジニアだった俺とセイで、ダンジョンバランスを整えていく。

「地下50階のお宝は世界樹の葉っぱ1枚にして：地下はどこまで作れるんだ？」

「コアに計算させると200階辺りまでかな。横に伸ばせば、もう少し潜れそうだけど」

テストプレイは隼人パーティーが行い、充実度を検討してくれている。アルメリア公国の資源にもなるダンジョンであるが、意図的にモンスターを溢れさせることで、タスマリア国への牽制になる。と、言うのも溢れたモンスター達はタスマリア国へ向かうように教育してあるので、ダンジョンも防衛施設の一部となるのだ。

「ダンジョンを防衛施設にするなんて、ツバサくんだけだよ」
満面の笑みを浮かべる隼人。

——セイ——

アルメリア公国の行政区に植物研究所を設立した。様々なハーブ、茶葉、薬草などの効用や飲用の仕方を研究している。現在の難問は目の前にある樽に入った物体Xである。これを飲みやすくして：マインちゃんのような魔力過多症の特効薬のだが、味がねえ。最悪である。それを1日にジョッキで3杯って、拷問クラスの治療法である。味以外にも臭いが：コレを飲んだ後の接吻：吐き気を催す。世界樹の葉っぱをブレンドすれば、万能薬にもなるけど、味は改善されない。

ここの植物園には貴重な植物の繁殖の研究をしている。しかし、貴重な植物の出所はダンジョンであるので、地上でなんとか繁殖出来ないかってことである。イザとなれば、先輩、マイルちゃん、プライドさんならソロで、隼人くんならパーティーで採取に行ってくれるのだが…

「なあ、この植物はあるかな？」

錬金術師ギルドのアルメリア公国支部のマスターのレインリヒさんがいらした。手にはメモが…

「ああ、これならあります。価格は金貨……」

稀少な薬の原材料になる植物がここには多々あるので、近々錬金術師ギルドの本部と、冒険者ギルドの本部が、この公国の行政区に移転してくるらしい。

ここで稀少な薬を増産し、各国の支部へと送る計画らしい。それに伴い、冒険者達の街も出来るらしい。

それらの政策は、アイリスさんと先輩、マイルちゃん、マインちゃんに私などの元日本人が中心になって決めて、推進していた。

「セイ、雑草と思われていた植物も研究対象にしてくれ」
「了解です」

この世界では雑草と思われていた植物が、我々元日本人にとって馴染みの深い植物だったりする。まさか、米の異種が雑草だったなんて……この異種の凄いところは、連作が出来、水田いらずに、年に数回収穫出来るところである。今は味の改良中であるが、現状でもそんなにマズくない。甘みが少ないのでササニシキに近いかな。

行政区に新たに建てる建物には、死の森の館で作り上げた魔導具が設置されていた。あの魔性のトイレやお風呂場などなど。

「えっ……」から出たく無いわ」

と、アイリスさんのお母様がトイレに立てこもった事件が発生したり。あのトイレ

は、この世界では人間を墮落させる力があるようだ。

新たに公女となったアイリスさんの屋敷は、魔導具のシヨウルーム状態である。接待目的でエライ人達を招待し、様々な魔導具を体験してもらい、気に入ったらエチゴヤで購入してもらおう流れになっている。

マインちゃんのご両親達も行政区に近接している街に引越してきていた。税金などは近辺国よりも安い上、物価も低めで住みやすいそうだ。この世界、エライ人ほど税金が安いらしいが、アルメリア公国だけは収入に応じた税金が課せられる。エライとか関係無い。あくまで収入ベースである。イヤなら他国へどうぞ！ってことだ。

日本の行政システムの良い部分を取り入れているのである。住民基本台帳を作り、住民税を取る。人口が少ないうちは税金収入だけで赤字であるが、冒険者ギルド本部、錬金術師ギルド本部からの寄付、エチゴヤからの先行投資などでやりくりをしている。出て行くお金の殆どは人件費である。資材調達などはエチゴヤで準備をしている。死の森のあの樹木を錬成して、部材にしているのだ。加工費、原材料費は掛からず、掛かるのは先輩の手間だけというコストパフォーマンスに優れたシステムになっていた。

先輩ばかり苦労しているけど、いいのかな？

聖者というバケモノ

——ツバサ——

王国からの独立、そして建国によりアイリスは公国の女王、公女陛下となった。事実上、公国のトップである。彼女の父親は宰相、彼女の母親は騎士団長で、俺は彼女の夫で王配扱いである。アイリス母によると事実婚だから結婚式はやらない方針らしい。まあ、招待するのって身内だけだし。披露宴くらいはするかな。

プライドはフリージア王国の大使になった。彼女の両親の計らいで名目上ではあるが、フリージア王国の為に働いていることにしてくれたようだ。

マイルは冒険者のままである。あの国はマイルの問題を金で解決したので、強いことは言え無いのだ。

教皇は公国立国と同時に、教皇直轄の教会を公都に建立してくれた。俺とは敵ではないアピールらしい。

行政区にはマインのような魔力過多症、通称身食いの治療院を建設した。この世界では少なくとも後数名いる筈であるからだ。

そして今、目の前に教皇とナンバー2のカトリックがいる。

「世界で一番安全な場所に神殿を建てたいのだ。協力してくれないか」

ごねるババア。

「俺の知っている一番安全な場所は、俺の屋敷のある場所だけど…聖シユルル教会治癒士ギルド本部を置ける場所で無い」

一応魔王国内である。そこに聖シユルル教会の本丸を置くのはどうかと思う。因みに、魔王とはお話をして、死の森は俺の領地にしてもらった。俺とセイが聖属性、光属性のオーラを出しまくって会談をしたのだが、魔王様は嫌な汗をかきつつ了承してくれた。恫喝ではなくお話し合いの平和的な解決であった。

「魔王国内だぞ、いいのか、それで？」

「えっ?!それは…」

良い訳は無い、一応教義上は魔王は敵であるから。実際には敵では無く、棲み分けで手を結んでいるらしい。

「次に安全なのは、この公国だな」

俺がダンジョンコアを奪ったせいで、教会の本丸であるババアの住処の結界が張れなくなったらしい。

「この国かあ…」

この国には住処を変えたSランク冒険者の隼人、チーターである俺、マイル、プライド、セイがいる国である。防衛システムに組み込んだスタンピートも強力な戦力になる。まして冒険者ギルド本部がある国を襲うバカは少ないだろう。

「うゝむ…わかった。この国に聖シユルル教会治癒士ギルド本部を置こう。それに隣接する形で神殿も作る」

「ただし、治外法権は認めない。この公国の国民として扱う。いいな？」

「…わかった。カトリーヌよ、公女陛下に条約締結の書面を送るように」

「わかりました…」

神殿の建立場所の地下深くにダンジョンコア部屋を置き、神殿には結界を張れるようにする。これで教皇は安心して眠れるだろう。ダンジョンマスターである俺は結界の出入りが自由であるけど…

——カトリーヌ——

「教皇様、良かったのですか？」

相手の言い分を丸々飲み込まれていた。あの男の言い分をだ。

「あれは人間の姿をしたバケモノだ。戦って勝てる相手では無い」

前回のあの男との会談…教皇様も私達も他人に言えぬ醜態の晒してしまった。白目

を剥き、泡を吐き、様々な体液を垂れ流してしまったのだ。

「聖者ではないのですね？」

「いや、たぶん、あの男は聖者じゃ。ただ単なる聖者では無く、聖者でありバケモノなのであろう。決して、敵対してはならぬぞ」

数百年にも渡って制覇出来なかったダンジョンを攻略した男。神殿の結界を造り出していたダンジョンコアを持ち出し、この地で新たなダンジョンを作った男。魔族や魔王ですら禁足地とした場所を拠点としている男：彼は何者なのだろうか？

この世界のツートップである教皇様と魔王が恐れる男：頭が上がない男：彼は何をし、何をもたらすのだろうか？

—— ツバサ ——

グーグーマップのような衛星写真マップがあれば、この世界の怪しい場所を見つめるのは容易いのだが：召喚される際に持ち込んだ俺とセイのノートパソコン。この世界でも使えている。それを使い、アルメリア公国の住民基本台帳を製作した。

「ソフィア、何か神とアクセスできそうな情報はあったか？」

行政区に巨大な図書館を建設し、本好きなソフィアとマインを司書として置き、暇な時に調べ物をして貰っていた。

「うーん…古い儀式場と言うか、マインちゃんのいたユルゲンシュミットという国家なんです。国土自体が円形で、白い砂に覆われた大地にあるんです。それで、国や領地に魔力を注がないと国そのものが維持出来ないみたいで…」

国土自体が魔方阵になっているのか？

「それは興味あるなあ」

調べてみるかな。

◇

新しくできた神殿へ…教皇を訪ねてみた。

「教皇様にお問い合わせに参りました」

怪訝な顔で俺を見るババア。

「何をだ？」

「ユルゲンシュミットなんです。通称身食いという病気の者達をその国の貴族達が隷にして、魔力過多の彼らを魔力タンク代わりに使っているそうなんです。どうにかありませんか？魔力過多症の治療院の者として、見逃せない状況なんですけどね」

聖シユルル教会治療士ギルド本部のトップとしての判断は如何に？見捨てるのか？見逃すのかな？ふふふ…

「お前は私を試すのか？全く…証拠はあるのかい？」

手に入れた幼児の売買記録の写しをババアに手渡した。

「物心が付くと奴隷契約しないとイケないから、物心が付く前の幼児の時に奴隷契約しているんだそうだ。貴族特権でね」

酷い話である。身食いの平民の子供は、貴族が有無を言わずに取り上げ、奴隷契約するそうだ。それを斡旋するのは教会だと言う。

「取引には神殿長、司祭などが関わっているんだけど、教皇様は黙認していたのですか？それとも関係者達は教皇様に忖度にして、身食いの幼児達を救済されているのですか？浄財と称し、貴族達の奴隷へと…」

「そ、そ、そんなことが行われていたのか、あの国では…カトリーヌ、すぐに調査団を派遣しなさい」

「はい…」

カトリーヌさんの俺を見る目が冷たい。なんでだ？

◇

調査団が到着する前に、ユルゲンシユミット国内で内乱が起き、隣国であるランツェナーヴェが攻め込んだそうだ。その戦乱に乗じて、俺達は乗り込み現地調査を始めた。

王城にある書庫、禁書庫、貴族院の図書館などにある書物を総て強奪し、戦火から保

護をした。貴族院：上から見ると何か幾何学模様に見えるような：祠らしき物からうつつすらと魔力のラインが伸び：何かの魔導回路にも見えるが：戦乱の地であるので、こっそりと離脱した。

保護した物を屋敷で検分していく。うん？鍵付きの書物がある。これは怪しい。鍵自体を『強奪』して解除した。鍵で護られていた内容は所謂聖典であり、様々な儀式の取り扱い方が書かれていた。だけど、儀式場の場所までは書かれていない。うん、小まめに調べ倒すしかないか。

呪いや罫の類いが怖いので、俺とマイルで調べることにした。

◇

例の戦乱だが、教皇派遣の調査団から冒険者ギルドを通じて、俺達や隼人に援軍として参加するように指示が出た。争いを終わらせて上げよう。まず俺達は、内乱に乗じて侵攻を始めたランツェナーヴェを壊滅させた。これで後続部隊は出せないだろう。続いて、内乱の原因であったアーレンスバッハ 大領地を殲滅し、マインの故郷であるエーレンフェストの防衛戦に参加した。

因みに王城は行き掛けの駄賃として、粉砕済みである。

世界樹の下に

——カトリーヌ——

調査団と冒険者ギルドから報告が上がって来た。戦乱は鎮火したそうだが、報告によると、あの男はバケモノだという。広域殲滅魔法を無詠唱で連発していたそうだ。推定魔法量は無尽蔵で、属性はマルチ。治癒魔法すら出来たそうだ。あのバケモノは何者なんだ？ 神は彼にとって敵か？ 味方なのか？

——ツバサ——

戦火から貴族院は守っておいた。どう見ても儀式場に見えるし。

「これは……って、ナノちゃんも同意見のようですよ」

と、マイル。現在、俺、マイル、プライド、セイで貴族院の上空に來ている。現在、貴族院には誰もいないので、これから内部調査を始めて行く。内部には至るところに術式やら魔方陣やらが巧妙に隠されていた。これは何かあるだろう。調査担当は俺とマイルで、戦闘チート特化のプライドは護衛で、セイはヒーラー、呪い解除要員である。

「うーん…ナノちゃんによると、探している神とは違うみたいですよ」

「まあ、神と言つても多種多様なものな」

日本人にとつて神は八百万の神だし。神だけで無く仏様にすらお祈りする種族である。関係無い神とは関わらないでいいのか。

◇

戦後復興の為に現地入りした調査団により保護された身食いの患者達が治療院に運び込まれてきた。結構な人数がいるな。俺とセイ、マイルが治療を施していき、聖シユールル教会治療士ギルド本部所属の治療士達が、施術技術を見守り、学んでいく。

冒険者ギルド本部からは治療薬である物体Xが樽で運び込まれる。セイが治療士達に物体Xの取り扱い注意を説明していく。その説明はまるで危険物の取り扱いに等しい気がする。

「兎に角、臭いが問題なので、使う分だけをジョッキに入れてください。後、健康な人が飲んでも人体に危険はありませんが、味、臭いなど拷問クラスなので覚悟の上、お試しください」

つて、それを患者に飲ませるんだぞ〜！味、臭いの改善が急務であるかもしれない。投与すると意識を飛ばす子供が多数。毒薬では無いんだが…

◇

前回の記憶から、アマツクニの存在を俺は知っている。俺とマイルでアマツクニに買い付けに向かった。部屋着、作業服に作務衣が欲しいのだ。後は畳だな。

「醸造蔵が買えるといいですね」

「だな」

醸造する為の酵母が見つからないのだ。醸造蔵なら酵母が巣くっているはずだし。味噌、醤油、みりんと作るには作れるが、味が…きつと酵母菌が違うのだ。俺とマイルとナノちゃんの今回のメインクエストは酵母の採取である。

「納豆菌も欲しいなあ。後麹菌も…」

「キノコの菌も欲しいですよ。お鍋に必須だと思えます」

「そうになると、スダチとかカボスも欲しいなあ」

俺とマイルの和食への妄想が暴走していく…アマツクニの大き目の街に入り、試食、試飲をし、気に入った物を購入していく。今回の予算は白金貨1枚である。教皇に聖龍の骨の一部を買い取って貰い、資金を作ったのだ。

キノコ類は無かった。これは今後、山でキノコ狩りだな。

その日の夜は、屋敷で和食パーティーである。露天で買った串物や漬物の類いに、米である。

「この米と交配すると美味しくなるかな？」

セイが脱穀前の米を目にして考え込んでいる。

「どうだろうな。この米は水田を使うらしいから」

改良中の米は水田を使わない。植生が違うのだった。

「なすとキュウリ、トマトの苗は買ってきた」

漬物と言えば、なすとキュウリである。トマトはアマックニで丸かじりしてきたのだが、昔懐かしの味だった。無駄に甘くなく素朴でマツタリと出来るような。

◇

今日は世界樹の地下茎との戦いである。伐採した世界樹の地下茎だけを除去していく。除去した地下茎は繊維に錬成していく。錬成スキルを持つ俺にしか出来ない作業である。切り株から伸びている地下茎を錬成しながら、引っ張り上げていく。ある程度繊維が出来たら、今度は布地へお錬成していく。この布地は裁断出来ないのです、服に加工するのも俺の錬成スキルである。裁断、縫製の際の型紙作りはトゥーリとアナスタジア・シヤデランが担当している。

ある程度地下茎を処理すると、地下から風を感じた。これって、地下空洞でもあるのだろうか？俺は、地下へと降りていった。

そこは真つ暗だった。『ライト』の魔法で周囲を明るくし、探索を開始した。見上げる
と絡み合った地下茎が見える。何だろうか、足下には地下遺跡があるみたいである。念

話でマイルを呼び出した。

マイルと合流して探索を再開した。

「ナノちゃん、この遺跡は何かわかるか？」

『これは…先史文明の痕跡かな？』

先史文明？

「年代はわかる？」

『1000年よりも前…1万年前かな？』

「先生、これって大発見では？」

「先史文明の滅んだ場所だから、死の森なのかもな」

「なるほど…」

足下の殆どは砂に埋まっている。所々何かの建築物の残骸が見えるのだが…アレ…これって…大きな物が横たわっていた。叩いてみると、硬いが金属ではないようだ。

「これって、カーボン繊維を樹脂で固めたのか？」

「先生…これって…」

その大きな物の中に入り、アレを探す。もし、想像通りの物であれば、識別銘板があるはずだ。あれはステンレス板なので熱に強く、腐食もしづらいはずで、大きな屋根に護られているから…

そして、それは見つかった。航空機に取り付けてある識別銘板が…日本の航空会社所有の飛行機であった。そう…ここは日本の未来…

「アマツクニのような日本の文化を持つている国があつたつてことは、急に滅亡した訳ではなく…」

義父はここが異世界だと言った。ならば並行した世界の可能性がある。

「俺達のいた世界とは違うパラレルワールドなのだろうな」

プレートを持って、屋敷に転移をした。

日本壊滅

——ツバサ——

「一万年後の世界……想像が付かないわね」

セイがそう言いながらプレートに視線を落としていた。

「いずれにしろ発掘するけどな」

問題はあの砂だな。どこに捨てるか。

「でも国内線とは限らないし」

確かに日本国内とは限らない。発掘して、どこの都市が埋まっているかだな。

翌日から、本格的に発掘作業を開始した。俺とマイルでまず底というか、元々の地表を指すために、砂を除去していく。廃棄場所はアイリスをスタボロにしてくれた王族の住まう城の真上である。今日からあの城には砂が降り続けることであろう。

巨大な篩いザルの上に砂を転移させ、混じった固形物だけをゲットして、砂だけを廃棄転移させていく。混じった固形物は殆どないようだ。鉄などの金属類、コンクリートなどは風化して殆ど砂状になっているようだ。

——アルフレッド・D・タスメリア——

王都に砂が舞うようになった。小雨の様に降り注いでいるようだ。税収の大きかったアルメリア公爵家が独立したせいで、国庫の目減りが激しい。国が傾くと予感して、貴族連中が城から金目の物を多数持ち出したように、国庫の内情が苦しい。アルメリア公国を再編入しようと、我が国の貴族達の有志軍が何度も攻め込んだのが、振り返ちに遭い、反撃を食らい、我が国の被害が増大していく。

弟の犯した罪により、神に見放されたのか、我が国には人災および災難が続いている。そして、今回の降砂現象である。晴れの日でも傘が欠かせない。眼鏡も必要である。いや冒険者が使うようなゴーグルが必要か？

「原因はわからないのか？」

父である王が新米宰相に原因を訊いている。元々宰相はアルメリア公爵であったが、立国と同時に、この国を去った。当然といえば当然である。腹違いの弟のした事を思えば、公爵ははらわたが煮えたる思いだっただろう。そこに追い打ちを掛けるような、俺との婚約命令である。王家として未だに謝罪をしていないのに、ボロボロになった令嬢への人権を無視した王令である。温厚な公爵がキレたのは間違いない。

「わかりません。ですが、アルメリア公国の仕業ではないでしょうか？」

原因が不明であれば、総てあの国のせいにするのか。大丈夫か、この宰相は。「あの国の嫌がらせなのか」

その宰相の意見を鵜呑みにする王。大丈夫か、この国は…王太子である私が言うべきことでは無いな。

「アイリス嬢はまだ差し出さぬのか？」

差し出す訳が無い。公爵家は、あの王令に嫌気が差したのだから。

「アイリス嬢を奪還し、旧アルメリア公爵領を奪い返すことは、可能か？」

「全軍で挑めば、可能かと思われませう」

「陛下、宰相のお言葉ですが、不可能だと思いません」

現状が見えなすぎているので、咄嗟に口を挟んでしまった。

「アルよ、どうしてそう思う？」

「將軍はアイリス嬢の祖父です。孫の望まないことはしないとします。アイリス嬢は既に結婚されていると言われておりますし」

「そんな弱気でどうするのだ！だから、王令を無視した結婚なんぞ、認めぬ。その偽りの結婚相手からアイリス嬢を救い出し、我が王家に嫁がせるのだ。アル、お前が先陣を切り、アイリス嬢を救出してこい！」

「無駄死はゴメンですよ。単純の兵力から見て、勝ち目が無いのは明らかです。かの公

国には聖シユルル教会治癒士ギルド本部があり、教皇様がお住みです。その上、冒険者ギルド本部、錬金術師ギルド本部まであるのです。そんな国にケンカを売るなんてバカのことですよ、陛下」

聖シユルル教会の教皇が住んでいる国に攻め込む？あり得ない。他国から独立し、世界規模で所属会員を見守っている組織の本部が3つもある国だ。あの国は戦の火種が無いと判断したってことである。全うな元首であれば、攻め込んだら負けだと気づく国なのだ。が…

「それがなんだ！王太子であるお前が及び腰でどうするのだ。我が国に編入すれば、より安泰では無いか。きっと教皇陛下も喜びになるだろう」

「その通りでございます、陛下」

この宰相ありて、この王ありか。

「將軍に伝えよ。王命により、全軍を持ってアルメリア公国に攻め込めと」

伝令に伝えた、暫くすると私の目の前に將軍が現れた。

「その王命は従えぬ。娘を討ち、孫娘を浚えって、従えぬ命令である。今を以て、將軍の座を辞する。王太子殿下、さらばだ」

將軍の後ろに近衛騎士団の騎士達が続く。もう、この国の最大戦力が去り、これで、この国は終わっただろう。

ツバサ

密偵達からタスマリア王国がアルメリア公国へ攻め込みそうだとの情報を得た。廃棄する砂のペースをあげるか。国境線から見える位置に攻め込む部隊がいたら、スタンピートを発生させるかな。

今日の発掘メンバーにセイ、プライド、隼人、パーティーが加わった。澱んだ空気をセイが浄化していく。時には汚れた空気だったり、時には成仏出来なかつた魂だったり：まあ、きれいが一番である。

プライドとマイン、マイルには錬成術を仕込み、根茎の処理を任せた。マインには幹から凸版印刷用の文字印材を錬成してもらう。鉄より固い世界樹の幹であれば、鉄で凸版を作るより、耐久度があるだろう。削り出しでなく、錬成で文字を作れば、効率的だろうし。マイルは息抜きにフィギュアを錬成して作り出しているし。

「人間の骨が出た…後、金庫…」

隼人は建物の中を発掘していた。砂を篩いザルに掻き出していく、発掘していたワンフロアの砂を退かしきつたようだ。

「金庫の中は…」

帯封がされた一万円札だった。金庫の中は密封されており、風化から逃れられたよう

だ。

「描かれている人物は坂本龍馬みたい。これって僕のいた時代の発行じゃないね」
「俺の時代でも無い。いつの時代だ？」

『マイル様のいらした時代より1000年後になります』

ナノちゃんから答えが出た。

「はい？1000年後…日本は壊滅するの？」

「壊滅原因は？」

『異常気象の可能性が大了。人類はこの星を捨て、軌道上に逃げた模様です』

軌道上？衛星軌道か？そうなると宇宙ステーションか？ここに残った人達は、貧乏だったのか？選ばれなかったのか？いやいや、万札の帯封がいくるもある。貧乏って事は無い。宇宙ステーションへ行く為の手段が無かったのだろうか。

「隼人、この場所を特定出来る物は残っているか？」

「探してみます」

隼人は金庫内を探し始めた。密閉されていない物は風化しているようなので。調査は隼人に任せ、俺とマイルは砂の除去を続けた。

SS：日本消失

それは突然起きた。日本列島が一夜にして消失した。消失の為か、津波が列島のあつた場所から発生し、台湾、韓国、中国など沿岸エリアへと押し寄せた。前兆無き事態で、津波を迎えた国々はなすすべが無かつた。

ロシアか、中国が何かをしたのか？世界中の様々な国々のニュースは連日、日本消失事件を報じた。

「どう思う？」

アメリカの地層学者で組織されたチームは、日本列島のあつた海域に潜水艦を送り、検証をしていた。

「沈没した形跡は無いなあ。砕けた後も無い。日本列島はまさに消失したようだ」

「問題は、4枚のプレートが集まり、或る意味プレートを押さえていた物がなくなり……」
「ちよつと待て……今、プレートも消失したようだ」

あり得ない計測結果に目を見張る研究者。次の瞬間、潜水艦は海中でシャッフルされていた。

「何が起こったんだ？」

「日本列島という、沈み込みの抵抗がなくなり、プレートの沈み込む速度があがったのか」

「そうじゃない。日本列島が押さえていたプレートも消失し、残っているプレートがダシニングしているようだ」

地殻プレートという、星にとつての皮膚が無くなり、マグマという血液が大量出血していく。大規模な海底噴火が起きた。噴火により、地球を覆う二酸化炭素濃度が濃くなっていく。

この大噴火を境に、アメリカとロシアは手を組み、宇宙ステーションを本格的に建築し、月に住める環境を整え始めた。

◇

あり得ない事態は続いていた。観測データを見ても明らかで、突然消失した日本列島、列島に隣接していた地殻プレートなどに加え、日本近海にいた海洋生物も消失していった。いや、近海だけでなく遠洋でもマグロなどの日本人好みの海洋生物が消失していった。

「まさか、日本は国土ごと、転移したのか？」

アメリカの物理学者が呟いた。

「どうやって？ 転移技術は日本には無いぞ。装置だつてアメリカとロシアにしかな無い。そもそも、どこに転移したと言うのだ？」

◇

その後、地殻移動が頻繁に起きる様になり、予測不能な大地震が世界中に襲い掛かってくる。地震の揺れにより、地球の回転がブレ始め、衛星軌道中にある人工衛星や宇宙ステーションが、月面にある開拓居住区へ降り注いでいく。大量のデブリと共に：地球は滅亡の未来へと突き進んでいった。

この時になって地球を統べていた神が事態に気づいた。もはや生物が住めなくなつた星々。地球の大惨事は地球だけにとどまらず、太陽系全体に波及していったのだ。一方、異世界転移させられた日本列島では、原発が次々にメルトダウンを起こしていった。海から冷却水を吸い上げていたのに、内陸部に転移したので、冷却が出来なくなつたのだ。

突然の爆発、降り注ぐ核の灰。神はマズいと思い、折角手に入れた日本列島を地下に封印し、世界樹によって放射性物質を浄化し始めた。放射性物質は世界樹を介して魔素となり、その世界に拡散していった。まだ、神しくない世界で、ふらりと立ち寄つた日本で手に入れたラノベの知識を生かして、様々な種族を生み出していった。そして、ラノベに出てきそうな国々で溢れる、日本語を共通後にした世界が出来上がつてい

た。

暗躍する者

——アルフレッド・D・タスマリア——

將軍に出て行かれ、近衛騎士団の騎士達に出て行かれ、配下の領主達は領地に引き籠もり、王家として立ち行かなくなっていた。その間も砂が不定期に降り注ぎ、城の半分は埋まっていた。

「どうするおつもりですか、陛下」

新米宰相は金目の物を漁り、城から逃げたらしい。

「どうにもならん。なるようになるだろう」

我が国の国民の人口が減っていた。住みやすいアルメリア公国へ移民として移り住んでいるようだ。我が国より税金が安く、威張り散らす貴族もない平和な国と評判である。我が国では荒くれ者が多い冒険者達も、かの国の冒険者達はルールを護り、冒険者の街とダンジョン内以外では礼儀正しいようだ。

「あの国は理想的な国家です。見習うべきでは無いでしょうか？」

出て行った將軍と騎士達はアルメリア公国に雇われたよう。

「既に遅いですけどね」

砂煙で視界が狭いが、かの国の方角を眺めながら、陛下に伝えた。

「ならば、お前が婿に入り、内部から併合してみよ」

まだ、そんなことを言うのか？

「手遅れですよ。弟がしでかした時に直ぐに謝罪し、アイリス嬢を護らなかつたツケが回ってきたんですよ。王都ではアイリス嬢の卑猥な姿の裸体画が回っているのに、回収も禁止もしないなんて……こんな王都に来てくれる訳ないでしょう？何故、それが分からないのですか？」

「分かる訳は無い。そいつ、洗脳されているぞ」

突然、この部屋にいない人物の声がした。振り返るとアイリス嬢の旦那であるアルメリア公国の王配がいた。

「洗脳？誰に？」

「ああ、王妃も洗脳されていたぞ。多分、お前の腹違いの弟の母親だ」

「父の側室か……」

あの女ならやりかねない。今だに城に残り、火の車である国庫を使い、贅沢三昧をしているし。

「父の洗脳は解けるのか？」

「薬を併用しているようだ。お前の母親の洗脳を解いたが、記憶障害が残った。お前の父親は更に重症だから、精神障害が残る可能性がある。薬は脳自体を蝕むからな」

「なあ、頼む。治療を頼む」

アイツに声を掛けたが、姿は既に無かった。

——ツバサ——

砂の状態を確かめに行ったついでに、王妃の容体を見に行つたのだが、目が死んでいて、明らかに精神がやられていた。マインドヒールを掛けたのだが、記憶に障害が出ていた。まだそんなに深く掛けていないに。これは薬による洗脳時に起きる脳細胞の破壊と思われた。王と王妃は洗脳状態にあり、アイリスに対しての命令は洗脳状態でなされたのだろう。

城内を探索していると宝物庫で宝石を袋に詰めている女を見かけた。ステイタスを見ると、王の側室のようだ。アイリスに罪無き処罰を与えたバカ王子の母親である。そんなに宝が好きなら、うちのダンジョンにある宝箱ダラケの部屋に強制転移させた。因みに階層は30だったかな？運が良ければミミックが遊んでくれるぞ。

砂は王城内に入っていないなかった。城自体は半分ほど埋まっているけど。そうか！王城内に廃棄すれば良いかな？発掘現場に戻って、砂の廃棄先を変えよう。この際、カタ

リナを虐めた王子の居る王城内に変更してみるか。

発掘現場に戻り、廃棄先を変え、砂の除去作業に戻った。

「ねえ、先生。砂だけを強奪して、転移させれば良くない?」

マイルがアイデアを提示してきた。

「一気にだと、足場が無くなるから…そうだ、隼人達のいるビルの屋上から、ワンフロア分ずつ砂を強制転移させるか」

マイルと共に転移をして、ワンフロア分の砂を強奪してからの強制転移をして廃棄してみた。うくん、魔力のへりがキツイ。少量であれば、魔力は使わないのだが…

「魔力的にキツイですか?じゃ、強奪だけしてください。転移は私がさせます」

廃棄用の強制転移の魔方陣をマイルが発動させ、そこに俺が強奪して集めた砂を置いて行く。これでもキツイな、量が多すぎる。って、この洞窟の体積ってどれくらいだ?

——アラン・ステイアート——

す、す、砂が城の中を流れている。どこから流れているのだ?流れを遡っていくと、天井の板がハズレ、砂が滝の様に流れ落ちていた。どういうことだ?誰かの嫌がらせだろう。魔法省へ向かい、原因を調べてもらうことにした。

「うくん、ここには魔方陣の類いは無いわねえ。誰かがここに強制転移させているのだ

ろうけど……いやああああ〜！」

砂の滝に飲み込まれ、砂に流されていくスザンナ・ランドール。魔法省の魔法道具研究室の部署長で、長兄ジェフリーの婚約者である。

「ちよつと、アラン！助けなさいよおおおお〜」

走って追い掛けるが、砂の流れが速い。スザンナは階段を砂に流され下っていく。

「おい！手を伸ばせ！」

ツーフロア先で漸く助け出せた。

「問題は誰が誰に恨みを買ったかねえ」

多分、ジオルドだ。アイツのせいでカタリナが家出をしたんだからな。

「第三王子かな……婚約者を虐めて家出に追い込んだしねえ。その上、指名手配をしたし」
カタリナを犯罪者扱いである。ジオルドに虐めた覚えが無い為、偽証罪と王族に対する侮辱罪で、カタリナは犯罪者墮ちである。その上、未だに婚約破棄はしていない。アイツは犯罪者と婚約するつもりなのか？

「あの指名手配って解除出来るのか？」

「指名手配した本人が解除すればねえ。でもカタリナ・クラエスの場合は解除出来ない。罪状明記の上での立派な犯罪者だからね」

出来ないのか。

「見つかった場合は？」

「国内法が適用されるわ。軽くてもむち打ち50回の上、結婚してから永久軟禁状態で、重ければ、奴隷紋が入れられて、ジオルド王子の奴隷にされるかな」

ジオルドはなんてことをしたんだ？あのバカは…

「そもそも王子が罪状を課せられないんだけどね。でも王族として冒険者ギルドに申請してしまっただから、罪状は確定してものとして、冒険者ギルド内では処理されているわよ」

「王子に罪状が課せないなら、無罪ってことになるのか？」

「その場合、この国の信用度は下がるわよ。だって罪の有無がコロコロ変わる独裁国家と思われてしまうの。そもそも間違いは冒険者ギルドに申請する書面に陛下の印を勝手に押されたことね。あれで国を挙げての手配としえ受理されたのよ」

ジオルドのヤツ…

「因みにクラエス公爵はカンカンよ。大切な娘を強制的に婚約者にし、家出に追い込んでいるから、犯罪者に仕立てられたんだもの」

「それはそうだな。ジオルドが悪い」

「ねえ、アランはカタリナ嬢の家出した先を知らないの？」

「ああ、俺もメアリーも知らない」



事態は最悪な方向へと流されていた。ジオルドの婚約者が犯罪者にされたカタリナから、聖女と噂されているマリア・キャンベルに変更になった。後、伏せられていたが、カタリナと共にアスカルト伯爵の令嬢ソフィア・アスカルトも逃避行に同行しているそうだった。その事を聞いたジオルドは、ソフィアを逃亡幫助罪板として指名手配したようだ。これは王の印が無かった為受理はされなかったが、ジオルドに対する忖度で、カタリナの共犯者としての指名手配書に加えられたそうだ。

王家としてクラエス公爵家、アスカルト伯爵家との対立は好ましくない。ましてアスカルト伯爵は我が国の宰相である。そんな両家が或る日忽然と消えたのだった。屋敷ごとである。国内は上に下への大騒ぎであった。

「うくん、これは大規模な魔方陣で転移させたようね。痕跡が残っていないのは見事としか言え無いわ」

捜査に長兄の婚約者であるスザンナが関わっている。

「屋敷ごと夜逃げとは、大胆よね。手引きした魔法使いに会いたいな」

「その魔法使いの線で追えないのか？」

「冒険者ギルドに問い合わせをしたんだけど、該当者無しよ。魔法使いとして登録していないか、ランクを態とあげていないか、冒険者ギルドに登録すらしていないかね。手

強いなあゝ」

スザンナはどこか楽しげである。コイツ、捜査を楽しんでいないか？

「アラン、出掛けるわよ。付き合いなさいね」

えっ？まさか、俺を助手にするのか？俺はまだ学生だぞ！

「砂の件はいいのか？」

「きつと同一犯よ。こんな高度な魔法を使うなんて、この世界広しでも出来る者は片手ほどもいないわ」

「二、三人か？」

「居ても一人、多くても二人かな。さあ、旅支度をして正門に集合よ。早くしなさいね」

なんで、俺なんだ？ジエフリーアニキじゃダメなのか？

再会は突然に

——ツバサ——

カタリナの弟から連絡を貰い、前回同様にクラエス公爵家の屋敷と、アスカルト伯爵家の屋敷を、アルメリア公国の行政区に隣接するエリアに転移させた。

「キース…会いたかったわ」

「姉さん…」

カタリナ、ソフィアは久しぶりとなる家族との再会をしている。そんな感動的なシーンだったが、俺はカタリナ、ソフィアの家族に打診をした。

「我が国で働いて貰えますか？」
と。

「ええ、娘を保護して頂いたし、この国の評判は耳にしております。我々の力で良ければ、お使いください」

王配としての俺は、カタリナ父、ソフィア父と雇用契約を結んだ。カタリナ父には財

務大臣を、ソフィア父に宰相を務めて貰おうと思う。後日、公女の館でアイリス、アイリスの両親とも面談の時間を設け、正式に契約を締結した。

「で、娘達の仕事は？」

「ソフィアには図書館の司書を、カタリナには植物研究所で植生研究をしてもらっています」

「息子達はどうしますか？」

「この国はまだ人手が足りず、学校の開設まで及んでいません。将来的には皆さんを講師にとかがえておりますが、現状はそれぞれ、父親の背中で学ばせてあげてください。領地経営を学ばせたいのであれば、領地を与えますが、基本的に我が国は中央集権国家にして、領地は代官に任せたいと思っております。勿論、代官を養成する学校も計画しております」

実際問題、この国の各都市は自治権を与えている。領主となる貴族がない為と、代官を雇う予算がない為である。それは各都市とも了解済みで、赤字にしない経営を目指してもらっている。赤字になりそうな都市は、こちらからアドバイザーを向かわせて、再建計画と一緒に立てさせているけど。因みにアドバイザーはアイリス父とアイリス祖父である。アイリス祖父の場合は、自警団関係のアドバイザーになるけど…

俺の役目が終わり、アイリスがシヨウルームの案内と商談を始める。俺は砂の除去作

業に戻った。

——アラン・ステイアート——

スザンナは迷い無くどこかに向かっていた。

「どこに行くんだ？」

「一番の理想的な国家であるアルメリア公国よ。きつと、彼らはそこにいる」

アルメリア公国って国の方針に逆らった公爵家が独立し、立国した新興国だったような。

「理由は？」

「教皇様に移り住んだ土地よ。きつと、難航不落のダンジョンを踏破した人物が、そこにいるはず」

難航不落のダンジョンだあ？都市伝説で聞いたことがあるなあ。確か教皇の住まいの足元にはダンジョンが広がっているってやつか？

「遷り住んだってことは、ダンジョンコアを奪い、あの土地に新しいダンジョンを作り上げたってことよ」

「なるほど…それが真実なら一理あるなあ」

「だから、行って確かめるのよ」

たった二人で敵陣に向かうのか？大丈夫か、この女は…

港町から船に乗り、隣の大陸へ…着いた街で馬車を借り、アルメリア公国へと向かった。

◇

そして、漸くアルメリア公国に入国をした。一面の平原が広がり、その背後には鬱蒼とした森が広がっている。

「あの森を越えれば公都よ」

森の中、魔物がいない。普通、いるだろうに。

「なあ、この森は魔物が出ないのか？」

御者の男に訊いた。

「出ないよ。アルメリア公国内ならダンジョン以外安全だ。冒険者達が定期的に森の安全を確保してくれているんだよ。盗賊すらいない」

「これが理想的な国家の現状よ。聞いた話だと、定期的に冒険者の気質を見極めて、悪質な冒険者は排除しているそうよ」

「ああ、そうだ。お嬢さん、詳しいねえ。悪質な冒険者は見せしめ目的で獄門刑に処されるのさあ。それは悪質な国民も対象だよ」

「理想の裏には恐怖政治ありかしら？」

「それは違うな。理想な国を担保して貰い、国民の自治権に於いて、賞罰するのさ。この国ではゴミ掃除は国民の義務なのさ」

か。そういう自治もあるのか。国民に自治権を与え、国策だけを注視しているのだろうか。

そして、漸く公都に着いた。街の周囲を壁が覆っている。王城かつて感じにだ。

「まずは宿屋の確保、そして食事よね」

街の中は整備されているようだ。道は馬車がすれ違うことが出来るように広めで、区画整理されているのだろうか、スラム街のような建物が見当たらない。

「あら？アラン様？」

何故か俺の婚約者であるメアリーの声が：声が出た方へ振り返ると、メアリー、ソフィア、カタリナ、キースがいた。

「あれあれ、アラン様は実は歳上が好みだったんですか？」

って、カタリナ。

「ちげえよ、この人は長兄の婚約者のスザンナだ」

「お兄様の婚約者とアバンチュールですか？」

って、ソフィア。

「ほら、ビンゴでしょ？さあ、カタリナ様、一緒に帰りましょうね」

スザンナが魔法でカタリナを拘束しようとする、俺とスザンナは一瞬で違う場所に転移させられていた。

「えっ！いつ転移魔法を掛けられたの？」

スザンナが周囲を見回している。

「魔導具ですよ。仲間に悪意を向けた相手とその仲間を、牢獄に転移させるね」

確かにここは牢獄のようだ。

「ああ、ここは脱出不可能な場所にあります。さあ、どうしますか？」

スザンナが何かの魔導具を発動させたが、何も起こらない。

「その牢獄内では、如何なる魔法も発動出来ません」

「アラン、どうしよう…囚われの身になっちゃったわ」

「どうしようじゃないだろ？護衛は？」

「あら？アランが護衛でしょ？」

うっ、ダメだ、この女は…

「さて、色々訊きたいことがあります。話してくれますよね？」

「話すことは何もないわよ。私達はカタリナ嬢を連れ帰ることが目的なの」

「じゃ、身体に訊いてみますか」

うん？身体に訊く？何を言っているんだ？

「えっ！」

スザンナの手首、足首に鎖が巻き付き、手足を引っ張り上げられて宙づりにされた。喘ぎ声を上げて身体をくねらせ始めた。彼女の真下が濡れていく。

「話を訊かせてくれますか？」

「お願い……もう止めて……」

スザンナの目から涙が零れていく。あの高飛車系の女が、乙女チックに見えるのは何故だ？

「本当に……もう……止めて……」

「そうだ！あなたはアラン王子ですよね？メアリーが話しがあるそうですよ。この女だけここに置いて、メアリーの元へ戻りましょうか」

「ねえ……置いて行かないで……アラン……助けて……」

次の瞬間、どこかの屋敷のリビングにいた。

「じゃ、カタリナ。後は任せる」

「はい、任されましたよ、先生」

あの男の姿が消えた。先生って、カタリナの先生なのか？なんの先生なんだ？

溶け込む異物

——ツバサ——

牢獄に戻ると、あの女はボロボロになっていた。身も心も：彼女の記憶を読むと、スザンナ・ランドール、ランドール侯爵家の次女で第一王子ジェフリーの婚約者で魔法省魔法道具研究室の部署長とある。

どうするかな：もう戻れない位精神はボロボロである。身体は洗えばきれいにはなるけど。ウエンデイに頼んで、身体をきれいにしてもらう。着衣は体液塗れで洗ってもダメらしい。当面全裸で放し飼いしておくかな。見てもムラムラしないし。アンダーヘアの茂みに奴隷紋つを入れて置くか。ここなら先ず見えないし、調べもしないだろう。そうだ、学校が出来たら、魔法の先生にしよう！

「ウエンデイ、洗い終わったら、メイド服を着せて、仕事を叩き込んでおいて」
「わかりました」

さてと、砂の除去作業に戻るか。砂はまだまだタンマリある。底がまるで見えない。後何メートルあるのやら。単人パーティーのおかげで、ここが東京都千代田区であるこ

とが分かった。円形に見える山脈から想像するに、ここは山手線の内側か？で、死の森の中心部分だとして、この下には江戸城跡でもあるのか？

俺の考えを隼人、マイル、セイ、プライドに話した。

「僕もそんな気がするんです。このビルって、丸の内辺りかなつと……」

634メートルのタワーらしき物は見えない。そうなると思までは700メートルくらいか？いや崩れたビルが見えているから、タワーは風化したのか？

そうなると思までは200メートルくらいか。

「階数表示が風化して見えないので、底までどのくらいあるか」

情報を共有しつつ、地下調査を続けた。

◇

山脈の向こう側なのだが、岩盤までそんなに深く無い。そうなると思、山手線の内側だ、異世界に転移したのか？

「ナノちゃんはと思う？」

『首都部だけ転移して危機を脱した可能性があります』

その可能性もあるか。月の模様に、ここが俺達のいた地球ではないのは確かである。この世界で見る月には兎を連想する模様がないのだ。

「兎に角、あの廃墟を調べてみましょう。調べた結果、1万年前のことに関われませんか」

ど」

「いや、まだ使えるオーパーツ的な物があるかもしれない」

前回召喚された世界とは違う並行世界の可能性もあるな。より迷惑な神が存在する世界……

——アラン・ステイアート——

うーん、この街は住みやすい。婚約者であるメアリーと同居しているアパート、快適である。階数は4階で階段が面倒であるが。現在、俺はアルメリア公国に楽士として雇われている。カタリナやソフィアは、それぞれの家に住んでいて、クラエス公爵、アスカルト伯爵はその爵位のまま、この国の財務大臣、宰相として働いているそうだ。

この国は頭を抱える問題が少ないそうだ。公女アイリスは贅沢をせず、国の象徴として、外務を担当しているそう。実質国の舵取りをしているのは、彼女の旦那である王配だそう。爵位と言っても、貴族は3家しか無いそう。クラエス公爵家、アスカルト伯爵家、そして公王家であるアルメリア公爵家だ。

税収がまだ少ないことで、金策で頭が痛いことがあるそうだが、王配がどこからかお金を工面してきてくれるそう。割と財務関係の仕事は楽しい。

何よりも貴族が少ないことで、余分な支出が少なく、健全な国庫であるそう。そも

そもここには城が無く、公女の館が城の役目をしているそうで、侍女や、メイド、騎士なども必要最低限な人数しかないそうだ。因みに公女様はここに住んで居らず、通いやすい。なので、夜間の警備なんかも必要が無いと言う。ただ、他国の重鎮客などが来た場合、公女の館は迎賓館として機能するので、その場合は騎士達を常駐させ、メイド、侍女達も常駐勤務になるらしい。

「兎に角、無駄を削減して、国庫を護っているのよ」

メアリーは植物研究所に勤務しているそうだ。そこにはカタリナもいるとか。

「カタリナ様と同じ職場……いいでしょう?」

「ああ、羨ましいよ」

「あつ、そうそう、アラン様、今度、植物達に音楽を聴かせて上げて下さいね。カタリナ様が音楽を聴いた場合の植生の変化を研究したいそうですの」

「わかった。その時は教えてくれ。最高の演奏をしてやる」

宝の山

——ツバサ——

森の館にある会議室に、俺、隼人パーティー、セイ、マイル、プライド、そして俺の義父がいる。

「コチラで調べた結果を、知らせておく」

義父は神の代行者として、調査をしているようだ。

「この世界の神は色々な世界を臨界接続していたようだ。既に騒動の原因である神は始末してあるから、問題は少ないけど…」

問題は少ないけど、有るには有るんだね。

「この地下に有るのは？」

プライドが訊いた。

「君達のいた日本の未来だよ。この世界の神はイカレていた。日本その物を召喚し、住んでいた民衆を世界各地に転移させた」

勇者召喚でなく、聖女召喚ではなく、日本自体を召喚したのか…義父の言葉に啞然と

する俺達。

「近代日本を古代文明として、召喚したようだ。その際、冷却水消失により、原発が軒並みメルトダウンし、焦ったバカ神は地下に封印してようだ。世界樹は放射能汚染を浄化する為に植えたらしい。根から放射能汚染を吸い上げ、魔素として空気へ放出したんだ」

「この世界の神は何をしているんだ？ そうなると、あの砂は核の灰混じりの可能性がある。半減期は過ぎて無害だろうけど。」

「そうそう日本の消えた地球は滅亡した。1000メートル級の津波が沿岸部を襲いね。文鎮の様に、複数のプレート縁にあった国だから、大地震も誘発したようだ。日本ごとプレートを引っ剥がしたらしく、地球の自転、周回軌道に誤差が出来、衛星軌道にあった宇宙ステーションは月と激突し、大惨事だったようだ」

「日本召喚の結果に対して、言葉が出ません。何、その迷惑な神様は…」

「あの神は、救済処置の名の下に、大惨事前の時間軸から、勇者召喚、聖女召喚をして日本人の保護をしているようだよ。ほんと頭が痛い…」

「神の代行者の頭痛の種らしい、この世界の元々の神…」

「なんで、日本限定なんですか？」

「マイルが質問をした。」

「言語体系的に、文字種も多く、基本文字数が一番多い国だかららしい。画数も多いし：古代文明ばいって。なによりも一神教で無いお国柄がよかつたらしい。そもそもが、あのバカ神のヤツ、日本発祥のラノベに倣まっていたのが原因らしいけど」

ああ、平仮名、片仮名で100文字近くある上、ローマ字、漢字もあるしねえ。神に至っては八百万の神々だし。ラノベは日本の文化だよねえ」

「そんな理由で？」

「イカレタ神ってそんな者だよ、まったく：問題は、魔王召喚をしているバカがいたことだな。今後、魔王が召喚されるかもしれない。その対処を頼みたい。こちらでも対処するけど」

迷惑すぎる神もいたもんだ。神は始末したが、その下僕たる天使や精霊が未だにいて、信仰をしてくれる原住民に異世界召喚の方法を伝授しているようだ。

「世界の中心はここであるのは間違いない。無闇に荒らされないように禁足地にした程度だ」

召喚された日本の中心でもあるかららしい。

「この世界のバカ神が召喚術の元になる装置をどこに設置したのか、覚えていないのが大問題なんだ」

その装置を破壊しないと、召喚地獄が止まらないらしい。当面、その装置を見つける

のが俺の使命らしいが、見つけ次第破壊で良いらしい。

「また、調べた結果を報告しに来るわ」

って、義父がどこかへ転移して消えた。

——ツバサ——

終わりが見えない発掘作業……ふと思いついて、俺が住んでいた家を掘り出すことに決めた。場所は……勘だけが頼りである。

「先生の家って、山の手線の外側では？」

と、マイルの素朴な疑問……そうだ。ここは山の手線の内側と想定していたんだ。ダメじゃん。

「じゃ、東京タワーは？」

と、隼人。

「錆びて風化している気がする」

待てよ……原発のメルトダウン……首都圏内には原発は無かった。もし、日本列島が丸々埋まっているなら……首都圏以外は密閉状態で風化していない可能性がある。

「そうだ。寧ろ山の手線の外側は風化していない可能性がある。後、ラノベ狙いで召喚したなら、図書館とか所蔵品を劣化させない処置をしているんじゃないか」

目指すは有栖川にある公立図書館だ。近くに十番温泉があったはず。ナノちゃんに測量してもらい、当たりを着けた場所の砂から除去していく。そして、漸く十番温泉を掘り出した。地形的に谷底であったので、周囲の砂が流れ込まないように、周囲をブロック状に固め、防砂壁とした。

「おおおおお、温泉だあ〜！」

喜ぶ元日本人達。源泉に世界樹で錬成したパイプを刺し、森の館の湯船に掛け流しさせてみた。

「ツバサさん、これでいつでも温泉に入れますね」

隼人が喜んでいる。

◇

砂の下にあった日本列島なんだが、そこは時間が停止しているようで、コンビニの弁当が腐らずに残っていた。森の館まで持つてくると時間が動き出すようで、持つて来てすぐならば、レンジでチンすると美味しく頂けた。きつとメルトダウンに焦ったバカ神様が時間を止めたのだろうか。バカ神様にとつての日本の文化財が腐らず、風化しないように：勿論、コンビニ内にある雑誌や漫画本などもそのまま残っていた。これにはマイン、ソフィアが狂喜乱舞していた。

「一生分の食料庫ですね」

マイルが喜んでいた。新鮮？なポテチが山のようにあるし：問題はまだまだあるある大量な砂である。相変わらず、カタリナの生まれた国へ転移させていた。そして数日後、あの国、ソルシエ王国はついに砂に埋まったと風の噂で聞いた。でも、廃棄場所は変えない。

VSプライド妹

——プライド・ロイヤル・アイビー——

久しぶりにフリージア王国に帰国した。目の前には、第一王子のスタイルと第二王女のティアアラがおり、その背後には近衛騎士団が彼らをガードするように取り囲んでいた。

冒険者ギルドを通じて、再三帰国を打診されていた。そして今日、発掘作業が休みだったので、ご主人様と帰ってきた。

「元第一王女、プライド・ロイヤル・アイビー、再三の帰国要請により、帰国いたしました」

「お姉様、元とは言わないでください」

妹であるティアアラの顔が苦しそうである。

「あなたは、未来が見えたはず。あのまま、ここにいたら、私は……」

「それでもです」

「今の暮らしに満足しています。何ひとつ不自由してません」

「お姉様……」

「姉君……」

妹と弟は、私の考えに同調出来ないようだ。

「私は隣におりますツバサ・アルメリアの側室です。もう、この国の女王にはなれませんが」

表向きの正妻はアイリス、事実上の正妻はセイさんである。

「お姉様が側室？ありえませんか」

納得しない妹。

「もう決定事項です。その代わり、この国に危機が迫れば、彼にお願いし手助けをします」

既に私を洗脳支配する予定の人物は排除してあるし、こここの周辺国くらいなら、私だけでも殲滅できる。

「それでは、皆様、お元気で……」

彼に領くと、森の館へと転移した。

——ティアラ・ロイヤル・アイビー——

お姉様は言いたいことだけを伝えると、目の前から消えた。確かに、このまま、ここ

に残れば、来て欲しくない未来が来るかもしれない。私達の一族の女系は未来予知と言う能力がある。お母様も私も、たぶんお姉様も、遠い未来にお姉様が暴走して、この国に害を与える未来が見えたと思う。

だけど：

「私、お姉様の元へ向かいます」

「居場所は分かるのか？」

お兄様が心配そうに私を見据えている。お兄様には転移能力があるが、行ったことがある場所でないとは転移出来ない。

「冒険者ギルドで確認してあります。冒険者ギルドを通じて、彼のいるアルメリア公国へ向かいます」

冒険者ギルドの本部のある国。冒険者ギルドの支部、本部は転送陣で繋がっているそう。国のトップであれば、その陣が使えるらしい。ただ、その使用許可審査は厳しいそう。悪用すれば、簡単に飛び地へ攻め入ることが可能であるから。

母である女王に相談しなければ。

——ツバサ——

冒険者ギルド本部から指名依頼が入った。Sランク案件らしいが、俺はFランクの筈

である。

「俺、Fランクだけど…」

「みなしSランクだ」

ランクアップ要請はすべて拒否している。

「隼人卿に依頼したら、連日の穴掘りで無理といわれた」

この国に居るSランク冒険者は隼人パーティーである。俺達のパーティーはFランクであるのだが…俺、マイル、プライド、セイのパーティーは教皇認定のSランク冒険者。パーティーになるらしい。主に裏仕事専門の…、あのばあさん、碌な事をしないなあ。で、仕事の内容は？」

「フリージア王国の王族の護衛任務だ」

「拒否します」

フリージア王国って、プライドの…なんで、俺達を指名した。

「拒否理由は？」

「目的がプライドの拉致だからだ」

「どうしてそうなる？」

グランドマスターがしつこい。俺、キレていい？

「プライドは、その国の第一王女で、俺の元に亡命したんだよ」

「そうなのか？この国へ来訪目的が違う。国交を結び、友好条約を締結する為とある」
「な訳無いだろう。あの国と一体どれだけ離れていると思うんだ？このこと友好条約を結んで、俺達にどんなメリットがあると思う？それ、下手すれば、戦争案件になるぞ」

目的が見え見えなので、ブランドマスターを脅しておく。

5章 富国強兵作りの異世界行 トキオ共和国建国

——ティアアラ・ロイヤル・アイビー——

冒険者ギルドから、転移陣の使用許可は下りなかった。無理を通せば、戦争案件になるといい、国家間の揉めごとには冒険者ギルドは不介入だそうだ。

「どうしよう」

自室にて一人で最善手を模索する。騎士達に護衛して貰うには、距離が有り過ぎる。旅費が国家予算に響く額になるであろう。

「手は無い訳ではないよ」

突然、部屋にいない人物の声が出た。

「どんな手を使うの？」

お姉様を浚った悪魔に、甘えた声で訊いてみた。

「フリージア王国はアルメリア公国の属国になるんだよ」

「そんなこと出来る訳ないわ」

声の主を睨みながら、声を荒上げた。

「じゃ、諦めろ」

「ねえ、お姉様を返して！」

「断る。アイツは、俺のパーティーメンバーだから」

「冒険者を雇って、アルメリア公国に行くわよ」

「いいよ。プライドの住んでいる場所は、そこじゃ無いし。好きにしろ」

お姉様のいる場所はアルメリア公国じゃない？ではどこに…

「俺達の住処は魔王国内だ」

魔王が総べる国？やはり、コイツは悪魔なんだ！

「攻めて来いよ。魔王国の属国になりたいなら」

不敵な笑みをして、悪魔が消えた。

——ツバサ——

ティアアラを煽った翌日、魔王国の王に呼び出された。要するに魔王様である。

「冒険者ギルド経由で、フリージア王国って国から返還要求が来たんだけど…」

プライドを返せとか？

「なんかした？」

「煽った。魔王国が後ろ盾って…」

「うーん…：お願いだから、独立してくれないかな。立場はそちらの方が上なんだし」

聖属は悪魔に対しても無敵であった。下級悪魔程度であれば、触れるだけで燃え上がり灰になっていく。

「ねえねえ、魔王国に税金払っているよ」

魔王国へはケツ持ち賃は払っている。住民税や所得税など三点

死の森は、魔王国内であるが、実質飛び地である。死の森を囲むあの山脈は龍王国の領土である。元々いたバカ神が、あの場所を護る為に、龍を山脈に住まわせたい。この世界の魔王はドラゴンより弱い。その為に死の森には転移でしか来られない。

「なら、龍王国の領地って、名乗ってくれない？そうしてくれると嬉しいです」

汗だくの魔王。

「どうするか。入国審査は無しにしてくれる？」

「します。通行税はとりません」

「じゃ、独立するか」

◇

森の館に戻り、会議を開いた。参加者は元日本人の方々。

「魔王国から独立するんですか？」

マイルに訊かれた。俺は経緯を説明した。

「ごねて、漁業権も貰った。龍王とも話したが、国として独立する以外は、今まで通りだよ」

魔王国内での漁業はし放題、龍達の住処の掃除や整理など無断侵入は問わないそうで、今まで通りで良いらしい。

「国名をどうするかだ。いい案はあるか？」

「それだったらトキオ共和国は？東京の真上だし、みんなで生活しているし」

セイが提案をした。他に浮かばないので、それに決定した。アルメリア公国にある各ギルド本部に独立国になったこと知らせた。

「おまえ、この国の王配でなく、別の国の王なのか？」

冒険者ギルド本部のグランドマスターに言われて、はっとした。そうなるなあ、どうするかな。アイリスとアイリスの両親と相談だ。

◇

「かまいませんよ。二つの国で王をしてはいけないってルール無いですから」と、アイリス。

「そうなるよ、名前はツバサ・トキオになるか。いや、ツバサ・アルメリア・トキオが良いかのう」

と、アイリス祖父。

「あそこつて難航不落よねえ。魔王国を超えて、龍王国を超えないと、攻め込めないし」

とは、戦闘狂のアイリス母。

「山脈手前の森を越える必要もありますね。隼人パーティーの鍛錬場所で、戦いがいはあると思います」

鍛錬するだけなら良いが、あそこを越えて、登山、龍王国、下山、死の森つて、越えられる軍がいるとは思えない。そもそも魔王国縦断も難しいだろうな。

「ねえ、うちの国とその国の関係は？」

と、アイリス母。

「兄弟国？」

「対等？上下関係は必要だと思っわ」

「トキオ共和国は、館以外、人の住める環境じゃないですが」

領土は死の森と呼ばれる世界樹の森全域で、山脈下山後2、3日は歩き通さないと、館にたどり着けない。

「じゃ、この後ろ盾の謎の国ね」

楽しそうに話すアイリス母。因みこの人、山脈前の森を踏破仕切れなかった。対人戦

最強クラスでも、ノラの魔物相手で分が悪かったらしい。

クマさん現る

——ティアラ・ロイヤル・アイビー——

執拗に冒険者ギルドに依頼をだしていたら、宣戦布告と取られたようで、一夜で王城は陥落した。お姉様が暴走した未来でも、もっと掛かったはずなのに

：

「じゃ、お前達に隷属の首輪を与える」

私とお母様は悪魔の前に跪いている。お姉様の手で装着される隷属の首輪：装着される時、首輪は不可視モードになり見えなくなっていく。

「今後、攻めようと思うなよ。フリージア王国はトキオ共和国の属国扱いだからな」

私のせいで魔王国から独立することになったらしい。地図で、この国の場所を示されると禁足地にあった。人間が踏み入れてはいけない場所。古代から神に侵入禁止にされていた場所であった。

森の中に立てられた館のリビングで、全裸でアイツに跪く私とお母様。一夜で無血開城され、私達だけをこの地に浚ってきた悪魔。

「ティアラ、私は哀しいわ。何の為に私は亡命したのかしら」

私の頭を小突くお姉様。

「いっそ、プライドがフリージア王国の次期女王になるか？」

「イヤです。ここに住めなくなるじゃないですか」

笑顔の二人：仲睦まじい姉夫婦：お姉様は幸せなような笑みを浮かべている。こんな表情のお姉様は、未来予知を含め、見た事が無い。衝撃的であった。

「そうそう、紹介しておく、俺の正妻であるセイだ。教皇認定の聖女だ」

正妻が聖女：お姉様でも勝て無い相手：

「で、こっちがアルメリア公国の公女であるアイリスだ」

これならお姉様の勝ちかしら。

◇

森の館：人間をダメにする魔導具が多い。温風乾燥機能付き洗浄便座：これ欲しい。掛け流しの温泉、肌がツルツルになる。未知の食べ物：美味しいどうやって作るのだろうか？一泊しただけで、私もお母様も森の館の生活に魅せられてしまった。

「毎度あり」

墮落すると分かっている、洗浄便座を注文してしまった私達：

とある高層マンションの入室……見覚えのある部屋……誰の部屋だっけ？デスクの上には大量のモニターらしき物の残骸が並んでいる。トレーダー系の部屋だな、そういえば、15歳で株の取引で大儲けした少女がいたっけ。家庭教師で学校の勉強よりも株で儲けたいからって、トレーディングを手ほどきしたっけ。あの子の名前はなんだっけ……うん……そうだ優奈だ！

ベッドらしき物の上に人骨が横たわっている。頭にはヘッドギアか？ゲームプレイ中に息を引き取ったのか？

知り合いかも知れないので、その部屋の中を浄化し、魂が漂っている気配を感じたので、魂を昇華し、天国へ誘った。

その日の夜、森の館の近くで黒いクマを捕まえた。立ち振る舞いがクマらしくなく、人間が着ぐるみを着ているみたいで……

「先生、これ人間ですよ」

と、マイル。

「ほら、顔が人間ですし、チャックもあります。」

本当だ。クマソツクリの手袋と靴を履いていた。こんな物どこで売っていたんだ？って、よくこんなふざけた装備で、ここまで来たな。

「ここに転移してきたのかな？ 足跡が無いですよ」

マイルがナノちゃんを使って周辺を捜査していた。ここに、ダイレクトで転移？どこかで見覚えのある少女がいた。頸動脈締めで意識を刈り取ったので、セイに回復してもらった。

「う〜ん…」

目覚めた少女。

「ここは？ アレ…先生？」

俺を先生よ呼ぶ少女。やはり、アイツなのか？俺が魂を昇華した為に、ここに召喚されたのだろうか？

「優奈か？」

「そうです…」

「このクマの装備はどこで買ったんだ？」

トウリーが似合いそうだ。

「クマの装備？ 確か、神様に…」

神様？ バカ神は排除したから、義父かな。知り合いなので、館の中に運び入れた。温泉に入れ、食事を与え、現在の状況を説明した。

「ここって、未来なんですか？」

「そんな感じだけど…不明なことが多い」

翌日、模擬戦をさせた。どの位のチートさなのかを知る為に…マイルより弱いかな。クマ装備になれていないだけかもしれないけど。

「このクマさんもパーティーのに入れますか？」

マイルに訊かれた。入れようかな。

「私の名前はクマではなくユナですよ」

「ああ、ユナさんを冒険者パーティーにいれますか？」

「魔王降臨までに戦力を揃えたい。神様装備ならチートかもしれない。マイル、登録しに行ってくれるか？たしか6名までオーケーのはずだ」

「了解」

マイルとユナが転移して消えた。

「地下領域で魂を昇華すると、ここに召喚されるみたいだ」

俺と同じ聖属性のセイに伝えた。

「そうになると、地下領域には魂が封印されているんですかね、先輩」

「可能性はある。腐敗もせず、食べ物の時間が止まっていたくらいだし」

中性子爆弾でもくらったのだろうか？ユナの記憶は曖昧で、死ぬ瞬間のことを覚えていなかった。ゲームをしていたら、この森にいきなり転移したらしい。

クマさん、異世界で呼び出される

——ユナ——

株という名の錬金術を手に入れた私は、15歳にして巨額の富を手にして、引き籠もり生活を始めた。この世界、お金があれば、なんでも出来る、両親に1億円をプレゼントしたら、お口にチャックをして、私に意見することを止めた。今、私と接してくれる人は、ゲームで知り合った仲間と、神野翼という家庭教師の先生だけである。

「ちゃんと喰っているか?」

「食べています」

私の健康を気遣ってくれる先生。たぶん、世の中で唯一、信用出来る大人だと思う。ダメなことはダメとハッキリ言ってくれる。お金で解決しようとする、真顔で「舐めるなよ」と優しくデコピンをしてくれる。両親を含め、先生以外の大人達は、お金を差し出すと、何も言わなくなるのに。

「顔色が良くないぞ。これを飲んでおけ」

サプリを何種類か、手渡して来た先生。

「先生は、このゲームに携わっているんですよね？」

「これ以外にも何本化は手に掛けているよ」

両親とは違い、頭ごなしにガミガミとは言わない。高校に行かない私に、生きる為の知識を教えてください。

「お金があれば、なんでも出来ますよ」

「そのお金が使えない世界になったらどうするんだ？」

「あり得ませんよ。日本円がいきなりデフォルトするなんて」

そう、あの時、そんなことを言った気がする…

◇

大型バージョンアップ後、ゲームにログインした。目の間にゲーム内の私のメイドが現れ、ゲーム内での変更点を教えてくれた。ああ、先生にもらったサプリを飲むのを忘れた。ログアウトしたら、飲まない、などと考えていたら、知らない場所にいた。真っ白な場所、私のメイドがない。

「ハハハハハハ」

『神様からの以下の装備を貰いました』

右手 黒クマのてぶくろ（譲渡不可） 攻撃の手袋、レベルが上がるにつれて威力アップ。

左手 白クマのてぶくろ（譲渡不可） 防御の手袋、レベルが上がるにつれて防御アップ。

右足 黒クマの靴（譲渡不可） 使い手のレベルによって速度アップ。使い手のレベルによって長時間歩いても疲れない。

左足 白クマの靴（譲渡不可） 使い手のレベルによって速度アップ。使い手のレベルによって長時間歩いても疲れない。

服 白黒クマの服（リバーシブル機能あり、表と裏で色が違う。見た目着ぐるみ）

表（黒） 使い手のレベルによって物理、魔法の耐性がアップ。耐熱、耐寒付き。

裏（白） 着ていると体力、魔力が自動回復する。回復量は使い手のレベルに依存する。耐熱、耐寒付き。

下着 クママークのパンティとブラ（脱ぐこと不可） 防水、防臭、汚れ防止 清浄浄化機能付き

以上、クマセット一式を手に入れました』

システム音と共に、目の前に文字が表示されている。クマセットって何？ 神様って？ これって、神様チート装備かな。カンストな私が装備すると、ゲームがつまらない気がする。でも、着ぐるみみたいでかわいいかな。先生も欲しがるかな。

真つ白な場所が急に光出した。眩しい：目が開けられない。

目を開けてみた。鬱蒼とした森の中にいた。ここはどこだ？木々の隙間か建物のよ
うな物が見えた。そこへ向かって歩いて行くと、背後に何かの気配を感じ、意識が途絶
えた。カンストした私がやられるとは…

◇

あれ？いつの間にか寝てしまったのかな？目を開けて、周囲を見ると、知り合いが目
に入った。

「……は？アレ…先生？」

「優奈か？」

「そうです…」

「このクマの装備はどこで買ったんだ？」

「クマの装備？確か、神様に…」

よく分からない状況である。私は死んで異世界に召喚されたらしい。ラノベの様な
展開でバカバカしいけど、先生、私が生前すんでいた部屋へ案内されると、真実味を感
じてしまった。砂に埋もれたマンシヨンの最上階の一室。株式の値動きをみるモニ
ターらしき残骸の数々。ベッドらしき物の上に静かに置かれている人骨。そのクビ元
にはステンレス製のペンダント型の認識証。手に取ってみると、私のだった。先生から
のプレゼント。私を私だと認識出来るからと、プレゼントされた。高層マンシヨンで怖

いのは火災で、万が一巻き込まれら、私を探す手がかりにしたいって…

「先生、これ…」

手に取り、先生に見せた。

「へえ、まだ残っていたんだ。風化もせず」

懐かしそうに私の認識タグを見つめる先生。 634メートルの塔は風化して消えた

そうだ。

銀環の魔女を探せ

——ツバサ——

ユナの件の後、知り合いの家を何軒か回り、魂を昇華して回ったが、召喚された者がいない。ユナとの違いを考える。ゲーム内アバター姿で召喚されたユナ。もしかして、魂の受け皿が必要なのか？リアルの身体は既に朽ちている。ゲーム内アバターはサーバーに残っている。サーバーってどこにあったっけ。勤務先のゲーム製作会社には無かった。

『各務 桂菜を探せ』

突然、義父の声が聞こえた。ケーナかあ。『銀環の魔女』という二つ名を持つ問題児なエルフキヤラである。現実でのストレスを発散しているのか、ゲーム内では、結構イケイケで、付いた二つ名だっけ。

ケーナとユナの共通点を考える。俺の教え子であること、未成年であること、後はゲーム内でカンストしていたことかあ！カンストが召喚条件なのか？そうだ。現在の転生者の仲間達もゲーム換算でカンストレベルである。スーパードクターのマイル、ラ

スボスチートのプライド、勇者隼人：

ケーナはどこにいたんだっけ。うくん、確か事故で半身不随に、そして、生命維持装置付きで病室で寝たきりに。彼女の伯父に意思の疎通がしたいと相談され、VR空間にケーナを送り込み、会話を出来るようにしたっけ。俺がいた時代、VR—MMO世界は医学に応用されていた。心のケア方向で。それらのサポートをしていた俺の部署：ゲーム作成以外にそんな業務があり、連日深夜様な帰りだったっけ。

俺は、いつものメンバーにユナを加え、ケーナのいた病院を探した。ナノちゃんがケーナのナビゲーションAIを探し出し、座標を訊き出すことが出来、砂の除去作業に入った。最近は効率的な砂除去方法を編み出していた。転移能力を持ち大容量の亜空間収納が出来る俺、マイル、ユナで、砂を砂専用の亜空間収納にしまい、あの国に捨てるリスクがあるから。

「屋上が見えて来た。あそこから入ろう。俺とユナとセイは病室へ。残りの者達は周囲の警戒を頼む」

警戒しないと砂が怖い。生き埋めはカンベンだよ。たまに砂が雪崩を起こし、流れてくるのだ。

——ケーナ——

腹部に衝撃を受け、目が醒めた。

「ケーナ、起きろよ〜」

私の腹の上にクマがいた。頭のフードを取ると女の子のようだ。声は、知り合いの声だ。誰だっけ？う〜ん、確か…先生の教え子のユナだっけ？カンストした私の元にたまに来てくれていた。目を見開きガン見すると、目の前にクマの着ぐるみを着たユナがいた。

「ユナ、それ、どこで手に入れたの？私も欲しいよ〜」

起きたばかりとは思えない素早さで、ユナからクマの着ぐるみを脱がしに掛かっていた私。それを阻むように頭部に打撃が入った。

「おい、ケーナ。周囲を確認しろよ」

「えっ…先生…」

最近は来てくれなかった先生が、目の前にいた。それよりも、四肢が自由に動く。ここはVR空間か？

「お久しぶりです」

「本当に久しぶりだな、おい」

先生に頭を抱かれ、徐々に落ち着きを取り戻した私は、部屋を見回す余裕が出来、見た事の無い室内。ここはどこだ？VR空間にこんな場所は無かったはずだ。

「ここはどこですか？」

「端的に言おうと異世界だ」

先生の口から思いも寄らない言葉が湧き出していく。

「じゃ、伯父さん達は？」

「今も病院内を搜索しているが、ケーナ以外の者を召喚できていない」

私達は突然の異世界召喚に遭い、元々いた世界で命を散らしたらしい。

「これからのことだが、協力してくれるか？」

元日本人の寄り合いにいた方が安心だと思う。ゲーム内では無敵であったが、現実世界では臆病者であった。

「先生達といたいです」

先生と一緒に安心なはずだ。

魔女の遺産

——ツバサ——

今は無きバカ神の仕掛けた臨界というシステム。義父からの情報によると、召喚されたアバターに関係する世界が、この世界に接続していくと言う。物理的に無理とかでは無く、兎に角拡張されていくらしい。そうなると、新たに確認出来るのはユナとケーナの世界だろうな。彼女たちが活動するエルファニカ王国、フェルスケイロ公国の場所については、冒険者ギルド本部に訊いておく。拡張された場所であっても、冒険者ギルドの支部は存在し、本部ではそれらを把握出来ている。不思議なシステムの1つであるが。

「どつちを先に攻略する？」

もはやゲーム感覚のマイルに訊かれた。冒険したそうさ。最近砂の掃除ばかりだな。

「エルファニカ王国から行くか。冒険者ギルド本部で確認したんだが、ケーナの方は、彼女の子供達が既に国の中枢を抑えているし」

「えっ?! ケーナって結婚して、ゲーム内で子作りしていたの?」

驚いた視線をケーナに向けるマイル、ユナ、セイ。

「違います。先生、ちゃんとシステムの説明して下さい」

「ああ、そうだな。ケーナの子供はみな養子だ。あのゲームでは『里子システム』って言うのがあって、ケーナには三人の子どもがいるんだよ」

これも彼女の伯父に頼まれて作ったものだ。結婚する年齢まで生きられない子供達の為に、疑似結婚生活を体験して貰うシステムであるが、R18規制により、異性との過剰なスキンシップは禁止とされ、『里子システム』に落ち着いたと言える。異性との関係を持たずとも、子育てだけは体験出来るのだ。

「あの子達元気かなあ…」

物思いに耽るケーナは置いておいて、今後の活動内容を決める。魔王対策として、仲間になれる国を見極めないと。現状で信用出来るのは、アルメリア公国とフリージア王国、魔王国、龍王国である。マイルのいた国は、お金で解決したが、絞れるだけ搾り取ろうとする王族の欲望が見えているので、いずれ消えて貰う

◇

グランドマスターにクリモニアの街の冒険者ギルド支部を紹介してもらい、そこへ転移し、ケーナのギルド証を手に入れた。遠征メンバーは俺と、ユナ、ケーナの二人とマ

イルである。知らない土地にいきなりセイは危険だから。

「この街で、異世界生活に慣れて貰う。後、商売の拠点でも作るか。俺とマイルはバックアップ要員だ」

戦力的には二人は問題無い程のオーバーキル要員である。それは死の森で確認済みであるが、生活面が不安であるのだ。リアル世界において、引き籠もりと寝たきりの少女だったのだ。自炊は壊滅的かもしれない。

「大丈夫です。ゲーム内では自炊はしてました」

と、ユナ。

「お金があれば、食堂で食べますし」

とは、ケーナ。

森の中で狩りをする。狼、兎などを狩り、解体していく。

『『解体』スキルを得るまでは、マニュアル作業をするしかないんだよ』

ゲームではドロップ品で肉を手に入れていたが、ここはゲーム世界では無い。解体用ナイフで解体しなければ、肉を得られない。

「こんなに大変なんだ…」

ケーナは泣き言を言うが、黙々とユナはマイルの指導に耳を傾けていた。

——ブランドル王国第三王女 モレーナ——

我が国から消えた女神様の依り代であるアデル・フォン・アスカム様を探す旅に出た。彼女からは、毎年『もう探さないください。迷惑です』とのメッセージと共に白金貨1枚が送られて来ていた。きつと、探す為の旅費にと寄付をされているのだろう。私の近衛騎士団と共に、アデル様搜索の旅は続く。

最近、妙な事件が起きている。砂が雨のように降り続き、既に3カ国が地図から消えたらしい。きつと、女神様であるアデル様がお隠れになったせいであろう。早く見つけねば…

冒険者ギルドに立ち寄り、国からの指示書を受け取る。内容は、聖シユール協和国の教皇様のお住まいが、アルメリア公国に移ったと有る。教皇様に指示を仰げとある。行き先をアルメリア公国へ変更して急ぎ向かう。

アルメリア公国は最近できた国である。タスメリア国の公爵家が独立し立国したと言う。そう言えば、タスメリア国って、砂に埋もれ地図から消えて国の1つである。陰謀なのか？まさか、アルメリア公国が女神様を…急いで教皇様に会わないと、世界の危機が近いのかもしれない。

アルメリア公国の王都に宿を構え、情報を収集していく。新興国であるのに、冒険者ギルド、錬金術ギルド、商業ギルドの本部があるそうだ。治癒士ギルドは聖シユール

協和国にあるそうだが、アルメリア公国にある教皇様のお屋敷の敷地は聖シユルル教皇領という、独立国家であるそうだ。アルメリア公国内にあるため、まず敵に攻め込まれる心配が無いと言う。いや、考えようによって、アルメリア公国に教皇という人質を取られた格好である。きつと、アルメリア公爵つて極悪非道な人物で、教皇様を出汁に、各ギルドの本部を呼び付けたのかもしれない。

女神様の前に、教皇様をお救いしなければ！正義感に燃え、勇んで教皇様に会い向かった。

◇

「お前はケンカを売りに来たのか？」

「滅相もございませぬ」

教皇様を救い出そうとしたら、戦乙女聖騎士隊に囲まれた。

「私は教皇様を極悪非道なアルメリア公爵からお救いに参りました」

「儂は、好き好んで、この地に移り住んでいるのじゃ。こんな儂達を心良く受け入れてくれた公爵に、何故その様なことを言うのじゃ」

「いえ、きつと、この国で我が国の女神様をもお隠しになったのかもしれない」

「女神じゃと？何者なのだ、そやつは…」

「わがブランドル王国が誇る女神様の依り代、アデル・フォン・アスカム様でございます」

「アデル？ 知らんなあ。」

思い込み王女の粘着

——ツバサ——

教皇から念話が届いた。面倒事が発生したようで、俺一人で来いとある。教皇の元へ急ぎ、転移した。教皇の間には、マイルを追い出した国の王女がいた。たしか：ブランドル国だっけ？ 正式な貴族令嬢であるマイルが下女のような扱いをされていても見もせず助けず、マイルが女神の依り代とうそぶいてからは、手の平を返した様に粘着してきたクソ王族である。

「おお、来たか。お前はアデル・フォン・アスカムという女神を知っておるか？」

まさか、教皇にマイルを寄越せと迫ったのか？

「アンタが影で、破壊神と呼んでいるアイツのことだよ。それがどうしたんだ？」

マイルのチートな破壊力を見て教皇様は、アイルを影で『破壊神』とよんでいるそう
だ。

「この者が儂とその女神を救済したいそうなんだが、どうしたら良いかの」

知らんがな。よし！ 決めた。砂の捨て場所を変更だ。王女と取り巻きをブランドル

国に強制転移させ、亜空間収納に入れて有る砂をブランデルの城の上からぶちまけた。

——モレーナ——

一瞬で我が城に転移させられた。大量の砂と共に：やはり、アルメリア公国が裏で糸を引いているんだわ。我が父である国王に進言をした。

「アルメリア公国が裏で糸を引いています。天誅を喰らわすべきです。女神様と教皇様を人質にしているようですわ」

「本当か？冒険者ギルドに申し立てをし、罰を与えよう」

が、冒険者ギルドからの返答は、『その様な事実はございません』だった。そうか冒険者ギルド本部すらも人質にされているのだろう。この事実をブランデル支部に持ち込んだ。

「確認しましたが、そのような事実はございません。本部は人質に取られていません」と、騙されている様であった。どうすれば良いか？

——ツバサ——

連日、モレーナ王女はあらゆる組織に働き掛けをしているようだが、冒険者ギルドも、教皇サイドも相手にしなくなつた。俺達からは連日、大量の砂をギフトしまくつてい

る。

「あんな国、無くなってもいいよ！」

と、マイルがキレまくっていた。探さないで欲しいとお金まで出して頼んでいるのに、白金貨1枚じゃ足り無いのだろうか？マイルは捕まれば、神殿に監禁されるんだろうな、女神の依り代として信仰の対象となり。

「いっそ、女神になつて、世界征服でもする？」

「イヤです。つまらないです。先生とアレコレ画策する側でいたいです。先生の思考は私よりも斜め上ですから。毎日がワクワクですよ」

と楽しそうに言うマイル。

森の中で狼と兎を狩り、解体する日々。解体スキル持ちであれば、亜空間収納に入れるだけで、自動で各部位に解体出来るのだが、ユナとケーナは未だこの世界の解体スキルを得ていないので、倒しても死体しか手に入らないのだった。

「兎に角、解体スキルを先ず手に入れることだよ。じゃないと金にならない」

解体用ナイフを手にして、ユナとケーナは解体しまくっている。倒す火力は充分であるので、解体の経験を積ませていく。

「この世界はゲームでは無い。レベルは存在しない。スキル頼みなんだよ」

解体練習で生まれる売れ無い素材をエサに、狼を呼び寄せて、俺とマイルで練習素材

を稼ぐ。解体に失敗し、ボロボロになった皮や血抜きが不十分な内臓などが売れに素材になる。

「誰か、助けて……」

突然、森の中で、人の声を聞いた。咄嗟に声の元へ駆け寄る解体に飽きてきた俺達。現場では、小さな女の子が倒れている。そこに三匹の狼が襲い掛かろうとしていたが、一瞬で狼は死体に成り果て、マイルが女の子を介抱し始めた。

「先生、マインドヒールをお願いします」

女の子にマインドヒールを掛けた。あまりの恐怖に失神してしまったようだ。

「あっスキルが生えた」

「私も……」

女の子を介抱している間、ユナとケーナのコンビは、死体となった狼を解体し、解体スキルを漸く手にいれたようだ。

聖者、家を買う

——ツバサ——

「えっ！クマ……」

目覚めた女の子がユナを見て、再度失神してしまった。あのクマ装備は危険だな

「ユナ、戦闘時以外は、頭のパーカー部分は外しておけ」

「あつ、はい」

再度目覚めた女の子。名前はフィナと言うそうだ。濡れたパンツは浄化清浄乾燥済みである。森にいた理由を訊くと、母親が病気で薬草を探していたようだ。

だ。

「問題無い、母親の居場所に案内してくれ。俺達はヒーラーだ」

「お金無いです」

しよぼんとする女の子。ここらでも回復師は大金を得ているのだろうか？教皇に抗議しておくか。

「無料でいい。俺達は冒険者だから」

冒険者ギルド証を見せて、安心させた。

◇

フィナにクリモニアの街へ連れて行かれた。この街に拠点を置くかな。この大陸で初めての街だし。そして、フィナの母親の元へ。と、その前に、門番に呼び止められた。まあ、一見不審者集団である。クマの着ぐるみ少女、エルフの少女、見た目幼女に近いマイルに、俺である。門番にギルド証を見せて黙らせる。

「えっ?!冒険者ギルド本部所属の冒険者パーティー…どうぞ、お入りください」

冒険者パーティーランクが『みなしS』なFって、どういうことだ。グラントマスターに文句を言ったら、Sランクにしてもいいんだぜって、脅された。冗談じゃ無い。Sランクになったら、面倒事が山積みである。俺は永遠のFランクでいたいのだ。

途中冒険者ギルドの支部に立ち寄り、森で解体しまくった兎と狼の素材を売った。

「なんだ、この量は…」

1000体をマニユアル解体しないと解体スキルは得られないなので、買取カウンターにはユナとケーナの練習素材であった200体以上が積み上げられていた。

「ギルドの金庫に現金無いんだろ?ギルド証に入金で頼む」

ギルド証はキャッシュレスカードとして使える。後日、ギルド証に振り込んで貰うよう申請をした。よくあることだ。レインリヒに世界樹の葉っぱ一枚を売るときなんか、

この機能を使っている。ギルドに白金貨なんか常備していないから。

食べ歩きという色々な食いの経験をユナとケーナにさせながら、フィナの母親の元に着いた。セイを呼び出し、診察を任し、セイの指示通りに治療、浄化、回復をさせていく。あの薬は、ここで使えない。使えば一発で治るのだが、セイとマイルに止められた。街中ではテロ行為になるから。セイもマイルも面倒事は嫌いである。勿論、俺もだ。

無事、治療が終わり、次に商業ギルドに向かった。宿に泊まるのも良いが、空き家を買い取ることにしたのだ。転移陣を置いた部屋を設置すれば、転移スキルを持たざる者の行き来が楽になるし。

手に入れた物件は、3階建てのお屋敷だった。元貴族のお屋敷だったそうだ。

「1階を商店にして、住居は2階にするか」

マイルと俺で、屋敷内を住みやすいように、改造していく。トイレ、風呂、畳敷きの部屋など：そうだ！冷蔵庫と電子レンジもいるか？あ、ダメだ発電システムが無い。早く掘り出さないと…

「商店って、何を売るんですか？」

ユナに訊かれた。

「街でリサーチをして、売れ筋を見極めるんだよ。後、採算の取れる価格帯で売れるかど

うかもだ」

目立った貴族街が無いようなので、庶民向きの物がいいだろうな。

1階の倉庫のような場所を作業場にして、マイルがユナとケーナに錬成術を教えながら、フィギュア人形を作り始めた。

◇

前回の周回で仲間だったコゼット・エーデルワイスト、ダリヤ・ロセツティをお持ち帰りした。

「遅いよ〜！」

と、会った瞬間に言われた。彼女達は前回の周回の記憶がうつつすらと残っていたようだ。

「コゼットは、前回と同じでダイエットを優先して、ダリヤはどうする？」

「げっ、ブーツキャンプ…！」

顔から血の気が失せていくコゼット。今回のブーツキャンプは鬼軍曹のアイリス母の元で無く、砂除去作業であるのだが。

「魔導具を作りたいです。今回はどんな物をつくりましたか？」

ダリヤは婚約破棄後、俺の迎えを待ちつつ、引き籠もり生活をしていたようだ。

「世界樹の錬成を中心に、印刷機、洗浄温水便座乾燥機能付きかな」

エチゴヤのラインナップを見せた。今回は先の見えない砂との格闘があり、あまり事業を拡張していない。

◇

内政が落ち着き、アイリスが洋菓子業を始めた。ダリヤは魔導具製作業である。今回は個々に商業権を取らずに、エチゴヤに集約させるそうだ。ここアルメリア公国の名産は力カオであるので、チョコを名産にするのは定番である。但し、前回と違いいきなり高級路線では無く、クリモニアの街で売れる庶民路線から攻めるようだ。

クリモニアの街の館で洋菓子業を開業する。売り子はユナとケーナである。クマとエルフの店、流行るといいなあ。

ユナはクマスキルで料理を習得しようだ。って、クマスキルって、なんだ？

ケーナは相変わらず食べるの専門ぽい。スキルマスターであるケーナには料理スキルが生えないのだろうか？

ケーキ作りの為、ミルクと卵をアルメリア公国から持ち込むと、クリモニアの街の商業ギルドの目に止まったらしい。

「お願いです。定期的に卵を卸してくれませんか」

と……この街では卵が品薄らしい。

「これはケーキに使う予定だから……」

「営業停止にして、強制で搾取してもいいんですよ」

などと商業ギルドのマスターと小役人。俺に脅しは通用しない。脅しには脅しの倍返しだな。商業ギルド本部のグランドマスターに支部長に脅されたことを提訴した。エチゴヤの商人ランクはみなしSSである。世界樹の葉っぱで財を為している商会であり、それなりに商業ギルドにお金を落として居る。

グランドマスター裁定で、支部長は降格、そして、領主から賠償金を貰った。

「クマさん、チョコをください」

領主の娘が毎日、チョコを買いに来るようになった。担当はクマさんことユナである。

「チョコばかりだと鼻血が出るよ」

「大丈夫です」

この街で売るチョコはカカオの濃度が低いので、鼻血は出ないと思う。

身食い患者再び

ツバサ

マインのいた国、ユルゲンシユミットは内戦の末、共和国の属国に収まった。王家の証を俺達が入手に入れ、マインが住んでいたエーレンフェストの領主に王家の証を貸与して、実質の属国にした。あの国は神々を召喚する祭儀場の役目を果たす地であったので、義父が介入して、その地関連の神々を矯正、指導をして、巨大な図書館をもぎ取って、アルメリア公国の行政区に持ってきていた。

「凄い、魔導具いっぱいある」

楽しそうにダリヤが魔導具を解析していく。マイン、ソフィアが本の目録を作成しつつ、読み込んでいた。エーレンフェストでは木の魔物でトロンベと言うのがいて、実験をすると上質紙が作れるらしいことが分かった。エーレンフェストの冒険者ギルド支部にトロンベの採取を依頼しておく。

後、回収していない人物っていたかな？

マイルに訊いてみた。

「あとですと、身食いのエルフ達かな。そうそう、身食いのオリヴィエ・アルウェイ、悪役顔のディアナ・クレスター辺りですか」

コイツ、よく覚えているなあ。

「身食い関連か。そういや、身食い専門の治療院を作ってから大々的に宣伝していなかったな」

前回よりもスローペースな俺。

—— リーシエ・イルムガルド・ヴェルツナー ——

王太子から婚約破棄を言い渡される運命のループを生きている。今回は8回目である。前回の周回は中々楽しかった上、死因は不明であった。過去6回の死因は分かるのに……という訳で、前回と同じ様に婚約破棄イベントはスルーして、アルメリア公国に来た。前回とほぼ一緒の風景が目の前に広がっていた。だけど、アズータ商会が無かった。特別区にある教皇領って、なんだろう？

行政区で見かけた領主の護衛(女性に限る)に応募してみた。そして、即決された。前回と同じなんだが……

「ああ、リーシエがいたな」

と、王配が声を掛けてきた。この人も前回の周回を覚えているようだ。

「前回との違いは？」

「そうだな。共和国を建国した」

「へ？ここアルメリア公国の王配では？」

「アイリスが、複数の国の王になつちやダメなルールは無いと言うんだよ」

それは、前回には無かったイレギュラー要因である。今回は長生きできそうだ。

「この新人さん貰つて行くわよ」

つて、鬼軍曹にお持ち帰りされた。これつて、ブートキャンプの始まりか？

——ツバサ——

冒険者ギルド本部に呼び出された。砂の掘り出し作業を中断し、本部へと向かったのだが……目の前に肉の塊がある。

「これつて、何かわかるか？」

グランドマスターに訊かれた。

「ああ、これは身食いの末期症状だ」

全身の細胞があるだけで、皮膚と筋肉の境が無い、内臓と骨の境すら無い。ただひたすら肉の塊である。

「身食いの末期？」

「ああ、人間の場合は身体という器の強度が弱く、溜め込んだ魔力で内部から暴発して肉も骨も細かい破片になるが、魔力に耐性のある種族だと、肉の塊になるんだよ」

「治せるのか？」

「試してみる」

前回よりも危険が一杯の疑似エリクサーがある。それに世界樹の葉っぱは腐るほどある。その為、試験的に熟成発酵させた世界樹の葉っぱの漬物すらある。

肉塊をお持ち帰りして、身食いの治療の為の部屋に持ち込んだ。肉塊を容器に入れ、疑似エリクサーを注ぎ、世界樹の葉っぱの漬物を投入した。これで放置である。部屋を密閉しておく。この臭いは俺でも変な汗が出るレベルである。ガスマスクを作らないと…

2週間ほど放置して、様子を見に行った。肉塊は金髪のエルフの少女へ…前回というアルファだろう。今回もアルファと名付け、念入りに脱臭処置を施した後、一般病棟へ移した。

アルファの治療の様子を録画した映像を、冒険者ギルド、治癒士ギルドの各グラウンドマスター、教皇に見せた。

「あの肉塊がエルフになるのか」

「違う。エルフが肉塊になったんだよ。それを治療しただけだ」

誰かが唸るように発した言葉に、俺は正解を言ってみた。初めから肉塊って、それはバケモノですよ。

「このように、身食いは末期でも治療できます」

二人のグラウンドマスターがああ、の漬物の臭いを嗅ぎたいと言いだし、別室で嗅いで貰うと、白目を剥き失神してしまった。俺ですら無理なのに、勇気あるなあ。

魔女の子供達

——ツバサ——

退院したアルファには『クマ&エルフ』の売り子を頼み、今日はケーナとケーナの子供達に会いに向かった。マイルとセイが興味津々で着いてきた。

「里子システムかあ。子育てはしつかりしましたか？」

セイがケーナに訊いたのだが、ケーナは吹けない口笛を吹いていた。

「コイツ、放任主義で、三人とも母親の愛情に飢えたマザコンだよ」

「それは言わないでくださいよ。子育て経験がなかったから……」

「全員、エルフなんですか？」

「上二人はエルフだけど……末子はドワーフよ」

「エルフは優秀な種族で面白みが無いっていつて、ドワーフにしたよな？手先が器用な子で、ケーナと工作をよくしていたような」

ケーナの伯父に頼まれ、暇が来ると、ケーナの様子を見に行ったり、手助けをしに行ったりしたっけ……

「先生のいじわるう〜」

少し拗ね気味のケーナ。その末っ子が働く造船所に向かった。上二人は、アポが無いと会えない名士であつたから。

「いたいた！お〜い、カータツ！」

俺の声で振り返るドワーフの親方。

「あれ？叔父貴…つて、お袋か？」

厳ついドワーフの目に涙が…

「カータツも貫禄出たわね」

と、カータツに抱きつき頭をなで始めたケーナ。まるで、子供が親の頭をなでているように見える。微笑ましい様子に笑いを堪える外野が2名。

「お袋は全然成長していないようだな。叔父貴も…」

俺を叔父貴呼びするドワーフの親方。

「今、どこに住んでいるんだ？」

「先生の家よ」

「つて、どこだ？」

「俺のねぐらは幾つもあるが、公式な現住所はトキオ共和国だよ」

「聞いたことが無い国だな。新興国か？」

「ああ、そうだよ。でだ、この国の重鎮と友好条約を結びたいんだが、ケーナの長男と長女でいいの？」

「二応、王族がいるから、そっちにだな。アニキは相変わらずだし」

ケーナの長男はスカルゴといい、この国フェルスケイロ公国の大司祭を務めている。人格者であるが、超マザコンで、ケーナが妙なスキルを与えた為、感情を乗せてポーズを取るとバツクに過剰演出が付与されるので、見た目が結構ウザいキャラである。いや、ケーナに対する言動もだな。

「マイマイに会いたいけど…ああ、スカルゴは面倒だから、内緒にしてね」

アイツを面倒な痛いヤツにしたのはケーナである。ケーナ本人はゲーム内でのネタとして設定したようだが、現実には存在するとなると、超ウザいな。

「姉さんは学校にいるぞ」

マイマイはケーナの長女で、王立学院の校長であり、魔法を教えている。

「ねえねえ、先生、ケーナさんの長男さんって、どんな人ですか？」

マイルに訊かれた。

「マザコンで感情を乗せたポーズを取るとエフェクトが付くウザいヤツだ。確かエクストラスキル『薔薇は美しく散る（オスカル）』だったか」

「えっ、アレを着けたの？」

変な汗をかいているセイ。同じ会社で働いていたので、あのスキルのデモ映像をみているはずだ。

「セイ、あのデモ映像のモデルは、ケーナの長男のスカルゴだよ」

「ああ、あれね…ゲーム内でも連発されるとウザいのに、現実だと」

「最悪だよ」

一人分らないマイルだけがスカルゴに期待しているようだ。

◇

王立学園に向かった。アポが無いと面会が出来ない。なので、強奪でマイマイを呼び寄せた、

「叔父様ですか？こんな力業で私を呼び出すなんて」

「アポの取り方を知らないし」

ゲーム内ならメッセージを飛ばせば、アポは取れたが、ここではメッセージ機能なんて物は無い。

「先触れは手紙でお願いします。つて、まさか…お母様ですか？」

俺に文句を言い終えると、漸くケーナに気づいたマイマイ。

「私のことなんて…」

地面に『』の字を書いているし。

「お会いしたかったです」

ケーナに抱きつくマイマイ。

「うくん、いつの間にか私より背が高いし…」

マイマイは順調に成長していたが、ケーナはつい先日、召喚されたばかりである。

「ねえ、胸が私より大きいよね？」

マイマイの胸を鷲掴みにし、確認をするケーナ。そのシーンを唾然としてみている外野の2名。

「ねえ、先生。ケーナさんって、内弁慶ですか？肉親に容赦ないですよね」

と、マイル。

「長男のウザさを我慢出来なくなると、雷撃を喰らわせたり、ぶん殴ったりもしていたな」

俺達との暮らしでは大人しいケーナだが、今日の前で繰り広げている親子のヤリトリは普段のケーナからは想像出来ないだろう。

「なあ、マイマイ、王族を紹介してくれないか。俺の国と友好条約を結んで欲しいんだよ」

親子のヤリトリに一段落つき、俺はマイマイに本題を切り出した。

「叔父様の国ですか？作ったのですか？」

「まあ、そんな感じだよ」

「国名は？」

「有名じゃないよ。トキオ共和国って言うんだ」

聖者、孤児院を助ける

——ツバサ——

マイマイの口利きで、フェルスケイロ公国と友好条約を結んだ。さて、帰るか。

「どうする？ケーナはマイマイの元に居残るか？」

マイマイは結婚をしたそうで、子供、孫がいるという。

「はあ？一緒に帰ります。ここに捨てて行かないでくださいよ」

スカルゴを警戒しているケーナ。お前の息子だろ？

「あつ！そうだ。ケーナの秘密拠点はいいのいいのか？」

ケーナは通称「銀の塔」という秘密基地を持っていた。あくまでゲーム内で、ここに
あるかは知らない。

「そうですね。ここまで来たんですか、ここにもあるのか確認したいです」

銀の塔の近くにある辺境の村まで、短距離転移で進み、村から遠くに見える塔へ一気に
転移をした。

「ありますね」

「あつたね」

「秘密基地つて？」

マイルに訊かれた。

「ゲーム内の全スキルを覚え、スキルマスターになった記念で貰える秘密拠点だよ。本人以外が内部の仕掛けをクリアすると、スキルを1つ貰えるんだ」

マスターの間に転移をし、ケーナの代理管理者に魔力を補給して帰宅した。

◇

クリモニアの街の領主であるクリフ・フォシユローゼから指名依頼が入った。Fランクの俺に指名依頼はあり得ないんだが、みなしSランクつてことで、グランドマスターが指名の許可をしたようだ。

依頼内容はクリモニアの街に卵を流通させて欲しいというお願いであった。どうするか？アルメリア公国の鳥の飼育場を拡張するか？それとも、地産地消に励むべきか？うくん：悩む。働き手を多めに確保しないと行けない。鳥の飼育つて結構人手がいるのだ。ストレスを与えると卵を産まなくなる場合もあるし。

冒険者ギルド依頼ボードをなにげなくみていると、ボランティア募集の貼り紙があった。内容は老朽化した孤児院の修理とある。ランク制限は無い。孤児院かあ：孤児を働き手にすれば：俺は依頼書を手に窓口へと向かった。

件の孤児院はボロボロであり、喰うにも困る有様だった。ユナを呼び出し、食事の用意を頼む。兎の肉がけっこう溜まっているので、ここで使うか。兎の毛皮欲しくて、大量に狩った兎たち。ユナのクマの着ぐるみに対抗して、ネコの着ぐるみを製作中である。

「建物だけでなく、食事まで……」

院長先生に泣かれてしまった。訊けば、領主から寄付金が出ないらしい。あのヤロー！卵を作っても売らないぞ！

孤児院を鶏舎付きの建物に改築した。そこに調教済みのコカトリスを放し飼いに。孤児院の庭にはエサになりそうな草の種を撒いておく。このコカトリスは優秀でガーディアン役もする。悪意に反応し、不審な侵入者を見つけると石化してくれるのだ。

コカトリス達が新しい環境になれるまで出荷は出来ない。出荷出来る様になれば、1日100個はいけるだろう。

——クリフ・フォシユローゼ——

何故か、我が家に卵を売ってくれない。おかしいだろ？私は領主だぞ。販売をしている商人を呼び出した。

「あ？お前の家には売らない。商業ギルドも納得済みだ」

一見冒険者に見える商人。

「どういうことだ？」

「お前、孤児院への寄付という援助金を打ち切っただろ？」

打ち切っていない。毎年援助する為に寄付しているが：

「喰う物にも困り、冒険者ギルドにボランティアを募集して、孤児院の建物の修理を依頼したんだぞ」

「そんなはずは…」

「己の目で確認すらしていないのか？そんなグータラ領主に売る卵は無い」

確かに、援助金が実際に使われているのか、確認はしていない。担当者からの報告だけを受けていたが

「いいか？こんな領地経営をするなら、潰すぞ！」

商人は言いたいことだけ言う私の前から去って行った。

聖者、王都へ行く

——ツバサ——

店の空き時間に何をするのも自由だが…目の前にサーベルタイガー、ゴブリンキング、ブラックバイパーの死体がある。クマさんことユナが狩ってきたようだ。

「コレって、売れるかな？」

死体の損傷は少ない

「売れると思うが、この街じゃ無理だな。せめて、王都かギルド本部で無いと金庫に金が無いだろうな」

狩りの腕が上がっているのか

「で、なんで、解体していないんだ？」

「それは…スキルレベルが少なくて…」

「Aランク以上の指定魔物が自動解体できないのか。解体出来るように練習有るのみだな」

「先生、プリン差し上げますから、手伝ってください」

新作か？プリン…美味しい。

「じゃ、ゴブリンキングで練習するか。サーベルタイガーとブラックバイパーは皮が高値で売れるから、損傷の危険があるマニユアル解体は避けた方がいい」

「はい」

ケーナが狩るところはならない。一撃必中の魔法をぶつ放し、地形その物を変形させるのだ。当然、魔物はバラバラで売れるのは魔石や牙、角などの硬い部位だけである。考える事より先に魔法をぶつ放す。『銀環の魔女』という二つ名の悪名は、その様な行動から恐れられていた。

◇

領主のクリフから横領犯を捕まえたと連絡あった。だから、なんだ？卵を売ってくれと??

「ユナ、ノアはプリンを買いに来ているか？」

ノアは、領主の娘のノアール・フォシユローゼのことだ。

「ええ、毎日、チョコを一つとプリンを一つ買いに来ています」

ならいいか。領主の家族に売っている実績はあるので、クリフの訴えはスルーだ。

卵の出荷は順調である。作りすぎても問題はない。余剰分は総てアルメリア公国へ持っていくからだ。現在、チョコ作りは低価格帯から高級路線にも向かっているそう

だ。遠距離で来る商人向けのお土産の定番にするには低価格帯では、目玉にならないという。まあ、チョコはアイリスに丸投げである。

フィナの病気だった母親、ティルミナは全快し、職を探していたので、養鶏場の責任者に雇った。元冒険者で読み書き計算が出来るって、丁度良い人材である。娘のフィナは解体が得意らしいので、兎などの解体を頼んだ。兎のシチューがよく売れるのだ。『クマ&エルフ』の売れ筋はプリン、チョコ、シチューである。ウエイトレスが確保出来れば、喫茶室を営業したい。

◇

マイルの奪還に燃えるブランデル国が周辺国と合同で『女神解放軍』を編成し、アルメリア公国へ向けて進軍しているらしい。その兵力5万ほぼらしいのだが、経路上にある小さな国々を占領しながら進軍し、占領した国から金銀財宝、女を奪っていると言う。どこが解放軍なのだろうか。ただ欲望を解放している盗賊に成り下がったと思う。ただ5万もいると大いなる理想の下の統制が効かないのだろうな。

その軍勢がアルメリア公国まで後1週間くらいの距離まで到達したという。

「どうしますっ？」

アイリスが心配そうに訊いてきた。

「アイツらの経路上には海があるんだが、どうするんだろうね」

金銀財宝を抱えている5万の軍勢。そんなに載せられる船は無いんだが：対岸の港町はエライ騒ぎらしい。領主を倒し、港にある総ての船を強制徴収しているそうだ。だが、酒と女に飲まれた軍勢が翌朝、目が醒めると、港町から馬車で二日の距離にある砂漠にいたらしい。武器や防具に財布などの他、奪って来た金銀財宝が消えていたそうだ。

「先生、盗んだのですか？」

マイルが妙なことを言う。

「俺は、敵認定した者達に容赦が無いだけだよ」

答えた。

遠征軍は戦う前に撤退戦に転じたそうだ。武器などを持たずに、殆ど手ぶらで撤退する軍勢。占領された国の民から石をぶつけられ、集団でボコられた

り、途方もない災難に遭遇したという。

これで、当分、いや、もう来るな！

軍勢が撤退している最中、俺とマイルとプライド、ケーナで、今回遠征をした国々を巡り、金属をゴツソリと頂いてきた。迷惑料だよ♪

◇

指名依頼が舞い込んだ。それも冒険者ギルド本部と商業ギルド本部の両方からだ。

冒険者パーティー『エチゴヤ』には貴族の家族の護衛依頼で、商会である『エチゴヤ』には王都で珍しい物を売ってくれと。依頼主は両方ともクリモニアの街の領主のクリフだ。

「パーティーの依頼料はSランクに払うには適正価格である。が、商会には依頼料は無しだ。どうする?」

アイリス、マイルに相談をした。

「商会の方は商いに掛かる税を免除してもらえば?」

とアイリス。アルメリア公国では所謂消費税は無いが、他国では存在している。

「それで交渉してみるか。遠征メンバーは俺とマイル、プライド、セイ、とユナとケーナだ」

冒険者パーティー『エチゴヤ』のフルメンバーで指名依頼を受ける予定だ。今回の遠征の間、『クマ&エルフ』は休業とし、アルファ達は隠密業務を与えるか。アルファは前回と同じように仲間を増やし、隠密集団を構成していた。普段は『クマ&エルフ』で売り子をしている。

「王都に家を買って、拠点にするか」

予算は国家予算並以上あるし。買えない物件は無いだろう。

依頼の当日、クリフの館の前に行くと、

「あつ！クマさんがいるでしゅ、クマさああ〜ん」

と、クリフの娘がもふっとユナに抱きついた。

「お前が、Sランク冒険者なのか？」

呆れ顔のクリフ。

「ご指名ありがとうございます。冒険者パーティー兼謎の商会『エチゴヤ』見参」

商人らしく揉み手をしながら、クリフに近寄ると、イヤそくに距離をとりやがる。

「娘を王都にある私の屋敷に連れて行って欲しい。後、これを本邸にいる妻エレローラに渡して欲しい」

手紙と大きな箱を手渡して来た。

「箱の中身は王様に献上するゴブリンキングの剣だ。盗むなよ」

「盗まないよ。それを商業ギルドに売ったのは、お前の娘のお気に入りクマさんだからな」

「なんだって…」

まあ、見た目強そうに見えないし。客寄せ枠であるし。

「じゃ、行くか」

ノアを連れて、短距離転移で王都を目指した。

◇

夕方には王都に着いた。ノアのご案内でフォシユローゼ邸まで練り歩く。勿論買い食いという市場調査をしながら。

「ここなら高級路線でもいけそうですね」

と男装の麗人であるプライド。この姿の方が戦い易いらしい。

「なんだろう？ 香辛料が弱くて塩味が強いのかな」

食べるの専門の魔女が呟いた。クマさんはノアが手を離さないらしく、先頭を歩いている。

「治安は良さそうね」

と安全チェックをするセイ。安全が一番だよな

けっこう大きめな門を潜るノアとクマさん。それに続く俺達。突然、何者かが走り寄る気配を感じ、クマさん以外の者が一斉に臨戦態勢に移行した。

「ノ、ア、ちゃん！」

と、叫びながらノアに飛びつく女性。それをクマさんがはたき落とし、首根っこを押しさえ制圧した。

「お母様！」

「ノアちゃん、会いたかったわ。って、なんで私が制圧されたのよ」

ノアの母親らしいので、クマさんが解放したようだ。あれ？ ノアの母親ってことはク

リフの奥さん？クリフには勿体ない美人じゃ無いか。

「それで、クリフはいないの？」

預かってきた手紙を渡した。

「仕事はまだ終わっていないのかあ。で、あなた達は誰？」

「指名依頼を受けた冒険者パーティーです。ああ、この箱も渡しますね」

ゴブリンキングの剣も渡した。面倒事はゴメンである。

「ねえ、メンバー紹介はしてくれないの？」

「俺がパーティーリーダー兼商人のツバサです。隣に居るのが妻のセイ、そこにいる男装の麗人がプライド、クマがユナで、エルフがケーナ、この子はマイルです」

「ええ、冒険者の自己紹介って役割も言うでしょ？」

なんか面倒臭い女だ。

「役割？全員戦闘職ですが…」

「きやく」

と叫び、膝から崩れ落ちたクリフの妻。苛ついた誰かが何かをしたようだ。ノアに完了依頼欄にサインを貰い、冒険者ギルドへ逃走だ。

聖者達、スタンピートに遭遇する

——エレローラ・フォシユローゼ——

手紙に注意書きがあった。『絶対に敵対するな』と。ちよつと粘着しすぎたか。いきなり久しく感じていない感覚を感じ、全身の力が抜け落ち、膝から崩れた。何をされたのかが分からない。誰も詠唱をしていなかった。あれは何だろうか？

ノアはクマの子が好きらしく、彼女のことを延々に話している。

手紙によると、彼らの冒険者パーティーランクはFだった。だけど、ギルド本部所属の腕効きとある。一番おかしな点は、今日の朝、出立して、着いたのが今日の夕方って、どんな移動手段をもっているのだろうか？

「ノア、どうやって来たの？馬車？」

分からないことは訊くのが一番だ。

「一瞬で、王都の門近くにいたの」

一瞬で？まさか、転移術か？使える者がいたのか…それは敵にしたら終わりである。王の寝所に転移されて、寝首を狙われても防げない。味方に引き込めないかしら？

——ツバサ——

冒険者ギルドで、依頼達成のサインの入った書面を提出し、報酬をギルド証に送金する手続きをして、商業ギルドに向かった。住みながらお店を開ける物件探しである。

「居抜きでもいいし、更地でもいいですよ」

「ご予算は？」

「国家予算程度までなら、問題無いです。そうだ、貴族街に近い場所がいいですね」

売り物のサンプルをギルドマスターに渡した。高級路線のチョコとプリンである。これで落ち無い女性はいないだろう。

「紹介状とがありますか？」

商業ギルド本部のグランドマスターから貰った手紙を渡す。

「あの…SSランクのエチゴヤさんですか」

「いやFランクのはずだが…」

「では、この物件はどうですか？」

紹介された物件は元呑み屋の居抜き物件で、王城の真ん前で…

その場で一括で代金を支払い、現場に向かい、早速内部を改装していく。

「基本、夜間は森の館に帰るから、凝らないでいいぞ」

王都に潜伏する者の拠点になれば良いから、店舗スペースだけ、手抜きなく施工して
いく。

——エレローラ・フォシユローゼ——

翌日、出勤すると王城の真ん前にあつた潰れた呑み屋が、エチゴヤという店になつて
いた。昨日までは無かつたけど……商業ギルドに向かい、事情を訊いた。

商業ギルド本部の紹介状に彼らの正体が書かれていた。リーダーのツバサはトキオ
共和国の国王で、アルメリア公国の公女の婚約者だという。男装の麗人はプライド・ロ
イヤル・アイビー、あのフリージア王国の第一王女で彼の婚約者……二大大国のトッ
プが婚約者なのか？あと彼の妻だというセイは教皇認定の聖女で、次期教皇候補者らし
い。残りの3名のデータは無かつた。新参加者か？どこかの国の大物か？

これはマズい。我が国最大のピンチである。アルメリア公国って、世界で一番安全な
国と言われ、その軍事力は計り知れないと言う。先日も5万の軍勢を撤退に追い込んだ
と吟遊詩人達が歌っていた。一方フリージア王国もは世界で一番王族への忠誠心が厚
い国で、やはり軍事力が計り知れない。その上、転移術使いがいるなんて、最悪なヤツ
ラだ。

王城に戻り、王様に報告をしなければ…

——ツバサ——

アルファから報告が上がって来た。この王都に向かって魔物一万匹がスタンピートしているという。

「じゃ、行くか？」

「おおおおおお〜！」

ノリがいいのは、マイルとケーナだけだ。全員で最前線に転移をした。ケーナと俺の広域殲滅魔法で大半をケチらし、マイル、ユナ、プライドが剣技ではぐれヤツラを切り裂いて行く。多少怪我してもすぐに、セイから回復治癒魔法が飛んで来て、2分程度で終わっただろうか。

「最後に死体は燃やしておくか」

木っ端微塵になった魔物の遺体。魔石だけ強奪で回収し、後は燃やして帰宅した。

——エレローラ・フォシユローゼ——

彼らのことを王様に報告へ向かうと、冒険者ギルドのギルドマスターであるサーニャがいて、スタンピートの発生を報告していた。

「数はいかほどだ？」

「一万くらいでしょうか？あれ？」

「どうしたのだ？」

サーニヤの顔色が悪い。

「スタンピートの鼻先に冒険者パーティーらしき者達が現れて、簡単に殲滅してしまいました。こんなこんな火力を持つ冒険者パーティーを、私は知らないです」

まさか、アイツらか？

「ねえ、サーニヤ。そのパーティーにクマがいない？」

「え？はい、居ます。あと、エルフが…このエルフは…まさか…なんつてことよ、銀環の魔女だわ…」

あのエルフは二つ名持ちなの。

「エレローラは彼らの事をしっておるのか？」

「ええ、その事を報告に…」

クリフ、なんて連中を王都にぶち込んだのよ！

出産経験者は貴重である

——ツバサ——

朝、エチゴヤエルファニカ王国支店に着くと、表が騒々しい。王城が焼き討ちに遭っているのか、確認すると、エレローラを先頭に騎士団が店を取り囲んでいた。討ち入りか？

エレローラだけを強奪で店の中に入れた。

「強制転移も出来るの……」

エレローラの顔色が悪そうだ。マインドヒールでも掛けておくか。若干、顔色が良くなつたようだ。

「で、なんで、騎士団が店を包囲しているんだ？ 新手の営業妨害か？」

「ちまいます」

あつ、囁んだ。

「どう違うんだ？ 事と次第によっては、敵認定をするぞ」

「ちよつと待って！ ね、落ち着いて話し合おうよ」

落ち着いていないのは、お前だろうが！

「王様が会いたいって…騎士団は過剰に反応しちゃったのよ」

「マイルとプライドは来てくれ。セイ、ユナ、ケーナは一旦、帰ってくれ」

俺とプライドとマイルとエレローラで、王が待っている玉間に転移をした。

◇

「で、何のようだ？」

いきなり目の前にいた玉座に座っているおっさんに声を掛けた。

「いつの間に来たのだ？」

「用件を言え。俺は忙しいんだよ」

「国交を結びたい。お前の国と…」

「メリットは？」

「メリット？」

「メリットも無しに、遠くの国と国交を結ぶ意味が分からない」

「ならば、欲しい物をやろう。何でも良いぞ」

「じゃ、エレローラをくれ！」

俺の言葉で王様は絶句し、当のエレローラは固まっている。出産経験があり、子育ての経験がある者は必要である。現状コゼットしかないし。

「何でもくれるんじゃないのか？嘘つきヤロー！」

ダメだ、この国は。俺とマイルとプライドだけで店に戻り、店においてある。商材とともに、アルメリア公国へ戻った。そして、冒険者ギルド本部のグランドマスター、商業ギルド本部のグランドマスターにクレームを入れた。因みに、店を買った代金は商業ギルド本部で返還して貰ったよ。

——エレローラ・フォシユローゼ——

彼の護衛陣の圧に負け、彼らが去ると膝から崩れ落ちた。

「エレローラ、大丈夫か？」

王様が助け起こしてくれた。

「この国は敵認定されたのでしょうか？」

身体の震えが止まらない。威圧だろうか？心配だけで本能が逃げろと言っていた。こんなことは初めてである。

「メリットも無しに遠くの国と国交を結び気は無い…と。確かにそうだな」

王様の表情は悲壮感で満ちていた。一万の魔物をほんの数分で殲滅した彼ら。この国が戦って勝てる相手では無い。

「だが、エレローラは差し出せぬ。他で代用できぬか、冒険者ギルド経由で尋ねてみる

か」

彼は私をどうしたいのだろうか？既に正妻がいて、婚約者が二人もいて…まさかのハーレム要員？私は子供二人も産んでいるのよ。

冒険者ギルドへ向かい、ギルドマスターのサーニヤと面会をした。

「そうですか、そんなことが…」

玉間での一件を話した。

「エルフ絡みで彼らの仲間のエルフに話を通して貰えないかな？」

「無理です。相手が悪すぎます。彼女は銀環の魔女。200年前にスキルマスターになり、その後行方が分からなくなっていたのです」

スキルマスター？2000年の間に何かがあつたのか？

「彼女の長男はフェルスケイロ公国の大司祭、長女は王立学院の校長で、孫は境屋の会頭ですよ」

境屋って、世界に名だたる大商会じゃない。

「子孫が動けば、この国なんつて…」

「ギルド本部に問い合わせをしてみましたら、罵詈雑言で怒られました。なんて相手にケンカを売ったんだと」

え？それって、彼のことかな？

「彼は世界で一番安全な国を作った功労者だそうです。それに彼は境屋をしのぐランクを持つエチゴヤの会頭ですって」

エチゴヤ：世界で一番ランクの高い商会である。あの商会の売上に優る商会は無いとも言われている。

「一番のポイントは謎の国家トキオ共和国の国王でもあることです。何しろ、誰もその国の場所が分からないんですから」

「それで国家として認められるの？」

「友好国に教皇領があり、アルメリア公国、魔王国、龍王国、フェルスケイロ公国と名を連ねているんです」

魔王国、龍王国って実在するんだ…

「噂では治癒士ギルドで治せない患者すら治せる能力と技術があるそうです」

ああ、奥様は聖女ですものね。

「冒険者ギルド本部だけでなく、商業ギルド本部、治癒士ギルド本部、錬金術師ギルド本部からの信頼に厚い人物だそうです。そんな相手にケンカを売るって、どういう了見だって、言われましたよ」

それは大変な目に遭いましたね。って、どうすれば許して貰えるんだ？

悪意は灰に

——ツバサ——

久しぶりに、ヤーシスから『掘り出し物有り』と連絡をうけ、さっそくヤーシスの元へ向かった。

「これなんですけど…」

ベッドに横たわる女性。この女性を知っている。マリア・キャンベルである。カタリナの友人で聖女である彼女がなんで奴隷の館で売り物になっているんだ？

「いくらだ？」

「訳あり物件なので高いですよ。5000万でどうでしょうか？」

確か、今回の周りではカタリナの婚約者と、婚約し結婚したんだっけ？

「訳ありって、元王太子妃か？」

「そんな感じですよ。三男坊なので王太子では無かったようですが」

ヤーシスの前に6000万を置いた。

「釣りは今後の情報料だ。そうそう、彼女の売買履歴ってあるか？」

「勿論ですよ元高位貴族ですからね」

売買履歴によると、亡国の王子、ジオルドが、生活費を稼ぐ為に、マリアを奴隷商に売ったらしい。それをどこぞの貴族が買い、飽きたのでヤーシスに売ったようだ。

マリアをクラエス家の屋敷に運び込み、診察をセイがして、俺が治療を開始した。カタリナ、メアリ、アランが心配そうに見守っている。売買履歴はマイルに渡し、どこぞの貴族の特定をしてもらっていた。プライド、ケーナにはマリアの母親を探してもらっている。

「ジオルドのやつ…」

「酷い…」

相当無理な物を入れたのだろうか？中で裂けていやがる。

◇

マリアが完治するまで1週間ほど掛かった。体内の臓器の修復に、アレを使った為だ。

「ねえ、マリアのアソコに漬物は残っていないよね？」

「大丈夫なはずだ。優しい水流で膣洗浄をしたから。それにマリアの股間に顔を埋めても臭いは残っていないし」

マリアの世話はカタリナに任せた。俺は俺ですることがある。

◇

エルファニカ王国内で、盗賊を見つけ、お宝を総べて奪い去り、盗賊達の頭だけ集め、からだ部分は灰にしていく。そして、王都の冒険者ギルドに向かった。

「おい、お前、初めて見る顔だな。お前みたいなヤツに冒険者稼業は無理だ。装備と金を置いて出て行け」

スルーして、受付に向かうと、

「ダメエ、無視するなよ」

剣を抜いた音、振り返り顔面にパンチをぶち込んでやった。俺に斬りかかった男は顔から灰になっていく。

「ギルド内でケンカは止めて下さい」

受付嬢が叫ぶが、襲い掛かってきた者は既に全身、灰になり証拠は無い。

「ケンカって相手がいないと出来ないが、相手はどこにいる？」

「え…ウソ…」

カウンター内で受付嬢が尻餅を着くように倒れた。

「貴様！悪魔だな」

俺に向かってくる冒険者達。

「俺は聖者だ。聖属性を発動していれば、悪意の有る者は総て灰になるぞ」

次から次に灰へと変わり果てていく冒険者達。こここのギルドは悪意持ちが多いなあ。
「あらあら、騒がしいと思っただら…」

上の階からエルフが降りて来た。コイツがギルマスか？

「受付嬢がトンスラするから、用件が済ませられない」

既に、ギルド内の冒険者は俺一人である。

「で、用件は？」

「お前は誰だ？」

「私は当ギルドのマスターでサーニャよ」

「用件は盗賊を退治したから、持って来た。」

サーニャの目の前に盗賊達の頭部を置いて行く。

固まるサーニャ。生首を見るのは初めてか？

「じゃ、俺は帰る。二度と、この国には来ない！」

サーニャの目の前から消え、森の館へ戻った。

嵐の前の静けさ

——エレローラ・フォシユローゼ——

冒険者ギルドのマスターのサーニヤが、私の元に駆け込んできた。そして、私の胸に顔を埋め泣いていた。その身体は小刻みに震え、とても冷たい。

「どうしたの?」

「アイツが盗賊の生首を50個ほど、ギルドに持ち込んだの」

アイツって、アイツだな。生首って…殲滅したのか?

「生首を見て怖かったの?」

声が震えるサーニヤをあやすように言った。

「違うの…ギルド内にいた冒険者達全てが灰になって消されたのよ」

灰になって?それって、生きたまま燃やされたのか?

「いつもの新人イジメだったけど、相手が悪かった」

アイツ相手じゃ、ギルド内居座る冒険者程度では勝て無い。

「もう、この国には来ないって…」

それって、完全に敵に認識したのか？

やはり、私が行かないとダメか。家に帰り旅支度をし、元冒険者のサーニヤを護衛に付け、アルメリア公国へ旅立った。

——ツバサ——

月に一度、クリモニアの街に行き、代理販売をしてきている商業ギルドで売り上げを回収して、孤児院の院長先生とテイルミナに給金を払う。

「すまん。この国に住めなくなってるな」

「何かしたんですか？」

「何もしていないんだけど、クリフの嫁にケンカを売られて…」

「領主様の奥様にですか？何か、失礼なことをしましたか？」

「したかな？」

「で、違う国で暮らさないか？」

孤児院の院長からは、亡命の承諾を受けているので、コカトリスの飼育場と孤児院ごととアルメリア公国にお引越しが決定である。問題はフィナ親子である。

「ここには想い出が一杯あります。だから、ここから離れたくないです」

「そうか。じゃ、またどこかで…」

その夜クリモニアの街から孤児院と飼育場と洋菓子店が消えた。

——クリフ・フオシユローゼ——

街から孤児院と養鶏場と人気のチョコ販売店が消えた。商業ギルドのマスターにやいのやいの言われた。俺が悪いのか？王都から知らせが届くと、今度は王都からエレローラと冒険者ギルドのマスターが消えたと言う。神隠しか？

養鶏場が消えたと言うことは、卵の供給が止まったと言うことだ。卵のある生活に慣れた街の住民達が、領主の館に苦情を言い押し寄せている。以前、孤児院の件で評判を落としている。今回は孤児院の建物が消えたのだ。領主である私が何かしたのではと疑われているようだ。

「知らないし、何もしていない」

「養鶏業者を引き留めもしなかったのか？」

卵の生産の責任者を呼びますが、突然の解雇に遭い、困っていると言う。どうしたもののか。

商業ギルドのマスターのミレーヌがやってきた。

「エレローラ様から聞いていないのですか？王都での事件のことを」

「何も聞いていないが、妻が何かをやらかしたのか？」

やらかしたらしい。大金をはたいて手に入れた店を騎士団で取り囲み、追い出したらしい。王都の商業ギルドで建物と土地の権利の売買取引は正常に終わり、引き渡した後に、騎士団で脅しを掛けたと、王都の吟遊詩人達が歌っているらしい。で、その相手はエチゴヤだった。

ああ、アイツかあ。ならば納得である。この国から去ったのだろうか。だから、商会の資産を引き上げたってことか。でも建物はどうやって、持っていたのだ？

——ツバサ——

孤児院の運営にコセットを絡ませた。彼女なら上手く熟すだろう。さあ、今日は砂の除去作業だ。赤い十字マークのある病院を掘り出し、内視鏡などの医療器具が手に入った。発電システムがあれば、アルメリア公国でも使えるのに。森の館エリアに治療院を建設した。近代医療に多少近づけるかな。

ケーナに頼んで、次男坊をアルメリア公国に亡命させた。ドワーフは必要だからな。鍛冶職人に転職して貰い、家庭で使える調理器具を生産してもらう。金属はどこぞの国から強奪してきたので、大量にあるし。

ケーナにはギルド本部依頼のAランク以上の魔物の殲滅を頼んだ。ユナはアイリスの洋菓子事業のサポートを頼んだ。適材適所である。

砂の捨て場所は、あの粘着王族の城に捨てている。マイルに頼むと楽しそうに捨てに行ってくれるし。

マリア・キャンベルは、彼女の母親を生きた状態で発見したら、精神的にも立ち直った。今は二人で暮らし、アイリスと洋菓子作りに励んでくれている。

さて、次の一手はどうするかな？ って、デパートを掘り出せた。ここは新宿辺りかな？ トウリーを連れて色々な服を見せて回る。ファンシーグッズ売り場に向かう元日本人の女性の集団。マインだけは、文具売り場に向かい、紙をゲットしていく。平和って、いいなあ。

◇

しかし、平和は長く続かない。

いきなり地面が揺れた。地震である。何かが地殻を刺激したのか？ 地震慣れしている俺達元日本人は震度5程度では驚かないが、地震になれていないこの世界の住人達はパニック状態である。だが、再開発した公都の街は耐震性も考慮してあるので安心である。

『魔王の世界が臨界したぞ』

義父の声が脳裏に響いた。ついに来たか。俺は、どこかに強制転移させられた。

6章 魔王迎撃の為の異世界行

魔王召喚

——大野晶——

いかん、ゲーム中に寝落ちをしたようだ…え？…ここはどこだ？大森林の中にいるのだが。木々の緑が眩しい。湖の湖面もだ。久しく、自然と戯れてなかったなあ。ふと、視線を足下に向けると、高級な革靴を履いている。湖面に俺は俺の姿を写しだした。なんだ、これは…

俺は、ゲームの「GAME」のアバター姿であった。九内伯斗、「GAME」内では魔王と恐れられていた。

「ああ降臨したのだが大野君で良かった」

突然、背後から声を掛けられた。振り返ると勤務先のゲーム会社の社長の息子のツバサがいた。

「九内伯斗って呼んだ方がいいかな？」

ツバサは冒険者のような服装をしているのだが…まさか、ラノベでありがちの…

「なあ、」

「ああ、そうだよ。ここは異世界だよ」

「異世界だと…」

なんで、俺はこんなオッサン姿で異世界に来たんだ？見た目が胡散臭いだろうが…

「大野君の選択肢は二つだよ。1つは、俺達の仲間になること。もう1つは敵になり、この場で消えることだよ」

ツバサの眼はマジである。後者を選択すると…まず死ぬな。ああ、死ぬと思う。それは間違いない。

「俺がツバサを裏切ることには無いぜ」

「大野君、蓮ちゃんをバーチャル彼女にする約束、反故にしたよね？」

蓮ちゃんとは九内伯斗側近である宮王子蓮のことである。

「アレは、蓮の意思であり、俺は関与していない」

一体、いつの話をしているんだ？

ガサゴソと草むらから音が聞こえ、ツバサが臨戦態勢を取った。暫くすると、草むらから女の子が飛び出して来た。

「逃げてください」

と叫んでいる。

ツバサは、空に向け魔法を放った。そこにはバケモノが浮かんでいたが、ツバサの魔法で灰となり霧散していった。

「伯斗、お前。この世界で無防備だろ死ぬぞ」

ツバサの動きは速い。しゃがみ込んでいる女の子の傍に行き、ヒールらしき魔法を放っていた。

「伯斗は魔法使えないのか？」

「使える訳ないだろ？魔法の無い世界のキャラだぞ」

「ソドムの火は？」

「あれはスキルだ」

「結構汚れているな。ちよつと待っている」

ツバサが一瞬消え、再び現れると、勤務先の後輩であつた小鳥遊がいた。

「小鳥遊……」

「ああ、大野さんが召喚されたんですね」

つて、九内伯斗を見て大野晶を即変換できる、この人達は怖い。俺のプライベートを知り尽くしていると思う。

「セイ、この子を湖で洗って」

「分かりました」

◇

少女の水浴中に、ツバサに現状を聞いた。この世界のバカ神が日本を丸々召喚しただと…で、俺は魔王召喚で召喚前の日本から召喚されたそうさ。

「この子、アクちゃんって、言うんだって」

小鳥遊が彼女の名前を訊いてくれたようだ。

「怪我していたから、治しておきました」

「治せるのか？」

「セイは聖女なんだよ。で、俺は聖者…でもって、伯斗は魔王様？」

「待て！ツバサが聖者だと？そんなもの、ダウトだ！」

苦笑いしている女性陣。

「じゃ、ためしてみるか？魔王様が灰になるかをさあ〜」

もの凄く悪い顔で言うツバサ。

「大野さん、じゃなくて伯斗さんは、マフィアのボス？」

「銃は持っていない」

小鳥遊が聖女だと？あり得ない。なんとと言ってもツバサの彼女だし。ツバサと後、誰だっけ？後、二人いたよな。徹夜に近い会社に在住組が…

「で、これからどうする？」

ツバサに訊かれた。

「ここは、お前の住処から遠いのか？」

「海を越えた先にある大陸だよ」

海越えかあ…

「転移すれば、直ぐだけど」

転移できるのか。一瞬で目の前の景色が変わった。森の中にいたのに、目の前には田園風景が開けていた。

「ここはアルメリア公国。あの森のある大陸から海2つ越えた先にある大陸だよ」

その領主の館に連れて行かれ、ツバサの側室を紹介された。なに？この世界は重婚有りなのか？

魔王はどっちだ？

— 大野晶 —

翌日、俺とツバサと、ツバサの教え子だった海里ことマイルの三人で、俺が呼び出された森へ転移をした。この俺を呼び出した者の目的を探る為と、敵対国家があるかを探る為である。

「けっこう、この世界は敵対国家が多いんだよ。まあ、攻めて来たら潰すけどな」

昨晩は、アクを小鳥遊ことセイに預け、ツバサの本拠地にも連れて行かれた。ツバサの国、トキオ共和国の地下に埋まる東京の姿を見て、声が出なかつた。

地下に広がる大都市だった東京。その姿のほとんどは砂の中だった。

「手分けして掘り出しているけど、終わりがまったく見えない作業だよ」

驚愕なのは、ツバサの元教え子達の戦闘力である。俺のステイタスを見るかぎり、管理者権限が一部ロックされているが、九内伯斗の「GAME」内のステイタスと変わらないのに、組手で負けた…あのクマと魔女、そして、目の前の少女は怖い。はつきり言おう、コイツらの方が魔王様だよ。

帰る場所が砂の中では…コイツらといった方が安全だし、楽しそうである。

「ああ、そうだ。経験値とSPを増やしておいたよ。それで、出せる者が出せるだろう？」

ツバサの目が連を出せと言って居るようだ。いや、最初は違うのにしよう。悠とか田原とか…

「経験値を貰っていいの？」

「ああ、俺達は既にカンストだから、必要無い」

カンスト？それは強い訳だ…

「先生、祠を見つめました」

マイルのオートマップで祠を見つけたようだ。

「祠か…寄ってみるか」

祠に向かうと、『願いの祠』と書かれていた。入り口は封印されていたようだが、強引に破られていた。

「空に浮かんでいたアレが封印されていたのか？それとも伯斗か？」

いや、俺には祠の記憶は無い。祠に踏み込むと

「血の匂い、糞尿もだな。供物に命を捧げる儀式でもしたのか？」

ツバサが、『浄化』をしたのか、ヤツの周囲から青白い霧が湧き出た。

「浄化しながら進む。俺より前に入るなよ。マイルは伯斗の背中を護ってやれ。ちよっ

と、戦力を上げるか。『サモン ケーナ』

ツバサの横に魔女が現れた。

「どうしたの？ わあ、空気が澱んでいるわね。『クリーンエア』」

魔女の魔法により、祠内の空気がきれいになっていくのが分かる。一番の奥の部屋には死体があった。それらを見下ろす様に、石像がある。ツバサが触れると粉々の埃となつて空を舞っている。

「ご神体のようだが、悪意に染まっている。俺が触れると悪意持ちは全て灰になるが、石像だつたらから、砂になつたのかな」

こわっ！ 何、触るだけで灰になるって…九内伯斗はそこまで凶暴でなかつたぞ。間違いない、魔王はツバサの方だ。

祠の近くに村があつたが、ツバサが足を踏み入れただけで、村人を含む村全体が灰になつていった。これが、魔王クラスの聖者の力なのか…だが、ツバサ達が何かを葬ると、俺に経験値とSPが振り込まれてくる。俺のカンスト狙いか？ それとも蓮狙いなのか？ よくわからん。

◇

付近に街がないか、歩いていると、空が闇につつまれていく。所謂、夜である。

「べっ！ 泊まるんだっ？」

「マーカーを撃ち込んで、家に帰って、明日の朝にマーカーに転移するんだよ」

それは良い案である。トキオ共和国の館だと、日本と変わらない生活水準であるし。皆に訊くと、異世界で困るのはトイレらしい。亜空間収納が出来る者達は皆、移動個室なり、休憩所を持っているという。

「その辺の草でお尻拭くと、危険がいっぱいだし」

と、魔女が言う。宿のトイレも危険なので、トイレットパーパーも持ち歩いているそうだ。

翌朝、昨日の続きから歩き始めた。しばらく歩いていると、矢が飛んできた。気にしないで歩いていると、矢の飛来が止んだ。スパーチャーターのマイルが動いたようだ。

「一応、殺さないでおきました。装備が酷すぎて、奪う気にならなかつたです」

「そうか。付近の百姓かもな。この辺の土では野菜は無理だろうし」

また暫く歩いていると、背後から金色の光を放った魔法が飛んで来た。が、ツバサの張った障壁にはじかれていく。

「光魔法か。聖者には届かないぞ」

ツバサが何かを放った。魔女もだ：魔法の放った魔法は、着弾地点にクレーターを造り出しているし。ツバサの方は、相手が全員苦しんでいるようだ。

「どこかのお偉いさんかも。装備も良いし、お金も持っていたよ」
マイルが戦利品の報告をしている。コイツらの動き迷いが無い上、容赦が無い気がする。マイルなんか常時笑顔であるし。

——ルナ・エレガント——

意識が戻ると、股間が冷たかった。ちびつた？いや、そんな量じゃない。大放したかも。周囲の護衛達は身ぐるみ剥がされ、下着姿であった。そして、私は服を脱がされていらないが、財布がぬすまれていた。

馬車は地面に出来た大きな穴に吸い込まれているし。あの4人組は何者なのか？もしかして、アレが噂の魔王と側近達なのか？私の魔法が弾かれ、その直後、一瞬で意識を刈り取られていた。

ロリテイマーと聖女

ツバサ

聖光国 交易の街「ヤホー」に着いた。なんだ、このネーミングセンスは？

交易の街：貿易の拠点で、この大陸にある売れ筋商品が分かる。俺達はウィンドウショッピングをしていく。欲しい物は無いが、売れる物が無いかを探す。

「金属はうれそうですね。アレはだめかも…」

と、マイル。アレとは世界樹の葉っぱらしい。

屋台から旨そうな香りが流れてくる。さつき、奪った金で、串焼きを買い食してみた。肉が硬い…が旨いことは旨い。そして、この街随一の高級な宿に泊まってみることにした。高級な宿のレベルで、その国のレベルが分かるはずだ。ちなみに一泊金貨一枚だと言う。

「安いなあ。高い国だと、金貨10枚以上だし」

「そうですね。下手レベルだと、白金貨1枚とか」

ツバサのつぶやきに応ずる魔女。

部屋に着くなり、皆でチェックをする。風呂に追い炊き機能が無いというか、これ、炊けないヤツだ。温水を溜めて温まるだけってタイプ。

「ベッドも今一です。どうします？」

夜のイベントに期待かな？ 相談の結果、この宿に泊まるのは、俺と伯斗と、ユナ、アクに決まった。因みに伯斗とアクは添い寝に決定だ。アクが伯斗に懐いていた。ケナは街中での戦闘にむいていないし……お役御免になった。

「さすが、ロリテイマーだな」

「誰がロリテイマーだよ」

「大野晶くんだよ」

「俺は断じて違うって」

「大野くんの好きなゲームタイトルを大声で言おうか？」

「おい！ やめろ！ シャレにならんのだろ」

◇

夕食の時間帯になった頃、ドンドンと扉を叩く音がして、扉が破壊されて、お漏らしをした幼女が入って来た。

「見つけたわ、魔王！ 私のお金を返しなさいよ」

幼女はヨタヨタと伯斗に迫っていく。さすが、ロリテイマーである。既に手懐けたの

か？

「ねえ、返してよくあれは無駄遣いしないで貯めたお金なのよ」

泣き続けるションベン臭い幼女。乾いたようだが、臭いが残って居るぞ。

「俺は盗んで居ない。して言うなら、盗んだのはアイツだ！」

伯斗が俺を指差した。

「しようがねえな。白金貨3枚でいいか？」

あの財布には合計白金貨2枚以上はあった。なので、色を付けて返済してやる。白金貨なら腐る程あるし。

「白金貨…3枚…お願い返して下さい」

「その代わり、この国のことを教えてくれ」

白金貨3枚を幼女に返した。ちなみに街中では白金貨は使えない。金塊で街の商店の支払いをするのと同じである。

「私は聖光国の三聖女の末の妹であるルナ・エレガントよ。頭が高いわ」

「そうか。俺は教皇認定の聖者のツバサだ」

認定証をルナに見せると、俺に跪いた。この世界では、違う世界が臨界すると、教皇の威厳や冒険者ギルドのネットワークなど、世界のルールが臨界した世界に伝搬するようだ。

「なんで、魔王と聖者が組んでいるの〜」

それは良い疑問だ。俺ですら疑問だからな

「まあ、そういうことだ。そうそう、森の中にあつた『願いの祠』って、なんだ？」

「あれは正式には『封印の祠』よ。座天使様が悪魔王を封印した祠よ」

「悪魔王？祠の中には、悪意に染まった石像があつただけだぞ」

「そんなはずは…」

血の気の引いた顔のルナを前にして、俺達は夕食の準備をし始めた。亜空間収納から、コンビニおむすびとカップ味噌汁を取り出し、カップにお湯を注いでいく。

「ねえ…私の分は？」

「金は返したぞ。自分の金で喰えよ」

「白金貨は食堂で使えないよ〜」

あつ、気づいた。目に涙を溜め、興味深そうにカップ味噌汁を眺めている。

「しょうがないな」

ルナの前にもおむすびとカップ味噌汁を置いて上げた。

「これはどうやって食べるの？」

伯斗はアクの分のおむすびを剥いていた。それを見よう見まねでおむすびを食べられる状態にするルナ。

「おいしーい！」

一口食べ、一言発すると黙々と食べ始めた。食べ終わると、その場で眠りこけたルナ。後のことは伯斗にお任せだな。

魔王とバトルジャンキー

——ツバサ——

翌朝、騒がしいのでゾロゾロと騒がしい場所に向かうと、巨大な神輿の上に乗る椅子にふんぞり返っている世紀末クイーンが黒いローブを羽織った者達と対峙していた。

「あれって、『GAME』の参加者か？」

世紀末の世界が舞台だった『GAME』。大野君が仕事とは別に、プライアベートで運用していたゲームである。

「いや、あんなヤツは見たこと無いなあ」

「あれはキララー・クイーンお姉様です」

と、ルナ。世紀末聖女だったようだ。そうなると、黒いローブ集団が敵か？

「相手はサタニストと呼ばれる悪魔信奉者の集団です。お姉様！」

説明をしてルナは世紀末聖女の元で走り去って行った。

「聖女ねえ、聖属性でないのに……基準が分からないなあ」

たぶんだが、国名の聖光国から判断するに、聖なる光の魔法使いなのだろう。それっ

て、銀環の魔女でも聖女になれちゃうじゃん。おいおい…

「聖女に災いあれ——」

「災いあれ」

サタニスト達が聖女二人に言葉を浴びせている。デモ隊みたいな物かって、思っていると、路地裏からも声が上がります。

「偽りの天使に死を——！ 《火鳥／ファイアバード》」

「聖女に嘆きあれ——！ 《氷槌／アイスハンマー》」

ヤジ馬達に魔法が撃ち込まれ始めた。狙いは聖女だけでないのか血の匂いが街中に漂い始めた。それに伴い、街の至るところで、血の雨が降り始めている。

「伯斗は、アクを護れつて。お前は魔法に無防備か。ユナ、二人を護れ」

「了解です」

俺はマイルとプライドを呼び出し、サタニストの殲滅に打って出た。

聖女達の方は行くと、何故か膝を付いて苦しんでいた。聖女達の前には黒いスライムのような、闇の何かの様な物が音を立てずに近づいて居た。察するに光の戦士のオーラを吸い込んでいるのだろうか？ 聖女から光のオーラが剥がされているし。

俺は俺の戦闘フィールドである『聖域』を展開し、サタニスト達と俺を閉じ込めた。俺の戦闘フィールド内では、悪意を持つ者たちは燃えて灰になっていく。例えそれがよく

分らない物でつても、悪意持ちの付属品であれば灰になるのだよ。

黒いスライムのようなものは灰になり、サタニスト達も灰となり消えていった。『聖域』を閉じ、聖女達は放っておけば大丈夫だろう。伯斗達とマイル、プライドを合流して、街から逃げ出した。あんな世紀末聖女には絡まれたく無いし。

街を出て、馬車を亜空間収納から取り出し、それに乗りこんだ。

「この馬は機械仕掛けか？」

「そうだよ。亜空間収納には生物が入らないから」

伯斗に訊かれて、答える。ふと臭いが気になり車内を見回すと何故か盛大に漏らした失神中のルナが同乗していた。空かさず、浄化して臭いの元を除去。

「誰だよ、これを持ち込んだのは？」

「道案内は必要だと思います」

と、クマさんが答えた。

「確かに道案内は必要だな」

◇ この大陸は殺気に満ちているのか？街中に血の雨が降るとは…

意識を取り戻したルナに、伯斗がブレザー一式を手渡した。盛大に漏らしたものを着替えは必要である。ユナがルナを別室に連れて行き、着替えさせた。汚れていない服

を着て、落ち着いてきたルナに俺は、あの黒い物のことを訊いた。

「あれは奈落と呼ばれる天使様の加護を奪うバケモノよ」

天使の加護？ 最初から無いだろうに。何を言っているんだ？ あれか、信じる者は救われるとか。

「奈落はどうなったの？」

「神の怒りに触れて灰になっただぞ」

「灰に？ 流石は魔王ねえ」

「待って待って、魔王は伯斗だぞ」

「ツバサ、ダウトだ」

「魔王様がダウトですよ。先生が魔王の器に収まると思いませんか？」

マイルが妙な説得をしている。俺は魔王以上の存在か？

◇

周囲に何も無い砂漠の平原でモンスタートレインをしている冒険者を見つけた。

「ユナ、マイル。伯斗に経験値をプレゼントしてあげて」

二人はモンスターの前に立ち、楽しそうに蹂躪していた。

「なあ、あの二人って、戦闘狂か？」

伯斗に訊かれた。

「あれは大人しい方だよ」

と、答える俺。明らかにオーバーキルするのはケーナだし、楽しそうに子供達に電撃を喰らわすのもケーナだし。そう言えば、この前、凍結魔法を孫に打ち込んでいたなあ。あの魔女に比べれば、あの二人はオーバーキルしないように心がけているし。

「あれでか？」

「ああ」

5分もしない内に、約1000頭の狼を討ち取った二人、取得した経験値はすべて伯斗の元へ…

魔王2号降臨

——九内伯斗——

「なあ、そろそろ蓮ちゃんを呼べるか？」

案の定、期待した目で俺を見つめるツバサ。

「いや、最初に呼び出すのは違うヤツだ」

馬車を降り、ツバサの視線から外れた。先ほど、脳内で

『《側近召喚》が解放されました』

と、聞こえたのだった。馬車の向こうを見ると、ツバサが亜空間収納からロツジを取り出し、殲滅した狼達を教え子と共に解体しだした。

ツバサが見ていない今がチャンスである。俺は《側近召喚》で白衣の女性と冴え無い中年男を呼び出した。

白衣の女性は桐野 悠。マッドな医者である。指を医療機器に変えて治療する「神の手」というスキルを持つ。冴え無い中年男は田原 勇。見た目は冴え無い中年であるが、設定年齢は31歳でアラサーに足を踏み入れた程度である。こいつは銃器に愛された男であると同時に、天才的な頭脳持ちである。

「長官、ここは新たな会場ですか？」

この二人は俺をツ長官と呼ぶ。会場とは「GAME」内のステージのことだ。

「いや、ここは……」

これまでの状況を二人に説明した。

「で、鬼畜がいるんですね」

田原がツバサを見ながら言った。魔法の存在しな「GAME」内において、プレイヤースキルとして唯一魔法を行使していた為、ツバサは田原達、俺の側近達から「鬼畜」と呼ばれていた。勿論、蓮からでもある。

「はあ？なんで田原とマッド女なんだ？蓮はどうした？」

ツバサが俺に対峙したが、側近達は傍観している。ツバサの蓮好きは側近達にも浸透していたのだ。

「最初に連を呼び出したら、俺の側近にならんだろ？」

ツバサがセクハラをし、連を俺から奪い、ツバサの側近してしまうだろう。

「まあ、田原には頭脳労働してもらい、悠には医療行為だな」

何かを諦めたような表情のツバサ。

「次は頼むぞ、ロリテイマー君♪丁度いいや、悠も解体を手伝ってや〜」

ロツジに悠を連れ込むツバサ。解体が終わると、今日はロツジに宿泊をするという。

ツバサ

舗装していない道を進むと聖女ルナの領地である傭人族の村「ラビの村」に辿り着いた。この国は人間至上主義であるが、聖女特権で亜人の村を起こしたそうだ。亜人との共存をめざしているルナ。話をきいたロリテイマーが、村おこしをしようと言い出したのだ。その為の人材が、先の悠であり、田原である。

「この荒野にオアシスを作ろうと思う。ツバサも協力してくれるよな？」
「次は蓮だぞ」

次の召喚枠に連をねじ込む俺。蓮の胸の大きさは理想的なのだ。伯斗はロリテイマーなので、その良さが分からないのだろう。

伯斗は水の涸れる事の無い井戸を数基設置し、痩せた畑の土を俺が呼び出したチームカタリナに栄養豊かな土にかえていく。伯斗は高度医療センターと温泉旅館を設置し、悠と田原に運営を任せた。

伯斗の構想は、この地をこの大陸のリゾート地に変えるらしい。リゾート地の経営者なら、魔王認定はされないうから、俺も協力をしようかな。協力代として、アルメリア公国にも温泉旅館を設置してもらった。伯斗の設置した温泉旅館は、1日に1回消耗品が補填されるシステムで、この世界では高級品である石けん、塩、温泉まんじゅう

などが自動で補充されるのだった。

「久しぶりの温泉まんじゅうだあ〜」

セイ、マイルの食べっぷりが凄いが、ウエルカムスイートな為、一気に大量には出ない。食ベきつたら、翌日にならないと補充はされない。そんな中、ユナは温泉まんじゅう作りに挑戦し始めた。

保養リゾート「ラビ」はルナの親しい貴族を中心に、今後人気を得ていくらしい。田原とナノちゃんの計算では：

◇

大野君事案は彼らに任せて、俺達は砂の除去作業に戻って数日、突然地震に見舞われた。折角除去して箇所にも砂の津波が押し寄せ、また埋まってしまったようだ。ああ、医療機器はラビの村で手に入るからいいとして、この地震は臨界した世界があったのだから。発掘していた全員で森の館に避難し、臨界した大陸について情報をあつめることにした。

——鈴木一郎——

後輩が失踪して、彼女の仕事まで俺が面倒を見ることになり、会社に泊まり込みで納品を間に合わせていく。もう何日家にかえっていないのだろうか。

いつものように、仕事の合間に机の下で仮眠を取って目覚めると、今作っているゲームのインターフェースが見えていた。あれ？机の下でなく、開発用のマシンの前で寝落ちしたんだっけ？意識が朦朧として、目の前に表示する【流星雨】をポツチとしてみると、轟音と共に、星々が地上に向けて降り注いだ。ドラゴン達の叫び声が至る処から聞こえて来た。こんなにリアルに作り込んだっけ？

「おいーお前、なにをしたんだ?!」

背後から、俺のよく知る声が聞こえた。振り返ると、出向先の会社社長の令息である神野翼氏がいた。

「あのゲームでは【流星雨】はポツチになっただろう？それすら覚えていないのか？」

彼は怒り心頭のような顔である。何故？

召喚魔王達が同僚だった件

——ツバサ——

今度の魔王候補も同じ会社の同僚であった。そいつは下請け会社から出向してきた鈴木一郎だった。社内ではサトウとよばれていた。鈴木氏が数名おり、呼び分けのために、愛称で呼んでいた。その辺の記憶は最早あいまいであるが、これって、義父が召喚された者をインターセプトして、その人選にしているのかもしれない。

呆然、唾然とボオくっとしているサトウを大野君の温泉旅館へ連れ込んだ。

コイツ、ゲームでまだ実装されていない魔王の魔法【流星雨】で龍の里にいたドラゴンを全滅させたようだった。ステイタス鑑定をすると、ジョブが魔王で、レベルがカンストしているし。この世界に馴染む前に、この世界のシステムにて、魔王認定されてしまったようだ。

——鈴木一郎——

目の前にツバサさん、大野君、小鳥遊さんがいる。同僚3名と同様に、俺は異世界召

喚されたようだ。それも魔王召喚だと言う。いきなりのレベルアップで討伐対象になんたらしい。頭を抱えるツバサさん。

「あの大陸は今後、荒れるだろうな。生物の頂点であるドラゴンの生息地を殲滅したんだから」

俺は朦朧とした意識の中で、3発の「流星雨」を撃ち撃ち込んだらしい。その衝撃で地震を発生させ、この星への影響が大きい。

「さて、どうしたものか。まさか、ゲームでのラスボスである竜神アコンカグラを降臨直後に倒すとは」

そうだった。威力が高すぎる為、「流星雨」はボツになったんだ…

「そう言えば、お前の後輩氏は失踪していたな」

大野君に訊かれた。後輩氏とは高杯光子のことで、社内では後輩氏と呼ばれていた。

「そうです。そのあたりを受けて、俺、彼女の分の仕事も…」

「まさか、後輩氏も召喚されたのか？ 聖女召喚ならば問題は少ないが、魔王召喚だと問題だな」

「この世界には魔王が何人いるんだ？」

「ねえ、ヒカリちゃんを探さないの？」

後輩氏は「ヒカリ」と呼んでくださいと、社内で言ったのだが、小鳥遊さん以外には

後輩氏と呼ばれていた。

「手がかりが無い。難しいなあ。アルファ達に頼んでみるけど」

アルファとはツバサ氏の配下の者らしい。

「鈴木氏と、召喚された大陸を旅して、誰が召喚したのかを探らないと。あとドラゴンの大量氏の影響と、流星雨の影響もなあ」

今後、この世界での呼び方は、ツバサ氏はツバサ氏で、大野君は九内伯斗、小鳥遊さんはセイさん、俺はサトウーになった。

——ツバサ——

話し合いの後、俺とサトウー、セイはマイル、プライドを連れ、召喚地点の龍の住処に転移し、伯斗は、保養リゾートの仕事に戻っていった。

龍の住処はクレーターターダケであった。流星雨を3発の威力は想像以上だった。この大陸で最強ラスボスであったアコンカグラの死骸が残らないほどに、地形をボコボコにしている。

「これは酷い…」

流石のマイルも唾然としていた。サトウーのステイタス鑑定をしてみるが、スキル、魔法とも見てみるが、流星雨は消えていた。これは、発動すると三連打で撃ち込み、抹

消するようにプログラミングされていたのだろう。サトウを呼び出した者により。そうになると、この世界のシステムに関われる人物であるが、既に神も天使もない世界で、誰がシステムに手が入られるのだろうか？

『邪神の可能性があるな』

と養父の声が聞こえた。邪神かあ。神でもないのに邪神と呼ばれる存在かあ。もしかすると、サタニスト達が信奉する神かも知れない。あの座天使のように。

マイルのオートマツピングにより、現在地が分かった。ここはシガ王国と言う国の近郊らしい竜の谷というのが正式名称のようだ。近くの街へと向かう天災によるスタンピートが発生していると厄介であるから。近くの街はセーリユー伯爵領の領都のセーリユー市。領都ならスタンピートが起きても安心かな？まあ、行ってみるか。

◇

領都にいる領軍がリザードマンのスタンピートをしのいだらしく。街中では至る場所ですりぞードマンの解体ショウが始まっていた。俺達は、冒険者ギルドに向かい、この街、この国の情報を集めていく。ついでに冒険者証の無いサトウを冒険者にして、俺達のパーティーに加えておいた。基本ギルドに登録出来るパーティーメンバーあ6名であるが、補欠メンバーの登録ができるのだった。

この街には迷宮があり、アンデッド系のモンスターが徘徊しているらしい。俺とセイ

はきつと悪い笑顔をしたかもしれない。サトウがびびっているし。早速向かい、ダンジョンコアをゲットし、ダンジョン内を浄化し、ダンジョンを廃業に追い込んでおいた。この街のダンジョンはザイクーオン神殿の地下にあり、教皇様認定聖女と聖者と言うことで、ダンジョンの封鎖を神殿から依頼を受けたのだった。大義名分もあり、セイとマイルは楽しそうにダンジョン内で殲滅作業をしていた気がする、

ダンジョンで軽い運動をしたので、屋台巡りにした。この待ちの名物は何だろうか？ 揚げたコウモリの翼に黒味噌を付けた「竜翼揚げ」なる物があった。

「コウモリの翼って、肉無いですよね？」

流石のマイルでも食指が動かないらしい。誰も食べないらしい。俺もノーグッドである。

次は名所を探してみると見ると、街の西サイドには多数の娼館や奴隷商が並んでいた。この街のダークなエリアだった。この国も亜人差別がひどいのである。露天の奴隷商もいるようで、道に檻を置き、亜人を売って居る商人もいるし。教会の指導は入らないのだろうか？

アルメリア公国内だったr、教皇に直訴案件だろう。伯斗好みのロリ亜人が売っていた。マイルが気に入った犬人族、猫人族、蜥蜴人族の少女を購入した。首に奴隷紋を入れたが、三人を連れて伯斗の温泉旅館に転移して、奴隷紋を消去し、三人を伯斗預

け、和食を食べ、今日は寝るか。

——九内伯斗——

ツバサに亜人の少女3名も預けられた。俺にどうしろと言うんだ。ルナは配下の者が出来たと喜んでゐるが…この3人には名前が無いらしい。どうするか。と思つていたのだが、マイルが名付けをしていた。リザ、ポチ、タマと…安直過ぎないか？

ラビの村はそれなりに流行つていた。ラビの村の人参は名産とし有名らしく王都で売れるらしい。そこに石けんと濃厚プリン、温泉まんじゅうに、入浴剤を王都への販売ルートに流していく。

流通ルートは、ツバサが村にエチゴヤの支店を設置し、手の空いて配下の者を使い、色々な物を売り出し、流通ルートを確保していた。そしてサトウーを行商人として教育していった。サトウーが召喚された大陸の調査員とし放流予定らしい。

殲滅の廃ゲーマー、異世界に立つ

——ツバサ——

最近の日課のルーティンは、砂の除去を二日して、翌日はセーリユー市の観光という名の調査をしていく。俺のメイン作業は発掘だし。セーリユー市の悪意持ちを人知れず灰にしていくと。大部人口が減った気がする。悪意持ちの多い街だったのだろうか。

「ツバサ氏が魔王じゃないのか？」

などとサトウーや伯斗に言われたり。悪意の掃除から分かったことは、この大陸には悪魔がいて、魔王の復活を狙っているってことだ。悪魔は撲滅の一手だな。見つけ次第、灰にしていく。と思ったのだが、悪魔は灰にならずに塩になっている。そう言えば、神の浄化の結果人間が塩化するとか言うラノベがあっただけ。

手に入った塩は、シガ王国で売り払う。悪魔の塩化できた塩。口にするのをはばかれるし。それに、塩は伯斗の処から無限に貰えるし、困っていない。

マイルの名付けたリザ、ポチ、たまは、アイリス母の元で剣を鍛えられていた。と、いうかアイリス母が、伯斗の温泉旅館に長逗留していた。理由は悠による瘦身術を学んで

いるらしい。コゼットと共に…

◇

アルファ達の調べで、伯斗達のいる聖光国の聖都に悪魔によるテロが起きるらしいことが分かった。マイル、ユナ、ケーナに探査を任せ、俺、セイ、伯斗サトウで警戒をし、そして悪魔達を退治していく。悪魔との戦い、伯斗が聖属性でない為、苦戦しているが、底地からで完勝していた。ユーナは相変わらずのオーバーキルで、街を破壊していく。俺は街中に塩と灰を撒いていた。騎士達に見つかる前に退散だな。

◇

『以前、何者かにハッキングされて消されたコンテンツの「ソード・アンド・ソーサリス」の世界が臨界したようだ。黒幕は、この世界の本来の神を邪神に落とした精霊達らしい。神の間への侵入を試みているところだよ。ツバサは、あのゲーム世界が臨界した大陸へ向かってくれ』

と義父から指示が入った。サトウが召喚された世界が臨界したときごさに紛れて臨界したのか、義父にもわからなかったらしい。

妖精系は質が悪い。無邪気な性質だが、悪意無き悪事を働く。こいつら、善悪の判断が出来ないのだ。楽しければ良いって種族である。

◇

俺は義父に強制転移され知らない森の中に移動させられた。ここが臨界した新たな大陸かな。向かってくれ、じゃなく、向かえだつたようだ。

目の前にオツサンがいる。このアバターは…有名人じゃないのか？

「ここは何処ですか？ 確か、僕は部屋でゲームを……」

「ここは異世界だよ、殲滅者の いや、ジヨブは大賢者だつたかな、ゼロス・マーリン君」

一番、魔王らしいヤツが召喚されていた。運営サイドではなく、最強最悪のプレイヤアのゼロス・マーリンこと廃人の大迫 聡を召喚したようだ。はあく

「つて、異世界転生ですか？あれ？もしかして運営さんですか？」

「いや、開発者サイドだつたが…俺は神野翼だ」

「ああ、メインプロデューサーの。ここつて、ゲームではない？」

「ゲームシステムを取り込んだ現実世界だよ。何をしていて、ここに？」

「イベントでラスボスの邪神を倒したら…」

「なるほど、この世界の偽神質は、自分で倒せないからゲーム内イベントで本来の神を消したのか」

「はあ？どういふことですか」

「コレまでの経緯を説明した。」

「じゃ、一緒に冒険しますか？」

廃ゲーマーは異世界召喚程度では驚かないようだ。ここをゲームの様な現実と受け止めているようだ。まあ、コイツと俺ならば、ラスボスでも倒せそうだけど。

「じゃmと一緒にこの大陸を探索する？」

「お願いします」

——ゼロス・マーリン——

この世界に来て一週間が経った。ツバサさんと一緒に、環境に慣れるのが早かった。異世界で一部の問題であるトイレ問題も、ツバサさんの携帯トイレにより何も問題は無い。まさか、乾燥機能付きの洗浄便座設置の個室を亜空間収納して持ち歩いているとは。異世界の旅のプロはひと味違うな。

ツバサさんの戦闘力は高い。触れれば、どんな魔物も灰になっていくし。問題は、食料にする場合は、武器で倒して、解体しないとイケないらしい。

リアルで解体っておもったが、解体スキルがあれば、亜空間に収納すれば、自動解体してくれるらしい。

「しかし、()は()だろうか」

「森の中ですよね？」

「いや、国の名前とかだよ」

森以外に見えない。マップにはファーフランの大深緑地と表示されているが……あつ、道らしいものが見えた。道にでると、マップに魔法王国ソリステアと国名が表示されたのだった。

「これで、国名が分かったな。転移で移動できそうだ。後は、街に行つて冒険者ギルドに行つて、大陸地図をリンクすれば、一緒にいなくても大丈夫だよ。ゼロスくんはゼロス君のやりたいように冒険していいから。困った時は呼んでくれれば、飛んで来るよ」

ツバサさんからは、当面の資金を貰った。この世界の共通通貨らしい。

「冒険者ギルドに行ったら、ウチに一度来るか？当面の必要の物を渡すよ」

「ありがとうございます」

聖者と殲滅者はポーナスステージへ

——ツバサ——

この大陸の街に行つて、生活水準をみておかないと。魔法王国つて、魔法が発達しているのかな？ 敵対した場合の保険である。相手の戦力を知らないと、オバーキル気味になりがちである。ユーナの使いどころの問題になる。

道に出る前に、生活魔法で、俺とゼロスの身体と衣服を清掃しておく。洗淨、浄化して、風呂に長くはいつていない汚れと体臭をリセットした。

「この魔法、ほしいです」

「家に来たら、くれるヤツを紹介してあげるよ」

スキルマスターである銀環の魔女に頼めば、きつとくれるはずである。

道を進んでいくと高そうな馬車が盗賊に襲われていた。

「どうします？」

「盗賊は小遣い稼ぎにいいぞ」

「ポーナスキャラなんですわね」

ゼロスが魔法と剣盗賊を殲滅していく。俺も負けずに灰にしていく。俺に触れると、相手が勝手に灰になっていくのだった。

「ツバサさん、魔王並ですな」

「闇属性持っていないけどな」

時間にして5分くらいだろうか、盗賊達はいなくなっていた。ゼロスの作り上げた死体も全て灰にしてしまった。盗賊達のお金、金目の物は全て強奪し、亜空間収納にしまった。ついでに負傷者達をヒールで治して上げたのだが、護衛の者達は俺達を見て青ざめているんだが、どうしてだ？

「此度はそなたらには助けられた。ぜひ礼を言いたいのじゃが」

背後から声をかけられ、振り返ると高齢の貴族らしい人物がいた。

「いや、進行方向に盗賊がいたから、つい…」

つい小遣い稼ぎに走ったとは言え無い。

「じゃが、おかげで孫娘を危険に曝さずに済んだわ。礼を申しても問題はあるまい」

「ならば、近隣の街に連れて行ってもらえませんか？」

道案内をゲットか？

「この先に、我が領の街があるが…」

領主か、この老人は。

「そなたら、名はなんと申す？」

何か探るように俺達を見ている老人に訊かれた。俺達は見た目が怪しいのだろう。ゼロスは灰色のボロボロなローブ姿だし、俺は世界樹の繊維で編んだジャケットにミシリルのナツクル装備だしなあ

「僕ですか？ゼロス・マーリンと言います」

「俺はツバサ。平民の冒険者だよ」

名前に家名があれば大抵、貴族である。そもそも、普段から家名をなのっていないし。って、俺の家名ってなんだ？

「儂は、クレストン・ヴァン・ソリステア元公爵じゃ」

隠居老人のようだ。公爵家かあそうなると、この先の街は公爵領になるなあ。エチゴヤの支店でも建てるかな。この大陸の拠点が欲しいなあ。

「ふむ、聞かぬ名じゃな。何故この国に来たのじゃ？そなたらほどの腕があれば他の国からも引く手数多じゃろうに」

何故って、この星の悪意に召喚されましたとは言え無いなあ。

「スローライフが出来る地を探していました」

俺が目で合図すると、ゼロスが頷いた。

「そうじゃ……そなたらには何か褒美を与えんといかんな」

「街まで連れて行ってくれれば、良いです」

迂闊に貴族に取り込まれるの争いの元である。

「欲がないのか、達観しておるのか？」

「いえいえ、まだまだ修練中ですよ」

「これは農ら貴族の責務と面子の問題じゃ。何しろ恩人に何もせずには帰したとあれば、農はどんな誹りを受けるやも知れんて」

ああ、面倒なヤツだ。

「貴族とはそういうものですか？では、小さくて構いませんので、住処をください。冒険の拠点にします」

「では、静かな土地を下さい。街から少し離れていて畑があれば言う事は無しです」

ゼロスも要望を口にした。

「ふむ……心当たりを探してみよう」

これは二人で一軒パターンだろうか。まあ、ゼロスの住処に転移ゲートを設置すれば問題ないし。

「お主らも乗って行かぬか？ 街まで行くには、まだしばらくは時間が掛かるぞ？」

「えっ？ どれくらいですか？」

「大体、三日じやな」

馬車に三日はつらいなあ。ゼロスを馬車に乗せ、俺はこの辺りを探索してから、追いつけることにした。一般人と馬車旅では、家に転移できないし。

ゼロスに念話の方法を教え、俺は、一人盗賊の拠点を強襲してから、家に帰った。

日本語は古代語？

——ツバサ——

森の館に帰り着き、皆に新大陸の情報を伝えた。

「ファーフランの大深緑地って森は、この大陸にいない魔物が多数いたよ」

キラキラし瞳で、俺を見つめるマイル、ユナ、プライド、ユーナのバトルジャンキーの面々。

「ちよつと行つてみるか？」

ゼロスが街に着くのが3日後なので、俺は5日後くらいに行けば良いだろう。

バトルジャンキー達と、森の狩りへと出かけた。

——ゼロス・マーリン——

ツバサさんと念話で会話できるようになり、異世界での相談が出来るのは安心である。馬車に乗り込みと、一人の少女が座席に座っている姿が目に入った。お孫さんだろうか？

「御爺様、この方は？」

やはり、お孫さんのようだ。

「儂らの窮地を救ってくれた恩人じゃ、ゼロス殿じゃ」

「初めまして、僕は魔導士のゼロス・マーリンと申す者です。僅かな時間ですが同行する事になりました」

「し、失礼しました。わ、私はセレスティーナと申します……その、よしなに……」

10代前半だろうか？幼い少女特有のあどけなさが残り、僕のストライクゾーンで無いので安心である。少女は制服らしきローブを羽織っていた。

「魔導士ですか？」

「まだ駆け出しじゃが、些か問題があつてのおく」

「問題ですか？ どのような？」

「うむ……実は魔術が発動せんのじゃ」

「発動しない？ 妙な話ですね」

魔力があり、魔力の出力ができれば、他所は発動するものである。発動しないのは、魔力のロスが多い術式の場合である。

彼女が目を通していた書物に目を通してみた。

「あつ、術式がおかしいです。欠陥だらけですよ」

「なんだとおおお〜」

「術式が美しくない。余分な文字や単語が混ざっているし。これは力任せに魔力を叩き込まないと発動しないです」

なんで、こんな風に描いたんだ？初心者には難しいだろう。

ツバサさんに、初心者用の術式教本を送って貰いせよスティーナに渡した。

「僕が一番美しい術式を描く人が作った教本です。これで、試し貰えますか」

ツバサさんの術式は日本語ベースであり、ゲームの専用文字仕立てと違い、理路整然に描かれていた。

「古代語ベースですか？」

ああ、そうか。日本は古代に転移されたんだっけ。

「たぶん、原典の術式ですよ。僕と一緒にいたツバサさんが作り出した物です。彼に習うのが一番だと思います」

僕では応用しすぎた術式が得意なので、基本魔法：生活魔法がベースだと言っていたな。僕もあれは欲しい。でも魔法でなくて、スキルでくれるらしいのは嬉しい。事故になりにくいし。

「彼はいつ来るのじゃ」

「5日後を目指すと言っておりました」

仕事が山積みらしいし。日本を壊滅させた元凶を叩く為の準備もあるらしい。叩く場合は協力をしようと思っっているが。

——ツバサ——

森の館に帰還するのと、まずは温泉で一息を休めて、ユーナに生活魔法のギフトの件を伝えた。

「いいわよ。へえー、あの殲滅者も召喚されているのかあ〜」

魔ゲーマーは魔ゲーマーを知りて感じなのか、噂をしっているようだった。

やたらに嬉しそうな笑みを浮かべている。これは手合わせ確定かな。ここの森の奥地でももらえば、影響はすくなそうだ。世界樹の木々は銀環の魔女の本気の一発でも、傷一つ入らなかつたし。

「あと、魔法王国にエチゴヤの支店を設立する。アルファ達は調査に向かつてくれる?」
「了解しました」

アルファ達、黒尽くめの一団が転移していった。

「後は、なんだつけ…そうだ、魔術の基本を教えるんだ。マイル、教本類を用意しておいて」

「はあ〜い」

「後は、フアーフランの大深緑地で狩った物を、冒険者ギルド本部で売り払うか」
アルメリア公国へ転移しようつと。

殲滅者、知らないうちに駐在大使になる

——ツバサ——

数日後、ゼロス達を迎えに行つた。この森の館で一週間の合宿形式で教えようと思つた。まだ、あの大貴族から住処も土地も貰えていないからだ。

「なんじゃ、ここは……」

死の森に降り立つたクレストン・ヴァン・ソリステア元公爵が叫び声を上げた。森の屋敷は鬱蒼とした世界樹の木々に覆われ、おどろおどろしい雰囲気醸し出していた。

「これが俺の屋敷で、テイーナの合宿先だよ」

ゼロスを迎えに行くと言つたクレストンの孫娘のセレスティーナの他に、保護者枠で。爺のクレストンが付いてくると言う。ゼロスはケーナ達によりドナドナされ、森の奥地へと消えていった。まったく、あのバトルジャンキー達め……

取り敢えず、館の中にご案内。応接間に通し、ああ、玄関で靴を脱ぐ習慣が無いように、爺が土足で上がろうとして、セイに叩かれていた。そして、セイに小一時間、この家のルールをレクチャーと言う小言を言われ、爺は既にグロツキー状態である。聖女の

小言つて精神ダメージが入るようだ。

玉露で入れたお茶と温泉まんじゅうを出すと、貴族の二人が唸って味わっていた。

「ゼロスに魔力操作は習ったんだね」

ゼロスの教えたことを確認するようにティーナに声を掛けた。

「はい。『トーチ』」

彼女の指先に小さな灯が灯る。

「じゃ、魔力制御は？」

俺は指先に五色の灯火を発現させた。

「凄い。無詠唱で、きれい……それは、どうやるんですか？」

魔法はイメージである。それぞれの灯火で燃える物質を変えているだけで。花火の発色に似た原理である。

魔術は術式というフローチャートで結果として魔法を発現するのだ。スタートに難の属性で起動するかで、結果が変わる。灯火の術式を水属性で起動しても、何もおこらない。水で発火する物質をイメージすれば、灯火になるかもしれないが。

「これが門外不出の術式の原理だよ」

一冊の書物をティーナに見せた。それは「ソード・アンド・ソーサリス」の設定資料の複製である。働いていた会社の建物発掘して、資料を複製したのだ。今後役立つ機会

があると思つて。

あのゲームの設定は俺が関わったので、所々虫食い状態だった資料を改定しながら複製したのだ。あの会社では腐食耐性の強い紙に記録していた。人工羊皮紙である。義父はこうなることを予測して、あんな描きにくい紙に記録させていたのか。

「おい。なんで古代語の書物ばかりなのだ？」

爺に訊かれた。現在、書庫でティーナにレクチャーしていた。

「或る意味、俺達が古代人だからだな」

日本人は古代人にあたるだろう。この世界では。ティーナには彼女の読める言語で書かれたフローチャート入門を見せている。

「ここはどこなんじゃ？」

爺に訊かれた。

「トキオ共和国の王都になるのかな？家が一軒しかないけどね」

「場所は？」

「禁足地つて言えば分かるかな？」

「禁足地じゃとおお〜！魔王国、龍王国によって封印されておるといふ」

あの国にはそう伝わっているのかな。

「その二国とは友好条約を締結しているよ」

「お主の立場は？」

「たちば？ 国王になるのかな？ ここには俺の家しかないし」

「こ、こくおうじやおお〜！」

「一々五月蠅いなあ、この爺は…」

「我が国とも友好条約を結んでくれぬか？」

「断る。メリットがない。まあ、ウチの商会の支店を設置する予定だけだな」

「商会？」

「ああ、エチゴヤだよ」

「爺が白目を剥きだし驚いている。」

「あのSSランクの商会かアアアア〜！」

「世界樹でランクを上げただけだな。」

「そうそう」

「では、貴様が会頭になるのじゃな」

「何かを考え込む爺、クレストン。」

「わかった支店の場所は確保しよう。それを持って友好の証とできんじやだろうか？」

「ああ、ゼロス君の住処に近い処にしてくれ。彼を駐在大使にするから」

「分かったのじゃ」

エレローラVS日本の食卓

——ゼロス・マーリン——

ツバサさんの仲間達、あなどれない。見た目で判断するとヤバい。聖女がいるからと、殺す気満々だし。回りの木々は俺の渾身の一撃でも傷がはいらなときている。

「この木はなんですか？」

「すべて世界樹ですよ」

世界樹の原木って、こんな頑丈なのか。

その場に集まった一堂と一戦ずつ交えた後、銀環の魔女から生活魔法一式を貰った。もう二度と、この人達とは戦いたくないぞ。特に魔女とマイルという少女、そしてクマさん。僕の魔法に怯まずに、飛び込むって、バカなのか？それとも僕がビビリーなのか。「さて、夕食まで発掘を手伝ってもらおうわよ」

って、魔女に発掘現場に連れ込まれた。

——エレローラ・フォシユローゼ——

知り合いの冒険者ギルドマスターのサーニヤを共に、教皇領を目指し、旅をしていた。遠い、遠すぎる。私達は行く先々の国の冒険者ギルド本部で情報を仕入れた。目指す教皇領はアルメリア公国の領地内にあるそうだ。アルメリア公国すらも遠い。船での移動になるようだ。

思い立って旅立ってから半年くらい過ぎた頃、漸くアルメリア公国に辿り着いた。

「あれ？エレローラじゃん」

目指していた相手に声を掛けられた。

「なんで、ここに居るの？」

「この国の王配だから。って、遠路はるばる、何をしに来たんだ？」

「あなたに会いによ」

「へ？なんで？会う用事って、ないだろ？」

「私を欲しい理由を訊きによ！」

「出産経験者だから。仲間に経験者が少ないからだよ」

「はあ？そんな理由で…」

「もつと言うと貴族の出産経験者だから。俺の仲間には平民の経験者がいるが、貴族のはいないからねえ」

啞然としてしまった私。そんな為に私を欲しがるとなんて想像の範囲には無かった。

「勤務場所は教皇領にある産婦人科病棟だけど、転職しない？」

◇

その日はアルメリア公国の迎賓館に泊まることになったのだが：ここは天国かあ？このトイレ欲しい。室内で素足が気持ち良い。草の床で寝っ転がるのがなんともいえないくらい眠気が誘われるし。人間を墮落させる館かあ？

食事に出た料理は見た事の無い物ばかりであった。帰国したくないほど私達を虜にするくらいにの衝撃だった。食材なんかは食べたことの無い物も多い。ワイバーンのテールスープ、マグロの兜焼き、刺身？魚の身を生で食べるなんて：TKGなんて、卵を生で食べるって：なんて贅沢な食べ方なんだろう。ここの家の子になりたいくらいだ。

「じゃ、ゆっくりして行つてよ」

って、宴の途中で、アイツと大公女が帰り支度をしている。ここに住んでいないのか？

「どこに行くの？」

「俺達は通いだから、家に帰るのさあ」

って…通いをする国王夫妻ってなんだ？

「俺達の家はトキオ共和国にあるから、アイリスは毎日、ここに通っているんだよ」

毎日、他国から通いで政務をしに来ているのか？

「ここより住みやすいの？」

「うくん、どうだろうか。一般の人にはすみづらいかな。俺達には住みやすいけどな」

◇

翌日の夜、彼らと共に、彼らの家へ。転移術で一瞬で着いた為、ここがどこにあるか分からないが、どこの深い森の中に館があった。

「(ハハ)は？」

「トキオ共和国の王都だよ。俺達の家しかないけど」

どくと建った館以外に建物は無い。これは住みにくいだろう。完全に森の中で、道が無いようだ。

「隣国へ行くには、どうしているの？」

「転移でしか移動出来ないよ。隣国は龍王国だから、交易はしていないし」

ドラゴンの聖地が隣国って…確か、その隣は魔王の治める魔王国だった気がするが…

「魔王国とは交易はあるの？」

「そことは貿易しているよ」

って事は、ここは禁足地なんだわ。人間が足を踏み入れてはいけない場所。人間が足を踏み入れには海を渡り、魔王が支配している国を超え、ドラゴンが生息する山脈を踏

破し…確か古代の文明の中心地を呼ばれていたような。古代の神々が封印されている地…ここが…

足腰から力が抜け、地面に尻餅を着いた…

後輩氏は知らない間にアラフォーに

——ツバサ——

エレローラが突然腰を抜かし、失禁していた。お共のエルフは青白い顔で震えている。どうしたんだ？長旅の疲れか？

館に戻るとティーナが実地鍛錬から戻っていた。合宿3日目の昨日は冒険者ギルドのクエストで、魔王国にあるゴブリンの村にクマさん達と強襲してもらい、今日は龍王国にあるノラのワイバーンの生息域に狩りに行ってもらった、

「どう狩れた？」

「はい。エアカッターで翼を切り刻みました」

そこには魔法がつかえなかった少女の面影は無い。自信マシマシに楽しそうに笑う少女がいた。

「じゃ、明日と明後日はアルメリア公国のダンジョンでダンジョン研修にしようか。現地で冒険者を雇ってもいいし、マイルとクマさんに連れて行ってもいいよ」

「はい。ユナさん、マイルさん、お願いしますね」

ダンジョンだとケーナは連れて行けない。崩落の危険が孕むし。ゼロスも同様である。この二人は手加減つてものを知らないようだ。特大魔法を連発出来る廃ゲーマーは怖い怖い。初心者のお供向きではない。

「最終日はタコ焼きパーティーにしたいから、ケーナとゼロス君は海でタコをお願いね。ああ、間違つても海竜はいらないから。あれ、小骨が多いし」

◇

翌日、アルメリア公国に戻り、教皇領の医療センターにエレローラ達を入院させた。ここまでの旅の疲れがでたのだろう。教皇領は世界各国と取引があるので、ここに入院させれば、取りっぱぐれは無いと思われる。

そう言えば、後輩氏の捜索がうまく行っていないそうだ。ふと思った。強奪で引き寄せれば、いいんじゃないかと。森の館に戻り、後輩氏を強奪で引き寄せてみた。

その結果、知らない全裸の女体が現れた。鑑定をすると、彼女の状態が仮死状態と出た。この人は誰だ？セイを呼び出し、サトウも呼び出した。

「この人は誰？」

「どことなくヒカリちゃんに似ているけど、見た目がアラフォーよね。取り敢えず、仮死状態を解除し、本人に訊いてみましょうよ」

セイが仮死状態を解除すると、女体に血液が循環し始め、青白く冷たかった女体に温

かみが生じた。暫くすると、目がさめたのか、状態を起こし、周囲を見回していた。

「あつ、イチロー兄だあ」

と叫び、サトウーに走り寄り抱きついた。サトウーは突然なことに呆然とし立ち尽くしている。

「なあ、お前は誰だ」

俺が代表して訊いた。

「え？ 私は高杯光子で、イチロー兄の幼なじみですよ」

「俺達の知っている後輩氏は二十代前半なんだが、いつ、アラフォーになったんだ？」

因みに、後輩氏はサトウーに「ほの字」なのだが、オツパイ星人のサトウーはちつばいな後輩氏に惚れることなく…人の性癖には口に出さないが…実らない恋だな、これは…

「あれ？ 神野先輩に小鳥遊先輩、どうしてここに？」

話をしてみると、後輩氏の失踪の原因はあの世界からの勇者召喚に巻き込まれたらしい。で、勇者とし活躍し、シガ王国を建国し、サトウーのいない世界で一人年老いていく事に嫌気が差し、ワールドスリップをしたそう。せめて、アラサーですればよかつたのにつて、後の祭りであるが…建国したつて？ このアラフォーは一体いくつなんだ？ 女性に年齢は訊けないけど、疑問である。

「後、大野君も召喚されているぞ」

「ええ、あのロリ大魔王の大野先輩もですか？あの会社呪われているんじゃないですか」

会社のマシンのスクリーンセーバーにロリキャラは宣伝しているようなものだよ。まあ、その裏では、会社の仕事ではなく「GAME」のバグ取り画面であつたが。ああ、懐かしいなあ。大野君はビール片手にバグ取りするから、残業しないし。仮眠部屋はサトウと後輩氏の部屋になつていたし。俺とセイはほぼ毎晩終電だつたし。

確かに、ゲームシステムに関わつた者5人も召喚被害にあつているしなあ。そういう意味では呪われた会社だつたのかも知れない。そんな全裸の後輩氏であつたが、その裸体を誰もガン見して居らず、後輩氏は気づくのはだいぶ経つてからであつた。ちつぱいであることを除けば、健康的な裸体だと思いますが、それを対象とする性癖持ちはここにはおらず……大野君はもつと低めがターゲットだし。

着る物を欲しがる後輩氏をセイが地下遺跡のデパートへ連れて行き、砂まみれの婦人服と下着をゲットして、着替えをしたそうだ。落ち着いて来た後輩氏に現状でわかつていることを伝えた。

「この世界ではミトと呼んでくださいね。シガ王国ではミト公爵を拜命しておりますから」

それはこうもん様から取ったのだらうな。って、ミト・ミツクニ公爵が正式名称らしい。

◇

サトウとミトをシガ王国に密偵兼行商人として送り届けた。二人を夫婦の設定にすると言ったら、ミトが喜んで、ノリノリだった。まあ、結果がどうあれ、適材適所であらう。

昼過ぎ、ケーナとゼロス君が、大ダコを数匹既にミンチ状態で持つて来た。タコ焼きパーティーの準備をするか。なんでミンチかって、たぶんやり過ぎたんだらう。ライブル意識過剰で：タコのミンチは海水に浸かっていたのか、既に下味がついたじょうだいである。紅シヨウガがほしいのだ、まだつくれていないのだった。食紅が見つからないのだ。ふと閃いた。そうだ、地下遺跡から強奪で、手元に：こんなことをしているから、開発が遅れるんだらうな。

翌日、爺とティーナとゼロス君を送り、支店の場所を爺として候補地を回った。ソリストア大公爵家の別邸の正門からなだらかな坂を下りること三十分、街の片隅に出た。角には広いがボロボロの教会があった。

「ここを立て直し、一階の手前を教会にして、奥を孤児院にする。で、裏口から出たあたりの土地を与えるぞ」

教会の裏口って、あの面した道は、教会と爺の家しか繋がっていないし。クレームを入れると、そこは住処用地であり、商会は教会と孤児院の上にするそうだ。改築費は俺達ださせようとしている爺。まあ、それでいいか。耐震強度を俺達でどうにでも出来るし。土建屋を入れずに、俺達で建てられるし。

その晩、こつそりと、教会の上に商会の入るビルを建てた。1階部分はトンネル状態で、ポロい教会は手を付けずに、2階から上だけを鉄筋コンクリートの強固なビルにした。鉄筋代わりに、世界樹の繊維を縫り合わせた物を使い、砂は大量にあるし。

翌日、爺達が驚いていた。教会の改築も俺達に擦り付けようとしたが、思惑は外されたのだった。ゼロスの住処も建てた。世界樹を遣った2X4（ツープайフォー）工法でだ。予め世界樹の干ばつ材を2X4サイズの板に加工して保存してあるので、工期は一晚で可能なのだ。チート集団をなめるなよ。たぶんあの家は、ゼロス君の全力一発でも破壊出来ないだろう。

その結果、エチゴヤソリスティア大公爵領支店の最初のお客様はソリスティア大公爵家となった。教会と孤児院の建て替え案件は、世界樹建材での2X4工法の家屋になった。工期は3晩くらいで：儲けさせて貰いますよ。クレストンの爺よ。

有益な番犬のコカトリス

——ゼロス・マーリン——

ツバサさんに建てて貰った家は快適であつた。トイレ、風呂、畳の部屋など、欲しい物が付いていた。ただ、電気が無いが、

「ソーラー発電システムが自前でまだ作れないから、魔石を充電池代わりに使ってくれ」と。魔法の使える世界である。それはそんなに不便なことではない。魔石は自分で取りに行つてもいいし、エチゴヤ支店に行けば、貰えるし。狩った獲物の買取もしてくれるし。快適な住環境である。畑で育てる米や麦なども貰つて来たので、裏の畑に撒いている。コカトリスを玉子採取用にもらつたので、畑に放牧している。このコカトリスは教育済みだそうで、僕達が食べられない雑草を食べてくれ、産んだ無精卵を、玉子置き場においてくれるのだ。有精卵は子孫繁栄のため、くれないそうだが。賢いなあ。更に、番犬代わりにもなるらしく。怪しい輩は即撃退してくれるそうだ。

確か、あの館の番犬はケルベロスとフェンリルだったので、一般家庭向きではないが、コカトリスなら、石化で捕らえられるそうだ。今日もクレストンさんが、石化されてい

た。魔法で解放してあげないと。

——ツバサ——

ゼロス君經由で爺から連絡が来た。どんなクレームかな。ワクワクしながら、交渉事だろうからマイルと向かった。

「で、何用ですか？」

「孫の装備なんだが……」

世界樹の繊維で編んだ防刃ベストとジャケットロングスカートを進呈している。後、殴れる杖と護身用のナイフもだ。最近の世界樹製の武器は相手の血を吸うと切れ味がアップする。防具は魔法を受けると魔力を吸収し、ダメージが入ると、防御力がアップする成長する装備であった。

「もっとカワイイ物に出来ないじやろうか？」

「無理です。あの素材は強固過ぎて加工が大変なんですよ。それに特別価格でお売りしましたし」

対物理ダメージ、魔法ダメージはほぼ通らない。安全仕様である。かわいさは追求おらず、生存性を優先されていた。

「あの素地を売ってくれぬか？」

「加工出来るの俺だけです…」

俺の錬成術以外では加工出来なかった。なおチート大王のマイルでもだ。

「ゼロス君の全力の一撃でも傷が入らない素材なんです。どうやって加工するつもりですか？」

サンプルの生地を爺に差し出した。

「これか？知り合いの仕立屋に出していいか？」

「いいですよ」

製法は企業秘密である。

◇

数日後、爺からクレームが入った。加工する為の刃物類が全損したらしい。

「だから、加工は無理だって言ったでしょ？」

「頼む、加工出来る道具を譲ってくれないか？」

「アレを加工出来る器具は無いです。俺のスキル以外で加工出来ないもん」

「はあく、どうということだ？」

「だから、俺のスキル以外では加工は絶対に無理」

「独占なのか？商業ギルドに訴えてやるぞ」

「どうぞ、ご勝手に。商業ギルド本部で独占許可出ていますから」

アルメリア公国の本店と商業ギルド本部では、ある程度のオーバメイドは受注している。とても高価であるが。売らない訳ではない。無理な物は無理として拒否しても良いといわれているのだ。

「うぬううう〜」

悔しそうな爺。で、ティーナな森の館の暮らしになれてしまい、ゼロス君の家に下宿しているそう。あの人間を墮落させるトイレ以外で、用が足せないらしい。

「そうじゃ、トイレを我が家に着くって欲しいのじゃ」

ティーナが歩いて15分の場所に家出された状況だしねえ。昼はいいのかな？あの上でゴロゴロするのが好きらしいが…

「下水設備はありますか？」

「なんだ、それは？」

まさか、ボットン式なのか？垂れ流しなのか？それは問題外である。

「糞尿を処理する設備ですよ。一番安価なのは、スライムに喰わせるですね。そうすると、近くにスライムを育成する部屋が必要になり、大規模な工事を費用が必要になります…」

どこかの場所に転移させれば良いんだが、その方式では儲からないし。転移先が必要になるし。概算の見積書をマイルが取り出し、爺の前に置いた。

「こんなにするのか?」

森の館とアルメリア公国の館では、下水処理場をつくってあるし。ゼロス君や支店では、汚水タンクに転移させている。発酵させてメタンガスを取り出し、発電の実験をしていたりするのだ。

「今後のことも考えて、街に下水処理場を作るのはいかがですか?」

マイルが見積書を爺の前に置いた。公共工事になるので、桁が2つ位上がるが……
「こんなに予算が無い……息子に相談する」

前向きなのかな?

さて、ゼロス君の家に寄って行くかな。

聖女とは？

—— クレストン老 ——

目の前に、この街の魔導具屋の店主ベラドンナがいる。

「なあ最近見かけるようになった、ベヒモスの皮のローブの男と、知らない素材のジャケットの男は何者だい？」

あの汚らしいローブはベヒモスの皮だったのか…

「ジャケットの男はトキオ共和国の国王で、エチゴヤの会頭で、ローブの方は、トキオ共和国の駐在大使じゃ」

「トキオ共和国？聞かない国名だね、新興国かい？」

「どうなんじゃろ…場所は禁足地だそうじゃ」

「禁足地だと？魔王なのか？」

「魔王国とは友好関係らしい。魔王かどうかはわからないが、古代人の末裔らしい」

「古代人？証拠はあるのかい？」

「彼奴の輩には古代語の書物が大量にあったんじゃ」

「それは欲しいなあ。 接收できんのか？」

「無理じゃな。 教皇領と友好をむすんでおる。 そもそも敵にしたら、我が国では勝てん。 テンタクルやワイバーンが食卓に乗る家のヤツラじゃ、それに未知の素材をあつかつておる」

あの素材のサンプルを見せた。

「これ、どう足掻いても加工できん」

「なんだ、これは…鑑定出来ないアイテムだと…技術を貰えないのか？」

「企業秘密のようじゃ。 どうしても欲しいなら、お主が貰つて来い」

「そうしようか」

翌朝、石化したベラドンナが届けられた。

『ふざけた真似はこれでおしまいな。 次はないぞ』

とメッセージ付きで…コイツ、何をしたんじゃ？

—— ツバサ ——

サンドールの街の魔導具屋の件は、商業ギルド本部と錬金術師ギルドの本部に通報した。 謎の生地秘密に迫りたいからと、強盗に入るとは、あさはかである。 家に侵入する前にコカトリス番犬隊にボコられての石化で御用となった。 侵入できたとしても、人

体実験の材料になったかもだ。どちらが幸せなんだろうか。

「頼みがあるんだが」

ゼロス君の前にバイクを数台置いた。

「地下遺跡でバイク屋を見つけてね。コレの発動機をこの世界で使える様にしてもらいたい」

「ここにはガソリンがない為、造形美鑑賞という目の保養にしかならない。

「いいですよ。研究は楽しいですよ。要は魔石受電地で、ピストン運動が出来れば良いんですね」

「そういうことだ。あとは、タイヤの代用品の開発だな。自転車のメカの部分は魔女の息子の鍛冶職人が目処をたててくれている」

本当は俺が研究開発したいのだが、忙しくて断念した。

「ゴムの代用品ですね。ゴムの木を探るのが早そうですね」

「ゴムの木はまだ見つけていない。強奪でも取り寄せられていない。きっと、形態が地球と違うのだろう。」

「後、頼まれていた薬草はここに置いておくよ」

「なんかのの薬剤を作るようだ。まあ、結果は自己責任だな。」

◇

「教皇の婆から指名依頼。どんだけふんだくるかな。仲間が増え、資金が減っているらしい。伯斗のところから徴税するかな。いや、クレストンの爺から公共大型工事が受注出来れば、潤いそうだが。」

「うん？ 聖光国と友好条約を締結しろって？ その国はどこだ？」

話を訊けば、伯斗の村のある国のようだ。

「ルナって聖女の治める村は、仲間が運営しているぞ」

「では、魔王は仲間なのか？」

「魔王って誰？ ルナの姉の世紀末聖女か？」

「G E M E」のキャラにぴったりだ。あれをラスボスにすれば、違うファン層もゲットできただろうな……

「あの国の三聖女の長女が、お前の仲間が三女の聖女を手懐け、貴族も次々と手中に収め、国が征服されるのではと、恐れているのじゃ」

「ああ、そう言えば、この前、その国の聖都で悪魔を退治したんだ。それを侵略と勘違いしたんじゃないの？」

「あの国に悪魔がか？」

「あの国の天使も碌な物じゃないぞ。天使の像が呪われていたし、国民も腐っているのが多そうだ。大掃除した方がいいぞ」

「取り敢えず、儂の名代として、長女と会談し、友好条約を締結してくれないかのう？」
「どこの国で？アルメリア公国にメリットないし。フリージア王国もメリットないし、
（一）、教皇領でいいか？」

「（一）じゃ、対魔王の後ろ盾にはならん。お前の共和国じゃ〜！」

全然メリットがない。

「そうだ。聖女の規定つてあるのか？ルナは光属性の攻撃魔法しか出来ないようだし、
その姉は、聖属性の拳持ちのようだが、治癒は出来ないだろうし」

「その国々で規定が違う。嘆かわしいことじゃ。完全に規定に合うのは、セイだけじゃ」
女性であつて、聖属性で治癒が出来るが正解のようだ。さて、今回の交渉相手は如何
に…

聖女V S聖者

——ツバサ——

敵地で会談は難しい。護衛が沢山付いてきそうだし。浚ってくるか。夜中に聖城に忍び込み、長女の聖女を攫って来た。問題はどこで会談するかだが、魔王疑惑を避ける為、アルメリア公国の迎賓館に運び込んだ。今夜は使用していないので、安心である。ベータ達にメイドを頼み、帰宅した。

——エンジェル・ホワイト——

目が醒めると知らない部屋で寝ていた。まるで空気に包まれるようなベッド。これって、魔法具かしら？

部屋は質素ではあるが、備えられている備品は高級そうな仕立てである。

「お目覚めですか？」

エルフのメイドが声を掛けてきた。

「いっは？」

「アルメリア公国の迎賓館でございます。湯浴みにしますか、お食事を先にしますか？」
うーん、聖城で寝た筈だが、アルメリア公国って…随分遠くな国のようだ。そうだ教皇領のある国だわ。きっと狎下が神の御業で私を召喚されたんだろう

「じゃ、湯浴みから」

湯浴み場、室外にあるのかあ。脱衣所から全裸でバスタブに行くの？って。バスタブは岩が組まれている自然に出来たお湯のたまり場のような場所だった。お湯につかうと、足を入れようとした。

「聖女様は、温泉のルールを知らないようね。世間知らずなのかしら？」

見た目が美しい女性に注意された。湯浴みのルールくらい知っているわよ。

「あなたは？」

「申し遅れました。この国の大公女様の護衛であるプライド・ロイヤル・アイビー、こちらにいらつしやるのがこの国大公女のアイリス・ラーナ・アルメリア様です」

プライド・ロイヤル・アイビー…有名人である。フリージア王国の第一王女であり、武芸に長けており、周辺国に恐れられている女性である。その均整の取れた肢体が湯に入ろうとした私を押しとどめ、洗い場に連れて行かれた。

「先ずは身体を洗う。汚れを湯に持ち込まないでくださいね。アイリス様に失礼です」

言われれば、そうかもしれない。身体を洗う…見慣れない容器があるだけで、石けんはどこだ？私の行動が不審に見えたのか、プライドが私の身体を洗い始めた。きめの細かい泡が私の汚れを洗い上げてくれるようだ。そのまま、意識が深く底に沈んでいく…

——ツバサ——

誰かが調合した媚薬入りの睡眠効果のあるシャボンで洗われ、意識を飛ばした聖女が、全裸で全身マツサージ室に運び込まれてきた。どうすんのだ？聖女を全裸で拉致つて…まあ既に聖城から浚つては来ているが…セイが更に深い眠りに導いているし。

マイル、セイ、ケーナのステイタス鑑定で念入りに調べ上げた。その結果は、熾天使崇拜者であること。魔導具による奇跡の行使を自らの能力と勘違いしているだけであつた。しかしトップ聖女であるため、知識はありそうだ。軍師にはよいかな。

「で、どうするん？」

段々、面倒臭くなつてきた俺。こんな美味しそうな裸体を見ても性欲が湧かないし。ああ、つまらない人生だな。

「あなたのペットにする？」

小悪魔ほい笑みを浮かべるアイリス。

「愛人にか？あの国を奪うと後が面倒だ」

あの辺りに伯斗に丸投げにしたい。

「では条約締結することで、この娘の初めてを貰えば？」

って、セイ。いいの？結果、物体Xの常飲により性欲が湧かない俺の取った行動は、アンダーヘア内に奴隷紋を刻んだだけだった。俺って、ヘタレだったのか…凹む俺をセイ、アイリス、プライドが慰めてくれた。

——エンジェル・ホワイト——

目が醒めると王城内の私の部屋のベッドで寝ていた。あれは夢だったのか？サイドテーブルをふと見ると、トキオ共和国との条約が締結された証拠の書類に教皇猊下の名と認め印が押されていた。

まさか、寝ている間に猊下がいらして？いや猊下といえども、ここに入ることは出来ないはずである。でも、そうするとコレはどうやって、ここに…まさか、魔王が何かをしくんだのか？

確かめる為に「熾天使の跳躍」でラビの村へ転移した。

聖女、痴態を晒す

——ツバサ——

伯斗から緊急事態発生と、呼び出された。昨晩は、徹夜作業だったので眠いのにな……

ラビの村へ転移すると、伯斗に全裸で掴みかかっている聖女がいた。伯斗がタジタジである。なんで服を着ていないんだ？脱いだのだろうか？姉の奇行にルナがフリーズしている。あまりの迫力で、田原、悠でも割って入る気配がない。

「どうしたんだ？」

「この女は、お前の奴隷だろ？どうにかならんか？全裸でここに來るって痴女だろう？」

全裸で來たのか？それなら痴女で間違いないのだろうな。まあ、全裸を見て、アンダーヘアに隠されている奴隷紋を読み解ける伯斗もたいがいであるが。

「おい、もうやめろ。そこに正座しろ。あと、黙れ！」

俺の命令通り動作する痴女疑惑の聖女。

「どういふことだ？」

伯斗に念話で説明をした。

「教皇のばあさんの指示か。じゃ、しゃないか。って、事後報告するな。先に説明しておけよ。俺は女性の全裸に免疫が無いんだからな」

「昨晚のことで、徹夜作業で寝ていたよ」

聖女が無言で俺を睨んでいる。未使用の乳房は見ていて飽きないので、俺もガン見して対抗してみた。

「なあ、ジャマだから、部屋に連れ込むか、持って帰れよ」

取り敢えず、温泉旅館の部屋に聖女を持ち込んだ。

「しゃべっていいぞ」

「あなた、私になにをしたのよ」

「目立たない場所に奴隷紋を描き入れた。敵対されると厄介だからね」

「どこに入れたの？」

彼女のアンダーヘアを指差す俺。

「な、な、なんて場所に…じゃ、したの？」

「出来なかった。精力減衰中なので…俺のアレは役立たずだったんだ」

「ヘタレ！」

「そうだよ」

「って、あなたは誰？」

「俺は通りすがりのヘタレです」

正座の命令を解除していなので、俺を厳しい視線で見つめる正座姿の聖女。

「そうじゃなくて、魔王とどういう関係？」

「うーん、同郷人で元同僚かな」

「じゃ、あなたも魔王なの？」

「俺は聖者だよ」

教皇からもらった身分証代わりのネームタグを見せた。

「猊下公認の聖者……」

目を見開いたままフリーズした聖女。

「帰ったら、動いていいから服を着ろよ」

聖女を聖城の彼女の部屋に強制転移させた。

—— エンジェル・ホワイト ——

部屋に戻されると、身体が自由に戻っていた。湯浴みをし、鏡で自分の下腹部を見ると、確かにアンダーヘアの中に描かれている紋。どうやって、ここへ描いたのだろうか。こんなに描きにくい場所に。確かに目立たない場所だけど……

彼が聖者だということに驚いた。それも教皇猊下公認である。本物の聖者なのだから

う。清く正しい者だから私を抱け無かったのだろうか？私に魅力があったから紋を刻み込んだのだろう。性欲が戻るまでのキープの意味で…

——ツバサ——

聖女を帰した後、仮眠を取った。一眠りすると、マイルから呼び出しである。サンドールの領主から商談が入ったそうだ。急いで森の館に帰り、マイルと共にサンドールに向かった。

爺の家に着くと、庭でティーナと近い年くらいの男子が戦っていた。男子の放った魔法を殴り杖で無効化し、瞬動術で男子の懐に接近し、杖で殴打して男子を吹っ飛ばした。うちのブートキャンプの参加者が、その辺の男子に負ける訳がない。そう、バーサスティーナは有能な戦士に生まれ変わったのだ。

「あつ、マスター、マイルさあくんなんだあああ」

俺達に気づいたティーナが走り抛って来た。

「お爺様に御用ですか？」

「いや、領主様と商談なんだが…」

「お父様と商談ですか。では、ご案内します」

商会、領主との取引を始める

——ツヴェイト・ヴァン・ソリスティア——

まさか、惨敗するとは。妹のセレスティーナは魔法の使えない忌み子であったのに。ことあるごとに、小馬鹿にしているのだが、今日は「では、勝負しましょう」と、挑発的であった。魔法が使えないくせに、生意気だと、勝負を受けたのだが、俺の放った魔法を杖で消し飛ばし、魔法で反撃されていた。

そう言えば、お爺様が、セレスティーナは生まれ変わったとか言っていたような。それはこういうことなのか？

セレスティーナは魔法だけでなく、接近戦も強かった。魔法の発動速度と威力が俺とは桁違いに強くなっているし。何をすれば、忌み子が戦士になれるのだろうか。

——ツバサ——

ティーナの父親である領主は女好きで、公爵家のメイドにムラムラ来て、結果ティー

ナが生まれたそうだ。妾腹から生まれたせいで、爺に引き取られ、別邸でくらししているそうだ。で、先ほどの相手は、公爵家の次期当主候補らしい。虐められないように、もつと鍛えようとマイルがノリノリであるが、ゼロス君が近くにいるから、そうそうマズい事態にはならないだろう。万が一の時は街を壊滅して、森の館に帰ってくるだろうし、最近の爺は、『権力に固執する様な奴は魔導士では無い、己を高める事が魔導士に本来の姿だ』と言い切り、魔導師の各派閥にケンカを売っているらしい。

い。吠えるくらいなら、もつと魔術を研究すればいいのに。平和が一番だよ。ティーナに現公爵の元へ連れて行ってもらった。

「お父様、この方が、私に魔法を教えてください、戦い方を教えてください、さつたツバサさんと、マイルさんです」

目の前にはゼロス君と同年代の身なりの良い中年紳士が立っていた。この人が現公爵なんだろうな。

「直接会うのは初めてだったな。私がセレスティーナとツヴェイトの父で、あの面倒な老人の子でもあるデルサシスだ」

あの爺の子供なのか。見た目は普通である。とても女好きなダメ人間に見えない。仕事はできそうである。物体Xを薦めて精力を減衰させてやろうかな。

「どうも、ツバサです。これは秘書のマイルです」

マイルは護衛であるが、幼女に見られがちで胡散臭そうに見るので、秘書ということにしてある。

「ウチの爺が無理難題を言つて、申し訳ない。公共事業の件は前向きに検討したいが、費用がなあ…」

「分割でもいいですよ。工期も長くなるし」

「それなら…」

公共工事はまともりそうである。

「それに先立ち、我が家のトイレ、風呂を改装したいんだが、簡易の下水処理ユニットもあるようだな」

「あります。簡易と言つても、きっちりつくらないと、衛生上良くないですから、費用は…」

「うくん…君の商会に便宜を図ろう。なので、もう少し、どうにやらんか？」

マイルの交渉術の結果、商会がタックスフリーになる代わりに、大幅値引きをした。儲けも出るだろうな、タックスフリーなら。

「話は変わるが、娘の教育なんだが、面倒みてくれるか。学校での勉強が無意味に思えて
いるんだ」

学校に通つてもバカにされるだけで、魔法はまったく使え無い訳だからな。教え方が悪いとしか言え無い。

「我が家の鍛錬で良ければ……ただ、住み込みになりますよ」

毎日送り迎えが出来る程、暇ではない。

「それは問題ない。学校も寮制だから。で、息子も面倒見てくれないか？学校では、シガラミが多々ある上、ウチの爺のせいで肩身が狭くなりそうなんだよ」

爺は家庭でも問題をおこしているのか。

「泣き言を言ったら、返還で良いですか？」

アイリス母のブートキャンプは厳しいからな。

「スパルタで良い。学費はこんな感じでしょうか？」

「ええ、いいですよ」

俺とティーナ父は固い握手をした。

—— ツヴェイト・ヴァン・ソリスティア ——

セレスティーナとお爺様と共に、アルメリア公国に留学の為に向かっている。今まで通っていた学校は辞めて、新しい学校に通うそうだ。セレスティーナは楽しそうであるが、片道2ヶ月だという。船で海を渡らないといけない程遠くにある国だそうだ。

「教皇陛下の住まれる教皇領もあり、様々なギルドの本部があるそうじゃ。教皇陛下がおっしゃるに世界で二番目に安全な国だそうじゃぞ」

二番目？

「一番は？」

「たぶん、トキオ共和国じゃろうな。あそこは攻め込まれる心配がないし。そもそも戦争に巻き込まれる心配がないじゃろうし」

聞いたことがない国だ。

「どこにあるのですか？」

「神々が封印されているといわれている禁足地じゃ。今から行くアルメリア公国はその属国になるそうじゃ」

禁足地で建国？正気の沙汰では無い。魔王の治める国にかこまれるようである地域だったはずだ。学校で習った限りは。だが、人類がそこ到達した記録が無いと言う。不思議な地域である。

「本当にあるのですか、そんな国が？」

お伽噺なんだろうな。だが、

「ある」

お爺様は断言した。

「儂とセレスティーナはそこで、魔法の神髄を学んだのだ」

「どうやって行つたのですか？」

未だに勇者パーティーでされ、到達してこは無いはずだが。

「転移魔法でよ、お兄様」

笑顔で答えた妹。転移魔法？それ自体がお伽噺クラスの魔術ではないか…

「ウチの近所に住んでいるゼロスさんは、トキオ共和国の駐在大使なのよ」

はあ？あのボロボロのローブを着た冴え無い男がかあ？

7章 平和が一番な異世界行

巫女誘拐事件

——ツバサ——

ティーナ一行が来るまで2ヶ月かかるらしい。転移での送迎はしない。森の館は来られないから転移サービスをするが、アルメリア公国へは、交通機関で来て貰う。これも学習の一環である。

彼女は国立の学校で文字や計算などの初等教育から学んで貰う。それと並行して、アイリス母によるブートキャンプもだ。ええ、丸投げですよ。これが分業制ですからね。

俺とマイルはティーナ父の家の改装工事の準備をする。家の設計図を貰い。まず、汚水槽の設計をする。実際の施工は土魔法でアルメリア公国の学生達にやらせる。アルメリア公国では下水設備を拡充中であり、それ専門の部署もある。そこに就職する為の学生もいる。国民には冒険者以外の職も覚えさせている。怪我をして冒険者を続けない場合の救済処置にもなる。

簡易タイプなので、汚水槽からは、支店で売っている交換用の魔石の魔力で強制転移

させる。転移先は、支店とゼロス君の家で共同で使っているメタン発生槽である。発生したメタンガスは、電気と無害な物に返還し、電気は、ゼロス君の家の家電で消費する。メタンガスを発生させた汚物は、スライムに食べさせて、腐葉土と水に分離し、水だけを川へ流す。これで環境に優しいシステムになるはずだ。森の館で実証実験済みだしね。

魔法王国ソリステアの人々はほとんど魔法が使える人なので、水タンクへの水の補給も魔法で行って貰う。出来ない場合は、水を発生させる魔性を商会で買ってもらえばいいし。

◇ そんなノンビリとして日々を送っていると、ミト・ミックニ公爵から救援連絡が来た。

俺とマイル、プライド、セイと共に、ミトの元へ転移した。

「先輩、大変です。テニオン神殿の巫女が浚われて、行方が分からないんですよ」
神殿？ミトに訊くと、この国では教会はなく神殿があるそうだ。

「ミトとサトウの探査スキルで見つからないのか？」

「です」

そうになると、増援部隊としてユナとケーナを呼び出した。

「あとですね。この子、転生者で、身食いの可能性があります」

ミト達が見つけた転生者の奴隷の少女。セイが彼女の身体を精査していく。それと並行して、ケーナ、ユナが行方不明の巫女を探しに行った。セイが精査した結果を受けて、俺が彼女、アリサの魔力回路の魔力の調整をしていく。

「そうだ、サトウー、地下の探査を頼む。ミトの探査でみつかないなら、地下の可能性があるぞ」

「了解です」

「ミトは、地下通路の地図があつたら、持つて来て」

「わかつたわ」

ミトは神殿の奥へ消えた。

「このサプリを噛まずに水で流し込んで」

身食い対策サプリを手渡した。このサプリ、アレを濃縮して粉末にしてカプセルに詰め込んだ物だ。飲む時の苦痛を減らす為に開発してのだが、胃酸と反応すると、あの臭いガスが発生して、体内から鼻孔へ向かうので、

「鼻呼吸はするなよ。死ぬ程苦しくなるから」

って、そうそう鼻呼吸は止められない。みるみるアリサの顔色は悪くなり、涙と鼻水でグチヨグチヨ状態に…

「臭いよ臭すぎるよ」

「臭さが難点の葉なんよ。良葉は鼻に臭しつていうだろう?」

味はクリアしたから、苦痛は半減したと思う。

「見つけた! 地下に悪魔の反応がある」

と、ケーナ。サトウは能力が使いこなせないようだ。まあ、F1マシンをド素人が運転するようなもので、性能が生かせないのだ。ゲームと違うからな。魔力操作は…

「ケーナ、そこへの侵入口は?」

「穴開ければすぐ」

それはそうなんだが、街が破壊されないか? 地盤沈下とか…

「俺とケーナとマイルで侵入する。ユナとアイリスは、セイを頼むぞ」

ケーナの開けた穴から、悪魔の居る処へと向かった。そして、悪魔は塩に、魔王狂信者達は灰になり、空气中に拡散していく、で、巫女は? 身食いの末期になりかけで、肉と骨だけになりつつあった。俺が触れると塩に塗れた肉と骨に…冷風乾燥すれば骨付きハムになりそうだな。

「マイルは、結果を地上に報告して。おれとケーナは、この骨付きハムを身食いの治療施設に運ぶ。後からアリサを連れて戻ってくれ」

ケーナと共に転移した。

◇

塩を洗い流し、アレをみたした容器に骨付き肉を保存した。

「当分骨付きのハムは食べられないかも」

とは、ケーナ。アレは衝撃的な絵面だよな。俺は治療の度に肉の塊を見慣れているが……初めてアレを見たケーナはショックを受けていた。

「あれが体組織が変化する前段階だ。あれより進行つすると、ダメかもしれない。今まで一番ひどかったのはアルファだよ」

「あの美人エルフが？」

「ああ、治療を終えたアルファを目にした時、助けられて良かったと思った」

「塩漬けになったのって……」

「たぶん、悪魔か魔王が取り憑いていたんだと思う。聖者の能力は悪魔系は塩化するんだよ」

塩化スキルが聖女との大きな違いなんだろう。セイにはそんな能力は無い。

一般病棟に行くと、セイがアリサを精査し、治療師ギルドのメンバーに指示をだしていた。俺達以外でも、見た目の変化が無い者は、治療師にまかせている。その研修もさせている。教皇が声を大きくし取り組んでいることだ。

「ねえ、セーラはどうなったの？」

目を腫らしたミトに訊かれた。

「治療を開始した。今は見ない方が良いぞ」

ケーナがショックを受ける程、グロい見た目である。

「そんなに酷いの？ 治る？」

「ああ、治るよ。あれより酷いやつを治療した事がある。ただ、時間は掛かるぞ。半年位は見ておけ」

面会すら命がけ

——ツバサ——

半月後、あの患者の家族が見舞いに来たいと言う。ミトが転移術で一般病棟の待合室まで連れて来ちやっつたそうだ。

「面会謝絶なんだが……」

物体Xを扱う部屋は、基本俺以外は立ち入り禁止である。見た目が人間には見えないし。なんせ肉の塊を世界樹の葉っぱの漬物で包んでいるし。見た目が狂気の沙汰で、その上、臭いすら人間には凶器であるし。

「そこをなんとか……」

中年？ 老年？ の男性が頼んで来た。

「セーラの祖父のオーユゴック公爵だよ」

と、ミト。ティーナの爺より若く見える紳士であった。

「彼が身食い専門病棟の責任者の聖者のツバサです」

「一目会えないか？」

「ハッキリ言つて、見た目が未だ人間で無いですが、良いですか？」

「人間では無い？では何だというんだ？」

骨付きのハムの世界樹の漬物巻きとは言え無い…家族が人間でない見た目つて、衝撃だろうな。俺の胸ぐらを掴む公爵、それを引き離すミト。

「落ち着いて下さい。オーユゴック公爵」

「しかし…あの目に入れても痛くないセーラが人間でないつて…」

「わかりました。特別ですよ。ただ見た内容は他言無用つてことで…」

ミトと公爵を連れて物体Xの部屋へ向かい。二人を観察室に入れ、俺だけ物体Xの部屋に入り、密閉してある蓋を開け、二人に患者の姿を見せた。



混乱し絶叫をした公爵をセイの麻酔術で眠らせ安静にした。ムンクの叫びのようになっていた。老人故、心臓は大丈夫だろうか。

「だから言ったのに…」

ケーナですら、未だにショックから立ち直れていない。夢に、あの肉塊が出てくるらしい。ミトもショックを受け、目を見開いたまま、意識を手放していたし。

一般病棟に入院したアリサは、物体Xの毎日の摂取が義務づけられたが退院してい

る。魔力回路が正常に機能し固定化すれば物体Xの摂取は止めて大丈夫だが、人間で摂取を止めた事例は未だいない。アルファやベータなど亜人種であれば、止めても大丈夫だが、やはり止めた者はいない。それだけ、本人達も再発が怖いのだろう。

「どの位かかりそう？」

セイが心配そうに訊いてきた。

「塩化状態は初めてだから、わからない。何かが取り憑いたのは確かだし」

トライアンドエラーで経験していくしか無い。正解なんか、どこにも書かれていない。身食いの治療を研究しているのは俺だけだから…

◇

身食い騒ぎ収まらない。邪神崇拝者達のパーティーを強襲したアルファたちが、新たな患者を助け出したようだ。ミドガル王国の第二王女のアレクシア・ミドガル、オリアナ王国の第一王女のローズ・オリアナ、ミドガル王国カゲノー男爵家長女のクレア・カゲノーの3名である。

アレクシアは身食いではなく、何らかの理由で血を大量に抜かれていた。造血剤を投与していく。魔法では造血が出来ないのだった。

残りのふたりのは身食いの肉化初期段階で、心臓の辺りの表面が肉塊になり始めている。二人の意識を狩り、呼吸経路を確保して、物体Xを満たしたバスタブに沈めて安置

する。

アレクシアの血液を悠の元で精密検査に出した。血を抜かれる理由が知りたいたので。ここ最近、重傷者が増えてきたので、物体X処置室を増築した。隔離を完璧にしないと、二次被害が怖い。

——アイリス・ミドガル——

妹のアレクシアが邪教崇拜者達により、なんらかのことされたそうで、付き添いとし、アルメリア公国の治療院へ同行した。

初めて訪れたアルメリア公国は、活気に溢れている国だった。我がミドガル王国が一番栄えている国思っていたが、初めて見るアルメリア公国は、驚きに満ちあふれていた。公都は高い壁に囲まれていた。公都に面して行政区、研究機関、教皇領、学園都市、ギルド本部区が隣接し、それぞれが結界により守護されていた。訊けば、国境にも結界を張っているそうで、攻め込まれない工夫が幾重に為されているようだ。

国策として、教育に力を入れており、平民でもヤル気のある者は無償で高等教育まで受けられるそうだ。教育も文武ともにレベルが高いようだし。剣術の講師にはあの人類最強と呼ばれたプライド・ロイヤル・アイビーがいる。剣術において負け無しの私が、未だに一度も勝てて居ない。この国の王配の側近とも手合わせをしたが、勝てた試しが

ない。勿論、王配にすら勝て無い。たぶん、その気になれば、世界を征服できる戦力が、この国はある気がする。

「世界を征服なんかしたら、メンドーだろう」

と、王配はなんかの平和会議で公言したそう。国の方針として、売られたケンカは買うが、売る事はないそう。

◇

妹が入院している病室に行くと、あの王配と女医さんがいた。

「どうですか？」

「サンプルが少ないので、まだ断定は出来ないけど、アレクシアの血液で身食いの進行が早まるみたいだ」

「どういことだ？」

「それは妹が悪魔化していると？」

「いや、悪魔化はしていない。君達の祖先がなんであったかが問題なんだろう」

「何故悪魔化していないと断言出来るのですか？」

「俺の能力は悪魔系を塩化出来るんだよ。しかし、アレクシアの血液は塩化しなかった。だから、断言できる」

「塩化する能力？断罪者なんですか？」

「ある意味そうなんだと思う。で。今、ミトガル王国の起源を調べているところだよ」
「では、私の血液も検査してください」

姉妹だから、同じ物が検出できるはずだ。

「クレア達はいかがですか？」

「あともう少しかな。肉塊がなくなれば、一般病棟に移動しても大丈夫だろう」

無知は罪なのか？

——ツバサ——

悠、マイルと共に、ラビの村へ向かった。悠の総合病院には高性能の検査機器があるのだ。

「原因の因子は特定できましたが、これの役目がわかりません」

と、悠。天才医師であっても、異世界のことは分からないのだ。なので、マイルのナノちゃんに分析を依頼した。古代文明のナノマシンなので、多少はこの世界には対応しているはずだ。ベータに信奉者達の拠点から奪った資料を調べさせているが、膨大な量を目視で調べるにも限界があるしなあ。

伯斗が新たに設置したカジノに設置されているコンピュータでAIを開発し、文書データベースをつくることにした。AIなら俺達、ゲーム製作サイドのスキルにより、可動できるコンピュータがあれば、製作可能である。カジノの上層階にある、総合司令室に設置してある端末に俺、セイ、ミト、サトウ、伯斗が群がり、解析推測が出来る大賢者AI、ラファエルを作り始めた。

地下遺跡発掘部隊には、高性能サーバーの発掘を依頼した。使える電算機は多い程良
いから。修理は俺とゼロス君、伯斗で出来ると思いたい。

——クレア・カゲノー——

一般病棟に移れたが、1日3回も服用する予防薬の苦いやらマズいやらの苦行が日課
に加わった。発病していないアイリス先輩も一緒に服用していた。予防の為だという。
が、舌と鼻孔を刺激する苦痛は鍛えてどうなる物ではない。そもそも鍛えられる部位で
は無い。

「この予防薬はここでしか調剤できないらしい。なので、この国と敵対したら、薬は手には
いらなないと思いなさい」

と、アイリス先輩が難しい顔で説明してくれた。

「それは、材料の問題？作り手の問題？」

アレクシア先輩がアイリス先輩に訊いた。

「安定供給をする為に、この国の植物園で増産しているらしい。作るのは教皇領らしい。
で、こっちのサプリは、違う国で作っているって」

この治療薬を巡り、様々な国の暗部がねらっているらしいが、この国の暗部に消され
ているそうだ。

「剣術のレベルというより、戦闘のレベルが、この国は高いわよ」

ミドガル王国の最強の騎士であるアイリス先輩でも、アルメリア公国の騎士相手では、勝て無い相手が多いらしい。

「盗賊ギルド本部や暗殺者ギルド本部まで、アルメリア公国にあるし：暗部の動きが丸裸かもしれない」

◇

一般病棟でリハビリをし、漸く外出許可を貰え、観光目的で街に出ることが出来た。街では、この国独自の貨幣で買物が出るそうだ。他国の通貨はまるで使え無いので、両替屋でこの国の貨幣を手に入れる必要がある。貨幣はコインではなく、紙幣という紙でできた貨幣であった。軽い上場所を取らないのがよい。

食事は屋台で済ませる。どれもこれも見た事の無い食べ物であった。

「ここは、手づかみで食べる物が多いわよ」

と、観光を一通り熟したアイリス先輩からのアドバイス。病院食も美味しいけど、屋台食も美味しい。屋台が多い割に、街にはゴミが落ちていない。

「ゴミのポイ捨ては罪だから、ちゃんとゴミ箱に捨ててね。違反をすると身分を問わずに懲役7日だから」

「懲役って？」

「無償労働の刑よ。お金で解決できないように、罰金系は無いのよ。どこから見られて
いるか分からないから、違反は絶対にしないでね」

「もしかして姉さん…」

「ええ、経験者よ。常習違反者に認定されると、懲役ではなく、強制労働になったり、陵
辱刑になったりと大変な目に遭うからね」

って、訊けないけど陵辱刑を受けたのだろうか？訊きたくても訊けない。

◇

リハビリが終わり、学園都市に引越した。4人部屋の寮に入所した。学生であれば、衣食住は最低限は保障され、身分を問わずに学費共々無料だそうだ。この国は奴隷制度が無い。犯罪奴隷以外はいないそうだ。その為、他国の奴隷がこの国に亡命をし奴隷から抜け出す者が多いそうだ。他国にはあるスラム街も無いらしい。野放しの犯罪者もいないらしい。そういう者たちは、収容所に送られ、身分を与えられ、放流されるという。更生見込み無いしの烙印を押されると、国外追放になるらしい。

「国外って？」

「元々いた国への帰国は認めないそうよ。確認はしていないけど、迷宮最下層への置き去りで、魔物エサにされるって噂がある」

そう言えば、この国には広大な地下迷宮がある。国で管理している迷宮。スタンピー

トが起き無いように、冒険者学校が主体になり管理されているらしい。

「さすがの私も、迷宮の最下層へ置き去りにされたら、生きてられない。50階層のオーク部屋でも地獄だったのに……」

つて、アイリス先輩。それって、陵辱刑の内容では……怖くて訊けない。そう言えば、アイリス先輩が丸くなった気がするの、きつと更生したのだろう。

文字の読み書き、計算などの初等教育から。試験に受ければ、パス出来るが、この国の公用語は私達では読み書き出来なかった。見た事も無く聞いたことの無い『日本語』という言語で、基本文字数が多いのだった。

「この言語をマスターすると、言語マスターのスキルが貰え、他国の言語を読み書き出来るらしいの……」

スキルが貰える??スキルって、神様がくれるギフトで無いの??

◇

1ヶ月くらい経つと、図書館の利用が可能になり、4人で図書館通いを始めた。

『無知は罪である。まず知る事が大切である』

この国の学校のスローガンである。その為、図書館通いする学生が多いそうだ。

「まず知らないと、質問が出来ない。身食いについて知らないと、この先、ダメだろ思うの」

世界広しと、『身食い』についての書物は、この図書館が一番らしい。私達が入院していた身食い専門の病院があるのは、この国だけである。運用、運営の問題で教皇領にあるそうだが、研究員、医師の殆どはアルメリア公国の人達のようなだ。

身食い：魔力回路が誤動作し、魔力に身体をくれる現象。発症すると、魔力にたええらるとうに身体が自己防衛し、体組織を組み替えてしまう。そして、末期には人間であれば細胞の結合が解かれ、バラバラになる。亜人系の血族の者であれば、骨と肉だけの身体になり、高位悪魔系の魂が取り憑くと魔王化、魔神化始まる

と、書かれていた。だから邪神狂信者達に浚われ、隔離されていたのか。

「結局は私はどうなのかな？」

アレクシア先輩がボソツと独り言。

自転車で文明開化するだろうか？

——セーラ・オーユゴック——

目が醒めると、お爺様、お父様、お母様の顔とミト様の顔があった。

「セーラ…よくもどってきてくれた」

お爺様に優しく抱き付かれた。

「……は？」

「病院じゃよ」

病院？ 私は病気だったのか？

「1年くらい寝ていたのよ」

と、笑顔のミト様。

「再発の危険があるから、巫女職には戻れない」

戻れない？ え、えええええ

「今後は、教皇領で狛下の元で働くことになるのよ」

もう、神殿長にはお会い出来ないのだろうか？

「ここにいれば安全だから」
安全？ 何に対して？

—— ツバサ ——

最近は悪魔狩りをしている。悪魔を強奪で引き寄せ、お触りして塩にする簡単なお仕事である。トキオ共和国のある大陸では出来ない仕事である。あそこですると、魔王国の国民を引き寄せてしまう。魔王国の魔王を引き寄せたこともあった。あれは危なかったなあ。俺の尋常では無いオーラを見て泣き叫ぶ魔王陛下…龍王を呼んで宥めて貰った。

そんな魔王国の禁書庫で探していた書物を見つけた。アレクシアの件の答えである。英雄・勇者の血筋の者の血液は肉塊の成長を促すとあった。もし、アレクシアの血が身食いに輸血されると、ヤバい状況になるらしい。この事は、アレクシア、アイリス姉妹に報告をした。もしかすると王族の先祖は勇者なのかもしれない。ミトが建国したように、勇者達が健康したのかもしれない。

魔王化するのには女だけのようだ。男は魔王化しないらしい。そう言えば、肉塊になったのは女ばかりである。その辺りの理論は書かれていない。が、男の身食いは人間爆弾

として利用すると書かれている。爆発する運命しかないのか、男だと：

調べ物を終え、森の館に戻ると、見かけない種族がいた。セイに話を訊くと、指名手配されていた吸血鬼の女を捕らえ、それを追っ手来た天使の女を捕らえて、巨乳の天使達にサトウーがメロメロに：で、ミトは嫉妬を爆発させ、天使をボコボコにしたらしい。

これ、国際問題になるんじゃない。

「奴隷紋を描き込んでね」

って、ミトが俺に迫って来た。サトウーにせがまれ天使を飼いたいらしい。奴隷にすれば、問題を隠滅出来るのか？ミトに押し切られ、吸血鬼1匹と、天使3羽を奴隷にした。紋はアンダーヘアの中に埋め込みましたよ。って、天使にもアンダーヘアがあるのね。

しかし、美人さんの天使の全裸を見たのに、そその物が無いとは：なんか、損した気分である。今夜は、セイに添い寝をしてもらうか。

◇

サーバー問題、閃いた。そうだ、ああいうのは都内には無かつたはずだ。千葉県とか神奈川県とか沖縄県じゃ無いだろうか。この地下移籍って、都内しか無いのかなあ。まだ、山の手線の内側すら補記起こせていない。新宿のデパート街まではいけたんふあよね。中野を目指して貰うか。

「もしかて、大学のあつた辺りを掘り起こすとか」

と、隼人。それは良い考えだな。有栖川を掘ったよな。246を目指せば、大学があるはずだ。A学院とか：

奴隷にした吸血鬼ルーシー・ルーにアレクシアの血液の解析を命じ、天使のティア、グランマリア、クーデル、コローネにはサトーのお守りを任せた。ミトはセーラのお守りにしよう。

俺はベータと共に、オーユゴック公爵領の公都へ向かった。エチゴヤの支店を設置しに：本当ならサトウーに行商人をしてもらうはずが、天使族を配下にしたものだから、連れ歩けない事態。あの国、亜人排斥と言うか、亜人は奴隷にしたがる風習があるので、羽を隠せに天使は連れ回せないことに：

公爵と交渉し、土地を手に入れ：あああ、エルフもダメなのか：じゃ、駐在員はセーラとミトにアリサとアリサの妹のルルにするかな。孫娘なら、便宜をはかつてくれるかな。

大都市であるあから、生活雑貨を中心にするか。後はスパイダーシルクのオーダーメイドドレスとか。

ティーナの実家の改修工事を終え、公共工用のパーツを揃えないと、公都で公共事業を受けられない。生産が追いつかないのだった。

◇

久しぶりにゼロス君の家に行くと、あの教会のシスターと良い感じになっていた。いなあ、アレがへたれていないやつは…

「バイクのエンジンはできているよ」

「ゴムの代用になるか分からないけど、ジャイアントスネイクの皮はどうだろうか。タイヤ状に錬成してみたよ」

サンプルの蛇タイヤを出して見た。

「ああ、良い感じですね。弾力もあり、耐久性も有りそうだけど、量産は堂なのかな？」
「肉が結構上手いよ。小骨が多いけど、強奪で抜けば問題は無い」

自転車のパーツを出し、二人で組上げていく。売れるといいいなあ。

言葉の行き違い

——ユナ——

久しぶりに先生と海へ。海産物の仕入れである。狙いはマグロだな、クラークンもい
いなあマグロは強奪でゲットしていき、クラークンは一殴りして収納していく。大きな
エビもいるし、カニもいる。

帰宅して、捌いていく。

「甲羅って、売れるんだよな？ 墨袋は？」

「売れますよ」

と、マイル。

「先生またお店をしたいなあ。屋台でもいいですよ」

ユナは料理が好きなようだ。

「シャシャートと王都のどっちがいい？」

「庶民相手がいいなあ」

「じゅあ、シャシャートかあ…解体を終えたら、商業ギルドへ行こうか」

基本、先生は提案を拒否しない。楽しいことが好きなんだと思う。

——ツバサ——

シャシャトーの商業ギルドで、土地を購入して、店舗を建築していく。俺とユナならツバイファオー工法であれば、直ぐに建てられる。明日には開店出来るが…

「何を売るんだ？」

「先生のパンケーキ食べたいなあ〜」

そうなると小麦粉か、米粉に玉子、バターにジャムだなあ

「飲み物は？」

「珈琲か紅茶ですかね？」

「どら焼きに緑茶もありかな。そうなると餡子いるな」

結構、材料がいるな。

「一番、楽なのは？」

「唐揚げかな。ジャイアントスネイクの肉なら大量にあるし。クラーケンも大漁だったし、イカ焼きも出来るなあ」

——マイケル・ゴロウン——

シャシャトーの街を代表する商会の会頭である。最近、流行の『クマヤ』という商店を視察中である。クマの着ぐるみを着た少女が店主らしく。販売品目は日替わりのようだ。

「今日はたこ焼きのようだ」

タコの切り身の入った団子のような物。団子と違い、外側がふわふわである。いったい、何品目のメニューがあるのだろうか。是非ウチのツ商会にスカウトしたい。その日閉店後にわが商会の一員になるように、説得を初めて見た。

「この街を代表するゴワウン商会の者だが、君をスカウトしたい。是非、わが商会に入つて欲しい」

「ランクは？」

ランクとは？

「この街では一番上のランクだよ」

「嘘つきは嫌いです。お帰り下さい」

と、嘘つき呼ばわりされた上に拒否された。それを見た、取り巻きの者達が憤慨し。

「お前なんか、この街で商売出来なくしてもいいだぞ」

と、脅すようなことを…小娘に大人げ無いなあ。

「わかりました。ここでは商売しません」

そういうと建物ごと消えた。どういう事だ？あの店は幻覚だったのか。 s

——ツバサ——

この街の商業ギルドで一番ランクが高いのはエチゴヤである。それを差し置いて、一番という商会。その上、エチゴヤにケンカを売るとはおろかな。商業ギルドに行き、ゴロウン商会に商売の差し止めを喰らったので、土地を買い戻してもらおうとすると、ゴロウン商会にそんな権限は無いから、営業を続けて欲しいと、買い戻しを拒否された。はあ？なんで、商業ギルドの支店が商売の続行を命令出来るの??ギルド本部にクレームを入れると、代わりに払い戻しに応じてくれた。オーユゴック公爵のところまで営業するかな。

とある商人の愚行

——マイケル・ゴロウン——

商業ギルド本部から、営業停止を喰らった。理由がよくわからない。街の商業ギルドに確認するが、問題なしと言われたので、営業をする。そうすると、王都からクローム伯がやってきた。

「どういうことかね？ 相手が激おこで、信用出来ない国家とは取り引きは出来ないと言うんだよ」

何のことか分からない。

「意味が分からないんですけど」

「分からない？ 君、クマさんを怒らせたよね？ この街を牛耳っているようなことを言うて……」

身に覚えが無い。そんな高飛車な態度は取らない。

「いいえ。何かの間違いではないですか？」

「本当に？ この街で一番上のランクの商会とか言わなかった？」

「それは事実ですから…」

「事実？ 違うぞ、一番はエチゴヤだぞ。何を言っているんだ？ ああ、怒った理由が分かった。直ぐに謝罪に行くぞ」

「悪い事をしていないのに私は謝罪なんかしませんよ」

「Aランクの商会がSSSランクの商会よりも上なんて言ったら、相手は怒るのも無理は無いぞ」

「この街にSSSランクの商会なんか無いですよ。そもそもエチゴヤは進出していないですし」

「商人なら情報は常に新しい物にしておけ」

意味がわからない

「それに、ギルド本部の命令を無視しただろ？」

「していませんよ。商業ギルドに確認したら、問題なしっていわれましたから」

「問題大ありだよ。全く…」

不機嫌な顔をしてクローム伯は転移をして去って行った。

——ツバサ——

魔王国で外交担当大臣をしているビーゼルさんがやってきた。

「申し訳ない」

ジュンピング正座をしてきた。何かあったつけ？

「問題ないですよ。営業できる場所は沢山ありますから」

「王都との取引はして欲しい。」

「この国で一番大きな商会さんがあるじゃないですか。そこと取引してくださいね。それに、シャシャトーの街の商業ギルドは機能していませんし。商売は、しませんよ。この国では……」

「そこをなんとか」

「なりません。一度舐められると、次からも舐めて来ますから」

「魔王様から許可がでていきますから」

「なら、王都との取引を続けましょう。ああ、1割増しでね」

「それで構いません。売ってください。自転車を100台」

「そんなに売れ無いですよ。予約販売なんですから。一度販売禁止にされたので、予約は破棄されてますから、新たに予約してくださいね」

「それはシャシャトーのことでしょう？」

「王都に商業ギルドがないですよ？この国の商業ギルドはシャシャトーの街だけですか」

メンドーになっていたので、窓口をビーゼルさんに絞るか。なまじ商人が絡むと中間マージンとかメンドーだな。エチゴヤは直販オンリーしよう。

——マイケル・ゴロウン——

商業ギルドで揉めている相手を調べてみると：はあ？なんだって：世界的な商会、あの小娘の店はSSSランクのエチゴヤのアンテナショップだったらしい。あのエチゴヤ傘下の店を吸収しようとしていたようだ。それなら、相手が怒るのも無理はない。儲けを寄越せと言っているようなものだ。

まずい：

外交担当のクローム伯に連絡を取ったのだが、

「もう解決した問題だ。今更、波風を起こすな」

と、問題が解決したようなことを言う。

「我が商会としては、問題は解決しておりません」

「今後、我が国との取引は、私が窓口になることになった。小売りはしないと、相手が言い切ったのだ」

「ちよつと待ってください。国家との直接取引では、我が国の商業の発展に繋がらないです」

「問題ない。今までそうして来たし。庶民相手に商売つて、あいらの気の迷いだそうだと。違う国で売るから問題ないそうだよ。販路は沢山あるからな、あそこは」

我が商会も一枚噛みたい商いである。

「今後、直販オンリーにするそうだと。中間マージンが発生すると、客に迷惑が掛かると言っていたぞ」

その中間マージンが我が商会の取り分である。

「我が商会に一枚噛ませて貰えないでしょうか？」

「今更だな。諦めろ」

「本店に直談判すれば良いですか？」

「戦争になったら、責任取れるのか？」

戦争？なんでなるんだ？

「あそこの本部は国营企業だぞ。無理に入り込もうとすれば、敵認定される可能性があるんだ」

「どこの国ですか？」

「言える訳無いだろう。他言無用な情報だ」

クローム伯は頑なに拒否している。魔王国に戦争で勝てる国なんか無いだろうに……
国益の為と言い、商業ギルドに情報を開示を依頼した。

愚行の末

——ビーゼル・クライム・クローム——

ツバサ氏が玉の間で魔王様に抗議しにきたそうで、私は急いで玉の間に急いだ。

「ああ、ビーゼルさん。魔王国はうちと戦争したいの？ここで魔王様を消してもいいんだよ」

何やら激高していた。昨日の今日である。まさか…

「ゴロウン商会が何かをしましたか？」

「商業ギルド本部に、魔王国の国益の為にエチゴヤの全情報の開示を依頼したそうだが、これって、戦争の前準備か？」

全情報だと、商会の出資比率や後ろ盾の個人名に、会頭の個人情報も含む。

「やましいことは無いけど、グラマスから連絡が来たよ。魔王国が侵攻する気だと…なあ、どういふことか、お話をしましょうよ」

魔王陛下の身体から煙が立ち昇っている。神聖属性のオーラにさらされているようなあ。

「自転車1000台の為に、侵攻する気か？ケンカ売るならいつでも買うよ。合図を出せば、魔王国が大陸から消えるけど、どうする？」

「そんな侵攻なんかしません。戦力差は充分に理解しております」

バケモノ揃いの戦力である。彼が聖者で、聖女が奥様。人類最強レベルの戦士や賢者、騎士もいるし、魔女、天使、吸血鬼まで…

「じゃ、クーデターなのか？悪いやつは誰だあ！」

「たぶん、ゴロウン商会だと思います。商売に1枚噛ませろって、私の所に来ましたから」

「ほお、シャシャトーでの商売を認めず、ユナをスカウトだと？その上、エチゴヤの儲けを寄越せって？何を舐めたこと言う商会なんだ？潰すか？」

「それは困ります。魔王国内で一番大きな商会です。民草に影響がデカイです」

「でも魔王国の国益の為、エチゴヤを取る気満々なんだろ？それなりのリスクを背負って貰うよ」

「わかりました。魔王国から人質を出します」

「そんな者は要らない。魔王はいつでも消せるんだから、人質のエサ代が勿体ないだろ？」

「では、どうすれば、怒りを静めていただけれますか？」

「今後、刃向かわないことを条件で、魔王国は、トキオ共和国の属国扱いにしろ。体制は現状のままでもいい。補償金を払えとは言わないが、魔王国への税金はフリーにして貰うよ」

「分かりました」

新たな条約を締結すると、ツバサ氏は消え、股間を濡らした魔王様が玉座に残った。

—— マイケル・ゴロウン ——

小娘と思つて、前準備を怠つた私に非がある。しかし、ボタンの掛け違いが、忖度というフィルターを通り、事は大事になつてしまった。

魔王様から、魔王国はトキオ共和国の属国になつたと、布告があつた。

私の知らない間に、無血開城があつたようだ。私の発した『国益の為にエチゴヤの全情報の開示』を宣戦布告と取られ、速攻で魔王国が落とされたようだ。なんてことだ。

商業ギルドによると、国营企業の全情報とは、その国の国力、軍事力や主要産業などの情報を含むらしい。それは、宣戦布告前の情報収集とギルド本部は捉え、戦乱を避けるために、関係各国へ知らせたそうだ。

外交担当のクローム伯は冒険者ギルドの聴取を受けたそうだ。一般的には、宣戦布告の前には冒険者ギルドに通達を出し、関係のない隣国との国境付近を警戒する必要があ

るそうだ。

「まさか、隣接もしていない国に挑むなんて……バカじゃないのか。アソコに攻め込むって、龍王国も侵攻するつもりだったのか？」

と、冒険者ギルドのギルマスに呆れられたようだ。

「お前のせいだぞ、マイケル」

クローム伯の怒号が会頭室に響き渡った。

「だから、今更、問題を起こすなって言ったんだよ。あの国に勝てる訳ないだろに……相手国は聖者が国王なんだよ。聖属性のオーラを浴びるだけで、魔王様が消滅するんだから」

なんだって！魔王様が暗殺される危機に陥ったらしい。

「まあ属国になる以外の被害は無かったから良かったよ。あの国は平和を愛する国で良かった」

トキオ共和国は龍王国に囲まれ、龍王国以外、攻められないそうだ。って、それって、禁足地が領土なのか……秘密のペールに包まれた国なのか。興味が湧いてしまった。

「良いか？興味本位で、領地侵犯を犯すなよ。その場合、ゴロウン一族は消えるからな」
一族郎党の命をベットするカケに出るべきか？

開発ブーム

ツバサ

自転車はヒットした。馬より経済的で貴族でなくても誰でも乗れるし、エサ代もいら
ない。馬小屋もいらぬ。自転車製造者を育成していく。後、鍊成士もだ。毎日毎日蛇
の魔物の皮でのタイヤ製造。飽きてきた。俺以外の鍊成士を育ててみることにした。
将来の道を決めていない学生達から希望者を募つて。冒険者でもいいなあ。後、鍛冶職
人もだ。アルメリア公国の学園都市に職人育成学校を創設した。エチゴヤでヒットし
た商品の製造する職人を育成していく。但し、大量生産が持続的に可能な商品にかぎ
る。他者が模倣するかも知れない。が、齒車とチェーン製造が模倣するのが大変だと思
うよ。

暫くするとベルト式の物が他社から出たが、耐久性が無いらしい。

自転車は模倣されてもいい。オートバイはどうだろうか？割と機構が単純なカブ擬
きを売り出して見た。これは魔石を使うので庶民には維持が難しいかもしれない。

ゼロス君はVWビートルを開発中のようだ。構造がシンプルな物がいいよね。電気

自動車なら、電池を魔石に替えれば：マイル、ケーナも開発に乗り出したようだ。初めの何台かは自分用途らしい。

ユナはキッチンカーを開発中らしい。

俺は、発掘作業だ。隼人達は秋葉原を発掘するらしい。俺は表参道辺りを発掘中であつた。

◇

「電車を使えるように出来ないかな？」

と隼人。伯斗、ゼロス君も開発に乗り出した。ラビの村では自転車ブームらしい。村は高低差が無いので、こぎやすいそうさ。しかし、長距離移動には適していない。この世界の一般人は、筋トレをしていない。そこで電車の出番らしい。

「電気はどうするの？魔石の使用量が多い。発電機を開発しないと難しいかな」

発電方式は水力発電が一番楽かな。水魔法か転移術で高所から水を落とせばいいし。

「それだと、ダムを発掘しないと」

それは問題だ。都内にダムなんかあつたっけ？ああ、奥多摩にあるな。中央線はまだ中野まで掘れていない。新宿は掘れているので家電は大量に発掘出来ている。マイルが家電を魔石で動作するように改良している。が、ドライヤーとかは魔導具を作った方が効率が良いそうさ。ラビの村に持ち込めば、問題無く使えるらしい。伯斗の設置した

建物の中では電気が使えない不思議。このチート建築士め！

発電機は課題だな。と、思ったら家電量販店で、水素と酸素で発電出来るシステムがあった。水素と酸素なら、水を分解すれば取り出せるし。もつと楽な発電方式があったよ。その名は空気発電。空気中の酸素と金属を反応させて電気を作り出すようだ。これを作ってみることに。金属は亜鉛らしい。緊急課題だ。亜鉛鉱山を探さないと……都内には無いから、この世界で探さないとなあ。

「なあ、亜鉛を強奪で引き寄せないのか？」

と、伯斗。

「そんなことしたら、基板類がおだぶつだよ。半田の成分つて亜鉛と錫だからなあ」
接触不良になる基板が大部分だろうな。

なんでもかんでも強奪で引き寄せれば良い訳ではない。それは異世界あるあるかな。
「それは違う。半田は鉛と錫だぞ」

そうなのか？勘違いしていたのか。強奪で亜鉛を引き寄せてみた。これは使えるな。しかし、話題を差し替えてみる。

「そうだ。異世界と言えばゴーレムだよな。シリンダー内のピストンをゴーレムにして、スクワットさせるのはどうだ？ピストン運動にならないか？」

「お前の発想は突然で斜め上だな」

「蓮はまだ呼ばないのか？俺の上でM字でのスクワットしてほしんだが…」

「発想はアレなのか？このエロ聖者め！」

ロリテイマー魔王には言われたくないんだが…

◇

冒険者学校の課外授業…うちのバトルジャンキー達もこぞって参加するらしい。最近、荒事が無いから、ストレスが溜まっているのだろうか？平和が一番なのだが。授業の現場は、ファーフランの大深緑地帯である。ティーナ、ツヴァイも参加している。あの爺もだ。

「魔物は素材を採取するので、爆殺はなしでな、ケーナ」

一応、釘を刺しておく。

「評価は買取額の高さである。狩った数では無いからな」

と、参加者達を送り出した。この森の危険生物はクレイジーエイプという猿らしい。コイツはメスしかないそうで。多種属のオスを見かけると、子種をうばうそう。ゼロス君が遭遇し、ズボン、パンツを剥がされ、死ぬ思いで貞操を守りきったそう。猿故、集団行動らしく、一心不乱でアレを狙って来る事に狂気を覚えたそう。

「あのワイバーンを集団で襲ってましたし、オークキングが逃げ惑っていったし」

この世界の山エルフとい種族も人間のオスを浚い、絞る取れるだけ搾り取るそうだ。俺のアレはヘタレなので、俺には寄りつかないみたいだ。アレの臭いがわかるのか？叫び逃げ惑う男子生徒達。バーサステイーナが殴り杖で撲殺していく。その姿は戦乙女というか…

俺は触れば、猿を灰にしていく。時たま塩になるがきにしない。この猿は殲滅して良いらしい。オークは食えるがコイツは食用でないそうで、毛皮以外、利用価値がないと言われている。罨を張り、生け捕りにして、研究に使うか。

テイーナは頭部を爆散させ、胴体部の毛皮を剥ぎ取っていく。

そして、夕方。野営の実習である。が、この森には食える物が少ない。あの猿が食い切ってしまったのだろうか？絞れなくなったオスは食い物にされていたのか？そうすると、猿以外の出産は出来ないだろうから、猿以外は増えない。で、この森からオスがなくなれば、待ちヘスタンピートして、人間を淘汰されてしまう。最後は猿の惑星のできあがりか？そうか、適度に異世界からオスを召喚しているとしたら…勇者召喚の裏の事情を想像してしまった。

「よし、殲滅しよう。このままでは食物連鎖が崩壊してしまう」

猿の惑星の始まりか？

——ツバサ——

学生達には食べられる物を探させ、うちのバトルジャンキー達に猿の殲滅を指示した。そして、野営実習はサバイバル実習に変容していった。食える物は工夫して喰う。頭を使った食事の開始である。

どうしても食べられない学生達に、ツケでインスタント食品を売る。お湯を入れて三分のアレである。お湯は魔法でいくらでも作れる。後、砂時計の重要性も分かって漏れたと思う。腹時計の三分は当てにはならない。

女性陣は強い。自分を囷にしてオークを誘き出し、集団で狩りをおこなっている。あの猿と重なって見える気がする。男性陣も自らを囷にし、ウルフをおびき寄せ、袋だたきにしているし。

サバイバルという極限状態で、学生達の精神は鍛え上がられていく。「サーチアンドデストロイ」猿以外の生き物は、肉に見えるらしい。猿はインスタント食品を買う為の資金に：

森の奥に踏み入れると、猿より頑強な個体が…あれって、ゴリラでは？鑑定をすると、クイン・アリエネコングと出た。あの猿の進化先だろうか？

群れのボスのような個体数体が、キラーエイプとやっている。こいつら、ボスになると雌雄同体になるのか？そうなるらと猿の惑星はメスだけでも死滅しないだろう。クインなボスの股間には立派な物が…俺は物体Xのせいだ…うっううう

ドーン！

俺の欲求不満がエクスプロージョンと化し。どうやら無意識無詠唱で発動し、ご満悦なゴリラ達に炸裂した。猿山はクレーターに。しまった。出来ないストレスをゴリラに八つ当たりしてしまった。啞然としているみんな。呆れた目で俺をみないで欲しい。

「今夜は川の字でねましようね」

セイが優しい声で俺を宥めた。セイの胸の谷間に顔を埋める。泣き顔は学生達に見せたく無い。

「あなたしか出来ない事をやってきた結果なのよ。自信を持っていいの」
いくら自信を持っても立たない物は立たない。更に凹む俺…

「付近にまだゴリラがいるかもしれない。みんな探すわよ」

プライドが一声掛け、話題をかえてくれた。学生達が周囲の探査を始めていく。

小一時間後、俺が俺として立ち直れた頃、ゴリラではなく、盗賊のアジトを発見したそうだ。

「ツバサさん、ボーナステージが到来ですよ」

と、ゼロス君。バトルジャンキー達がいい笑顔をしている。学生達もだ。

「じゃ、討伐するか」

皆でアジトに向かい。一気に殲滅した。アジトの入り口には盗賊達の生首が山のようにならまれている。人質というか囚われていた女性達は何人もいた。一人一人に触れ、悪女を灰にしていく。女性達の顔に戦慄が走っていく。首の無い死体も灰していく。ギルドでは首しか買収取ってくれないから。

「先生、卒業時に貰えるマジックバックは生首がどの位はありますか？」

ティーナに質問をされた。

「そうだなあ、50くらいかな。無理に押し込めば、押し込めばもっと入るが、顔の判別ができなくなるからね」

アルメリア公国の冒険者学校では卒業する時に、大容量のマジックバックを与えることにしている。より一層の活躍を期待してだ。ただ、残念なことにそれをお金に換えるバカ者達もいる。その対抗処置で、正式な所有者が生きている場合の所有者変更は認められておらず、その場合、変更時にロストする術式を埋め込んでいるのだった。

さて、囚われていた女性達の進路を決めるか。

「出産経験者には、孤児院、産婦人科で働いて貰う。それ以外の者は応相談で進路を決めよう」

囚われていた女性の半分くらいは経験者のようだ。

それ以外の進路は、神殿での下働き、手に職があればその道へ、最後の選択は学校への入学である。これ以外は面倒を見られないので、爺に丸投げだな。その爺はメスに囲まれたようで、青ざめた顔で震えていた。発情状態の猿は、多少の魔法に屈せず、竿目掛けて襲ってくるらしい。そう言えば、あのゴリラは学生達の魔法や剣を弾いていた。防具の素材になるかもなあ

アジトの内部を物色していく。肉塊があれば、保護するが、このアジトには無いようだ。処分されたのか、既に売られたのか、幸い発見されていないかだな。

「あれ？懐かしいなあ、ルーンウツドの杖がある」

とゼロス君。あれはガチャの景品では無いか？

「それは、私のです」

囚われていた冒険者風の女性の一人が所有権を主張している。それは、ゼロス君同様、プレイヤーであって、この世界に召喚された者ってことである。

「プレイヤーか？」

「えう…」

プレイヤーのようだ。

「君は収容所行きだよ」

その場から、消え去る女性。帰宅して尋問しないと…

「これから、学園都市に戻る。空間魔法を使える者は、順次転移をして。自信の無い者は俺達と帰還するぞ」